博士学位論文（東京外国語大学）

Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏　　名	福田 翔
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 173 号
学位授与の日付	2013 年 11 月 6 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	中国語の可能補語〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉 ―可能とモダリティ―

Name	Fukuda, Sho
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 173
Date	November 6, 2013
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	‘-de-liao’ and ‘-bu-liao’ in Mandarin Chinese —Potential and Modality—

中国語の可能補語〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉
― 可能とモダリティ ―

福田　翔

謝辞

本論文は、東京外国語大学グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」（2009 年度から 2011 年度まで）の支援を受け、その成果としてまとめることができたものであり、ここに謝意を表します。

また、論文を執筆する過程で、主に五名の先生方にご指導を頂き、論文を執筆することができ、ここに感謝の意を表します。

まず、中国語学の専門家でいらっしゃる杉村博文先生には、論文中で用いている意味範疇の設定に対するご指摘や、中国語の文に対する捉え方の問題点等、的確なご指摘を頂きました。また、論文の細部に至るまで目を通してくださり、筆者自身の今後の研究姿勢を考え直す上で、非常に有益なご指摘を頂きました。

日本語学の専門家でいらっしゃる張威先生には、可能という術語の捉え方から、論文構成まで、様々なご指摘を頂きました。また、論文における先行研究に対するアプローチの方法に関する問題点や、可能という術語の設定の仕方等、有意義なご教示を頂きました。

中国語学の専門家でいらっしゃる三宅登之先生には、専門的な術語の扱いや、中国語の例文における解釈をはじめ、様々なご指摘を頂きました。また、博士論文を執筆する上での学会発表の原稿や学会誌への投稿原稿にも丁寧に目を通してくださり、その都度多くの貴重なコメントを頂きました。更に、筆者の学会での発表にも足を運んでくださり、その場においても有意義なご指摘を下さいました。このように、筆者の論文執筆において、大きなお力をお貸しくださったことに心より感謝申し上げます。

日本語学の専門家でいらっしゃる川村大先生には、言語学の視点から様々な有意義なご指導並びにご指摘を頂きました。特に、「モダリティ」や「エヴィデンシャリティ」といった用語の使い方をめぐって、筆者自身の先行研究の捉え方の不備並びに力不足であった点等に関して、懇切丁寧にご指導をしてくださいました。また、学術論文を執筆する上での心構えや文献の読み方、更にはどのように書けば読み手に伝わる文章を書けるのかという点に至るまで、ご教示くださいました。このように、論文を執筆するということに止まらず、研究に対する姿勢や心構えに至るまでご指導くださったことを、心より感謝致します。

最後に、筆者の指導教員である望月圭子先生には、修士課程のときから長きに渡りご指導を賜りました。筆者の力不足故に、研究が進まない、或いは良い結果が得られないときにも、常に励まし、見守ってくださり、また良い方向へと進むようご助言くださいました。

言語学に関する知識や論文の書き方は勿論、筆者の大学院での研究生活全般を支えてくださったのは、指導教員である望月先生です。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

目次

謝辞 i
目次 iii
グロスで用いる略語 vii

第一章　序 1
1.1．研究の目的と方法 1
1.2．先行研究の記述と課題 3
1.2.1．可能補語の位置付け 3
1.2.2．可能補語の分類に関する主要な研究 4
1.2.2.1．丁声树他（1961） 5
1.2.2.2．Chao Yuan Ren（1968） 6
1.2.2.3．刘月华（1980），刘月华他（1983，2001） 9
1.3．可能補語〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉の諸特徴 11
1.3.1．〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉が表す意味 12
1.3.2．肯定形式と否定形式の非対称性 14
1.3.3．典型的な可能補語〈V 得/不 C〉との相違 17
1.3.3.1．基本形の有無 18
1.3.3.2．構成要素間の生産性 18
1.4．使用データ 19
1.5．各章の概要 20

第二章　可能を表す〈-得了/-不了〉と〈-不得〉 23
2.1．研究の背景 23
2.2．可能の意味 26
2.3．状況可能を表す〈-得了/-不了〉 30
2.3.1．状況可能を表す〈-得了/-不了〉の諸特徴 32

2.3.1.1. 形式の移行.....32
2.3.1.2. 動作・行為動詞の種類.....35
2.3.1.3. 文の構文的特徴.....37
2.3.2. 状況可能.....43
2.3.2.1. 条件の一時性と恒常性.....44
2.3.2.2. 動作への指向性.....54
2.4. 心理的不可能を表す〈-不得〉.....58
2.4.1. 心理的不可能.....61
2.4.1.1. 働きかけと許容・受容.....61
2.4.1.2. 心理的影響.....64
2.4.2. 知覚動詞に付く〈-不得〉の諸特徴.....66
2.4.2.1. 文の構文的特徴.....66
2.4.2.2. 文法的特徴.....68
2.4.2.3. 目的語.....70
2.4.3. 心理的不可能の意味的特徴と文法的・構文的特徴の関連性.....72
2.4.4. 類似する意味を有する他形式との関係性.....74
2.5. まとめ.....79

第三章　義務的モダリティを表す〈-不得〉と〈-不了〉.....81
3.1. モダリティ：話し手の対命題的・対聞き手的態度.....81
3.2. 研究の背景.....83
3.3. 義務的モダリティ：可能との相違.....85
3.3.1. 諸特徴の相違.....90
3.3.2. 諸特徴と意味との相関性.....92
3.4. 不許可を表す〈-不得〉.....93
3.4.1. 不許可を表す〈-不得〉の諸特徴.....94
3.4.1.1. 動作・行為動詞の種類.....95
3.4.1.2. 文の構文的特徴.....96
3.4.2. 不許可.....99
3.4.2.1. 主題の属性・性質.....99

3.4.2.2．事態の実現と悪い結果.....102
3.5．不必要を表す〈-不了〉.....106
3.5.1．不必要を表す〈-不了〉の諸特徴.....107
3.5.1.1．使用･消費を表す動詞.....108
3.5.1.2．文法的特徴.....109
3.5.1.3．文の構文的特徴.....111
3.5.2．不必要.....112
3.5.2.1．主題の属性･性質.....112
3.5.2.2．過度.....113
3.6．まとめ.....114

第四章　認識的モダリティを表す〈-不了〉.....117
4.1．研究の背景.....117
4.2．認識的モダリティ.....119
4.3．蓋然性を表す〈-不了〉.....121
4.3.1．蓋然性を表す〈-不了〉の諸特徴.....122
4.3.1.1．非継続性動詞の種類.....122
4.3.1.2．文の構文的特徴.....123
4.3.1.3．〈非継続非意志動詞-不了〉が現れる文中の位置.....124
4.3.2．蓋然性.....135
4.3.2.1．先行述語と意味の相関性.....135
4.3.2.2．複文の種類と意味の相関性.....137
4.3.2.3．文中における位置と意味の相関性.....142
4.3.2.4．副詞句への移行.....146
4.4．推断を表す〈-不了〉.....149
4.4.1．〈静態形容詞-不了〉の諸特徴.....152
4.4.1.1．静態形容詞の種類.....152
4.4.1.2．文の構文的特徴.....154
4.4.1.3．述語用法、連体修飾節用法、副詞用法.....155
4.4.1.4．文法的特徴と否定に伴う形容詞の意味.....156

4.4.2．推断 160
4.4.2.1．論理的推論と様態：述語用法 161
4.4.2.2．論理的推論と様態：連体修飾節用法 165
4.4.2.3．各用法の頻度 167
4.4.3.推断としての論理的推論と様態 168
4.5．まとめ 170

第五章〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉の中心的意味 172
5.1．研究の背景 172
5.2．〈-得了/-不了〉の意味用法 172
5.3．〈-不得〉の意味用法 176
5.4．まとめ 178

第六章　可能から認識的･義務的モダリティへ 180
6.1．研究の背景 180
6.2．状況可能と認識的モダリティ 181
6.3．状況可能と義務的モダリティ 183
6.4．状況可能からモダリティへのシフト 184
6.5．まとめ 189

第七章　結論 190
7.1．はじめに 190
7.2．〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉の意味範疇 190
7.3．中心的意味と意味シフト 202
7.4．課題と展望 204

資料 206
参考文献 206

グロスで用いる略語

省略記号	用語（英語）	用語（日本語）	例
actu	actual	アクチュアルな可能	
ASSOC	associative	2 つの名詞句を連結	〈的: de〉
AUX	auxiliary verb	法助動詞	
BA		目的語を導くマーカー	〈把 :ba〉
CAUS	causative morpheme	使役を表すマーカー	〈让: rang〉〈叫: jiao〉 〈使: shi〉
CL	classifier	類別詞	
COP	copula	コピュラ	〈是: shi〉
DE		結果･程度を表す補語を導くマーカー 不可能･不許可等を表す可能補語の要素	〈得: de〉
deduc	deduction	推断	
DUR	durative aspect	継続を表すアスペクト詞	〈着: zhe〉〈在: zai〉
EXP	experiential aspect	経験を表すアスペクト詞	〈过: guo〉
LAI		可能を表す可能補語の要素	〈来: lai〉
LIAO		可能･不必要･推断等を表す可能補語の要素	〈了: liao〉

省略記号	用語（英語）	用語（日本語）	例
necess	(un) necessary	（不）必要	
NEG	negative particle	否定詞	〈不: bu〉
NOM	nominalizer	名詞化を導くマーカー	〈的: de〉
PASS	passive morpheme	受身を表すマーカー	〈被: bei〉
PERF	perfective aspect	完了を表すアスペクト詞	〈了: le〉
permi	(non-) permission	（不）許可	
poten	potential	ポテンシャルな可能	
prob	probability	蓋然性	
Q	question particle	疑問不変化詞	〈吗: ma〉
SFP	sentence final particle	文末不変化詞	〈了: le〉

第一章　序

1.1. 研究の目的と方法

本研究は、現代中国語において可能補語[1]に位置付けられる形式〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が表す意味の多義性について、体系的に記述並びに分析することを目的とする。

従来の研究では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉における考察は、断片的には行われてきたものの、その全体像を明らかにするような、体系的、統一的な記述並びに分析に関しては不十分であると言える。その結果、両形式におけるいくつかの重要な事実が見過ごされてきた。また、各形式が有する諸特徴の関連性、或いは明確な相違についての議論が完全になされてきたとは言い難い状況である。そこで、本研究では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の意味的特徴を中心として、それを体系的に論じることとする。その中で、文の構文的特徴や文法的特徴、並びに統語的特徴等を中心に議論し、意味の記述を行う。また、コーパス等の言語資料での実際の使用における調査を交えた分析を行うことで、より客観的に意味特徴の類似や相違を明らかにすることを目指す。

〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、これまで、可能補語における研究の中でも特別な地位を与えられてきた。それは、両形式が次に挙げる 2 点に関連するため、言語学的にも関心のある形式とされてきたと言える。第一に、当該形式は意味の漂白化 (bleaching) という、ある種、文法化現象として捉えられるものと関連している。本来、補語である〈了: LIAO〉は「終了する」、〈得: DE〉は「獲得する」という動詞としての語彙的意味を有する語である。しかし、本研究で分析する〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、それらの語彙的意味が薄れ、機能語（虚詞）的な要素として成立している。第二に、話し手の態度や判断に関わるモダ

[1] 先行する動詞(V)とそれに後続する補語 (C) の間に肯定形では〈得: DE〉、否定形では〈不: NEG〉を挿入した形式(〈V 得 C, V 不 C〉)を可能補語形式という（Chao1968:452, 朱德熙 1982:133, 刘月华他 1983:354 等参照）。典型的には、補語は結果或いは方向補語から形成され、主にその意味は「ある結果や方向の実現を許容するか否か（刘月华他 2001:582）」を表すと記述されることが多い。

リティ (modality) としての意味が関係している。この点に関して、従来の研究では、〈-不了: -NEG-LIAO〉が表す推測・推量、及び〈-不得: -NEG-DE〉が表す不許可という意味特徴が各々指摘されてきた。

本研究では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が表す意味は、可能に併せて、不許可や不必要といった義務的モダリティと蓋然性や推断といった認識的モダリティに関わることを指摘する。また、本来的には可能の意味を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉から、このようなモダリティ範疇に属する意味が現れるということの条件、並びに各々の意味が現れる際の諸特徴についても分析を行う。同一形式に、可能の意味とモダリティ的な意味が共存するという現象は、通言語的に見れば、決して珍しいことではない。しかし、本研究で扱う両形式は、文の構文的特徴、文法的特徴並びに統語的特徴等より、表し得る意味の範囲や制限が、他の類似した意味を表す形式と異なることが予測される。他形式との比較という点に関してまでは、本研究で詳細に議論をする用意はないないが、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉を取り上げて、その意味について詳細に論じる意義はあると考えられる。

そこで、本研究では、主に以下の 3 点を明らかにすることを通して、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の特徴を明らかにすることを試みる。

(A) 両形式における多義の記述・分析
(B) 各意味における構文的・文法的な諸特徴の特定と意味の関連性
(C) 中心的な意味の規定と各意味の間の関連性

本研究で行う意味分析の方法として、〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE / -NEG-DE〉が取る先行述語の意味素性や、無題文或いは有題文として成立するか否か、または副詞や文末不変化詞との共起、目的語の種類、可能補語が用いられる文中での位置等を基準として行う。更に、意味が類似する他形式との比較並びに対照を行うことで当該形式の特徴を明らかにする。更に、中国語の大規模コーパスである CCL コーパス（1.4 節にて詳述）を用いて、用例を収集することで、それらのデータを数量的に集計し、客観的に得られたデータを利用して、各々の特徴を明らかにすることを試みる。

1.2．先行研究の記述と課題

本節では、まず中国語の補語形式における可能補語の位置づけについて、先行研究を概観しながら論じる。更に、可能補語における分類を行った主要な研究である丁声树他 (1961)、Chao Yuan Ren (1968) 及び刘月华 (1980)（刘月华他 1983, 2001）の議論についてまとめる。この 3 氏の分類の視点や方法、及びその内実は、各々共通する点が非常に多いと言える。また、現代の可能補語研究に対して、基礎的な役割を果たしているという点で非常に重要であると思われる。しかしこれらの分類には、若干の相違も見られ、その点についても以下で言及することとする。

1.2.1．可能補語の位置付け

まず、中国語の文法体系において、補語は動詞或いは形容詞の後に位置する述語性成分であると記述されてきた（朱德熙 1982:125, 刘月华他 2001:533 等参照）。補語として機能する成分は、原因事象を担う先行述語に対して、結果事象を表すという特徴を共通して持つ。このように先行する述語と補語という 2 つの異なる要素の組み合わせから構成されることより、「述補構造（〈述补结构〉）（朱德熙 1982:125）」や「動補複合 (verb-complement compounds) (Chao1968:435)」、更には「述補句（〈述补短语〉）（张斌 2010:307）」等と言われてきた。

補語位置に現れる成分は構文的･文法的、或いは意味的観点からいくつかの種類に分類することができ、その中の 1 つとして可能補語は位置付けられてきた。朱德熙 (1982:125) では、まず補語を〈粘合式述补结构: 粘合式述補構造〉及び〈组合式述补结构: 組合式述補構造〉の 2 種類に分類する。〈粘合式述补结构: 粘合式述補構造〉とは補語が直接述語の後に貼り付ついているということを指し、〈组合式述补结构: 組合式述補構造〉とは述語と補語の間に〈得: DE〉を有して得られる形式のことを指す。その中で可能補語は、〈组合述补语结构: 組合式述補構造〉に分類される[2]。一方、刘月华他 (2001:533-534) は、補語を 7 種類（〈结果补语: 結果補語〉, 〈趋向补语: 方向補語〉, 〈可能补语: 可能補語〉, 〈情态补语: 情態補語〉, 〈程度补语: 程度補語〉, 〈数量补语: 数量補語〉, 〈介词短语补语: 介詞フレーズ補語〉）に分類し、その中の 1 つとして可能補語を位置づける。

[2] 状態の意味を表す状態補語も〈组合式述补结构: 組合式述補構造〉に分類され、可能補語と状態補語は、〈得: DE〉の性質の相違によって区別されている。つまり、可能補語の〈得: DE〉は独立した助詞（〈独立的助词〉）（朱德熙 1982:126）であるのに対して、状態補語の〈得: DE〉は先行する動詞の接尾語（〈动词后缀〉）（朱德熙 1982:126）として機能しているとされている。

また、可能補語は、本研究で考察の対象とする〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉を除いて、結果補語及び方向補語を基本として、そこから構成されると考えられてきた。例えば、张斌主编 (2010:309) においても、〈结果补语与趋向补语的可能式: 結果補語と方向補語の可能式〉と記述されている。

1.2.2. 可能補語の分類に関する主要な研究

次に、可能補語に関して体系的に分類を行った研究について概観する。本節で取り上げるのは、丁声树他 (1961)、Chao Yuan Ren (1968) 及び刘月华 (1980)（刘月华他 1983, 2001）の 3 氏の議論である。まず、各々の研究における可能補語の分類とその対応関係について（表 1）に提示する。

（表 1）先行研究における可能補語の分類の対応関係

文献	分類名		
丁声树 (1961)	補語の可能式 〈补语的可能式〉	可能補語 〈可能补语〉	
ChaoYuan Ren (1968)	一般的可能補語 ‘general cases’	代役可能補語 ‘dummy potential complements’	最小可能補語 ‘minimal potential complements’
刘月华 (1980) 刘月华他 (1983, 2001)	A 類可能補語 〈A 类可能补语〉	B 類可能補語 〈B 类可能补语〉	C 類可能補語 〈C 类可能补语〉

（表 1）において、刘月华 (1980)（刘月华他 1983, 2001）の B 類可能補語と Chao Yuan Ren (1968) の代役可能補語 (dummy potential complements) は、そこに含まれる形式において若干の相違が見られる。刘月华氏の B 類可能補語には意味の漂白化が進み、可能の意味を表わす〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉のみが含まれるが、それにほぼ対応する Chao Yuan Ren 氏の代役可能補語には、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉に併せて、可能の意味を表す〈-得来/-不来: -DE-LAI/-NEG-LAI〉も含まれる。また、（表 1）には取り上げていないが、Chao Yuan Ren (1968) では語彙的可能補語 (lexical potential complements) として、可能補語形式全体でイディオム的な意味 (idiomatic meaning) を表わす形式を一つの分類として立てているが、刘月华 (1980)（刘月华他 1983, 2001）では、典型的な可能補語である A 類

可能補語の中で論じられているという相違もある。

以上指摘したように、（表 1）は、おおよその対応関係を示しているに過ぎず、厳密には以下で各分類について詳細に述べる。

1.2.2.1. 丁声树他 (1961)

丁声树他 (1961:60-62) では、可能補語を「補語の可能式」（〈补语的可能式〉）[3]と「可能補語」（〈可能补语〉）の 2 種類に分類する。補語の可能式とは、動補構造（〈动补结构〉）の先行動詞と補語の間に肯定形では〈得: DE〉、否定形では〈不: NEG〉を挿入した形式のことを言い、可能補語とは、動詞の後に補語として加えられた〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉或いは〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉のことを指す。

(1) a. 虎妞 <u>说 得 出来</u> 就 <u>行 得 出来</u>。（老舍）（丁声树他 1961:60）

虎娘 言う-DE-出て来る 正に 行う-DE-出て来る

「虎娘は一度口にしたことは、必ず実行する。」

b. 大家 都 同意，只是 <u>决定 不 了</u> 该 选 谁 好。

皆 すべて 同意する ただ 決定する-NEG-LIAO$_{poten}$ AUX(べき) 選ぶ 誰 良い

（赵树理）（丁声树他 1961:62）

「皆は同意したが、ただ誰を選ぶのが良いのか決められないだけだ。」

補語の可能式の例である (1a) は、法助動詞〈能: できる〉を用いて〈能说出来就能行出来: 一度口にしたことは、必ず実行する〉と言い換えることができ、可能補語の例である (1b) は、〈不能决定: 決定することができない〉と言い換えることができる（丁声树他 1961:60,62）。以上の例より形式と意味の対応関係を考えると、補語の可能式の場合、法助動詞の意味を担うのは〈得: DE〉のみであるのに対して、可能補語の場合は、〈-不了: -NEG-LIAO〉という可能補語全体が担っていると考えられる[4]。この現象は、丁声树他 (1961:62) が指摘する

[3] 特に、〈得: DE〉を持つ形式を「補語の肯定可能式」（〈补语的肯定可能式〉）、〈不: NEG〉を持つ形式を「補語の否定可能式」（〈补语的否定可能式〉）とし、両者を併せて「補語の可能式」(〈补语的可能式〉)と呼ばれている（丁声树他 1961:61 参照）。

[4] 〈走不了: 歩き終わらない〉に関しては、〈不可能走掉: 歩ききれない〉或いは〈走不掉: 歩ききれない〉と言い換えられるとある（丁声树他 1961:62）。

ように、〈了: LIAO〉単独では何ら意味を成さず、〈得/不: DE/NEG〉と合わさって可能・不可能を表わす[5]ということと関連していると言えよう。また、〈了: LIAO〉は本来「終了する」（〈完: 終わる〉）という意味を有し、〈吃得了: 食べ終わる〉及び〈吃不了: 食べ終わらない〉は各々〈吃得完: 食べ終わる〉、〈吃不完: 食べ終わらない〉という意味を表すこともでき、この場合は、「補語の可能式」に分類されている。

1.2.2.2. Chao Yuan Ren (1968)

Chao (1968:452-458) では、可能補語を次のように 4 分類することを提案している。

(2) 可能補語の分類: Chao (1968)

a. general cases （一般的可能補語）

b. dummy potential complements （代役可能補語）

c. minimal potential complements （最小可能補語）

d. lexical potential complements （語彙的可能補語）

一般的可能補語 (general cases) とは、結果に対する可能 (possibility) 及び不可能 (impossibility) を表すために、先行動詞と補語の間に肯定の際は〈得: DE〉、否定の際には〈不: NEG〉を挿入した形式である[6]。また、意味を成す限りにおいて、様々な動詞と補語の結合 (V-R compound) に適応することができる。

代役可能補語 (dummy potential complements) は、〈了: 終了する〉及び〈来: 来る〉を典型的な形式であるとし、補語が表す意味は非常に希薄であり、ある種代役的な補語として機能している。

---

[5] 〈“了”字单独已经没有多少意思，只是和 “得，不” 合起来表示可能和不可能，“得了” 和 “不了” 是可能补语。（丁声树他 1961:62）〉（〈了: LIAO〉は単独では意味が既にほとんどなく、ただ、〈得，不: DE, NEG〉と合わさって、可能或いは不可能を表し、〈-得了: -DE-LIAO〉及び〈-不了: -NEG-LIAO〉は可能補語である。）

[6] Chao(1968)の以下の記述をまとめたものである。“A potential complement compound is one in which an infix is inserted between the first verb and the complement to express possibility or impossibility of the result. Possibility is expressed by 得 -*.de*-, and impossibility by 不 -*.bu*-, as: 趕得上 *gaam.de-shang* ‘can catch up’, 趕不上 *gaan.bu-shang* ‘cannot catch up’.(Chao1968:452)” （可能補語とは、可能或いは不可能を表すために接中辞が先行動詞と補語の間に挿入されたものである。可能は〈得: DE〉によって表され、不可能は〈不: NEG〉によって表される。例えば、〈趕得上: 追いつく〉や〈趕不上: 追いつけない〉のように。）

(3) a. 这　饭 我　吃 不　了，　里头　净　是 沙子。(Chao1968:453)

この ご飯 私 食べる-NEG-LIAO$_{poten}$　中　ばかり COP　砂

「このご飯は食べることはできない。何故なら中身は砂ばかりだからだ。」

b. 我 只　会　　做 中国衣裳，洋服 我　做 不 来。(Chao1968:454)

私 ただ AUX(できる) 作る　中国服　　スーツ 私 作る-NEG-LAI$_{poten}$

「私はただ中国服をつくることはできるが、スーツを作ることはできない。」

(3a) 及び (3b) は、「食べることができない」、「作ることができない」という意味を表すことから、〈了: LIAO〉及び〈来: LAI〉は、本来の述語としての「終了する」及び「来る」という意味は含意せず、各々代役として機能しているに過ぎないと言える。つまり、動詞と可能補語を併せて、一つの事態を表しているのである。しかし、〈吃不了: 食べられない〉及び〈做不来: 作れない〉の可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉及び〈-不来: -NEG-LAI$_{poten}$〉は、代役として機能するのか、或いは本来の語彙的意味を有する可能補語として機能するのかは、文脈に拠るとし、以下の例を挙げる。

(4) a. 这么 些 饭，我 三天 也　吃　不　了。(Chao1968:453)

こんな CL ご飯　私　3 日　も 食べる-NEG-LIAO$_{poten}$

「こんなご飯を、3 日間でも食べきれない。」

b. 香港 去　做 洋服，一个月 也　做 不 来。(Chao1968:453-454)

香港 行く 作る 洋服　1 ヶ月　も 作る-NEG-LAI$_{poten}$

「香港にスーツを作りに行っても、1 ヵ月間あっても作れない。」

(4a) 及び (4b) の可能補語〈-不了: -NEG-終わる〉及び〈-不来: -NEG-来る〉は、「し終わらない」、「来られない」というように、本来の述語としての意味を有する。この意味は、上に挙げた (3ab) と異なっていることは明らかである。また、代役可能補語は、辞書に記述される慣用的な表現も存在する。

(5) 〈受不了: 耐えられない〉, 〈谈得来: 話が合う, 馬が合う〉, 〈说得来: 気が合う〉, 〈说不来: 気が合わない〉, 〈合得来: 気が合う〉, 〈合不来: 気が合わない〉

(Chao1968:454 参照)

最小可能補語 (minimal potential complements) とは、形式的には「手に入れる, 獲得する」という意味を表す〈得: 手に入れる, 獲得する〉がそれに当たり、〈得: DE〉それ自体で先行動詞に後接し、可能の接尾辞 (potential suffix) として機能することができる補語のことを言う。しかし、〈得: 済ませる, 完成する〉は、通常の補語として「済ませる, 完成する」等の意味をも表し、可能補語を構成することができる（e.g. 〈做得得: 行って完成する〉, 〈做不得: 行ったが完成しない〉)。最小可能補語の肯定形式には、以下のような例がある。

(6) a. 〈吃得: 食べられる, おいしい〉, 〈做得: 行える, 許される〉, 〈说得: 言及できる〉
b. 〈懂得: 理解できる〉, 〈记得: 覚えられる, 覚える〉, 〈认得: 認められる, 良く知っている〉, 〈晓得: 知っている[7]〉, 〈免得: 避けられる〉, 〈省得: 回避できる〉
c. 〈懒得: する気がしない〉, 〈难得: 貴重である[8]〉

（Chao1968:454-455 参照）

(6a) は動作行為を表す動詞が先行し、可能補語〈得: DE_{poten}〉は可能の意味を表している。(6b) は認知･認識的な動詞及び無意識で行い得る動作を表す動詞が先行する。また、(6c) は類推 (analogy) による。また、特筆すべきこととして、〈免得: 避けられる〉、〈省得: 回避できる〉、〈懒得: する気がしない〉、〈难得: 貴重である〉は、名詞句を目的語位置に置くことができないが、動詞及び主述句（〈主谓短语〉）は目的語として置くことができ、法助動詞 (auxiliary) や接続詞 (conjunction) のように機能し得る。

一方、最小可能補語の否定形は、先行する述語と〈得: DE〉の間に否定詞〈不: NEG〉を挿入して、〈吃不得: 食べられない〉、〈说不得: 言ってはならない, 言及できない〉となることより、この最小可能補語の〈得: DE〉は、ここでは純粋な接尾辞ではないと考えられている。

---

[7] 揚子江流域の方言。
[8] 〈得: 得る〉が主動詞、〈难: 難しい〉が連用修飾語として機能している〈难得: 手に入りにくい〉とは区別しなければならない。

最後に、語彙的可能補語 (lexical potential complements) とは、述補構造全体で慣用的な意味を表す可能補語形式であり、その特徴は基本となる「動詞＋補語 (VR) 」という形式が存在しないことが多い。また、否定形式のみで現れ、肯定形式は存在しない、或いは逆成 (back formation) のみで用いられることが多いとされている。

(7) a. *来及 → 来得及 / 来不及
b. 说定(了) → ??说得定 / 说不定
c. ??用着 → 用得着 / 用不着
d. *犯着 → 犯得着 / 犯不着

1.2.2.3. 刘月华 (1980), 刘月华他 (1983, 2001)

刘月华 (1980)、刘月华他 (1983, 2001) の可能補語に対する分類は、Chao (1968) の分類に類似しているが、どの形式をどの分類に含めるかという点で、Chao (1968) の分類とは若干異なる個所も存在する。刘月华他 (2001) の可能補語に対する分類は以下の通りである[9]。

(8) 可能補語の分類: 刘月华 (1980)、刘月华他 (1983,2001)
a. A 类可能补语（A 類可能補語）
b. B 类可能补语（B 類可能補語）
c. C 类可能补语（C 類可能補語）

A 類可能補語とは、可能補語において中心的に扱われる一分類であり、丁声树他 (1961) の分類では補語の可能式、Chao (1968) の分類では一般的可能補語 (general cases) にほぼ相当するものである。また、刘月华は A 類可能補語を「主観的条件（能力, 力等）或いは客観的条件が、ある種の結果や方向の実現を許容するか否か（刘月华他 2001:582）[10]」を表す形式であると規定し、補語位置には、結果補語及び方向補語が用いられるとする。また、Chao (1968) の語彙的可能補語 (lexical potential complements) も刘月华は、熟語性（熟语性）の A 類可能補語の中で説明する。

[9] ここでは、最も新しい刘月华他(2001)の記述を参照する。
[10] 刘月华の実際の記述を以下に提示する。“主观条件（能力、力气等）或客观条件是否容许实现（某种结果或趋向）。（刘月华他 2001:582）”（主観条件（能力、力）或いは客観条件が（ある種の結果や方向の）実現を許容するか否か。）

B 類可能補語とは、形式的には〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉から成り、Chao (1968) の代役可能補語 (dummy potential complements) にほぼ相当するが、Chao のように〈来: LAI〉を B 類可能補語とせず、あくまでも〈了: LIAO〉を含むか否かに固執する。また、B 類可能補語の〈了: LIAO〉自体は結果の意味を表さず、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉全体が表す意味として、「主観、客観条件が（ある種の動作或いは変化）の実現を許容するか否か（刘月华他 2001:590）[11]」と定義されている。〈了: LIAO〉が可能補語として、本来の意味である〈完: 終了する〉或いは〈掉: 離脱する〉という意味を表す場合は、A 類可能補語に分類される。この点に関しては、Chao (1968) の考え方と共通している。

(9) 这 个 西瓜 太 大，咱们 俩 吃 不 了。（吃不完）（刘月华他 2001:590①）

この CL スイカ とても 大きい 我々 2 人 食べる-NEG-終わる（食べ切れない）

「このスイカは大きすぎて、我々二人では食べ切れない。」

(10) 这 件 事 我 总也 忘 不 了。（忘不掉）（刘月华他 2001:590②）

これ CL 事件 私 どうしても 忘れる-NEG-終わる (忘れ去れない)

「この事件はどうしても忘れ去れない。」

(9) 及び (10) は、可能補語〈-不了: -NEG-終わる〉が用いられているが、各々が「終わる」(9)、「離れる」(10) という意味を表している。また、否定詞〈不: NEG〉が結果を表す補語の意味を否定していることより、A 類可能補語に分類されることになる。

C 類可能補語は、肯定形は〈-得: -DE〉、否定形は〈-不得: -NEG-DE〉という形式を取り、Chao (1968) の言う最小可能補語 (minimal potential complements) に相当する。また、その意味記述としては、「主観、客観的条件が（ある種の動作或いは変化）を実現させることを許容するか否か（刘月华他 2001:592）」という、即ち B 類可能補語と同一であると見られている。更に、C 類可能補語は、普通話[12]においては、「人情･道理上、許可するか否か」という

[11] 刘月华の実際の記述を以下に提示する。“主、客观条件是否容许实现（某种动作或变化）。（刘月华他 2001:590）”（主、客観条件が（ある種の動作或いは変化の）実現を許すか否か。）

[12] 「普通話」とは、「漢民族の話す言語の中でも、語彙や文法は、中世以降、揚子江以北のいわゆる中原地方を中心に成立してきた北方語をもととし、発音は、首都北京の方言の中でも一定の教養のある人たちの言葉に認められるものを模範とし、全国に標準語として行われている（亀井他編 1989:892-893）」共通語として作られた中国語のことを指す。

許可の意味を表すと見られている。

(11) 凉　水　　浇 不　得。(意思是“不应该浇凉水”) (刘月华他(2001:593)①)

冷たい 水 かける-NEG-DE_{permi}　(意味は「冷たい水はかけてはいけない」である)

「冷たい水をかけてはいけない。」

以上、刘月华 (1980)、刘月华他 (1983, 2001) で見られる可能補語の分類を観察してきたが、その分類の観点及び詳細等には多少の相違はあるが、その体系はほぼ Chao (1968) 及び丁声树他 (1961) の可能補語の分類と同じであると言える。

1.3. 可能補語〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉の諸特徴

1.2 節から分かるように、本研究で扱う〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、可能補語の分類において、各々一つの類型を成す形式として、分類されてきた。具体的には、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉に関して Chao (1968) では「代役可能補語」、刘月华 (1980)（刘月华他 1983, 2001）では「B 類可能補語」という一類型として分類され、〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉に関してはそれぞれ「最小可能補語」、「C 類可能補語」と分類されている。また、丁声树他 (1961) では両形式を合せて「可能補語」として、一括し、他の可能補語とは別の類型として分類されている。

そこで、本節では、本研究で扱う可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の諸特徴に関して、先行研究にも言及しながら概観する。具体的には、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の意味特徴や、一見すると対応関係にありそうな肯定形式と否定形式の非対称性、更に「典型的な可能補語」の諸特徴と比べることで、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の特徴をより明らかにする。この「典型的な可能補語」とは、以下、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉以外の、所謂「補語が表す結果事態を肯定或いは否定する」という意味を表す可能補語のことを指して言うこととする。

1.3.1.〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉が表す意味

1.2.2 節で可能補語の分類における主要な先行研究について論じた際に可能補語の分類と併せて、その意味特徴にも触れたが、ここで改めて〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE / -NEG-DE〉のみを取り挙げ、主にその意味的な特徴を整理する。

まず〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉は、これまでの研究において、「結果の実現の可能性」、「可能」、更には「推量」という意味を表すことができると記述されてきた。

(12) 这 个 西瓜 太 大，咱们 俩 吃 不 了。（吃不完）（刘月华他 2001:590①）

この CL スイカ とても 大きい 我々 2 人 食べる-NEG-終わる （食べ切れない）

「このスイカは大きすぎて、我々二人では食べ切れない。」

(13) a. 今天 下 雨，去 不 了 颐和园 了。（客观条件不容许）（刘月华等 2001:590②）

今日 降る 雨 行く-NEG-LIAO$_{poten}$ 頤和園 SFP

「今日雨が降っているから、頤和園へは行けなくなった。」

b. 今天 阿里 病 了，上 不 了 课 了。（主观条件不容许）（刘月华等 2001:590④）

今日 アリ 病気 PERF 出る-NEG-LIAO$_{poten}$ 授業 SFP

「今日アリは病気にかかって、授業には出られなくなった。」

(14) a. 我 看 小刘 比 小陈 大 不 了 几岁。（刘月华他 2001:590①）

私 見る 劉さん より 陳さん 大きい-NEG-LIAO$_{deduc}$ 数歳

「見たところ劉さんは陳さんよりそれ程年上ということはないだろう。」

b. 这 病 好 不 了。（吕叔湘主编 1999:367）

この 病気 良い-NEG-LIAO$_{deduc}$

「この病気は良くならないだろう。」

(12) は、「終了する」という語彙的意味を表す補語〈了: 終了する〉を否定し、「食べきれない」という意味を表す。これは補語が表す結果事態の実現の可能性を表すということより、所謂典型的な可能補語（〈V 得/不 C〉）であることが指摘されてきた。また、〈-得了/-不了:

-DE-LIAO/-NEG-LIAO〉がこの意味を表すのは、主に数量に関する意味が含意される場合である（李宗江 1994, 林可 2001）。次に、(13ab) が「可能」の意味を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉である。これは、黄文龙 (1998)、林可 (2001) 等で、補語〈-了: -LIAO〉の意味が漂白化しその意味が動詞に向かうというように解釈されている。つまり、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉は、基本的には可能･不可能の意味を表し、数量表現が含意されることで、典型的な可能補語の意味となると言える。更に、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉は、(14) のように話し手の判断を表すこともできる。(14a) は特に静態的 (static) な素性を持つ静態形容詞を先行述語とし、「状況に対する推測〈对情况的估计〉（刘月华他 2001:590）」や「性質や状態の程度に対する推測〈对性状的程度作出估计〉（吕叔湘主编 1999:367）」を表すとされてきた。更に、柯理思 (2000, 2005) では、これらを文法化に伴う根源的意味 (root meaning) から認識的意味 (epistemic meaning) への拡張として位置付け、認識的モダリティ (epistemic modality) の表現であると規定した。また、(14b) は状態変化を表す変化形容詞を先行述語として持ち、その意味は「性質や状態の変化に対する推測〈对形状的变化作出估计〉（吕叔湘主编 1999:367）」と記述されている。また、変化動詞〈到: 到着する〉、〈丢: 失う〉、〈免: 避ける〉等が先行する場合も含めて、その意味が「『可能性、未来』に傾く（荒川 2008:129）」ことが指摘されている。

次に、〈-得/-不得: -DE / -NEG-DE〉は、「可能」及び「許可」を表す形式であるとされてきた。

(15)（三仙姑）羞　得　只顾　擦　汗，再　也　<u>开　不　得</u>　口。

三仙姑　恥ずかしい DE　ひたすら~するばかり 拭う 汗　再び　も 開ける-NEG-DE$_{poten}$ 口

（刘月华他 2001:592）

「（三仙姑は）恥ずかしくてひたすら汗を拭うばかりで、再び口を開けることもできなかった。」

(16) 这 个 人　你　可　<u>小看 不 得</u>。（意思是“不应该小看”）（刘月华 2001:593②）

この CL 人 あなた くれぐれも 見下す-NEG-DE$_{permi}$ （意味は「見下してはいけない」である）

「この人を見下してはいけない。」

(15) の〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は不可能の意味を表す例であり、(16) は不許可を表している。

しかし、(15) のような可能の意味を表す〈-得/-不得: -DE$_{poten}$/-NEG-DE$_{poten}$〉は、普通話においては既に用いられなくなっている（詳細は 2.3.1.1 参照）。それに対して、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、様々な先行動詞を取り、普通話において広く用いられる形式である。

そこで、これまで先行研究で指摘されてきた〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE / -NEG-DE〉が表す意味を簡潔にまとめると次のようになる。

(17) 〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉が表す意味特徴

a. 結果事態の実現の可能性

b. 可能

c. 状態に対する推測、認識モダリティ / 変化に対する推測

(18) 〈-得/-不得: -DE / -NEG-DE〉

a. 可能 (一般的に、普通話では用いられない。)

b. 許可

1.3.2. 肯定形式と否定形式の非対称性

次に、肯定形式と否定形式の非対称性という観点から、可能補語の特徴を見る。肯定形式と否定形式は、一見すると対をなす関係であるように思われるが、可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、肯定形式と否定形式が非対称的な関係にあることが従来の研究により指摘されてきた。そこで、先行研究において主に指摘されてきた「使用頻度の相違」、「目的語位置の相違」及び「形成時期の相違」を中心に〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の肯定形式と否定形式の非対称性について概観する。

(19) 〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の肯定形式及び否定形式の非対称性

a. 肯定形式と否定形式の使用頻度の相違

b. 肯定形式と否定形式の目的語の位置の相違

c. 肯定形式と否定形式の形成時期の相違

まず、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の使用頻度であるが、刘月华 (1980:254-256) の調査によると、現代中国語における〈-得了: -DE-LIAO〉と〈-不了: -NEG-LIAO〉及び〈-得: -DE〉と〈-不得: -NEG-DE〉の使用頻度において、大きな異なりが見られる。次の（表 2）及び（表 3）の統計は、6 冊の小説、合計約 1,145,000 字から取られたものである[13]。

（表 2）〈-得了: -DE-LIAO〉と〈-不了: -NEG-LIAO〉の使用頻度

意味	肯定形式〈-得了〉	否定形式〈-不了〉
「可能」	17 例（内疑問文 11 例）	246 例（内疑問文 8 例）

（刘月华 1980:255-254 参照）

（表 3）〈-得: -DE〉と〈-不得: -NEG-DE〉の使用頻度

意味	肯定形式〈-得〉	否定形式〈-不得〉
「可能」	29 例（内疑問文 5 例）	135 例（内疑問文 3 例）
「許可」	1 例（内疑問文 0 例）	48 例（内疑問文 1 例）

（刘月华 1980:255-256 参照）

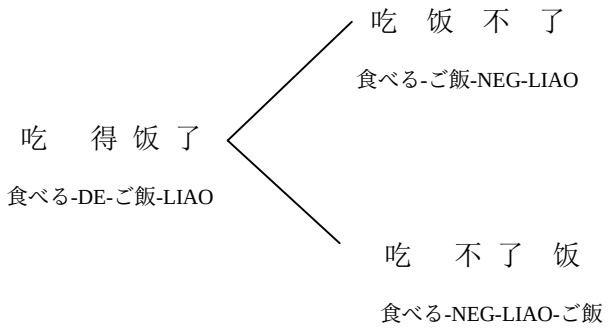
（表 2）より、肯定形式〈-得了: -DE-LIAO〉の使用頻度（17 例）は、否定形式〈-不了: -NEG-LIAO〉の使用頻度（246 例）に比べて、圧倒的に低いことが分かる。同様に（表 3）でも、肯定形式（合計 30 例）は否定形式（合計 183 例）よりも、その使用頻度が低いことが分かる。つまり、普通話における使用頻度という観点から考察すると、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の肯定形式と否定形式は非対称的であると言える。

次に、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が肯定形式と否定形式で、目的語の位置が異なることについて考察する。ここでは主に通時的な観点より中国語を見ていく。まず、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉について、肯定形式〈V 得了: -DE-LIAO〉では、目的語が〈得: DE〉と〈了: LIAO〉の間に置かれ〈V 得 O 了〉とな

[13] （表 2）及び（表 3）における統計は、曹禺《曹禺剧作选》297,000 字、老舍《骆驼样子》143,000 字《老舍剧作选》263,000 字、赵树理《李有才板话》77,000 字《李家庄的变迁》85,000 字、姚雪垠《李自成（二巻下）》280,000 字を用いて、集計されたものである（刘月华 1980:247 参照）。

るのに対して、否定形式〈V 不了〉では〈不: NEG〉と〈了: LIAO〉の間に置かれることはなく〈VO 不了〉或いは〈V 不了 O〉となる（太田 1958:233 参照）。太田氏は、この対応関係を次のようにまとめている。

(20)



（太田 1958:233）

また、〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉においても、肯定形の場合は目的語を可能補語〈得: DE〉の後に置き、否定形の場合は〈-不得: -NEG-DE〉の前に置かれるという相違がある（太田 1958:231）。実例を以下に挙げる。

(21) a. 除得此患,眾各思報恩矣 （傳奇，廣記 441）

「この災難をのぞくことができましたらみなは御恩をわすれません。」（太田 1958:231）

b. 余時把著手子,忍心不得 （遊仙窟）

「わたしはその時手をにぎったまま、心にがまんができなかった。」（太田 1958:232）

このように、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、肯定形式と否定形式では目的語の位置が異なることより、両者は非対称的な関係にあることが分かる。しかし、現代語においてはこのような相違はなくなり、肯定形式及び否定形式ともに目的語は補語の後ろに置かれている。

最後に、肯定形式と否定形式の形成時期の相違についてであるが、これは〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉よりも〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉でより顕著に見られる。〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉に関しては、肯定形式及び否定形式ともに唐五代において用

例が見られると太田 (1958:234) で指摘されている。しかし、その時代での意味特徴は可能とは言えないものが多く、結果の意味を示すものが多いとある。その一方で、〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の肯定形式は隋以前から見ることができ（太田 1958:230 参照)、一般的には漢代において、可能の意味として定着していたとみられている（王力 1980:350 参照)。更に、ごく僅かではあるが、先秦にもその用例が存在したという（杨平 1989:127 参照)。その意味特徴は、先秦では補語〈得: 得る〉は動詞本来の意味である「得る」という獲得の意味を表しており、可能の意味の用例が多くみられるのは、唐代の詩中においてである（王力 1980:350)。それに対して否定形式は、用例としては隋以前の資料から見られ、この時期に既に可能を表す例が観察されていた（太田 1958:231)。このように〈-不得: -NEG-DE〉が不可能の意味を表すことが、〈得: DE〉が可能の意味を表すよりも、非常に早い時期から見られるという事実より、両形式の非対称性が窺える。

以上、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の肯定形式と否定形式の非対称性について、「使用頻度の相違」、「目的語位置の相違」及び「形成時期の相違」といった観点から指摘した。

1.3.3. 典型的な可能補語〈V 得/不 C〉との相違

次に、本研究で考察対象とする可能補語である〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉と、他の典型的な可能補語との相違を論じる。既に 1.2.2 節でも論じたように、先行研究における可能補語の分類においても、典型的な可能と〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、別の類型として分類されてきた。そこで、1.3.3 節では、両形式を分ける特徴を更に詳しく考察する。

まず、両者を明確に分ける観点として、「対応する結果補語形式の有無（基本形の有無)」及び「構成要素間の生産性」を挙げることができる。

（表 4）　〈-得了/-不了〉及び〈-得/-不得〉の特徴

種類	基本形の有無	構成要素間の生産性
典型的な可能補語	あり	低い
〈-得了/-不了〉, 〈-得/-不得〉	なし	高い

以下、1.3.3.1 節では基本形の有無について、1.3.3.2 節では構成要素間の生産性について、

各々考察を行う。

1.3.3.1. 基本形の有無

まず、各々の可能補語形式が、結果補語形式を基本形式として持っているか否かという基準に関して、典型的な可能補語と〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉では、次のような相違が現れる。後者に関しては、〈-不了: -NEG-LIAO〉を例として取り上げる。

		＜基本形式＞	＜可能補語形式＞
(22) a. 典型的な可能補語	:	听　懂	听　得/不　懂
		聞く　理解する	聞く-DE/NEG-理解する
b.〈-得了/-不了〉〈-得/-不得〉	:	*吃　了	吃　得/不　了
		食べる-LIAO$_{poten}$	食べる-DE/NEG-LIAO$_{poten}$

典型的な可能補語は、対応する結果補語形式を持つのに対して、補語が機能語となっている〈-不了: -NEG-LIAO〉は、対応する結果補語形式を持たない。その要因は次のように考えることができる。まず、結果補語というのは、先行述語が表す事象に対する結果を表す、即ち全体として分析的に捉えられる事態であると言える。よって、その先行述語と補語の間に〈得: DE〉及び〈不: NEG〉を入れることで結果の肯定･否定を表す典型的な可能補語は、必然的にもととなる結果補語を持つことになる。それに対して、補語の意味が薄れ、分析的に解釈することができない〈了: LIAO$_{poten}$〉では、基本形式である対応する結果補語は持たないと考えられる。

1.3.3.2. 構成要素間の生産性

構成要素間の生産性に関しては、典型的な可能補語は先行述語と可能補語の組み合わせが固定的であるのに対して、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は様々な先行述語に接続し、生産性が非常に高いと言える。それは、典型的な可能補語は、補語自体で語彙的意味を持つため、それに適合する事態、即ち意味的に関連性のある事態を先行述語として取る必要があるため、その先行述語の種類は限られる

ことになる。それに対して、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、意味の漂白化が進んでいるため、様々な事態を先行述語として取ることができる。

以下、典型的な可能補語の例として〈-不懂: -NEG-理解する〉を、意味の漂白化が進んだ可能補語の例として、不可能を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉を各々取り上げる。

(23) a. 典型的可能補語　:　（听/看）-不懂

b. 可能補語〈-不了〉:　（吃/跑/看/走/用/要/忍受/解决/好/大…）　-不了

典型的可能補語である〈-不懂: -NEG-理解する〉は、(23a) にあるように先行動詞として用いられる語は〈听: 聞く〉及び〈看: 見る〉に限られる[14]。それに対して、意味の漂白化が進んだ可能補語である〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、(23b) から分かるように先行動詞として用いることができる語は非常に多岐に渡る。内容語の組み合わせである典型的な可能補語は、各々の要素の語彙的な内容を持つため、その組み合わせは意味的に影響を受けやすく、結合の際に、より強い制限が加えられる。それに対して、実質的な語彙的意味を持たない可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、機能語として主に文法的な情報を加える働きを行うため、様々な語が先行述語として現れやすいのである。

1.4. 使用データ

本研究では、主に北京大学汉语语言学研究中心（北京大学漢語言語学研究センター）で作成された《CCL 语料库》（以下『CCL コーパス』と表記）を用いて、用例を収集した。CCL コーパスは、〈现代汉语〉（現代中国語）及び〈古代汉语〉（古代中国語）に分けられており、本研究では、現代中国語のみを対象として調査を行った。その規模は、約 4,77 億字 (1.06GB) であり、〈现代汉语〉の総字数は、307,317,060 字である。CCL コーパスは、会話文、小説、新聞、雑誌、インターネット上の文章等、非常に多岐に渡るデータが収容されており、現代中国語を反映した大規模コーパスであると言える。

また、必要に応じて、《中国语补语例解》（侯精一・徐枢・张光正・蔡文兰. 北京:商务印书

[14] 稀に〈弄: する，やる〉、〈搞: する，やる〉等の代動詞を用いた例もある。

馆.2001）にある用例を使用した。《中国语补语例解》は、日本語を母語とする中国語学習者用に作成された補語の用法を記述した辞書である。また、辞書に挙げられている補語の種類として、「結果補語」、「方向補語」、「可能補語」、「介詞補語」、「程度補語」、「状態補語」、「数量補語」の 7 種類がある。

本研究では、主に CCL コーパスよりデータを収集し、議論を進める。《中国语补语例解》に関しては、作例を基本とし、例文が非常に整っているため、必要に応じて利用することとする。

1.5．各章の概要

本論文は全 7 章から構成されている。第一章の 1 節では、本研究の目的、及びその方法を明らかにした。更に、中国語の可能補語における先行研究を概観する形で、可能補語の位置づけやその分類について論じた。また、本論文で扱う可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉について、意味及び文法的、構文的な諸特徴を明らかにした上で、典型的な可能補語との相違について記述した。

第二章から第四章までは、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の意味特徴に着目して、分析を行う。ここでは、当該形式が表す意味として、可能（能力可能, 心理的不可能）、義務的モダリティ（不必要, 不許可）及び認識的モダリティ（蓋然性, 推断）に分類して論じる。

まず、第二章では、可能の意味を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉及び〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉について論じる。〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は状況可能を表し、〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は心理的不可能を表す。〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉の状況可能については、これまでも多く議論されており、本研究でも先行研究を踏まえた形で議論を行う。それに対して、〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が表す心理的不可能の分析は、管見の限りでは本研究での指摘がはじめてであると言える。具体的には、2.1 節で、研究の背景として問題とする議論のポイントをまとめた上で、2.3 節では状況可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉について、2.4 節では心理的不可能を表す〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉について論じる。議論の中心は、両形式の意味的な特徴を明らかにすることであるが、その中で、可能補語に先行する述語が有する意味素性の種類や、文法的な特徴、更には文の構文的な特徴等を記述することで、意味の分析を行う。最後に、2.5

節で第二章の議論全体をまとめる。

次に、第三章では、義務的モダリティを表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉及び〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉について論じる。〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は不許可の意味を表し、〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は不必要の意味を表す。まず、3.1 節では、本研究が取るモダリティの立場を明らかにする。続いて 3.2 節の研究の背景で第三章の議論の方向性を示し、3.3 節では、義務的モダリティと可能の意味の相違について論じる。従来からも指摘されてきたが、義務的モダリティの不許可や不必要という意味は、可能とある種非常に類似している。そこで、両意味範疇を明確に区別するために、まずは両者の相違について議論したのである。その上で、3.4 節では不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉について、3.5 節では不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉について、その意味的特徴、及び文法的、構文的特徴等を明らかにする。最後に、3.6 節で第三章の議論についてまとめる。

第四章では、認識的モダリティを表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob/deduc}$〉について論じる。〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob/deduc}$〉は、蓋然性及び推断という意味を表す。4.1 節で研究の背景を述べた上で、4.2 節では、認識的モダリティについて論じる。その上で、4.3 節では蓋然性を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉について、更に 4.4 節では推断を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉について分析を行う。そして最後に、4.5 節で第四章のまとめを行う。

以上述べたように、第二章から第四章で、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が表す意味特徴や文法的、構文的特徴について議論を行った後、第五章及び第六章では、各形式が表す中心的な意味、及びそれぞれの意味の関連性について考察する。

第五章では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が中心的に有する意味を明らかにする。第二章から第三章で論じたように、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、可能、義務的モダリティ或いは認識的モダリティというように多義であることが分かる。この中心的な意味を特定する基準として、その意味特徴が有する先行述語の多様性、その意味が成立するための文法的及び構文的特徴における制限等を総合的に考察して判断を行う。そこで、5.1 節で研究の方向性を示し、5.2 節では〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉について、5.3 節では〈-不得: -NEG-DE〉について論じる。そして最後に、5.4 節で第五章の総括を行う。

第六章では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の両形式について、状況可能の意味からモダリティの意味へとシフトした可能性があることを

論じる。具体的には、6.1 節で研究の背景を述べた上で、6.2 節では〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉における状況可能から認識的モダリティへの意味のシフト、6.3 節では〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉における状況可能から義務的モダリティへの意味のシフトについて分析を行う。更に、6.4 節では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉が認識的モダリティを表すようになり、〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が義務的モダリティを表すようにるが、どうしてその逆ではなかったのかという点について考察を行う。その結果として、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の特徴が更に明らかとなるであろう。6.5 節では第六章の議論をまとめる。

最後に第七章では、論文全体の総括として、再度論点を整理し、本研究で明らかになった点をまとめることで結論とする。

第二章　可能を表す〈-得了/-不了〉と〈-不得〉

2.1. 研究の背景

本章では、可能の意味を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉及び〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉という 2 つの形式を取り上げる。両形式を可能という意味範疇で一括りにしたが、厳密には〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は状況可能を表し、〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は心理的不可能を表すというように、厳密にはその意味特徴が異なる。これは、主に可能補語に先行する述語の意味素性の相違が大きく関わっている。まず、両形式に先行する述語は、基本的に意志性 (volitional) を含意していると考えられる。〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、特に働きかけという側面に言及する動作或いは行為を表す動詞を先行述語として取り、その種類は多岐に渡る。それに対して、〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、主に知覚動詞を取り、対象を知覚している、或いは知覚していることを仮定するという許容･受容という側面を捉えた動詞であると言える。この知覚を表す動詞に関して、本研究では〈看: 見る〉及び〈听: 聞く〉という 2 つの動詞を対象として、考察を行うこととする[15]。

先行述語の意味素性と可能補語が表す意味の関係性を以下の表にまとめた上で、各々の具体例を (24) 及び (25) に提示する。

[15] 〈看: 見る〉及び〈听: 聞く〉という知覚動詞は、基本的に中国語では、動作動詞の一種であると考えることができる。しかし、知覚という事態は、「知覚対象に働きかける」という側面と、「知覚対象を受け入れる」という側面の二面性が存在し、そのどちらに着目するかで、可能補語の意味に違いが現れると考えられる。

（表 5） 可能: 先行述語の意味素性と可能補語の意味範疇

先行述語		可能補語	
意味素性	述語の種類	形式	意味範疇
・意志性 ・働きかけ	動作動詞	〈 -得了 / -不了 〉 -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$	状況可能
・意志性 ・許容･受容	動作動詞の中の知覚を表す動詞	〈 -不 得 〉 -NEG-DE$_{poten}$	心理的不可能

(24) 平时 工作 忙碌，想 去 的 地方 去 不 了。 (CCL:《新华社 2004 年新闻稿》)

普段 仕事 忙しい AUX(したい) 行く NOM 場所 行く-NEG-LIAO$_{poten}$

「普段は仕事が忙しく、行きたい場所へ行けない。」

(25) 苒青 知道， 他 是 个 喜欢 流 泪 的 男人，

苒青 知っている 彼 COP CL 好む 流す 涙 NOM 男性

而 她，向来 看 不 得 男人 的 眼泪。（百合《哭泣的色彩》）

しかし 彼女 ずっと 見る-NEG-DE$_{poten}$ 男性 ASSOC 涙

「彼は良く泣く男性であるが、しかし、自分はもともと男性の涙を見ていられないということを、苒青は知っている。」

(24) は〈平时工作忙碌: 普段は仕事が忙しい〉という事態が原因で、〈想去的地方去不了: 行きたい場所へ行けない〉、即ち「行こう」と意図しても、その事態が実現しない（「行けない」）という不可能の意味を表している。それに対して、(25) は〈看不得男人的眼泪: 男性の涙を見ていられない〉というように、主体が対象を知覚する、或いは知覚していることを仮定した上で、その状態を続けることが主体にとって心理的或いは心情的に困難であるということを表している。そこで本研究では、前者のような〈動作動詞-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が表す意味を状況可能と呼び、後者のような〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が表す意味を心理的不可能と呼ぶこととする。

可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、補語〈了: LIAO〉が「終了する」という本来の語彙的意味を失い、ある種、文法化した形式であると言える。そのことから、先行述語が表す動作や行為が実現するまたは実現しないことを表す形式であるこ

とが、これまでの研究で指摘されてきた。また、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が状況可能として用いられ出したのは、元代以降のことであり、もともと状況可能の意味を表す形式として清代までは〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉が主に使用されていた。しかし、普通話では〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉が〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に完全に取って替わられることとなった。この通時的な議論に関しては、先行研究の記述をもとにして、本章 2.3.1.1 節で詳細に論じる。また、この可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に関しては、既に Chao (1968) 、刘月华 (1980) 、李宗江 (1994) 及び刘月华他 (1982, 2001) 等多くの先行研究で取り上げられ、様々な分析並びに考察が行われてきた。その中では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉の状況可能の意味として、大よそ次のように定義されてきた。当該形式は、「ある条件のもとで、先行述語が表す動作、行為或いは変化等が実現するか否か（刘月华他 2001, 李宗江 1994 等参照）」を表す。先行研究における議論の中で、この形式が表す可能の意味として重要であると思われる点は 2 点ある。それは、ある動作を行うことがどうして可能或いは不可能であるのかという、何らかの条件が必ず含意されている点と、補語である〈了: LIAO〉の意味の漂白化により、先行述語が表す動作、行為或いは変化等が指向されるようになったという点である。この 2 つの特徴が〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉の意味を規定する上で、非常に重要な要素であるとこれまで考えられてきた。そこで本研究では、この条件の含意ということと、先行述語の動作行為の指向性ということに関して、更に考察を行うこととする。

心理的不可能を表す〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、知覚動詞を先行述語とし、「見ていられない、聞いていられない」といった心理的に困難であるというニュアンスを表す。また、これは主に否定の表現となることより、考察の範囲を否定形式に限る。本来、可能の意味を表す〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、普通話ではほとんど用いられなくなっているという事情もあり、本研究で扱う心理的不可能〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉というのは、先行研究での記述及び分析では、ほとんど扱われることがなかった。しかし、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は普通話でも用例が見られ、〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉と意味特徴が異なるという点でも分析の必要性があると思われる。心理的不可能を表す〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、その意味として、「主体が許容或いは受容している事態に対して、主体の性格・性質として現れる心理・心情的な要因により、知覚を受け入れられないという主体の恒常的な感情を表す」と記述することができる。この定義は〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が、許容・受容

を表し、心理的影響という意味が現れるという分析に基づいている。この点で、働きかけを表す〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉とは、意味的に異なると言える。更に、意味的特徴の相違が、構文的或いは文法的特徴の相違と連動して現れることを指摘する。簡潔にまとめると、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は常に SVO（S = 知覚主体, V = 補語を含めた述語部分, O = 知覚対象）という語順を取り、主題化や主題-評言という構文を取ることができない。もしも主題-評言となる場合、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は不許可の意味となる（不許可の意味に関しては第三章 3.3 節で論じる）。 また、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は心理上の抽象的な活動を表す述語と用いられる副詞〈最: とても〉とも共起し、更に目的語要素として主述句を取ることもできる。一方、それに反して、〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、可能の意味として、主題化を許し、副詞〈最: とても〉とは共起し難く、主述句を目的語とする用例も見受けられない。このことから、文法的或いは構文的に見ても、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉とは異なる特徴を有すると言える。このように、本研究では〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉を普通話の一形式として分析し、文法的及び構文的な特徴との関連性も考慮した上で、その意味的特徴を考察する。

本章の構成として、まず、2.2 節では可能とは何か、また可能補語が表す可能の意味について考察を行う。その上で、2.3 節では可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉について、更に 2.4 節では心理的不可能を表す〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉について議論する。最後に、2.5 節で本章の議論及び主張をまとめることとする。

2.2. 可能の意味

可能とは、主体が動作或いは行為を行おうとすれば、その意図した動作行為が実現する、または実現しないということが、その状況の中に存在することを表す意味範疇である。つまり、可能の意味を形成するには、動作主の「意志性」及び動作行為の「実現性」という 2 つの意味特徴が非常に重要な役割を果たしている。

まず、意志性という点に関して考察する。可能の意味の場合、特に否定形式でその意味の特徴が表れやすい[16]。例えば、述語動詞を単に否定すると、各々の動詞が表す語彙的意味に併せて、動作を行おうとする意志が否定されている。例を次に挙げる。但し、中国語で

[16] 可能表現が否定表現として現れやすいという点は、中国語の現象のみならず、日本語における可能表現でもかつてから指摘されてきた（ヤコブセン 1989 等参照）。

は否定詞〈不: NEG〉は、否定する要素の前に置かれるのが規範である。

(26) 我　不 去。

私　NEG-行く

「私は行かない。」

(26) において、否定詞〈不: NEG〉は述語〈去: 行く〉の動作を行おうとする意志性、及び「行く」という動作の両方を否定して、「行かない」という意味を表している。それに対して、(27) のように可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉を用いると、「行く」という動作の実現性は否定されるが、主体の「行こう」とする意志は否定されない。

(27) 我　去　不 了。

私 行く-NEG-LIAO$_{poten}$

「私は行くことができない。」

このように、「行こう」とする意志が否定されないという点が、可能の意味を成立させる重要な特徴であると言える。これは、否定詞〈不: NEG〉が先行動詞〈去: 行く〉の前に置かれるのではなく、先行動詞の後ろ、つまり補語〈了: LIAO$_{poten}$〉の前に置かれるという相違の反映である可能性が高い。

次に、実現性という点に関してであるが、本研究が扱う可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が表す可能の意味は、主体の行為が実現するだけの「許容性、萌芽がその状況の中に存在する（尾上 1998:93）」[17]という、いわゆる「潜在的な」或いは「可能性がある」と記述されるポテンシャル (potential; POTEN) な可能を表すと言える。このようなポテンシャルな可能に対して、アクチュアル (actual; ACTU) な可能[18]と言われる

[17] 「動作主がその行為をしようという意図を持った場合にその行為が実現するだけの許容性、萌芽がその状況の中に存在する（尾上 1998:93）」という記述を参考にしている。

[18] アクチュアルな可能は、「実現可能」又は「意図成就」等と言われることもある（尾上 1998, 川村 2004, 渋谷 1994 等参照）。尾上 (1999) では、意図成就とは「動作主がその行為を意図したところ動作主自身の期待どおりに実現したということ（尾上 1999:91）」であるとし、可能の意味である「事態全体の生起に関してその成就への期待の存在を意識する用法（尾上 1999:91）」という点で共通性は見いだせるものの、両者にはそれ程近接性はなく、両者を「広義可能」という名で一括することに消極的な態度を示している。

一類型も可能の意味として存在する[19]。特に日本語における可能を表す形式である「れる・られる」及び「できる」は、語用論的意味の含意の違いにより、ポテンシャルな可能及びアクチュアルな可能の両方を表し得る。ポテンシャルな可能とは、「動作の実現（非実現）を含意しない（渋谷 1993:14）」可能のことを言い、主に「動詞の動作性を失って、過去・現在にかかわりなく状態的な意味の様相を帯びる(渋谷 1994:15)」という点で、形容詞と類似した用法であると見られている。そこで、次に中国語可能補語が表すポテンシャルな可能の例を挙げる。

(28) 山　太　陡，　　开　不　了　　路。

山 とても 急で険しい 通す-NEG-LIAO$_{poten}$ 道

「山が険しすぎて、道を通せない。」（《中国补语例解》p.273）

(29) 今天 下 雨，去　不　了　　颐和园 了。（刘月华等 2001:590②）

今日 降る 雨　行く-NEG-LIAO$_{poten}$ 頤和園　SFP

「今日雨が降っているから、頤和園へは行けなくなった。」

(30) 今天 阿里 病 了，上　不　了　　课 了。（刘月华等 2001:590④）

今日　アリ　病気 PERF 出る-NEG-LIAO$_{poten}$ 授業 SFP

「今日アリは病気にかかって、授業には出られなくなった。」

(28) の〈山太陡: 山が険しい〉ことが原因で、〈开不了路: 道を通せない〉という不可能の意味は、実際に動作が試行された事態を表しているのではなく、その状況として潜在的に不可能であるということを表している。(29) は〈今天下雨: 今日雨が降っている〉、(30) は〈今天阿里病了: 今日アリは病気になった 〉ということから分かるように、一時的な状況が条件として機能しており、一見すると実現可能のように思われるが、この文は事態の非

[19] 特にモダリティ(modality)の議論で、realis-irrealis (現実相-非現実相)の対立でモダリティを規定する場合、ポテンシャルな可能を表す文法形式はモダリティ形式に入るが、アクチュアルな可能の中でも特に意図成就の意味を表す場合には、モダリティ形式とは言えない。この点において、両者の分類は非常に重要であると考えられる。しかし、本研究では主に主観性(subjectivity)を軸にしてモダリティを考えているため、両者をもともとモダリティ形式とは考えない。

実現を含意しているのではなく、「頤和園に行けない」及び「授業に出られない」という状況にあるということを表している。つまり、(28) から (30) はポテンシャルな可能の例であり、この場合には、可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉を用いて表すことができる。

それに対して、次に提示するように、事態の非実現を表すアクチュアルな可能を表す文では、可能補語を用いることは非常に難しい。上に挙げた (29) 及び (30) の例文を、過去に事態が実現したことを表すアクチュアルな可能表現にすると、(31a) 及び (32a) のようになる。これらの文は、対応する中国語を考えると (31b)〈没去成: 行けなかった〉及び (32b)〈没能上课: 授業に出られなかった〉というように表現され、可能補語を用いた〈去不了: 行けない〉及び〈上不了课: 授業に出られない〉という表現では表すことができない。

(31) a. その日は雨が降って、頤和園に行けなかった。

b. 那天 下 雨， <u>没 去 成</u> 颐和园。

その日 降る 雨 ない 行く-達成する 頤和園

(32) a. その日アリは病気に掛かって、授業に出られなかった。

b. 那天 阿里 病 了， <u>没 能 上课</u>。

その日 アリ 病気になる PERF ない AUX（できる） 授業に出る

アクチュアルな可能とは、「動作の実現（非実現）を含意する（渋谷 1993:14）」可能のことを言い、主として「一回的な動作の（非）実現（渋谷 1994:15）」について言及することが多い。もう一例、アクチュアルな可能を表す肯定形の例を加える。

(33) a. 張三は 100 キロのバーベルを持ち上げられた。

b. *张三 <u>举起 得 了</u> 了 100 公斤 的 杠铃。

張三 持ち上げる-DE-LIAO$_{actu}$ PERF 100 キロ ASSOC バーベル

c. 张三 成功　　举起　了 100 公斤　的　杠铃。

張三 成功する 持ち上げる PERF 100 キロ ASSOC バーベル

(33a) は、現実としてその場で、「張三が 100 キロのバーベルを持ち上げる」という行為が実現したことを表している。このように、アクチュアルな可能は、中国語の可能補語では表すことができない。つまり、(33a) の文を中国語に訳すと、可能補語を用いた (33b) のような表現とはならず、(33c) のような〈成功举起: 持ち上げることに成功した〉という表現となる。つまり、中国語の可能補語は、アクチュアルな可能を表すことはできないと言える。

中国語の可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が表す可能の意味に関して、動作主の「意志性」、及び動作･行為の「実現性」という 2 点について考察し、その特徴を明らかにした。その結果、可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、否定形式の場合において、動作主の意志性には否定のスコープが及ばず、必ず意志性が保持されることが分かった。更に、その事態は、動作の実現性を含意せず、その状況の中に事態を実現する可能性があるか否かを問うポテンシャルな可能を表すのである。

2.3. 状況可能を表す〈-得了/-不了〉

2.3 節では、可能を表す〈動作動詞-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉における文法的、構文的特徴及び意味的特徴等について論じる。そこで、扱う形式の具体例を以下に提示する。

(34) 拖拉机　坏　了，今天 耕　不　了　　地　了。

トラクター 壊れる PERF 今日 耕す-NEG-LIAO$_{poten}$ 土地 SFP

「トラクターが壊れて、今日は耕せなくなった。」(《中国语补语例解》p.254)

(34) の先行動詞〈耕: 耕す〉からも分かるように、可能の意味を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、先行述語として意志性を持つ動作動詞を取る。また、その種類は非常に多岐に渡る。更にこの文は、〈今天: 今日〉を主題とした有題文となっていることがこの例から窺える。但し (34) は、主語位置に現れるはずの動作主体が省略され

ている。また後に議論するが、〈動作動詞-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は無題文としても成立することができる。

次に意味特徴に関しては、(34) は〈耕: 耕す〉という動詞に可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉が付加されて「耕すことができない」という意味を表し、先行述語が表す事態が実現しないということを述べている。また、耕すことができないことの要因として、「トラクターが壊れている」という条件が明示されていることが分かる。このように、可能・不可能であることの条件、及び先行述語が表す事態の実現性という特徴が、これまでも可能を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉の議論の焦点となってきた。そこで、この 2 点について、先行研究の記述を概観する形で、本節での議論の方向性を示す。

まずこれまで、〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉が可能の意味を表す上で、何らかの条件が必ず関与していることが指摘されてきた（刘月华等 2001 等参照)。その中で、刘月华等 (2001:590) では、その条件の種類として、〈主观条件: 主観条件〉及び〈客观条件: 客観条件〉という 2 類型を提示している。この類型に関しては、2.3.2.1 節で詳細に論じるが、そこで問題となるのは、両条件において可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が成立するという点である。それに対して、本研究で主張するのは、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉を用いることのできる条件と用いることのできない条件があるという点である。結論を先取りすると、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が用いられる条件とは外在的或いは内在的な事態で、特に一時的な条件となっている場合であり、能力或いは心情のような恒常的な事態が条件となっている場合は用いることができないことを論じる。

次に、先行述語の事態の実現性とは、典型的な可能補語が有する結果の実現性に言及するという特徴ではなく、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、先行述語が表す動作行為の実現性に対する可能性を述べる形式であるという特殊性から出発した議論であると言える。この先行述語が表す事態の実現性ということに対して、主に李宗江 (1994) では、「動作への指向性」という表現を用いて説明がなされている。この点に関して、本研究では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ /-NEG-LIAO$_{poten}$〉は動作を指向しているように見えるが、本質的には動作行為の実行を前提としており、結果に対する指向性は一時的な条件を取ることで保持されているということを論じる。

本節の構成として、2.3.1 節では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉の先行述語の種類や構文的特徴の記述並びに分析を進める。また、可能を表す用法として、〈-得/-不

得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉から〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉への形式的な交替について、通時的な観点からの議論を参考に 2.3.1.1 節で論じる。その上で、2.3.2 節では、主に〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉の意味的な特徴の考察を行うこととする。

2.3.1. 状況可能を表す〈-得了/-不了〉の諸特徴

2.3.1 節では、可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉の先行述語の特徴や主題を取るか否か等の特徴に焦点を当てて議論を行う。可能を表す可能補語は、唐、宋代では〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉という形式が用いられていた。それが、普通話では完全に〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に取って替わられたと言える。この可能の意味となる〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、先行述語として意志性を持つ動詞を取り、主語-述語を基本として成立する。また、主語以外の要素を主題化することも可能であり、更に主題-評言を基本とした有題文としても成立することを指摘する。

まず、2.3.1.1 節では、可能補語の通時的な研究を参考に、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が、〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉に代わって可能の意味を表すようになる過程について論じる。その上で、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に先行する述語の種類を 2.3.1.2 節で、更に〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が用いられる文の構文的な特徴について 2.3.1.3 節で提示する。

2.3.1.1. 形式の移行

2.3.1.1 節では、主に李宗江 (1994) の記述に沿って、可能を表す〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉が〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に取って替わられる通時的な過程を追う。また、普通話において〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉が用いられなくなる要因として、〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉の多義性及び先行動詞の音節数による制限、更には可能補語が本来表す意味から得られる特徴への類推という観点で主に説明されている（李宗江 1994）。以下では、基本的には李宗江 (1994) の議論に従うが、この形式の交替の原理に関しても、特に他の特徴をも考慮した上で再度検討したい。

まず、通時的な観点から、〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉から〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉へ取って替わられる過程を概観する。〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉は唐代の資料に大量に出現し、清末に至るまでずっとその使用頻度が高いこ

とが指摘されている。〈近代汉语〉（近代中国語）における資料から、次のような例が挙げられている。

(35) 兵马较多，趋到界首，归去不得。(敦 39 页)[20] (李宗江 1994: 379)
「兵隊と軍馬が割合多く、界首に到着して、帰ることができない。」

一方、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、元代以降になって初めてその用例が見られるが、用例の出現数としては明代になってもそう多くはない[21]。この要因として、李宗江 (1994) では、執筆時期に著者の方言の中で、まだ〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が使用されていなかった可能性を指摘している。それが、清代に入り、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉の使用が急激に増加する。更に、〈北京口语〉（北京口語）では完全に可能を表す〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉はその地位を奪われ、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に取って替わられた[22]。つまり、唐代、宋代では可能を表す可能補語として〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉が用いられており、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は使用されていなかった。しかし、元代に入り〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉も可能の意味で使用されるようになるが、明代までその用例は非常に少なかったようである。それが、清代に入り〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉の使用が急激に増加し、普通話においては〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉が〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に完全に取って替わられたという。以上が歴史的な資料をもとにして、論じられた事実である。

次に、このような〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉の衰退の要因を概観する。この点に関して、李宗江 (1994) では、意味的な負担の重なりという観点から、〈得: DE〉の多義性と先行動詞の音節数の制限を挙げる。更に、可能補語の意味的な特徴からの類推という点からも説明を試みる。しかし、これらの要因がどのような関係を持って、またどの要因が

[20] 《敦》は《敦煌变文集》の略である。
[21] 李宗江(1994:379)では、《金瓶梅词话》前 50 回のうち 6 例、《水浒传》、《西游记》の中には一例も見られないと指摘されている。
[22] 現代語においても、《骆驼祥子》の中にも 30 例の〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉が見られるが、その内の 29 例は、慣用化した〈顾得/顾不得: 構う/構っていられない〉、〈舍得/舍不得: 惜しまない/惜しむ, 離れがたい〉が占めていることが、李宗江(1994:379)で指摘されている。更に、40 万字の現代小説を基にしたコーパスでは、〈顾不得，算不得，怨不得，少不得，等不得〉等がいくつか現れるが、これは〈古语: 古語〉の名残あるいは、方言の参入であると考えられている（李宗江 1994:379）。

どの時期に〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉の衰退に関与しているのかという点に関しては論じられていないため、ここでは、李宗江(1994)が取り上げている順番に合わせて提示することにする。まず、〈得: DE〉の多義性であるが、可能補語を取り不許可を表す用法、動詞の後に用いて実現のアスペクトを表す用法（〈完成体〉（完成アスペクト）と言われる）[23]、動詞の後に用いて〈获得: 獲得〉の意味を表す用法に併せて、可能補語の可能の意味を表す用法をも考慮すれば 4 種類の意味用法が存在することになる。このように〈得: DE〉が多義であるということから、その意味的な負担が大きく、可能を表す〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉が衰退して行った要因の一つであると考察されている。しかし、様々な言語現象を考えると、一見異なるように見える意味を 1 つの形式が担うという現象は他にも多々存在する。そのため、この点が単純に可能を表す〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉の衰退と関連しているかについては慎重に議論する必要があると思われる[24]。次に、先行動詞の音節数による要因であるが、もともと〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉が取る先行動詞の音節数は、1 音節の動詞に制限され、2 音節の動詞は取りにくいことが指摘されている。それに対して、中国語の中の 2 音節動詞の増加に伴い、その制限のために、他形式である〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に取って替わられた可能性があることが指摘されている。最後は、可能補語の意味的な特徴からの類推である。可能補語は必ず結果の実現性を表すという点で、結果の部分が補語 (C) として表される〈V 得/不 C〉という形式を取る。この意味に適合した形式の台頭により、可能を表す場合も、特に肯定形式では、〈V 得: -DE$_{poten}$〉よりも〈V 得了: -DE-LIAO$_{poten}$〉が好まれるようになった可能性があるという。これらの指摘は、実際に実証することは非常に困難であるが、これらの特徴が可能を表す〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉の衰退に大きく影響している可能性は非常に高いと考えられる。

以上、李宗江 (1994:378-340) の記述を参考にして、可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉と〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉について見てきた。ここで指摘されているように、結果的に普通話では、可能を表す〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉という形式は基本的には衰退し、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に取って替わられたと言える。そこで、本研究では基本的に普通話を対象としているため、特段必要があ

[23] 特に初期の白話で見られる用法である。
[24] 例えば、日本語の「（ら）れる」は、可能という意味も表すが、同時に受身、尊敬、自発等といった意味特徴をも同時に有する。また、可能には「ことができる」という形式もあるが、可能を表す「（ら）れる」も現代日本語において意味的に重なりを見せる。

る場合を除いて、可能の意味を表す可能補語の分析は〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉のみに止めることとする。

2.3.1.2. 動作･行為動詞の種類

可能という意味には、必ず主体の意志性が含意されるため、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉の先行述語は、意志性を有した動作或いは行為動詞に限られることが必然となる。また、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が取ることのできる先行動詞の種類は、他の典型的な可能補語[25]に比べて非常に多いと言える。この点に関しては、刘月华他 (2001) の次のような記述からも明らかである。

(36) 动词或形容词与 B 类结合要比 A 类来得容易，结合面也宽些，连某些动补式动词（如“扩大、延长、埋没、提高”等）、前面有状语的动词甚至有其他补语的动词都可以带 B 类补语（刘月华他 2001:591）

「動詞或いは形容詞と B 類可能補語の結合は、A 類可能補語より容易であり、その結合面も広く、動補式動詞（例えば、〈扩大: 拡大する〉，〈延长: 延長する〉，〈埋没: うずめる〉，〈提高: 高める〉)、連用修飾語が前接する動詞、そして他の補語の動詞でさえ B 類可能補語を取ることができる。」

1.2.2.3 節でも先行研究をまとめる形で論じたが、ここでいう A 類可能補語とは、補語が表す結果や方向の実現を許容するか否かを述べる典型的な可能補語のことである。それに対して、B 類可能補語とは、意味の漂白化の進んだ可能補語である〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉のことである。この B 類可能補語が、本節で扱っている形式である。(36) で取り上げた刘月华他 (2001) の記述からも分かるように、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、典型的な可能補語に比べて、結合する先行述語の種類が非常に多岐に渡り、多様な述語を取り得ると言える。

そこで、ある動詞及び形容詞が、どのような補語[26]を取るかを記述した辞典である《中国

[25] ここでいう典型的な可能補語とは、先行する動詞 (V) とそれに後続する補語 (C) の間に肯定形では〈得: DE〉、否定形では〈不: NEG〉を挿入した形式（〈V 不/得 C〉）のことを言う。また、意味的には、先行動詞が表す動作行為に対して、補語が表す結果や方向の実現を許容するか否かを表す（Chao1968:452, 朱德熙 1982:133, 刘月华他 1983:354 等参照）。

[26] 辞書に挙げられている補語の種類として、「結果補語」、「方向補語」、「可能補語」、「介詞

语补语例解》[27]から、可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉（或いは否定形式〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉のみの場合もある）と結合する述語を数えると、合計 857 語あった（辞書に見出し語として挙げられている動詞及び形容詞は、合わせて 1072 語である）。その中で、意志動詞を先行動詞とする用例の異なり語数は、約 650 語あり、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に先行する述語全体の約 75%となる[28]。このように、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が可能を表す場合、その先行述語は、基本的に意志性を有するという制限はあるものの、様々な語彙的意味を表す種類の動詞を先行動詞として取ることができる。

しかし、その一方で、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉であっても、共起しにくい動詞も存在する。それは、話し言葉で一般的に用いることのない動詞（例えば、〈逾: 超える〉, 〈著: 明らかである〉, 〈恭候: うやうやしく待つ〉等）や、使役の意味を表す動詞（例えば〈使: させる〉, 〈让: させる〉等）、または法助動詞（例えば〈能: できる〉, 〈可以: してもよい〉等）である（刘月华他 2001:591 参照）。以下に例を挙げる。

(37) a. *逾　得/不　了

超える-DE/NEG-LIAO$_{poten}$

b. *使　得/不　了

させる-DE/NEG-LIAO$_{poten}$

c. *能　得/不　了

できる-DE/NEG-LIAO$_{poten}$

補語」、「程度補語」、「状態補語」、「数量補語」の 7 種類が挙げられている。

[27] 侯精一・徐枢・张光正・蔡文兰 (2001) 《中国语补语例解》北京・商务印书店.

[28] 《中国语补语例解》では、多義語に関しては、各々見出し語として提示している。例えば、〈介绍〉という語は、「紹介する」、「引き入れる、持ち込む」、「理解させる、熟知させる、説明する」という 3 つの意味があり、それぞれを別の見出し語として立て、次のような例を挙げている。

① 他的条件太差，给他介绍不了对象。（彼の条件は余りにも悪いので、彼に結婚相手は紹介できない。）

② 我还没有入会怎么介绍得了别人。（私はまだ入会もしていないのにどうして他人を紹介したり出来ようか。）

③ 那门学科的研究动态他介绍得了吗？（その分野の研究の動きを彼は説明出来ますか。）

よって、本研究の集計の際にも、これらを別々の語として数えている。

可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、その成立時期が遅いため（2.3.1.1 節参照）、文語調の語とは共起しにくいことが、(37a) のような結合を許さない要因であるのかもしれない。また、(37b) の使役動詞や (37c) の法助動詞は、広義の意味で文法化していると捉えることができ、用いられる文中で主動詞として機能しているとは見にくいことから、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉の先行動詞とはならないことは容易に想像がつく。

以上、可能の意味を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉と共起する先行述語の特徴として、多少の制限はあるものの、基本的には意志性を有する様々な動詞と共起できることを見てきた。

2.3.1.3. 文の構文的特徴

次に、主題化という観点より、可能の意味を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉を有する文の特徴について考察を行う。そこで、主題 (topic) ということを考える上で、切り離せない概念として主語 (subject) という術語がある[29]。主語に関しては、1950 年代中国語学界で、その規定を巡って活発に議論が行われた。これを主賓論争（〈主宾语问题讨论〉）[30]と言う。そこでは、主に、二つの異なる立場に分かれて議論がなされた。それは、主語を意味によって規定する立場と語順によって規定する立場である（朱 1985:27-41 参照）。本研究は、後者の語順によって主語を規定する立場を採る。この語順による規定では、述語との意味関係で主語を規定するのではなく、主語は必ず述語の前に現れる要素であるという見方を取る[31]（张志公 1953, 徐仲华 1957, 朱德熙 1982, 1985）。しかし、特に朱德熙 (1982, 1985) では、単純に語順のみを考慮しているのではなく、文における文法的な特徴をも併せて、主語を規定しており[32]、本研究でもこの考え方に則ることとする。

---

[29] 尾上 (2004:22) では、主題(題目)を立てる動機として、主語と似ているが主語とは違う成分、つまり「主語との緊張関係（尾上 2004:22）」において定義さ得る術語であると言う。

[30] 「賓語」（〈宾语〉）とは、目的語にほぼ相当し、〈主宾〉とは「主語-目的語」のことである。

[31] 主語が述語に前置されるということの例外として、倒置（〈倒装〉）が挙げられる（朱德熙 1982:221-223 参照）。つまり、〈快进来吧，你: さっさとお入りなさい、あなたは。〉或いは〈修好了没有，那辆车: 直りましたか、あの車は。〉のような例に関しては、主語が文末へ倒置されたと考える。

[32] 例えば、〈今天（这儿）种树: 今日（ここに）木を植える〉の〈今天: 今日〉は、一般言語学的には状況語や副詞と言われそうな要素であるが、朱德熙 (1982, 1985) の立場に立て

また、形態変化に乏しい中国語にとって、文頭に置かれるということが主語を規定する上での特徴の一つになると考えられよう。本研究では主語と主題はレベルの異なる概念であるとする立場を採る。主語とは統語機能 (syntactic function) のレベルによって規定されるものであるのに対して、主題とは情報構造 (information sturucture) における、評言 (comment) に対する話題というレベルで規定されるものである（角田 2009:177-181 参照）[33]。つまり、状況によっては、ある成分が主語であり、同時に主題としても機能しているということも往々にして起こり得る。つまり、両者はレベルが異なるのである。主語となる要素の中に、情報構造のレベルで見ると、主題であると言いたくなる場合があるのである。この主題という概念に対して、本研究では、「文頭に立ち、1 文の中で説明がなされる対象」という観点で規定する。これは Sapir、Hocket 等のアメリカ構造主義、及び Haliday、Michael 等のプラーグ学派における主題に対する見方であり、“Topic-Comment” 或いは “Theme-Rhema” 等と呼ばれてきた（Sornicola2006:766 参照）。そこで、まずは、中国語における主語、及びその中で主題として規定したくなるような要素について、先行研究を参考にして、以下で簡潔にまとめる。

まず、主語とは、統語機能によって規定されることを述べたが、主語とする要素に共通する概念的な側面に関して、朱德熙 (1982) では、「話者が最も深く関心を寄せる主題」〈他 [说话人] 最感兴趣的话题（朱德熙 1982:96）〉であり、述語によって叙述される対象であると記述されている[34]。また、必ず述語の前に置かれるということより、〈我们开会: 私たちは会議を開く〉という文の中の動作主である〈我们: 私たち〉も主語であり、〈车修好了: 車はなおった〉という文の中の対象である〈车: 車〉も主語となる。更に、通常、状況語や副詞とされる時間や場所、或いは受動者や間接関与者や道具といった要素も主語として機能すると考えられている。

ば、主語ということになる。その根拠として、〈他们种树: 彼らは木を植える〉という典型的に主語と見做せる要素を文頭に有する文と文法的に同様の振る舞いをするからである。一方で、〈今天: 今日〉は、〈马上种树: すぐに木を植える〉という副詞〈马上: すぐに〉が文頭に来る文とは、文法的に異なりを見せるからである。

[33] 情報構造のレベルにおいては、「topic（主題）対 commnet（評言）」及び「旧情報、新情報」という二つの代表的な下位分類が挙げられているが、本研究では、主に「topic 対 comment」という点で主題を考察する。

[34] 中国語における主語は、他の文法的特徴と比較した場合、述語との関係が非常に緩い。この点に関して、朱德熙 (1982:95) では、主語と述語の間にはポーズを置くことができる、また語気助詞を置いて両者を隔てることができるという特徴を挙げている。

(38) a. 今天 下午　开会。（時間主語）（朱德熙 1982:98）

今日　午後　会議を開く

「今日の午後は会議を開く。」

b. 教室 里　在　上课。（場所主語）（朱德熙 1982:98）

教室 の中 DUR　授業をする

「教室では、授業中だ。」

つまり、(38a) の時間を表す〈今天下午: 今日の午後〉や、(38b) の場所を表す〈教室里: 教室の中〉も主語ということになる[35]。また、次の文では、受動者、間接関与者及び道具が主語として機能している例である[36]。

(39) a. 所有　的　办法　都　试　过　了。（受動者主語）（朱德熙 1982:99）

すべて ASSOC　方法　全て 試す EXP　SFP

「あらゆる方法は試してみた。」

b. 这 位 同学 我 没 跟 他 说　过 话。（間接関与者主語）（朱德熙 1982:99）

この CL　学生　私 ない と 彼 話す　EXP 話

「この学生とは私は話をしたことがない。」

c. 你　的 钥匙 开　不　了　我　的　锁。（道具主語）（朱德熙 1982:99）

あなた ASSOC 鍵　開ける-NEG-LIAO$_{poten}$ 私 ASSOC　鍵

「あなたの鍵では私の錠を開けられない。」

以上が統語論的な観点によって規定した主語の例である。

次に、このような主語という要素の中で、情報構造のレベルにおいては、主題として機能していると考えられている現象について述べる。ここで取り上げるのは、左方転移 (left

[35] この〈今天下午: 今日の午後〉及び〈教室里: 教室の中〉を連用修飾語とする見方もある。
[36] また、中国語では述語句がそのままの形で主語になることができる。〈教书不容易: 勉強を教えることは容易ではない〉がその一例である（朱德熙 1982:101 参照）。

dislocation) した主題及び場面設定語としての主題の 2 つのタイプである。これらは、特に本研究で問題にする可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉を伴った述語を主要述語とする文で問題となるために取り上げるのであり、他にも中国語の主題を規定する上での特徴はあるが、ここでは特段取り上げないこととする[37]。まず、左方転移した主題とは、評言中の述語と文法関係にあり、意味役割を与えられた名詞句が文頭へ移動したと分析されるような例である。

(40) 这 本 书 我 看 过。 （望月 1986:30）

この CL 本 私 読む EXP

「この本は私は読んだことがある。」

(40) の〈这本书: この本〉は、動詞〈看: 見る〉の対象であり、本来は目的語位置に置かれる成分であるが、それが左方転移し、主語位置に用いられている。この現象は、Chafe (1976:49-51) でも次のような例で以て、指摘されている。

(41) The play, John saw yesterday. (Chafe 1978:49(13))

「劇は、ジョンが昨日見た。」

これも、対象である ‘the play: 劇’ が、文頭に移動しており、それに続く主述句（‘John saw: ジョンが見た’）が ‘the play: 劇’ の解説として機能し、全体で主題-評言という有題文となっている。次に、場面設定語が主題として機能する例であるが、主に場所詞及び時間詞がこれに当たる。

(42) a. 在 院子 里 我 种 了 几 棵 菊 花儿。（望月 1986:31）

に 庭 の中 私 植える PERF 幾つか CL 菊 花

「庭には私は菊の花を何本か植えた。」

[37] この他にも中国語の主題の例として、〈象鼻子长: 象は鼻が長い〉や〈他工作很积极: 彼は仕事がとても積極的だ〉といった、所謂二重主語文がある。この現象を以て、Li&Thompson (1976) では、中国語を「主題卓越言語」(topic prominent language) と呼んだ。

b. 今天 天气 很 好。 （望月八十吉・望月圭子 1999:325）

今日 天気 とても 良い

「今日は天気が良い。」

以上、中国語における主題の具体例を取り上げ、その特徴を観察した。

そこで、以上の主語及び主題の議論に則って、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が有する主語及び主題の分析を行う。結論から述べると、可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、主語-述語及び主題-評言の両方を取ることができる。まず、主語-述語の例から提示する。

(43) 他 调 得 了 颜色 吗?

彼 調合する-DE-LIAO$_{poten}$ 色 Q

「彼は色の調合ができますか。」(《中国语补语例解》p.457)

(44) 这 个 病人 救 不 了 了。

これ CL 病人 助ける-NEG-LIAO$_{poten}$ PERF

「この病人はもう助からない。」(《中国语补语例解》p.268)

(45) 这 个 班 取 不 了 五十个人。

これ CL クラス 採用する-NEG-LIAO$_{poten}$ 50 人

「このクラスから 50 人は採用出来ない。」(《中国语补语例解》p.337)

(46) 话剧 要 演 两个 多 小时，现在 还 散 不 了 场。

劇 必要である 上映する 2 CL 余り 時間 現在 まだ はねる-NEG-LIAO$_{poten}$ 舞台

「劇は上演が 2 時間余りかかるので、今はまだはねていない。」(《中国语补语例解》p.392)

(43) は動作主体である〈他: 彼〉が主語であり、(44) は対象である〈这个病人: この病人〉が主語となっている。また、(45) では〈这个班: このクラス〉という場所、(46) は〈现在: 現在〉という時間が主語となっている。更に、実例を追加する。(47a) は対象である〈书: 本〉が主語位置に置かれ、場所である〈架: 棚〉が目的語位置に置かれており、(47b) は場所が

〈宁安县人民医院: 寧安県人民病院〉が主語位置に置かれている。また、(47a) は〈书: 本〉を目的語位置に移動させる等の他の語順は許さず、(47b) も〈宁安县人民医院: 寧安県人民病院〉に場所を表す前置詞[38]である〈在: で〉を用いたり、この要素を目的語位置で用いたりすることもできない。よって、(47ab) は主語-述語であると考えることができる。

(47) a. 空间 紧缺， 书 上 不 了 架，

空間 不足している 本 上げる-NEG-LIAO$_{poten}$ 棚

他们 就 在 书架 上 再 加 上 一个 书架;…。

彼ら 正に に 本棚 の上 再び 加える-取り付ける 1-CL 本棚

(CCL:《1994 年报刊精选》)

「空間が不足しており、本が棚に上がらず、彼らは棚の上にまた棚を加えた;…。」

b. 经 主治医生 检查， 孩子 已 危在旦夕，无力 抢 救，

経る 主治医 検査する 子供 既に 危篤状態 する力がない 救急措置をとる

只好 用 车 转 送 到 宁安县人民医院。

するほかない で 車 移す 送る 着く 寧安県人民病院

宁安县人民医院 看 不 了， 又 去 牡丹江市。(CCL:《读者》)

寧安県人民医院 見る-NEG-LIAO$_{poten}$ また 行く 牡丹江市

「主治医の検査では、子供は既に危篤状態で、助けることができず、ただ車に乗せて寧安県人民病院に送り届けるしかなかった。しかし、寧安県人民病院では診ることができず、また牡丹江市に行った。」

更に、(44) から (47) は、状況によっては、説明がなされる対象としての主題表現と見做すことも可能である。また、次の例の〈这个工作: この仕事〉は、〈他可顶不了老张: 彼は張さんの代わりは勤まらない〉という主述句を評言として従えており、更に主題性の高い要素であると見做すことができる。

[38] 中国語学においては、〈介词: 介詞〉と呼ばれることが多い。

(48) 这 个 工作 他　可　　顶　　不　了　老张。

これ-CL　仕事　彼 絶対に 取って代わる-NEG-LIAO$_{poten}$ 張さん

「この仕事に関しては、彼は張さんの代わりは勤まらない。」(《中国语补语例解》p.129)

〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉を述語とする形式は、目的語位置等に現れる要素を文頭へ左方転移することによる、主題化 (topicalization) を引き起こすこともできる。例えば、主語-述語という構文となっている (49a) に対する (49b) が、左方転移による主題化である（以下の例では、便宜上、主語位置の要素である動作主を省略して記述している）。

(49) a. 穿 不　了　　这　双 鞋。

履く-NEG-LIAO$_{poten}$　　この CL　靴

「この靴を履くことができない。」

b. 这　双 鞋 穿　不　了。

この　CL 靴　履く-NEG-LIAO$_{poten}$

「この靴は履くことはできない。」

(49a) は、対象物である〈这双鞋: この靴〉が目的語位置に置かれており、(49b) ではそれが文頭へ移動し、主題となっている。また、このような移動という操作が行われたとしても、可能としての〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉の意味は変わらない。

ここでは、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉を述語とする文は、主語-述語という無題文としても、更には主題-評言という有題文としても成立することができるということを見てきた。

2.3.2. 状況可能

2.3.2 節では、主に状況可能として捉えられる〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉の意味的特徴について論じる。まず、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉で表すことのできる可能の特徴にとって重要な点は、主体に対して外在的或いは内在的、さらには一時的に付加される条件においてのみ成立するということである。また、この特徴が〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉の先行動詞が表す動作行為の実行を必ず保証す

るという動作の指向性における特徴を保持しているということを指摘する。

2.3.2.1 節では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉がどのような条件の基で成立するのかということについて、更に 2.3.2.2 節では〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉の動作への指向性について論じる。

2.3.2.1. 条件の一時性と恒常性

〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が表す可能は、ある条件のもとでその出来事が実現するか否かを問題にするということが、従来の研究において、指摘されてきた。そこで、その条件の種類によって〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉を用いることができない場合があることを指摘し、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉で表すことのできる条件とできない条件について論じる。

まず、「条件」という術語について、先行研究で指摘されてきた点について概観する[39]。

(50) 他　的　手　破　　了，<u>绑　不　了</u>　行李。

彼 ASSOC 手 怪我する PERF 縛る-NEG-LIAO$_{poten}$ 荷物

「彼の手は怪我をしているので、荷物を縛れない。」　(《中国语补语例解》)

(50) の文は、〈绑不了行李: 荷物を縛れない〉というように、不可能の意味を〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉が表している。文脈から、この不可能であるという事態が成立するのは、〈他的手破了: 彼の手は怪我をしている〉という状況においてであると言える。このように可能･不可能であることの前提として設定されている状況のことを、中国語学における可能補語の研究では、これまで「条件」と呼んできた[40]。

---

[39] ここで言う条件の「一時性」と「恒常性」は、渋谷 (1993:30-32) における「一時性」と「永続性」に対応する。渋谷 (1993:31) では、「永続性のスケール」といして、「心情可能 > 能力可能 > 内的条件可能 > 外的条件可能」の順に永続性が強いことを論じており、特に内的条件以下は一時性をその特徴とすることを述べる。

[40] 「条件」という術語について、日本語学における可能表現の研究でも、同様に捉えられてきた。以下にその記述を提示する。

「ある動作を行うことがなぜ（不）可能である（あった）のかという、その(不)可能であることの制約条件（以下、『可能条件』と呼ぶ）によってわけることができる。たとえば肯定表現では、

④ X なので、Y することができる

というときの X に相当する（渋谷 1993:27） 」というものである。

この条件ということについて、刘月华他 (2001) では、次のように言及する。

(51) 主观、客观条件是否容许实现（某种动作或变化）　（刘月华他 2001:590）

「主観、客観条件が（ある動作或いは変化の）実現を許容するか否か」

このように、刘月华他 (2001) では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が表す可能の意味は、ある条件を前提として成立するものであると見做されており、この条件に関して、少なくとも主観条件と客観条件の 2 類型があることを提示している。各々の具体例は以下の通りである。

(52) 今天 下 雨，去　不　了　　颐和园 了。（客观条件不容许）（刘月华等 2001:590②）

今日 降る 雨　行く-NEG-LIAO$_{poten}$ 頤和園　SFP

「今日雨が降っているから、頤和園へは行けなくなった。」

(53) 今天 阿里 病 了，上　不　了　　课 了。（主观条件不容许）（刘月华等 2001:590④）

今日　アリ　病気 PERF 出る-NEG-LIAO$_{poten}$ 授業 SFP

「今日アリは病気にかかって、授業には出られなくなった。」

(52) は〈今天下雨: 今日雨が降っている〉ということが条件であり、これは主体に対して外在的な事態であるため、このような条件を「客観条件（〈客观条件〉）」としている。それに対して、(53) は〈今天阿里病了: 今日アリが病気になった〉ということが条件であり、「病気」という主体であるアリに内在する事態が条件となっている。このような条件を「主観条件〈主观条件〉」としている。つまり、刘月华等 (2001) で提示されている客観条件及び主観条件とは、その条件が主体外部の要因によるのか、主体内部の要因によるのかという点に着目した分類であると考えられる。念のため、刘月华等 (2001) で客観条件及び主観条件として提示している例をもう 1 例ずつ提示し、検証を行う[41]。

[41] 客観条件及び主観条件の説明において、刘月华等 (2001:590) では、本研究で提示した 4 例のみしか挙がっておらず、その両者の定義についても明示的に記述されていない。そこで、その解釈を慎重に行うために、残りの例を提示して検証を行う。

(54) 钻机　　没有 水　就　动　不　了。（客观条件不容许）（刘月华等 2001:590①）

ボーリングマシーン　ない　水　正に 動く-NEG-LIAO$_{poten}$

「ボーリングマシーンは水がなければ、動かない。」

(55) 你　这么　大　年纪 了，连 山　上　的　草 都　拔　不　了，

あなた こんなに 大きい 年齢 PERF　さえ 山　の上 ASSOC 草 全て　抜く-NEG-LIAO$_{poten}$

怎么　能　搬 走　这　两 座　大　山 呢?

どのように AUX（できる）　運ぶ-行く　この　2　CL 大きい 山　SFP

（主观条件不容许）（刘月华等 2001:590③）

「あなたはこんなにも年を取っていて、山の草さえ抜くことができないのに、どうしてふた山も持って行くことができようか。」

客観条件とされている (54) は、〈没有水: 水がない〉という外在的な条件により、「ボーリングマシーンが動かない」ということを表している。それに対して、主観条件とされている (55) では、〈你这么大年纪了: あなたはこんなにも年齢がいっている〉というように、主体である〈你: あなた〉自身の内部にある条件が要因で、「草さえ抜くことができない」ということを表している。やはり、客観条件及び主観条件は、その条件が主体外部の要因か主体内部の要因かという点を基準とした分類と考えても良さそうである。

しかし、客観条件である (54) の文（〈钻机没有水就动不了: ボーリングマシーンは水がなければ、動かない。〉）と平行して捉えることができそうな、次に挙げる (56) の文はどうであろうか。

(56) 我 没有 力气 就　动　不　了。

私　ない　力　正に 動く-NEG-LIAO$_{poten}$

「私は力がなければ、動けない。」

〈我没有力气就动不了: 私は力がなくて、動けない〉という文は、ヒト主語を取っているという点で (54) の例である〈钻机没有水就动不了: ボーリングマシーンは水がなければ、動かない〉とは異なるが、その文の特徴及び意味は非常に類似していると言える。よって、(56) の条件である〈没有力气: 力がない〉は、客観条件を表すと捉えれば良いのか。しかし、こ

の条件は、主観条件とされている (53) の〈阿里病了: アリは病気にかかって〉や (55) の〈你这么大年纪了: あなたはこんなにも年齢がいっていて〉のような条件と、意味的には非常に類似している。そこで、刘月华等 (2001) の議論通りに当て嵌めようとするならば、(56) の条件は主観条件であるのか客観条件であるのか、またその中間的な条件となるのかが問題となる。そこで、この点に関して以下で簡単に考察を行う。

結論から述べると、(56) の〈我没有力气就动不了: 私は力がなくて、動けない〉は、主観条件であると言える。つまり、文の特徴や可能補語が表す意味は類似しているが、その条件の意味は、(54) のような客観条件とは異なると考える方が妥当である。その根拠として、(54) と (56) では、条件を表している節を文頭に移動させることができるか否かという特徴が異なるという点を挙げることができる。

(57) a. *没有 力气 我 就 动 不 了。
ない 力 私 正に 動く-NEG-LIAO$_{poten}$
「力がなくて、私は動けない。」

b. 没有 水 钻机 就 动 不 了。
ない 水 ボーリングマシーン 正に 動く-NEG-LIAO$_{poten}$
「水がなければ、ボーリングマシーンは動かない。」

(57a) のような主観条件は、その条件が主体自身の性質を表しているため、その条件だけを主体の前に前置することは難しいのに対して、(57b) のような客観条件は、その条件が外在的な要因であるため、その条件のみを取り出して文頭に生起することができるのではないかと考えられる。

このように、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が表す可能・不可能であるということが成立する条件として、主観条件及び客観条件という 2 類型は、直感的にも、また文頭に移動させることができるか否かという観点からも分類可能な条件の類型であると言えよう。

しかし、主観条件或いは客観条件という分類は、両者とも〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉という同一形式で用いることができ、また中国語の可能補語の意味としては、両者を特別分類する必要性も見られない。そこで、本研究では〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$

/ -NEG-LIAO$_{poten}$〉で、表すことのできる条件の類型を考えるのではなく、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉で表すことのできる条件とできない条件を問題として、その境界を提示することを試みる。

まず、次の例から分かるように、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、その条件（「風邪を引いた (58a) 」のか、「金槌である (58b) 」のか）の違いによって、文法性判断が異なる（ここで言う「条件」とは、条件節として明示的に提示されるものだけではなく、可能･不可能であることの要因となっている事態全般を言い、より広い意味として捉えている[42]）。

(58) a. 他　感冒　了，　游 不 了。

彼 風邪を引く PERF 泳ぐ-NEG-LIAO$_{poten}$

「彼は風邪で、泳げない。」

b. ??他 是 旱鸭子，　游　不 了。（〈不会游:泳げない〉)

彼 COP 金槌　泳ぐ-NEG-LIAO$_{poten}$

「彼は金槌で、泳げない。」

(58a) のように、可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉を用いた場合、〈他感冒了: 彼は風邪を引いた〉という条件のもとでは、〈游不了: 泳げない〉というように不可能を表すことはできるが、(58b) のように〈他是旱鸭子: 彼は金槌である〉というような主体の純粋な能力を表す場合は、〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉を用いることは難しく、一般的に法助動詞〈会: できる〉を用いて〈不会游: 泳げない〉とするのが自然となる。この事実より、主体の能力を条件とした場合、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉を用いて可能･不可能を表すことはできないということが分かる。

このような習得して得られた能力を表す場合には、法助動詞〈会: できる〉を用いて表現される[43]。次の例をもって考察すると、(59a) は彼の能力として「料理を作る」ということ

---

[42] つまり、語や句として、可能･不可能であることの要因が明示的に提示される、または暗示的に含意される場合も、ここで言う「条件」に含める。

[43]刘月华他 (2001) において、〈会: できる〉と〈能: できる〉の相違として、〈“会”表示学而能后，不需要学的，只能用“能”，不能用“会”。（刘月华他 2001:184)〉（〈会: できる〉は学習した後に習得したという意味を表し、学習する必要がない場合は、〈能: できる〉が用いら

を習得している或いは習得していない、(59b) は、「歌を歌う」ということを習得している或いは習得していないということを表しているため、法助動詞〈会: できる〉が用いられている。

(59) a. 他　会　　做 / 不　会　　做　菜。

彼 AUX（できる） 作る　NEG AUX（できる） 作る　料理

「彼は料理ができる/できない。」

b. 他　会　　唱 / 不　会　　唱　歌。

彼　AUX（できる） 歌う　NEG　AUX（できる） 歌う　歌

「彼は歌が歌える/歌えない。」

このような主体の習得による能力を表す場合、〈会: できる〉の代わりとして、可能の意味を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉を用いて表現することは、やはり難しいと言える。つまり、能力のように主体が本来的に有する性質･属性に対する可能は〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が表す可能の意味とは馴染まないことが分かる。

(60) a. *他 做 得　了 / 做　不 了　　菜。

彼 作る-DE-LIAO$_{poten}$　作る-NEG-LIAO$_{poten}$ 料理

「彼は料理ができる / できない。」

b. *他 唱　得 了 / 唱　不　了　　歌。

彼 歌う-DE-LIAO$_{poten}$　歌う-NEG-LIAO$_{poten}$　歌

「彼は歌が歌える / 歌えない。」

しかし、(60ab) に対して、(61ab) のように何らかの要因を条件として加えれば、文法的な文として成立するようになる。

れ〈会: できる〉は用いられない。）と記述されている。

(61) a. 今天 没有 材料，做 不 了 菜 。

今日 ない 材料 作る-NEG-LIAO$_{poten}$ 料理

「今日は材料がないので、料理できない。」

b. 他 唱 不 了 京剧。

彼 歌う-NEG-LIAO$_{poten}$ 京劇

「彼は京劇が歌えない。」

(61a) の例は、〈今天没有材料: 今日は材料がないから〉という条件節を加え、それが要因で〈做不了菜: 料理ができない〉という不可能の意味として〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉が用いられている。また、(61b) の例では、目的語位置の名詞句（意味役割として対象を表す）を〈京剧: 京劇〉という習得がより困難なものに変えると、その難しさゆえに「歌えない」という不可能の意味として〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉が成立する。このような可能･不可能である条件が文中には現れず、語用論的に含意されることも多々あるが、主に条件を明示的に提示する方策として、条件節の付加、対象目的語の特殊性、或いはその両者によって表されることが多い（この条件の表し方に関しては、以下で詳しく観察する）。

更に、条件が主体の心情･心理を表す場合も、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉を使用して、可能･不可能を表すことは難しいことが、次の例から分かる。

(62) a. *他 很 害怕，晚上 一个 人 去 不 了 厕所。

彼 とても 怖い 夜 1 CL 人 行く-NEG-LIAO$_{poten}$ トイレ

「彼はとても怖がりで、夜一人でトイレに行けない。」

b. *他 很 害怕，坐 不 了 过山车。

彼 とても 怖い 乗る-NEG-LIAO$_{poten}$ ジェットコースター

「彼はとても怖がりで、ジェットコースターに乗ることができない。」

「怖がりだから」というように、主体の心理･心情が条件となった場合、可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉で表すより、法助動詞〈敢: する勇気がある〉を用いて、〈不敢去: 行く勇気がない〉及び〈不敢坐: 乗る勇気がない〉と表現する方がより自然である。

以上のように、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉で表すことができる可能の意味は、主体の内部或いは外部にある何らかの要因を条件とした場合のみ成立し（これらは刘月华等 (2001) で指摘されている主観条件及び客観条件にほぼ一致する）、その条件が能力や心理･心情となっている場合は、成立しないことが明らかとなった。以上の議論をまとめると、次の表のようになる。

（表 6） 〈-得了/-不了〉が表す可能と条件の関係

形式＼条件	「外在的条件」	「内在的条件」	「能力条件」	「心理条件」
〈-得了/-不了〉	成立する	成立する	成立しない	成立しない

そこで、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が成立する内在的条件及び外在的条件と、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が成立しない能力条件及び心理条件の特徴を考察する。

まず、内在的或いは外在的な条件の特徴として、その条件は「一時的」という概念でまとめることができる。例えば、内在的な条件である「病気であるから」や外在的な条件である「雨が降っているから」というのは、ある特定の時間において起こる一時的な事態である。それ比べて、能力条件や心理条件は「恒常的」な特徴を有すると言える。例えば、能力条件である「金槌だから（泳げない）」や心理条件である「怖がりだから」というのは、主体が有している特性であり、ある一時的な事態としては捉え難い。ここから恒常性が窺える。たとえば、心理として「怖いから」というのは、一時的な感情として解釈され得る可能性もあるが、主体にとっても容易にコントロールできるものではなく、基本的に主体の恒常的な性質がもとになっていると考えることができる。このように、内在的或いは外在的条件は一時的な事態を表す条件であり、能力或いは心理条件は恒常的な事態を表す条件であると言える。また、前者では〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉を用いることができるが、後者では〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉を用いることができないという特徴を指摘した。以上の議論を表にまとめると以下のようになる。

（表 7） 条件の一時性及び恒常性と〈-得了/-不了〉の関係

条件の特徴	[一時性]		[恒常性]	
条件の種類	「外在的条件」	「内在的条件」	「能力条件」	「心理条件」
〈-得了/-不了〉	成立する		成立しない	

次に、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が成立する条件である、主体に内在或いは外在する要因が、どのような形で文中に現れるかということについて論じる。実際には、その条件の現れ方は、様々であり、文中には明示されない場合も多々あるが、その中で特徴的なものとして、従属節として生起するものと、目的語として生起するものを取り上げる。まず、条件が従属節に現れる例として、次のような文を提示する。

(63) a. 过　了　黄河 是　吴堡 县城。

過ぎる PERF　黄河　COP　呉堡　県

这里　积压　了　不　少　探亲　回来　的　知识青年。

ここ わだかまる PERF　NEG 少ない 親族に会う 帰って来る NOM 教養のある若者

<u>面前　的　路　坏　了</u>。<u>雪　又　太 大</u>，汽车　<u>开　不　了</u>。

前　ASSOC　道 壊れる PERF　雪 また とても 強い　車　運転する-NEG-LIAO$_{poten}$

（CCL:《插队的故事》）

「黄河を過ぎれば呉堡県である。ここには多くの親戚に会うために帰ってきた教養のある若者たちがわだかまっている。前の道が壊れ、雪が激しく、車が運転できないのだ。」

b. 他　为　官　的　民本色彩　使　每天　寄 到　他 办公室 的

彼 として 官吏 NOM　人民本位　CAUS　毎日 送る-到着する 彼　事務所 ASSOC

信件　五花八门，　孩子 没　钱　上 不　了　学，家庭 有　纠纷，

郵便物 多種多様で変化に富む 息子 ない お金 通う-NEG-LIAO$_{poten}$ 学校　家庭　ある もめ事

甚至 女孩子 因为 长　胡子 找 不 到　郎君，都　求助　于　这 位 父母官。

さえ　娘　だから　生やす 髭　探す-NEG-達成する 夫　全て 援助を求める において これ CL 地方長

（CCL:《1994 年报刊精选 9》）

「彼（地方長）は官吏として人民本位であるため、毎日事務所に多種多様な郵便物が届く[44]。お金がなく子供が学校に通えない、家庭にはもめ事がある、ある女の子が髭を生やしたままで旦那が見つからないなど、この地方長に助けを求める。」

(63a) の〈汽车开不了: 車が運転できない〉ということの要因は、「前の道が壊れ、雪もとても多い」ためであり、この条件は従属節として提示されている。また (63b) のように〈孩子没钱上不了学: 子供はお金がなく学校に通えない〉というように単文の形をとっているが、意味的には複文を表している例もある。この場合、〈孩子没钱: 子供はお金がない〉が条件となっており、所謂従属節の要素に当たる。このような文は、一般的に緊縮複文と言われ、ここでは複文の一種として扱うこととする。それに対して次の例は、目的語位置にある要素が条件として機能している。

(64) 她　说，你　应该　知道，　你　学　不　了　圣人，

彼女 言う あなた　AUX（はずだ） 知っている　あなた　真似る-NEG-LIAO$_{poten}$ 聖人

可　圣人　管 得 了　你。　（CCL:《活动变人形》）

しかし　聖人　管理する-DE-LIAO$_{poten}$ あなた

「あなたは知っているはずだと彼女は言う。あなたは聖人を真似ることはできないが、聖人はあなたを管理することができる。」

(64) は、目的語の〈圣人: 聖人〉が、「そこから学ぶことが難しい人物」として意識され、それが、「学ぶことのできない」ことの条件として機能している。また、従属節及び目的語

[44] 中国語の例文では、使役構文が使われており、直訳すると「彼（地方長）の官吏としての人民本位が、毎日事務所に届く郵便物を多種多様にさせる。」となる。

の両者が関わる場合もある。

(65) 温州人　说，　简单　　的　低价 竞争，

温州人　言う　簡単である　NOM　安価　競争

靠　　去　搞　假冒伪劣　和　高额 回扣，

寄り掛かる-行く する　偽ブランド　と　高額 リベート

终究　　做　不　了　　大　生意，…。　（CCL:《市场报 1994 年》）

結局のところ 行う-NEG-LIAO$_{poten}$ 大きい 商売

「温州人が言うに、簡単な低価格競争は、偽ブランドと高額のリベートによって成り立っており、結局のところ大きい商売とはならず、…。」

(65) は、「ニセの粗悪品で高額のリベートを得る」という従属節として現れる要素と〈大生意: 大きい商売〉という目的語位置の要素の両方が、不可能であることの条件となっている。このように、文中の要素として現れる条件の例は、従属節として生起するもの、及び目的語として生起するものが特徴的である。

本節では、通常では法助動詞で表されるような、獲得した能力や主体の心理･心情といった恒常的な条件の場合、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉を用いて、可能の意味を表すことができないことを指摘した。〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が可能の意味を表すことのできる条件とは、かつて主観条件及び客観条件と言われてきた、主体に内在或いは外在する一時的な条件であると言えよう。

2.3.2.2. 動作への指向性

可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、これまで主体の動作行為という先行述語が表す事態の実現性を問題とすることが指摘されてきた。しかし、本節では、結果性の実現を指向するという可能補語形式の特徴が、一時的な条件を取るという点に引き継がれ、主体が本質的には動作行為を実行できることを前提としているということを主張する。

従来、可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が表す意味特徴として、「先行述語が表す動作を指向し、可能補語形式全体で動作の実現性の可能性を表すようになる（李宗江 1994:375 参照）」という指摘が成されてきた。この指摘は、典型的な可能補語が、

補語成分が表す動作の結果或いは方向の実現を指向することとの相違を意識しての指摘であると言えよう。

(66) a. 教室 里 很 吵， 听 不 清 录音。（刘月华他 2001:582）

教室 の中 とても 騒がしい 聞く-NEG-明白である 録音

「教室の中はとても騒がしくて、録音がはっきり聞こえない。」

b. 他 搬 不 出 这 门 城市。（刘月华主编 1998:219）

彼 運ぶ-NEG-出る この CL 都市

「彼はこの都市を出ていけない。」

(66ab) のように、典型的な可能補語は、先行述語の〈听: 聞く〉及び〈搬: 運ぶ〉という行為が行われ、その結果として〈-不清: 明白でない〉或いは〈-不出: 出られない〉ということを表している。このように、否定のスコープは補語が表す要素の意味に掛かるため、補語を指向する表現であると考えられる。それに対して、(67) の例である可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、先行述語である〈做: する〉という事態が実現できないことを表している。この現象から〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、先行述語が表す動作を指向していると分析されてきたと言える。

(67) 这 事 太 难，我 做 不 了。(Chao 1968:453)

これ 事柄 とても 難しい 私 する-NEG-LIAO$_{poten}$

「これはとても難しく、私にはできない。」

李宗江 (1994)の「動作への指向」という指摘は、可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が、典型的な可能補語が表す結果事態の実現性ではなく、先行動詞が表す事態の実現に関与しているという点から得られた考察の結果であると言える。

可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉と典型的な可能補語の指向性の相違は、文中の要素としても違いが現れる。例えば、可能補語を用いた表現から法助動詞〈不能: できない〉を用いた表現に変えた場合、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉及び典型的な可能補語とでは、言い換えられるか否かという点において違いがある。典型的

な可能補語の場合、(66ab) の可能補語〈-不清: 明白でない〉及び〈-不出: 出られない〉を、不可能を表す法助動詞〈不能: できない〉に変えて、(68) のようにすると、同じ意味を表すことはできない。

(68) a. #教室　里　很　　吵，　不　能　　听　录音。
教室　の中 とても 騒がしい　NEG　AUX（できる）　聞く　録音
「教室の中はとても騒がしく、録音を聞くことができない。」

b. #他 不　能　　搬　这　门 城市。
彼 NEG AUX（できる）　運ぶ この　CL　都市
「彼は都市から出て行けない。」

これは、典型的な可能補語は、補語の要素（〈清: 明白である〉，〈出: 出る〉）がそれだけで語彙的に意味を有しており、単に可能･不可能を表す法助動詞〈能/不能: できる/できない〉とは異なる意味を表すためであると考えられる。それに対して、〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉の場合、(69) のように代わりに法助動詞〈不能: できない〉を用いて表現しても、その意味は可能補語の場合とほぼ変わらない[45]。

(69) 这　事　太　　难，我 不　　能　　做。
これ　事柄 とても 難しい　私　NEG　AUX（できる） する
「これはとても難しく、私にはできない。」

このように、典型的な可能補語が表す結果事態への指向性、つまり結果事態の実現性ということと、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が表す先行述語への指向性、つまり動作行為の実現性ということは、その意味特徴として、何らかの違いがあることが窺え、両者を区別することは、可能補語の研究において有益であると考えられる。また、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が先行述語の動作の実現性を問題とするのは、補語〈-了: LIAO〉が、本来有する「終了する、終わる」という語彙的意味の漂白化を通して、実質

[45] 法助動詞を用いる場合と可能補語を用いる場合では、厳密に言えば、語用論的な含意が異なることがあるが、述語が表す意味としては同じ意味を表すと言える。

的な意味が感じられなくなることに起因していると言えよう（Chao1968 等参照）。

しかし本研究では、意味の漂白化の進んだ可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉と典型的な可能補語における事態に対する指向性の相違は認めつつも、両者の結果の実現性を問題にするという特徴との平行性を根拠として、指向性においても共通する側面があることを主張する。

まず、両形式の諸特徴の平行性とは、可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉も典型的な可能補語も、否定詞〈不: NEG〉が先行述語の前ではなく、先行述語の後ろ、つまり補語の前に現れるという点である。

(70) a. 可能補語〈-不了〉　　: 听　不　了　「聞くことができない」
　　聞く - NEG - LIAO$_{poten}$

　b. 典型的な可能補語　　: 听　不　懂　「聞いて理解できない」
　　聞く - NEG - 理解する

中国語において、否定詞は否定を受ける要素の前に置かれる。つまり、否定詞の後ろの要素が否定されることとなる。よって、本来であれば、(70a) は否定詞の後ろの要素である〈了: LIAO$_{poten}$〉が、(70b) は〈懂: 理解する〉が否定を受けることとなる。(70b) に関しては、〈-不懂: 理解できない〉というように、規則通り補語である〈懂: 理解する〉が否定の意味を受けている。しかし、(70a) の場合は、先行述語〈听: 聞く〉の実現が否定されるというように、先行述語を否定しているかのような意味として実現している。しかし、本研究では、例え先行述語の動作行為を指向していたとしても、結果を否定するという特徴の反映が、異なる形で〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉にも引き継がれているのではないかという予測のもとで分析を行う。

結論としては、2.3.2.1 節で考察したように、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、主体の能力や心理･心情といった恒常性を条件に有する可能を表すことができず、必ず何らかの一時性を有する条件の含意が必要であるという点に求められるということと関連させて主張を行う。

つまり、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が使用できる場面というのは、主体が本質的には動作行為を実行することができることが前提としてあり、何らかの一時的

な条件によって、その動作行為の実現が可能或いは不可能であることを表していると言える。(71) を例に取ると、〈做不了菜: 料理が作れない〉というのは、確かに先行述語〈做（菜）: (料理を)作る〉という事態の否定となっているが、本来、主体は料理をすることができるのであり、これは、「今日は材料がない」という一時的な条件によって、事態が成立しないことを表しているのである。

(71) 今天　没有 材料，做　不　了　　菜　。

今日　　ない　材料　作る-NEG-LIAO$_{poten}$　料理

「今日は材料がないので、料理できない。」

この事実から、「(料理を)作る」という先行述語が表す事態の実現性は、本来的には保持されていると考える。つまり、〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は先行述語が表す動作行為は実現可能であるが、一時的にある条件によって実現することができないというように、語用論的なレベルで先行述語の実現性が保たれていると分析する。このようにレベルは異なるが、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉と典型的な可能補語は、実現性という点で平行的に捉えることができる。それは、補語〈了: 終了する〉の意味が文法化により薄れていく過程で、否定を受ける要素としては意味的に不十分となり、否定を受ける対象が語彙的意味を有する先行述語の表す意味へと移ったと考えられる。しかし、それが一時的な条件という制限が付くとこで、先行述語が表す動作性或いは行為性の可能性が保持されると解釈した方がより合理的ではなかろうか。

本節では、可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉と典型的な可能補語における結果の実現性を問題にするという特徴との平行性により、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉にも結果に対する指向性が、一時的な条件を取るという点に引き継がれ、主体が本質的には動作行為を実行することができることを前提としていることを論じた。

2.4. 心理的不可能を表す〈-不得〉

2.3.1.1 節で、可能補語〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉は、普通話において可能の意味としては用いられなくなったことを指摘した。しかし、知覚動詞を先行述語として取る〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、普通話で使用され、更に可能を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉とは

異なる意味を表す。2.4 節では〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の意味を規定することを主な目的とする。

扱う具体的な形式は、(72) の〈看不得: 見ていられない〉のような例で、(73) の〈看不了: 読むことができない〉と比較するとその意味的な相違は明らかである。

(72) 用 项士信 的 话 说，他 看 不 得 别人 受苦。(CCL:《1994 年人民日报》)

で 項士信 ASSOC 話 言う 彼 見る-NEG-DE$_{poten}$ 別の人 辛い目に合う

「項士信の言葉を借りて言うと、彼は他人が苦しむのを見ていられない。」

(73) 他 自己 有 中央 委托 的 很 重要 的 事情，非常 忙。

彼 自身 ある 中央政府 委託する NOM とても 重要だ NOM 事柄 非常に 忙しい

我们 担心 他 看 不 了。 (CCL:《1995 年人民日报》)

私達 心配する 彼 見る-NEG-LIAO$_{poten}$

「彼は、中央政府が委託した非常に重要な職務があり、とても忙しい。我々は彼が（単行本の校正刷りを）読む暇がないのが心配だ。」

(72) の〈看不得: 見ていられない〉は、〈他: 彼〉が〈別人受苦: 他人が苦しんでいる〉という状況を知覚し、その状況に対して「見ていられない」という主体の心理的な感情を表している。それに対して、(73) の〈看不了: 読めない〉は、〈非常忙: とても忙しい〉という外在的な要因で、〈他: 彼〉が「単行本の校正刷り（前の文脈より）[46]」を、「読む暇がない（読むことができない）」という不可能の意味を表している。このように、〈看不得: 見ていられない〉及び〈看不了: 読めない〉は、ある種意味が異なると言える。

既に 2.3.1.1 節で論じたように、かつて唐、宋代では〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉のみが可能を表す可能補語として用いられていたが、元、清代に入り〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が使用されるようになり、普通話では完全に〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に取って替わられた（李宗江 1994:378-340）。つまり、普通話において可能を表す〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉を分析することは原理的に無理が

[46] (73)は〈我们把《呐喊》单行本的校样送到乔木那里，请他尽快审阅并提出意见。: 私たちは『呐喊』の単行本の校正刷りを喬木のところへ送り、彼にできるだけ早く校閲して、意見を出してもらうように頼んだ。〉に続く文であり、〈看不了: 読めない〉が本来有する対象項である〈《呐喊》单行本的校样: 『呐喊』の単行本の校正刷り〉が省略されている。

あると言える。

しかし、知覚動詞を先行述語とする〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉だけは、普通話でも用いられる形式であると言える。その根拠を以下にまとめる。

(74) a. 普通話が用いられる資料で用例が多く見られる。

b. 母語話者への確認でも普通話として頻繁に用いるという。

c. 知覚動詞につく〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉と意味が異なる。

知覚動詞を先行述語とする〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、普通話が主に用いられる資料である《人民日报》等の新聞や《读者》等の雑誌でその用例が見られる。また、協力を得た 5 名[47]の中国語母語話者全員が、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉に関して、普通話で用いられる形式であるという。更に、(72) 及び (73) の例からも分かる通り、知覚動詞を取る〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉及び〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の意味は異なる。よって、通常は〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が可能の意味として普通話で用いられることはないが、知覚動詞を先行述語として取る場合のみは、普通話として分析することができよう。しかしこの場合、用例に関しては、ほぼ否定形に限られるため、否定形である〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉のみを対象として分析を行う。

分析の観点として、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の意味的特徴、及び〈最〉との共起、目的語の種類、或いは主題構造を取るか否か等の諸特徴について論じ、更に〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉及び〈知覚動詞-不下去〉と比較・対照することでその特徴をより明らかにする。また、本研究では、知覚動詞の種類として、視覚を表す〈看: 見る〉及び聴覚を表す〈听: 聞く〉を扱う。他に知覚や感覚を表す〈感觉: 感じる〉、〈想: 考える〉、〈见: 見る、見える〉等もあるが、本研究で行った CCL コーパスを用いた調査では、可能の意味を表す用例は非常に少ないか、或いは見つからなかったため、ここでは取り上げないこととする。

---

[47] 確認した 5 名の母語話者の性別、出身及び年齢は次の通りである。
A. 男性、山東省済南市、20 代
B. 男性、吉林省延辺朝鮮族自治州、30 代
C. 女性、河北省邢台市、20 代
D. 女性、遼寧省大連市、30 代
E. 女性、山西省臨汾市、30 代

2.4.1. 心理的不可能

2.4.1 節では、知覚動詞が先行する〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が表す心理的不可能の意味的特徴について考察を行う。ここでは主に、知覚動詞を伴い、可能の意味を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉と比較・対照することで、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の意味的特徴をより明確に記述・分析する。具体的には、知覚動詞に付く〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、許容・受容の意味を表し、心理・心情的に困難であるという意味を帯びる。よって、知覚動詞を取る可能補語〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の意味を心理的不可能と呼ぶこととする。

まず、2.4.1.1 節では、働きかけと許容・受容という観点から〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の意味を考察し、2.4.1.2 節では、心理・心情的に困難であるという心理的影響に関する意味について論じる。

2.4.1.1. 働きかけと許容・受容

本節では、知覚動詞に後続する〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は主体の許容・受容を表すのに対して、知覚動詞に後続する〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は主体の働きかけを表すことを明らかにする（井上優先生からの私信による）[48]。

まず、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、主体が知覚対象を許容・受容するという側面に言及するという特徴を持つ。その例として、(75) では、主体が対象を既に捉えているか、或いは捉えることが仮定されており、それに対する認識を表している。

[48] ここで述べた「働きかけ」と「受容・許容」という意味素性における分析は、2012 年 10 月 28 日の第 62 回日本中国語学会での口頭発表での井上優先生のご指摘、及び 2012 年 11 月 7 日-8 日に頂いた井上優先生からの私信によって、ご指摘及びご助言頂いたものである。しかし、内容に関する一切の責任は筆者にある。

(75) 他 在 黑暗时代 中 处处 碰壁， 不 得 仕进 也 不屑 仕进；

彼 で 暗黒時代 の中 至る所で 行き詰る NEG AUX（許す）（官吏が）昇進する も 軽蔑する 昇進する

眼睛里 看 不 得 人世间 的 一切 不平事， 肚皮里 充满 了 怨气怒气，

目の中 見る-NEG-DE$_{poten}$ 世の中 ASSOC 一切の 不公平なこと 腹の中 満る PERF 恨みつらみ

一触即发， 一 发 就 不 可 收拾。（CCL:《读书 vol.099》）

一触即発 一度 発する 正に NEG AUX（できる） 収拾する

「彼は暗黒時代で至る所で行き詰まり、官吏として昇進することもできず、また昇進することも軽蔑しており、その目はこの世の一切の不公平な事を見ていられず、腹の中に恨みつらみが渦巻き、一触即発、一度発すれば収拾はつかない。」

(75) の〈看不得: 見ていられない〉は、「この世の一切の不公平な事を見ていられない」というように、主体にとって、「不公平な事」が既に認識されてしまっている状態で、主体は知覚をこれ以上続けられないということを表している。つまり、〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉に先行する動詞〈看: 見る〉は、「映像を受け入れる」という許容･受容の側面に着目した用法となっていることが分かる。この許容･受容というのは、基本的に主体の恒常的な感情を表しており、この恒常性という点では、一般的な可能補語と同じ特徴を示す。

(76) 他 看 不 得 别人 受苦。

彼 見る-NEG-DE$_{poten}$ 別の人 辛い目に合う

「彼は他人が苦しむのを見ていられない。」

例えば、(76) は、発話時に「彼が他人が苦しんでいるのを知覚している」という状況で発せられた発話というよりも、主体の性質として、ある種仮定的とでもいえるような事態において、「他人が苦しんでいるときには」という状況で述べられていると解釈する方が自然であり、これは可能補語一般に共通する特徴である。

一方、〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、主体の働きかけに着目した用法であると言える。それは、(77) の〈看不了: 読めない〉が表すように、「読もうとしても（読むことができない）」という意味の現れから窺える。これは、可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉一般に共通する特徴であると言える。

(77) 那 些 失眠 的 夜晚，她 看 不 了 书，也 睡 不 着 觉，…。

あの CL 眠れない NOM 夜 彼女 見る-NEG-LIAO$_{poten}$ 本 も 寝る-NEG-入る 眠る

（CCL:《皮皮》）

「あのような眠れない夜は、彼女は本も読めないし、眠ることもできず、…。」

「見る」や「聞く」といった知覚現象には、一般的に「対象に対して働きかける」という側面と「対象を許容･受容する」という側面を持つと考えることができる。それは、知覚するという事態が、主体が自らの働きかけにより知覚を実現させるという側面と、主体に対して対象が偶然知覚されるという側面があり得ることが関係していると考えられる。これは知覚事態が表す特徴の一つであると言えよう。その中で、〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉では、前者の働きかけの側面が取り上げられ、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉では、後者の受容･許容の側面が取り上げられると言える（井上優先生の私信による）。このような相違が、〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉及び〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が表す意味の違いとして現れていると考えられる[49]。この議論をまとめると、次の（表 8）のようになる。

（表 8） 働きかけと許容･受容から見た〈-不得〉及び〈-不了〉

	［ 働きかけ ］	［ 許容･受容 ］
〈知覚動詞-不得〉	言及しない	言及する
〈知覚動詞-不了〉	言及する	言及しない

次に、問題とするべき点は意志性という意味素性との関連性である。可能という意味を形成する上で、意志性は非常に重要な素性であった。そこで、働きかけに言及する〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉に関しては、意志性を有することは明らかである。しかし、許

[49] この知覚動詞における分析は、Tsunoda (1985) や角田 (2009) 等の他動性 (transitivity) の議論における ‘see: 見える’ と ‘look at: 見る’ の相違に類似している。そこでは、‘see: 見える’ は受影性 (affectedness) を表し、‘look at: 見る’ は意志性 (volitional) を表すことが指摘されている。

⑤ a. see:「対象の映像を既に捉えてしまった状態を指す」（角田 2009:103）

b. look at:「対象の映像を捉えようとする努力を指す」（角田 2009:103）

しかし、英語の ‘see’ は、中国語では〈看见: 見る-見える〉に当たると思われ、また受影性は一般的に受身や再帰性の議論の際に用いられる術語であるため、本研究ではその使用を避けた。

容・受容に言及する〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉はどうであろうか。対象を許容或いは受容しているということは、主体が意志を持って知覚するという行為を行ったとも見られるし、主体が意図することがなく、たまたま「見えた」或いは「聞こえた」ということを表していると見ることもできる。確実に言えることは、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉にとって、意志性という意味素性には重点が置かれていないということまでであろう。そこで、本研究では、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉にも意志性という意味素性が基本的には含意されているという前提のもとで議論を進めたい。それは、中国語の〈看: 見る〉や〈听: 聞く〉という動詞が、本来的に表す特徴を根拠としている。

まず、〈看: 見る〉や〈听: 聞く〉は、「動詞＋補語」という動補構造（〈动补结构〉）において、基本的に先行動詞の位置に現れる。この動補構造は、先行動詞が動作の働きかけを表し、補語がそれに対する結果事象を表す。つまり、先行動詞として基本的に用いられるということは、〈看: 見る〉及び〈听: 聞く〉は動作行為を働きかける、能動的な事態を表す動詞であると考えられる。このような事情を踏まえて、〈看不得: 見ていられない〉及び〈听不得: 聞いていられない〉に関しても、基本的にはそこに主体の能動的な側面、つまり意志性が関与していると考える。それに対して、許容・受容を表す形式は、〈看见〉及び〈听见〉という動補構造で表される。しかし、この点に関しては、更に慎重に考察する必要があり、今後の課題としたい。

以上の議論をまとめると、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は主体が対象を既に捉えてしまっている、或いは捉えていることを仮定しているという許容・受容に着目した用法であるのに対して、〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は対象を捉えようと努力するという働きかけに着目した用法であるという相違があることを明らかにした。

2.4.1.2. 心理的影響

〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、心理的に困難であるという意味を帯びるのに対して、〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉はそのような意味を帯びない。ここでは、心理的困難ということの内実を明らかにするとともに、このような意味が現れる原理について考察を行う。

この心理的困難というのは、(78a) の〈看不得〉が表す「見ていられない」、「見るに堪えない」といった意味を指して言う。これは、(78b) の〈看不了: 読めない〉からは窺えない意味特徴である。

(78) a. 心术　不　正　　的 人，打击　　了 敌人，　分明　　胜利 之后，

心がけ NEG 正しい NOM 人　攻撃する PERF　敵　　はっきりと 勝利　の後

还　看 不　得 失敗者 立即　抹 干　眼泪，　重新　　为　人。

まだ 見る-NEG-DE$_{poten}$ 失敗者 直ちに 拭く-乾く　涙　　再び　となる 人

（CCL:梁凤仪《九重恩怨》）

「心がけが正しくない人は、敵を攻撃し、ちゃんと勝利した後なのに、それでも失敗した者が直ちに涙を拭いて、再び新たな人生を始めるのを見ていられない。」

b. 如果　这个 民族 只　会　　看 小人书，而　看　不　了　《红楼梦》，

もしも このCL 民族 ただ AUX(できる)　読む　絵本　そして 読む-NEG-LIAO$_{poten}$ 『紅楼夢』

是　这个 民族　的　悲哀。　（CCL:《1994 年人民日报》）

COP このCL 民族　ASSOC　悲哀

「もしもこの民族がただ絵本ばかり読んで、『紅楼夢』を読めなければ、それはこの民族の悲哀であろう。」

そこで、心理的に困難な意味を帯びる要因として、主体がある事物の受容を否定するという点から考察を行う。

まず、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、許容･受容を表すことより、たとえ仮定的であり、その場で実際に対象を知覚していなくとも、許容或いは受容していることを表す。(78a)で再度確認すると、〈看不得失敗者立即抹干眼泪，重新为人: 失敗した者が直ちに涙を拭いて、再び新たな人生を始めるのを見ていられない〉ということから、主体が事態を目という器官を通して受容しており、その受容に対して否定詞〈不〉を用いて否定を行っていることが分かる。つまりここから、主体が事物の認識を受け入れられないという、心理的に困難であるという意味との関連が窺える。よって、この「許容･受容に対する否定」という点が、心理的困難の意味を表すようになる要因の一つであると考えられる。それに対して、働きかけを表す〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、行為を企ててもその事態が実現されないことを表す。(78b) で確認すると、「『紅楼夢』を読むことができない」ということは、主体が読むという行為を企てたとしても、その行為が実現しないということを述べており、何ら主体の心理的な困難の意味は現れない。

ここでは、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が心理的困難の意味を表し、その要因として、

許容或いは受容した或いはそれらを仮定した事態に対しいて、否定形式を用いて、「続けられない」という意味を表すことにより得られると解釈し得ることを論じた。

2.4.2. 知覚動詞に付く〈-不得〉の諸特徴

2.4.2 節では、文法的及び構文的側面に関しての記述・分析を行う。〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、必ず「知覚主体 + 知覚動詞-不得 + 知覚対象」を取り、主題化或いは主題-評言という有題文としては成立しない。更に、文法的特徴として副詞〈最: とても〉と共起することができ、更に主述句を目的語に取り得ることを論じる。また、ここでも可能を表す〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉の諸特徴と比較・対照することで、より〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の特徴を明らかにする。

具体的には、文の構文的特徴については 2.4.2.1 節で、文法的特徴を 2.4.2.2 節、更に目的語の特徴については 2.4.2.3 節で各々論じる。

2.4.2.1. 文の構文的特徴

知覚動詞を先行動詞とする〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、「知覚主体 + 知覚動詞-不得 + 知覚対象」を基本構文とし、知覚対象等他の要素の主題化を許さないというのが、その特徴である。その典型的な例として、(79) を提示する。

(79) 中国人 是 非常 富 于 同情心 的。他们 <u>看 不 得</u> 别人 受苦，他们 爱 流 泪。

中国人 COP 非常に 富む に 同情心 NOM 彼ら 見る-NEG-DE$_{poten}$ 他人 苦しむ 彼ら 好む 流す 涙

（CCL:《读者(合订本)》）

「中国人は、同情心が非常に豊かである。彼らは他人が苦しんでいるのを見ていられず、涙を流すことを好む。」

(79) から分かるように、〈看不得: 見ていられない〉という述語の知覚主体である〈他们: 彼ら〉が主語位置に置かれ、知覚対象である〈别人受苦: 他人が苦しむ〉が目的語位置に置かれている。

一方、主題化、或いは主題-評言となった場合、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は不許可・禁止の解

釈となり、心理的不可能の意味とはならない[50]。その例として (80) を挙げる。(80) は〈看不得: 見てはいけない〉という述語が用いられているが、対象である〈这把刀: この刀〉が左方転移により主題化しているため、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が不許可の意味として解釈される。

(80) 他 也 没有 忘记 那天 青青 在 忧愁谷 里，
彼 も ない 忘れる あの日 青青 で 憂愁谷 の中
对 那 神秘 的 老 矮人 说 的 话："这把 刀 是 绝对 看 不 得 的，
に対して あの 神秘 ASSOC 年老いた 小人 言う NOM 話 この CL 刀 COP 絶対に 見る-NEG-DE$_{permi}$ NOM
看 过 这 把 刀 的 人，都 已 死 在 这 把 刀 下。"
見る EXP この CL 刀 ASSOC 人 皆 既に 死ぬ で この CL 刀 のもと
（CCL:古龙《圆月弯刀》）

「彼もあの日青青が憂愁谷で、神秘的な年老いた小人に言った言葉を忘れておらず、『この刀は絶対に見てはいけない。この刀を見た人は、皆この刀のもとですでに死んでしまった。』」

また、左方転移による主題化ではなく、もともと場所や時間等が主題として機能している構文においても、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は不許可或いは禁止の意味を表す。

それとは対照的に、可能を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、対象の左方転移による主題化 (81a)、及び基本構文として場所や時間等を主題とする構文 (81b) を取り得ることを 2.3.1.3 節で論じた。再度、以下に例を提示する。

(81) a. 季 说，因为 10 月 1 日 要 开工，设计人员 都 放假 了，
李 言う なので 10 月 1 日 AUX（つもり） 操業する 設計士 みんな 休みになる SFP
图纸 看 不 了。 (CCL: 李郁《重建圆明园》)
設計図 見る-NEG-LIAO$_{poten}$

「季が言うに、10 月 1 日に操業するから、設計士は皆お休みで、設計図は見られない」

[50] 不許可や禁止を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉に関しては、第三章で扱う。また、不許可と不可能は、意味的に類似しているといえるが、文法的、機能的等の諸特徴の相違より、本研究では両者を異なる意味範疇として捉えている（詳細は 3.2 節参照)）。

b. 经 主治医生 检查，孩子 已 危在旦夕，无力 抢 救，

経る 主治医 検査 子供 既に 危篤状態 する力がない 急いで 救う

只好 用 车 转 送 到 宁安县人民医院。

するほかない で 車 移す 送る 着く 寧安県人民病院

宁安县人民医院 看 不 了， 又 去 牡丹江市。(CCL:《读者》)

寧安県人民医院 見る-NEG-LIAO$_{poten}$ また 行く 牡丹江市

「主治医の検査では、子供は既に危篤状態で、助けることができず、ただ車に乗せて寧安県人民病院に送り届けるしかなかった。しかし、寧安県人民病院では診ることができず、また牡丹江市に行った。」

このように、心理的不可能を表す〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、「知覚主体 + 知覚動詞-不得 + 知覚対象」という制限された環境でのみで現れ、目的語要素の左方転移を伴う主題化や主題-評言を基本とすることは許さないことを指摘した。よって、知覚を表す動詞に付く〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉に比べて、より制限された条件のもとで現れると言える。

2.4.2.2. 文法的特徴

知覚動詞に付く〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の特徴として、副詞〈最: とても〉と共起するという点が挙げられる。これは一般的な可能補語では、基本的に見られない現象である。

(82) a. 大半生 都 在 枪林弹雨 中 度过 的 贺龙，

半生 すべて で 戦闘が激しい の中 過ごす NOM 賀龍

最 看 不 得 在 背后 搞 阴谋 活动，…。(CCL:《贺龙蒙难(连载之二)》)

とても 見る-NEG-DE$_{poten}$ で 背後 企む 陰謀 活動

「半生を戦闘の激しい中で過ごした賀龍は、陰での陰謀を企むのをとても見ていられず、…。」

b. 杜宪 在 外地， 最 听 不 得 别人 孩子 喊 一嗓，“妈哎—”

杜憲 で 他の土地 とても 聞く-NEG-DE$_{poten}$ 他人 子供 呼ぶ 1 CL 『お母さん』

（CCL:《1994 年报刊精选》）

「杜憲は他の土地で、他人の子供が『お母さん』と呼ぶのをとても聞いていられない。」

本来、副詞〈最: とても〉は、形容詞や動詞、方位詞と共起することができる。その中で、ここで問題となるのは、動詞と共起する〈最: とても〉の用法である。このような〈最: とても〉は、(83) の記述からも分かるように、「心理上の抽象的な活動」を表す動詞とのみ共起すると言える。その例として、〈喜欢: 好む〉、〈愿意: 願う〉、〈了解: 理解する〉、〈同情: 同情する〉等が挙げられる（吕叔湘主编 1999:703 参照）。

(83) 动词限于表示情绪、评价、印象、态度等内心抽象活动的。 吕叔湘主编(1999:703)

「気持ちや評価、印象、態度等、心理上の抽象的な活動を表す動詞に限られる。」

本来、〈看: 見る〉や〈听: 聞く〉のように主体の行為を表す動詞と〈最: とても〉は共起し難い。しかし、それらの動詞が可能補語〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉と結合し、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉となることによって、許容･受容という側面に着目し、心理的な意味が現れる。その結果、〈最: とても〉とも共起できるようになると考えられる。つまり、〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が先行する知覚動詞に何らかの意味的な影響を表しているのである。

一方、〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、基本的には〈最: とても〉とは共起することはできない。

(84) ??李顺达 最 看 不 了 文件，…。

李順達 とても 見る-NEG-LIAO$_{poten}$ 文書

知覚動詞を取る〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、心理的な活動には関与しておらず、動作主の働きかけを表すことより、このような〈最: とても〉とは共起することができない。

ここでは、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が、その意味として困難及び苦難を表すという心理的な活動に関与しているため、副詞〈最: とても〉と共起することができるという現象を指摘した。

2.4.2.3. 目的語

更に、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、主述句を目的語要素として取ることができるという特徴がある。

(85) a. 他 看 不 得 海云 的 孩子 般 的 面孔 上 缀 满 泪珠。

彼 見る-NEG-DE$_{poten}$ 海雲 ASSOC 子供 の様な ASSOC 顔 の上 繋ぎあわせる-満ちる 涙の粒

（CCL: 王蒙《蝴蝶》）

「彼は海雲の子供のような顔に涙を溜めているのを見ていられない。」

b. 不 知 怎么 的，一 出 大陆，

NEG 知る どのように SFP 一度 出る 大陸

她 特别 听 不 得 外人 说 大陆 不 好，…。(CCL: 谌容《梦中的河》)

彼女 とりわけ 聞く-NEG-DE$_{poten}$ よその人 言う 大陸 NEG 良い

「何故だか分からないが、大陸を出ると、彼女はとりわけよその人が大陸は良くないと言っているのを聞いていられず、…。」

(85a) は〈海云的孩子般的面孔上缀满泪珠: 海雲の子供のような顔に涙を溜めている〉、(85b) は〈外人说大陆不好: 外国人が大陸が良くないと言っている〉という要素が〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の目的語句として機能している。この目的語句は、その内部に主語、述語及び目的語等を備えた主述句となっていることが分かる。しかし、〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉の例においては、主述句を目的語位置に取った例は、CCL コーパスからは得られなかった。そこで、知覚動詞（〈听: 聞く〉及び〈看: 見る〉）を先行動詞とする〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉[51]を対象に、知覚対象が主述句となっているか否かという観点で用例数とその割合をまとめると次の（表 9）のようになる[52]。

[51] 不許可の意味を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉に関しては、集計に入れていない。

[52] 許可の意味を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉に関しては、集計に入れていない。集計の内訳は、〈看不得: 見ていられない〉が合計 28 例（内訳: 主述句 11 例、非主述句 13 例、その他 4 例）、〈听不得: 聞いていられない〉が合計 52 例（内訳: 主述句 8 例、非主述句 43 例、その他 1 例）である。その他とは、連体修飾節となっている場合や目的語が省略されている場合が含まれる。

（表 9） 〈知覚動詞-不得〉が取る目的語要素の種類

	目的語: 主述句	目的語: 非主述句
〈知覚動詞+不得〉	23.8% (19 例/80 例中)	70.0% (56 例/80 例中)

（表 9）から分かるように、主述句を有する要素が目的語に現れるのは、全体の 23.8%ほどであり、全体としては非主述句よりも例が少ない。非主述句とは、次の (86ab) に挙げるように、名詞要素を目的語に取る場合である。

(86) a. 姚晨 说，哎呀 最 看 不 得 这样 的 人，跟 他们 比 起来，

姚晨 言う あ~ とても 見る-NEG-DE$_{poten}$ このような ASSOC 人 と 彼ら 比べる-上がる

自己 过 得 太 好 了，都 好 得 叫 人 不好意思 了。 （CCL:《武林外传》）

自分 過ごす DE とても 良い PERF 全て 良い DE CAUS 人 申し訳ない SFP

「姚晨が言うに、このような人はとても見ていられない。彼らと比べると、自分は良い暮らしをしており、申し訳ないと思うほど良い暮らしをしている。」

b. “现在 最大 的 问题 是 主席 听 不 得 我们 的 意见，

現在 最大 ASSOC 問題 COP 主席 聞く-NEG-DE$_{poten}$ 私達 ASSOC 意見

江青 几 个 人 唆使 毛远新 在 他 那里 告阴状。”

江青 いくつ CL 人 おだててそそのかす 毛遠新 で 彼 そこ 陰口を言う

（CCL: 草石・萧帆《特殊决战中的叶帅》）

「現在の最大の問題は、主席が我々の意見を聞かず、江青ら何人かの人が陰口を言うように毛遠新をおだててそそのかしていることである。」

以上の例のように、目的語位置の要素は、〈这样的人: このような人〉（(86a) の例）や〈我们的意见: 我々の意見〉（(86b) の例）というように、連体修飾節は取っているが、主述句とはなっていないこと分かる。

本来、動詞〈听: 聞く〉及び〈看: 見る〉が目的語位置に文 （〈她唱: 彼女が歌う〉（(87a) の例），〈他们下棋: 彼らが将棋をさす〉（(87b) の例））を有することは、可能である。

(87) a. 别　　闹，　听　她 唱。　（吕叔湘主编 1999:530）

するな 騒がしい 聞く 彼女 歌う

「騒がしくするな、彼女が歌うのを聞きなさい。」

b. 我 看　过 他们　下棋。（吕叔湘主编 1999:331）

私 見る EXP　彼ら　将棋をさす

「私は、彼らが将棋をさすのを見たことがある。」

よって、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は目的語位置に主述句を取ることができるのに対して〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は取り難いという相違は、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が表す許容・受容という意味に関連していることが考えられる。

以上議論したように、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の特徴として、目的語位置に主述句を取ることができるという点を指摘した。これは、〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉では現れにくい特徴であることから、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の意味特徴と関連している可能性があると推測し得る。

2.4.3. 心理的不可能の意味的特徴と文法的・構文的特徴の関連性

〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉の特徴は、可能を表す可能補語一般に共通するものである。一方、2.4 節では〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉はそれとは異なる特徴を表すことを見てきた。以下に、これまで考察してきた意味的特徴、及び文法的或いは構文的特徴について、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉及び〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉の特性をまとめる。

（表 10）〈知覚動詞-不得〉と〈知覚動詞-不了〉の諸特徴の相違

	〈知覚動詞-不得〉	〈知覚動詞-不了〉
・意味素性	許容･受容	働きかけ
・心理的影響	あり	なし
・主題-評言	不成立	成立
・〈最〉と共起	共起する	共起しない
・主述句目的語	取る	取り難い

〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉及び〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉の両形式は、その意味的特徴及び他の諸特徴において、（表 10）に挙げたような相違が存在する。そこで、本研究の目的である〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の意味特徴について、当該形式の許容･受容及び心理的困難の意味を表すという特徴から考えて規定すると、「主体が許容或いは受容している事物に対して、主体の心理的な要因により、その知覚を受け入れられないことを表す」と記述することができる。またその他の諸特徴との関連として、主体の心の動きが含意されるため、性格や性質を描写する主題-評言という構文は取り難く、また心理的活動を表す〈最: とても〉とは共起しやすくなる。更に、主体が事態を知覚しているため、その知覚対象が出来事である場合、主述句を使用して詳細に描写するということも可能となる。

本研究では、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉及び〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉を対象として議論を進めた。そこで、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は「対象を受け入れる」という許容･受容の側面に言及し、〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は「目や耳を向ける」という働きかけの側面に言及するという相違があることを論じた。しかし、許容或いは受容的な側面を有するのは〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉のみではない。例えば、〈舍: 捨てる, 放り出す〉を先行動詞とする〈舍不得: 離れがたい, 別れるのがつらい〉及び〈舍不了: 離れられない〉に関しても、許容･受容及び働きかけという観点から分析し得る可能性がある。〈舍不得: 離れがたい, 別れるのがつらい〉という形式は、従来、慣用的或いはイディオム化（〈熟语性〉）した表現として、普通話において用いられることが先行研究でも指摘されてきた。次の例に見られるように、この〈舍不得: 離れがたい, 別れるのがつらい〉も許容･受容という意味素性を表すという点で、先に議論した〈看不得: 見ていられない〉及び〈听不得: 聞いていられない〉と同等に捉えられる可能性がある。

(88) a. 妈妈　舍　不 得　　孩子　　出　远门。(《现代汉语词典第 5 版》)

母　離れる-NEG-DE$_{poten}$　子供　出る　遠出

「母は子供が遠いところへいってしまうのがつらい。」

b. 远离　　故乡，我 心里　　真　有点儿　　舍　不 得。(『小学館中日辞典』)

遠く離れる 故郷　私 心の中 本当に　少し　離れる-NEG-DE$_{poten}$

「故郷を遠く離れるのは、どうも後ろ髪を引かれる思いがする。」

(88a)は、「対象が勝手に離れていくのが許容できない」という意味を表し、積極的に手放すという働きかけの意味とは対照的である。また、(88b)は、物理的には主体である〈我: 私〉が離れていくことを表しているが、心理的には「自らの意志とは関係なく故郷が遠のいていく」といった意味として捉えられる可能性がある。つまり、これら〈舍不得: 離れがたい, 別れるのがつらい〉も同様に、許容･受容として捉えることができると考えることが可能である。それに対して、〈舍不了: 離れられない〉は、次の例からも分かるように、主体の働きかけに言及していると言える。

(89) “孩子，我　舍　不　了　　你　呀！”　(《1994 年人民日报》)

子供　　私 離れる-NEG-LIAO$_{poten}$ あなた SFP

「息子よ、私はお前と離れられないよ。」

よって、これまで慣用化された表現として捉えられてきた〈舍不得: 離れがたい, 別れるのがつらい〉、〈巴不得: 切望する〉、〈算不得: 認められない〉等も許容･受容という意味素性で一括してまとめて議論し得る可能性がある。しかし、この点に関する詳細な議論は、今後の課題としたい。

2.4.4. 類似する意味を有する他形式との関係性

知覚動詞を先行述語に用いる可能補語で、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉と同様に、許容･受容を表す形式として考えられるものとして〈知覚動詞-不下去: -NEG-XIA QU$_{poten}$〉がある。〈-不下去: -NEG-XIA QU$_{poten}$〉は方向補語から成る可能補語であり、〈-下去: -XIA QU〉は本来「継続」の意味を表す（刘月华主编 1998:196 参照)。具体的には、次の例のように、「難

民の惨状」を「見ていられない」というように、主体がある事物を知覚・認識することに対する否定を表しているという点で、意味的に〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉と非常に類似している。

(90) 难民　的 惨状 实在　叫　人 看　不 下去。

難民 ASSOC 惨状　実際に CAUS 人 見る-NEG-XIA QU$_{poten}$

「難民の惨状は実に見ていられない。」(『小学館中日辞典』)

本節では、許容・受容を表すという点で共通する形式である〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉及び〈知覚動詞-不下去: -NEG-XIA QU$_{poten}$〉を比較・対照することで、以上で提示した〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の意味記述をより精密に行う。具体的には、主体の心理的な要因、及び述語が表す事態の性質という点について詳しく論じる。

まず、知覚した事物を受け入れられないことの要因であるが、2.4.1.2 節で議論した「心理的影響」という観点では、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉も〈知覚動詞-不下去: -NEG-XIA QU$_{poten}$〉も共に心理的に困難であるという意味が現れる。

(91) 有人 说："精神 要　　强调，　但没技术，

ある人 言う　精神 AUX（する必要がある）強調する しかし ない 技術

精神 还是　白搭。我 看　了　对　　巴基斯坦队　　的 上半场 就　不　看　了，

精神 やはり 無駄である 私 見る PERF に対して パキスタンチーム ASSOC 前半　正に NEG 見る PERF

为什么？没 特点，看　不 下去。"（CCL:《1994 年报刊精选》）

なぜ　ない 特徴　見る-NEG-XIA QU$_{poten}$

「ある人が言った。『精神は強調しなければならない。しかし、技術がなければ、精神はやはり無駄である。私がパキスタンチームとの前半を見たが、そこで止めた。なぜかって。特徴がないから、見ていられない。』」

(92) 她　的　性格 就是　这样　　的　　温柔　多情，

彼女 ACCOS 性格　正に このように ACCOS おとなしい 愛情豊か

这样　　的　容易 体贴　别人。 她　的　眼睛 特别　看 不得　　苦难，

このように ASSOC 容易に 気遣う 他の人　彼女 ASSOC 目　特別に 見る-NEG-DE$_{poten}$ 苦しみ

却 偏偏　生　在 一个 有 很　多 苦难　的　时代里。(CCL: 张炜《秋天的愤怒》)

のに　生憎 生まれる で 1 CL ある とても 多い 苦しみ ASSOC 時代 中

「彼女の性格は、このようにおとなしくて愛情豊かであり、このように他人をすぐに気遣う。彼女の眼は特に苦しみを見ていられないのに、あいにく苦しみの多い時代で生まれた。」

(91) は〈看不下去: 見ていられない〉、(92) は〈看不得: 見ていられない〉を述語とする例であり、(91) は文として明示されていないが、「見ていられない」ということについての心理的な意味が感じられる。また (92) に関しても、「苦しみを見ているのは辛いから見続けられない」といった心理的な意味が読み取れる。しかし、両形式は条件として取る要因が異なる。〈知覚動詞-不下去: -NEG-XIA QU$_{poten}$〉は他の可能補語の特徴と同様、「特徴がないから」という「主体に対して外在的な条件」が「見ていられない」ことの要因となっているが、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は「性格がおとなしく愛情豊かである」という「主体の性格・性質として現れる心理・心情的な条件」が「見ていられない」ことの要因となっている。可能補語は一般的に、主体に対して外在的な要因を条件とし、主体の能力や心情といった主体に内在する要因を条件とはしにくい。この点においても、〈知覚動詞-不下去: -NEG-XIA QU$_{poten}$〉は一般的な可能補語と同等の特質を有すると言える。また〈知覚動詞-不下去: -NEG-XIA QU$_{poten}$〉は、2.4.2.2 節で見た〈最: とても〉との共起、並びに目的語の特徴に関しても〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉と同様の振る舞いを見せる。つまり〈最: とても〉とは共起し難く、主述句を目的語要素としても取り難い。また、〈知覚動詞-不下去: -NEG-XIA QU$_{poten}$〉は主語-述語構造及び主題-評言構造の両者を基本的には取ることができる。しかし、主題-評言構造を取った場合は非常に良く用いられるのに対して、主語-述語構造の場合の使用度は低くなるという相違が見られる。

(93) a. 我 看 不下去　　书 了。

私 見る-NEG-XIA QU_{poten} 本 SFP

「私は本を読んでいられなくなった。」

b. 这 本 书 我 看 不 下去　　了。

この CL 本 私 見る-NEG-XIA QU_{poten} SFP

「この本は私は読んでいられなくなった。」

まず、(93a) は主語-述語構造、(93b) は主題-評言構造を取っており、基本的には両者とも非文法的な文ではない[53]。しかし、〈知覚動詞-不下去: -NEG-XIA QU_{poten}〉は (93a) の主語-述語構造よりも、(93b) の主題-評言構造の方がよく用いられるという。これは、（表 11）の CCL コーパスを用いた調査から分かるように、〈知覚動詞-不下去: -NEG-XIA QU_{poten}〉は主題-評言構造を取る場合が全体の 97% と、主語-述語構造より圧倒的に出現頻度が高いことからも裏付けられる。

（表 11）〈知覚動詞-不下去〉の「主語-述語」構造或いは「主題-評言」構造に現れる用例数

	看不下去	听不下去	合計
主語-述語	2 例	4 例	6 例 / 2.2%
主題-評言	77 例	185 例	262 例 / 97.8%

出現頻度としては全体の 2.2% と非常に低いが、〈知覚動詞-不下去: -NEG-XIA QU_{poten}〉が主語-述語構造を取っている例として、以下のような文が挙げられる。

(94) “你　先 说，　不然　　你　也 听　不 下去　　我 的。”（CCL:老舍《老张的哲学》）

あなた 先に 言う そうでないと あなた も 聞く-NEG-XIA QU_{poten} 私 NOM

「『あなたが先に言って、そうじゃないとあなたも私の話を聞いていられないでしょ。』」

[53] 下記の 3 名の中国語母語話者に確認をした。
F. 女性, 貴州省貴太市, 20 代
G. 河北省石家荘, 女性, 20 代
H. 男性, 山西省太原市, 20 代

次に、述語が表す事態の特徴であるが、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉及び〈知覚動詞-不下去: -NEG-XIA QU$_{poten}$〉は、文末助詞 (sentence final particle) の〈-了: SFP〉と共起するか否かという点で異なる。(95ab) 及び (96) から分かるように、〈知覚動詞-不下去: -NEG-XIA QU$_{poten}$〉は〈-了: SFP〉と共起し得るが、〈知覚動詞-不得〉は共起することができない。

(95) a. 映雪　越听　　脸色 越白，最后 终于 听　不下去　　了。(CCL:琼瑶《鬼丈夫》)

映雪 聞くにつれて 顔色 白くなる 最後に ついに 聞く-NEG-XIA QU$_{poten}$ SFP

「映雪は聞くにつれて顔色がみるみる青白くなり、最後にはついに聞いていられなくなった。」

b. 下午　的 旁听者 明显　　减少，大概 实在　是　听 不　下去　　了…。

午後 ASSOC 傍聴者 明らかに 減少する 恐らく 確かに COP 聞く-NEG-XIA QU$_{poten}$ SFP

(CCL:《1994 年报刊精选》)

「午後の傍聴者は明らかに減少した。たぶん実際に聞いていられないのだろう…。」

(96) ??他们 看　不 得　　别人　　受苦　　了，…。

彼ら 見る-NEG-DE$_{poten}$ 他の人 苦しい目に合う SFP

「彼らは他人が苦しむのを見ていられなくなり、…。」

文末助詞の〈-了: SFP〉は、「何らかの〈変化〉が参照時において〈既に実現済み〉であることを表す（木村 2012:140)」と記述される。つまり、〈知覚動詞-不下去: -NEG-XIA QU$_{poten}$〉は未然の事態から既然の事態への変化を表すことができる、即ち動的な事態を許すと解釈することができる。それに対して、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は事態の変化を含意することができない。それは、主体の感情の変化の結果等ではなく、恒常的な感情を表しているためであると考えられる。

以上の議論を含めて、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の意味を更に精密に記述すると、「主体が許容或いは受容している事態に対して、主体の性格・性質として現れる心理・心情的な要因により、知覚を受け入れられないという主体の恒常的な感情を表す」形式であるとすることができる。

2.5. まとめ

本章で論じた、可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉及び心理的不可能を表す〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、ポテンシャルな（潜在的な）可能であるという点で共通している。2.5 節では、本章の総括として、両形式の意味的特徴を簡潔に提示し、更に文法的･構文的特徴を、再度提示する。その上で、先行研究との関連で、特に問題とした議論についてまとめることとする。

まず、意味的特徴として、両形式の意味を各々簡潔にまとめると次のようになる。状況可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、「動作主体が意図的に動作行為を行おうとすれば、ある一時的な条件が要因で、その事態が実現する或いは実現しないという状況にある」ということを表す。それに対して、心理的不可能を表す〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、「主体が許容或いは受容している事態に対して、主体の性格･性質として現れる心理･心情的な要因により、知覚を受け入れられないという主体の恒常的な感情を表す」と記述することができる。可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、動作主体の意志性 (volitionality) 及び事態の実現という素性が可能の意味の成立に中心的に関わっており、更に一時的な条件のもとで用いられるという特徴が加わっている。一方、心理的不可能を表す〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、知覚主体の許容･受容という素性が関連しており、知覚対象を既に知覚している、或いは知覚することが仮定されている。また、その知覚事態が、主体の心理として、受け入れられないという心理的に困難の意味を表す。

次に両者の先行述語の種類と意味素性、及び文法的･構文的特徴をまとめる。

（表 12） 可能を表す〈-得了/-不了〉及び〈-不得〉の諸特徴

		状況可能: 〈-得了/-不了〉	心理的不可能: 〈-不得〉
先行述語	種類	動作動詞	動作動詞の中の知覚を表す動詞
	意味素性	・意志性 ・働きかけ	・意志性 ・許容･受容
構文的特徴		・無題文 ・有題文	・無題文
文法的特徴		―	・〈最: とても〉と共起し得る

状況可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、動作動詞を先行述語に取り、主語-述語という無題文、並びに他の要素の左方転移等による主題化された有題文としても成立する。また、もともと主題-評言を基本とするものもある。このように、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉を有する文は、構文的には制限の少ない形式であると言える。一方、心理的不可能を表す〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、知覚動詞を先行述語として取り、更にそれが働きかけではなく、許容・受容という点に着目するという特徴を有する。この点で、可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉との意味的な相違が生じる。また、構文としては「知覚主体 + 知覚動詞-不得 + 知覚対象」という主語-述語となる無題文でのみ成立し、主題化等の主題-評言としては現れない。もしも主題-評言を取った場合、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は不許可の意味を表すことになる。このように、〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、先行述語の種類及び構文的特徴という点で、非常に制限された形式であることが窺える。

最後に、先行研究の記述並びに分析との関連で、特に問題として取り上げたのは、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉における「可能・不可能であることの条件」と「動作の指向性」との関連についてである。従来の研究でも、両者は〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が表す可能において、重要な特徴として取り上げられてきた。この議論に加えて、本研究では、可能・不可能であることの条件において、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が表す可能は、主体にとって外在的或いは内在的である一時的に付加される条件においてのみ成立し、能力や心情といった恒常的な条件においては成立しないことを論じた。またこの一時的な条件を取るということが、主体の本来的に持っている能力として、先行動詞が表す動作・行為を行うことができるという点を保証する、つまり、主体の動作の実行性を保証するということで、結果性に言及するという典型的な可能補語の特徴を保っていることを主張した。

第三章　義務的モダリティを表す〈-不得〉と〈-不了〉

3.1．モダリティ：話し手の対命題的･対聞き手的態度

本論文で扱う可能補語が表す意味は、義務的モダリティ及び認識的モダリティという範疇に広がる。そこでまずは、本研究で取るモダリティについて検討する。それは即ち、発話時における話し手の対命題的･対聞き手的態度という意味範疇としてモダリティを考える。

モダリティは伝統的に、統語的、形態的な範疇ではなく、概念的、意味的な範疇として捉えられてきた（Ziegeler2006:259 参照）。その定義としては、現在、通言語的に二つの立場[54]が最も有力視されている。一つ目は「モダリティを話し手の態度或いは心的な主観性の表現（Narrog2005:168 参照）」で捉える立場であり、二つ目は「モダリティを現実･非現実或いは事実性の概念（Narrog2005:168 参照）」で捉える立場である[55]。モダリティ研究において、その内部の分類を考える際、どちらの立場でモダリティを定義するかで可能の位置付けも異なるため、特にここで問題とする必要がある。前者の主観性に基づく定義を採る立場では、一般的に可能はモダリティの範囲には含まれない（Palmer1990:2 参照）[56]。たとえば、この立場を採る日本語の記述的研究では、可能を表す「（ら）れる」や「ことができる」をヴォイス (voice) の範疇に位置付けてきた。それに対して後者の立場である事実性という観点で捉えた場合、可能は力動的 (dynamic) な範疇として確実にモダリティの範囲に含まれる。たとえば、Palmer (2001) 等による可能を表す法助動詞 ‘can’ の分析がそれに当たる（ナ

---

[54] 実際には、Narrog (2005) で挙げられている伝統的なモダリティの定義は三つである。残りの一つは「モダリティを命題の外側にある全ての言語表現を含むもの（Narrog2005:168）」として捉える立場であるが、現在ではモダリティそれ自体の分類基準として用いられることは稀であるため、本文では扱わなかった。

[55] 前者は Lyons (1977) 、Palmer (1986, 1979, 1990) 等で一般的に採られる立場であるのに対して、後者は Givon (1995) 、Palmer (2001) 等で主に採られる立場である（Narrog2005:168 参照）。

[56] “…the use of CAN to refer to ability and of WILL to refer to volition and to the future, do not seem to be strictly matters of modality at all; for ability and volition refer to characteristics of the subject of the sentence rather than the speaker, while future would seem to be a matter of tense. (Palmer 1990:2)”（…能力に言及する can の使用、及び意志或いは未来に言及する will の使用は、厳密にはモダリティの問題ではないであろう。能力及び意志に関しては、話し手よりもむしろ、文の主語の性質に言及しており、未来はテンスの問題であると言えよう。）

ロック 2009:35 参照)。

中国語の可能補語が表す可能の意味は、先行する述語に対して結果事象を表す補語成分を肯定或いは否定することで現れるため、主としてアスペクトの問題として捉えるのが妥当であると見られてきた（大河内 1980:69-70 参照)。また、可能補語が表す意味をより厳密に特定するためにも、本研究では、この可能の意味をモダリティ範疇に位置付けないのが適当であると考える。即ち、本研究においては、従来言われている「主観性」(subjectivity) の観点から定義するのが適当であろうと思われる。しかし、主観性という用語の内実は、研究者によって様々であり、時として混乱を招く恐れがあるため、本研究で扱う形式における意味記述では、主観性という術語の使用を極力避けることとする。そこで、本論文では、モダリティを発話時における話し手の対命題的･対聞き手的意味範疇として定義する。

発話時における話し手の対命題的･対聞き手的態度とは、文に述べられている事柄に対する話し手の判断的態度や聞き手に対する伝達的態度のことである。言わば、話し手の発話現場的行為とでも言うべきものである。次の文を用いて説明する。

(97) a. 小河　的　水　<u>深　不　了</u>。（吕叔湘主编 1999:367）

小川　ASSOC 水　深い-NEG-LIAO$_{deduc}$

「小川の水は深いはずはない。」

b. 篮子　　里　有 鸡蛋，　<u>压　不　得</u>。（吕叔湘主编 1999:165）

手提げかご　の中 ある　卵　　押さえる-NEG-DE$_{permi}$

「手提げかごには卵が入っているので、押さえてはいけない。」

(97a) は、「小川の水は深い」という命題に対して、〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉を用いて、「はずはない」という話し手の推測的判断態度を表している。また、(91b) は、「かごを押さえる」という命題に対して、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉を用いて、「いけない」という聞き手に対する不許可、即ち一種の要求的態度を表している。つまり、可能補語〈-不了:-NEG-LIAO$_{deduc}$〉及び〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉という要素が付加されることによって、これらの文には、（例えその場で発話されたものでなくとも、）常に話し手の態度をめぐる意味が読み込まれることになる。このような意味をもって、本研究では、モダリティと呼ぶ。但し、ここでは、文における意味の一側面としてモダリティを見るような、所謂意味的指向性の強いモダリテ

ィ観ではなく、文法形式で表現されたものに限って、検討対象とする立場に立つ。

話し手の対命題的･対聞き手的態度として、認識に基づいた話し手の判断、つまり認識的意味の表現、遂行的行為としての要求の一種である義務或いは禁止、つまり義務的意味の表現が本研究で扱うモダリティ表現である。

3.2. 研究の背景

本章では、不許可の意味を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉、及び不必要の意味を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉という 2 つの形式を取り上げる。この不許可及び不必要は、義務的モダリティ (deontic modality) という範疇としてまとめることができる。不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、主に動作行為を表す動詞を先行述語とする。また、形容詞が先行述語に現れることもあるが、この場合も、必ず意志性または制御性といった意味素性が含意される。不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は非常に制限された用法であり、基本的には動作動詞を先行述語とするが、その中でも、本研究で行った調査では、使用或いは消費を表す動詞を先行述語とした場合にのみ現れることが分かった。先行述語の意味素性と可能補語が表す意味の関係を表にまとめた上で、各々の具体例を (98) 及び (99) に提示する。

（表 13） 義務的モダリティ: 先行述語の意味素性と可能補語の意味範疇

先行述語		可能補語	
意味素性	述語の種類	形式	意味範疇
意志性	動作動詞	〈 -不 得 〉 -NEG-DE$_{permi}$	不許可
意志性	動作動詞の中の使用･消費を表す動詞	〈 -不 了 〉 -NEG-LIAO$_{necess}$	不必要

(98) 篮子 里 有 鸡蛋， 压 不 得。（吕叔湘主编 1999:165）

手提げかご の中 ある 卵 押さえる-NEG-DE$_{permi}$

「手提げかごには卵が入っているので、押さえてはいけない。」

(99) 搁　不 了　　这么　多 油。

入れる-NEG-LIAO$_{necess}$ こんなにも 多い 油

「こんなに多くの油を入れる必要はない。」(《中国语补语例解》p.184)

(98) は〈压不得: 押さえてはいけない〉という不許可の意味を表し、(99) は〈搁不了: 入れる必要はない〉という不必要の意味を表している。両形式に共通する顕著な特徴は、必ず主題-評言、つまり有題文としてのみ成立するということである。これは、両形式が表す意味的な特徴にも影響を与える。また、これらは基本的に否定形式でしか使用されないため、考察の範囲も否定形式に止めることとする。

不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、意志性という意味素性を持つものでさえあれば、先行する動詞或いは形容詞の種類は非常に多岐に渡り、先行研究においても、様々な記述・分析が行われてきた。その中で重要な指摘として、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が表す不許可は、「情理上許可するか否か」〈情理上是否许可〉(刘月华他 2001:593) ということであり、「不許容の意味のときには、用いることができない」〈不准许意义时，不能用〉(刘月华他 2001:593) という点、及び「動作の実現に基づいて良くない結果が生まれる可能性がある」〈依据动作实现可能产生的后果〉(李宗江 1994:376) ということを前提としているという点が挙げられる。前者の指摘は、人の行為に対する許容に関して、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉を用いることはできないという点と関連している。これは、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が常に有題文を取り、主題の性質や属性に対する判断を行う機能を有する、所謂属性叙述文に近い表現となっているためであると考えられる。後者の指摘に関して、不許可の意味が悪い結果を前提とするというのは、普通話では衰退した形式である可能を表す〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉との相違という点で、しばしば議論される。しかし、本研究では、この悪い結果の含意が、不可能と不許可の両者を分類する上での本質的な相違でもなく、またこの不許可の意味の成立に絶対的に関わっているものでもないということを論じる。そこで、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉に対する新たな観点として、主題-評言を成し、主題の性質・属性に対する判断を行う表現形式であり、この形式の意味を形成する本質的な要素として考えられてきた悪い結果の生起というのは、二次的なものであることを主張する。

不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉の意味記述に関しては、管見の限り、これまでの研究では指摘されていない。そこで、〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉が不必要の意味を表すということを提案する上で、その意味が義務的モダリティに共通する広い意味での遂行的表現

であるということを根拠としている。この点で、可能とは異なる意味範疇に属する。この不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は、先行動詞が使用或いは消費を表す動詞に限られるということからも、非常に制限された用法である。また、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉と同様に、〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉においても必ず有題文となり、更には数量表現が目的語位置に現れるという特徴がある。この数量表現が現れるという特徴より、「過度」という意味的な含意があることを論じる。

〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉及び〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉は、可能を表す、或いはかつて表していたとされており、この可能及び義務的モダリティ（「不許可」，「不必要」）は両者とも、先行述語として、意志性を持つ動詞を基本的に取るという共通性がある。そこで、可能の意味と義務的モダリティの意味の類似と相違が、しばしば先行研究でも取り上げられてきた。本研究では、可能と義務的モダリティは異なる意味範疇に属すると考え、両者の相違について 3.3 節で論じる。その上で、3.4 節では不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{premi}$〉について、更に 3.5 節では不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉について議論し、最後に 3.6 節で本章の議論及び主張をまとめる。

3.3．義務的モダリティ：可能との相違

義務的モダリティは、ギリシア語の‘binding’（束縛しているもの）を意味する語に由来する（Allan2001:359 参照）。義務的モダリティは、伝統的に、動作及び行為を動作主に行わせる、或いは行わせないという許可 (permission) や禁止 (prohibition) を表す表現に対して用いられてきた（Ziegeler2006:261-262 参照）。本節では、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉及び〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉が表す義務的モダリティは、弱い義務 (weak obligation)（非遂行的）を基本として表し、条件が整えば所謂義務的モダリティ（Palmer1979 の言うところの）、つまり強い義務 (strong obligation)（遂行的）の表現となることを論じる[57]。

義務的モダリティである不許可は、可能と類似した意味的側面を有する。例えば、次の例である〈穿不得: 履けない / 履いてはいけない〉は、解釈によっては、不可能とも不許可とも捉えることができる[58]。

---

[57] 「弱い義務」(weak obligation) 及び「強い義務」(strong obligation) という術語は、Coates (1983:32) による。

[58] 第二章の 2.3.1 節で論じたように、可能の意味を表す〈-得/-不得: -DE$_{poten}$/-NEG-DE$_{poten}$〉

(100) 这 双 鞋 穿 不 得。（吕叔湘 1999:165）

この CL 靴 履く-NEG-DE$_{poten/perm}$

「この靴は 履くことができない / 履いてはいけない。」

可能の意味として解釈されるのは、「靴を履こう」としても、例えば靴が小さいなどの理由でその動作が実現せずに終わったことの描写･報告の場合である。それに対して、不許可の意味と解釈されるのは、「靴を履いてはいけない」という動作の不実行を要求する、即ち話し手から聞き手に対する行為の遂行を求める表現となった場合である。また、その場合でも、動作主体である聞き手側からすると、「履く」という動作が許されないために、「履くことができない」という可能の意味として解釈することができる。

このような、不可能と不許可の決定的な相違は、「行為遂行的」(performative) であるか否かであるという点がこれまでの研究においても指摘されてきた (Ziegeler2006:262)[59]。本研究でも基本的には、義務的モダリティを行為遂行的表現であると考える[60]。以下、(101ab) は不可能、(102) は義務的モダリティ（(102a) 不必要, (102b) 不許可）の意味を表す例を挙げて、説明を行う。

(101) a. 今天 下 雨，去 不 了　　颐和园 了。（刘月华他 2001:590）

今日 降る 雨 行く-NEG-LIAO$_{poten}$ 頤和園 SFP

「今日は雨だから、頤和園には行けなくなった。」

は清代末期に至るまでは生産的に用いられたが、一部の方言や特別な文体を除いて普通話では、形式的に〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に取って代わられた。つまり、(100) の不可能の意味は、普通話では〈这双鞋穿不了:この靴は履くことができない〉とした方がより自然である。しかしここでは、説明の都合上、〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉を可能の意味を表すものとして提示した。

[59] ‘Denison (1993:293) also made a distinction between deontic and dynamic modality, suggesting that deontic modality is involved with giving permission or obligation imposed performatively by the speaker … and that dynamic modality lacks a performative sense. (Ziegeler2006:262)’（Denison (1993:293)も、義務的モダリティは話し手による遂行的行為を課されることで許可や義務という意味を含意し、力動的モダリティは遂行的意味を欠いているということを提案することで、義務的モダリティと力動的モダリティの相違を区別した。）と述べている。

[60] 行為遂行 (performative) と非常に類似した術語として、日本語学におけるモダリティ研究の中で「行為要求」という表現が用いられることがある。行為要求とは、話し手が「聞き手が行為を実現すること（または実現しないこと）を求めたり、容認したりする機能（高梨 2010:191）」として規定されており、行為遂行とほぼ同じ現象を指しているが、本研究では、行為遂行という術語を用いることとする。

b.（三仙姑）羞　　得　只　　顾　　擦　汗，再　也　开　不　得　口。

（三仙姑）　恥ずかしい DE ただ 気にする 拭う 汗　再び　も 開ける-NEG-DE$_{poten}$ 口

（刘月华他 2001:592）

「（三仙姑は）恥ずかしくてひたすら汗を拭って、もう口を開けることはできなかった。」

(101a) の〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は〈去颐和园: 頤和園に行く〉という事態の実現が不可能であることを表しており、(101b) の〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は〈开口: 口を開ける〉という事態の実現が不可能であることを表している。このように不可能の意味を表す場合、話し手が聞き手に対して行為を求めるという含意はなく、また話し手の関与さえ義務的には存在しない。それに対して、次に挙げる (102a) は、話し手が聞き手に対して、「こんなに多くの油を入れる」という行為が必要ないことを述べており、(102b) は「冷たい水をかける」という行為が許可されないということを述べている。つまり、(102ab) は、遂行的な表現となっているのである。

(102) a. 搁　不　了　　这么 多 油。

入れる-NEG-LIAO$_{nece}$ こんな 多い 油

「こんなに多くの油を入れる必要はない。」（《中国语补语例解》p.184）

b. 凉水　浇　不　得。（刘月华他 2001:593）

冷たい水 かける-NEG-DE$_{perm}$

「冷たい水はかけてはいけない」

「行為遂行的」(performative)[61]とは、Austin (1962:4-7) によって用いられ始めた術語であり、基本的には「命令的」(imperative) と同系の語として考えられている。その例として、次のような文が挙げられている。

[61] ‘The name is derived, of course, from “perform”, the usual verb with the noun “action” (Austin1962:6)’（行為遂行的という名称は、行為 action という名詞とともに普通に用いられる動詞「遂行する」(perform) から派生されたものである。）

(103) a. I give and bequeath my watch to my brother. ―as occurring in the will. (Austin1962:5)(E. *c*)

「私は、私の時計を弟に遺産として与える。―ただし遺言状の中に記された場合。」

b. I bed you sixpence it will reain tomorrow. (Austin1962:5)(E. *d*)

「私はあなたと、明日雨が降る方に 6 ペンス賭ける。」

Austin (1962:5-6) によると、これらの文を口に出して言うことは、これらの行為を実際に行うことに他ならないとし、このような文を行為遂行文 (performative sentence) とする。

義務的モダリティを遂行表現であると規定すると、(104) のような例は話し手の実際の発話現場における直接的な行為遂行的発言であることより義務的モダリティとして捉えられそうであるが、(105) のような例は不許可の叙述を行っている文であり、行為遂行的であるとは極めて言い難いように思われる。

(104) 许凤 一 摇手 说："去 不 得，敌人 只 留 张村，

許鳳 さっと 手を振る 言う 行く-NEG-DE$_{permi}$ 敵 ただ 残しておく 張村

正是 想 逼 我们 进 网。"（CCL: 雪克《战斗的青春》）

丁度 したい させる 私達 入る 網

「許鳳はさっと手を振って言った『行ってはいけない。敵が張村だけを（安全に見えるように）残しているで、丁度私達を罠にかけようとしている。』」

(105) 还 一再 地 嘱咐 他们 说："小学校 的 大门口千万 可 走 不 得，

また 何度も DE 言い聞かせる 彼ら 言う 小学校 ASSOC 正門 絶対に べき 行く-NEG-DE$_{permi}$

那儿 是 这 街上 东西南北 来往 必经之路。…"（CCL: 刘流《烈火金刚》）

あそこ COP この 表通り 東西南北 往来する 避けて通れない道

「また何度も彼らに言い聞かせて言っている。『小学校の正門は絶対に通ってはいけない。あそこはこの表通りを往来するのに避けて通れない道なのだ。』」

実際には、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉及び〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉が表す義務的モダリティの意味は、どちらかというと遂行的なものではなく、非遂行的な描写表現であると言える。

それは、当該形式は必ず主題-評言となるということに関係していると思われるが、この点に関しては後に詳述する。このような非遂行的な描写を表す場合は、Palmer (1979) では義務的モダリティ (deontic modality, discourse oriented modality) とはせず、力動的モダリティ (dynamic modality) に振り分けられている（特に法助動詞 ‘must’ の意味について言及されている）。その根拠として、話し手の関与がほとんど或いは全く存在しなくなっているためという観点から説明されている (Palmer1979:91)[62]。つまり、Palmer (1979) では遂行的ということを狭義に捉え、その意味で遂行的か否かという点を基準として、義務的モダリティに入るか力動的モダリティに入るかを分類していると言える。一方、Coates (1983:32-33) では、両者を義務的モダリティの中で捉え、Palmer (1979) の言う義務的モダリティとして捉えられた ‘must’ の意味を強い義務 (strong obligation) とし、力動的モダリティとして捉えられた ‘must’ の意味を弱い義務 (weak obligation) とした。更に、強い義務を核 (core) 、弱い義務を周辺 (periphery) とし、核から周辺へと意味が連続的に推移 (cline) しているという捉え方を提案している。これは、強い義務を主観的な表現とし、一方で弱い義務を客観的な表現とした上で、両者には明確な境界線が存在しないため、連続体として捉えているのである[63]。本研究でも、基本的には Coates (1983) の考え方に則り、強い義務及び弱い義務ともに義務的モダリティの範疇として規定する。更に、弱い義務においても、本質的には遂行的意味が含意されていると本研究では考える。しかしそれは、少なくとも可能が表す意味との相対的な比較によってである。(105) においても、現場で 2 人称主語に対して行為の非要求を直接的に求めているわけではなく、どちらかというと事態に対する評価を表しているが、その中でも遂行的な意味は含意されていると考えるのである[64]。

以上、義務的モダリティにおける規定と本研究で扱う形式が表す意味の範囲を論じた。次に、不可能を表す形式と比較した上で、義務的モダリティ（不許可, 不必要）に現れる意味的、或いは文法的な相違を更に指摘する。

---

[62] Palmer (1979) では、‘must’ の意味記述をめぐって、議論されている。

[63] Palmer (1979:91) においても、厳密には ‘must’ の意味が義務的モダリティであるか否かを確定するのが難しい場合があることを認めている。また、Coates (1983:32) において強い義務及び弱い義務を連続体として捉える根拠として、両者とも‘it is necessary for…’で言い換え可能であるという点を述べている。

[64] 本研究で扱う義務的意味を表す形式は、日本語学で言う「評価のモダリティ」（高梨 2010）により近い意味を表していると思われるが、評価 (evaluation) とはかなり広い意味を含意し、また言語学においても様々な意味で用いられるため、本研究ではこの術語の使用を避けた。

3.3.1. 諸特徴の相違

中国語の可能補語〈-不得: -NEG-DE〉及び〈-不了: -NEG-LIAO〉が表す不可能と、義務的モダリティである不許可、不必要の意味的及び文法的な特徴における相違について更に論じる。

まず、制御可能性 (controllability) という意味的な観点から両者の相違を分析する。制御可能性とは、「不可能、不許可或いは不必要の対象となる事態が動作主体の意志によって制御できるか否かを表す」という意味特徴を指す。制御可能性というと、言語学では、動作主体の制御可能性を問題とするのが一般的であるが、義務的モダリティ（「高梨氏は「評価のモダリティ」とする」）を扱った高梨 (2010:48) では話し手の制御可能性[65]という観点より分析を行っている。しかし、本研究では可能との対応において義務的モダリティを統一的に捉えたいがために、従来通り動作主体の意志による制御可能性という点で考察を行う。まず、可能を表す形式について、(101ab)を用いて考察する。不可能の意味を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉及び〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、「雨が降っている (101a) 」、「恥ずかしい (101b) 」という条件によって、動作主体が「頤和園へ行く」、「口を開ける」という事態の実現が制御できないということを表している。それに対して、肯定形式である〈-得了: -DE-LIAO$_{poten}$〉は、(106) から分かるように、「一人で食べることができる」ということから、動作主体は「食べる」という事態の実現を制御することができることが分かる[66]。

(106) 起初 我 很 奇怪， 一 个 人 能 吃 得 了 吗？

最初 私 とても 不思議だ 1 CL 人 AUX（できる） 食べる-DE-LIAO$_{poten}$ Q

（CCL:水静《我眼中的江青（下）》）

「最初、私は不思議に思った。一人で食べることができるだろうか。」

このように可能は、否定形式では動作主体が事態実現を制御できないのに対して、肯定形式では制御することができる。つまり、動作主体の制御可能性の有無と肯定及び否定の連動関係があると言える。それに対して、義務的モダリティを表す〈-不了: NEG-LIAO$_{necess}$〉及

---

[65] 動作主体の制御可能性と話し手の制御可能性の区別を論じたのは奥田 (1988:19) である。

[66] 可能補語の肯定形式の例は、実際の使用では非常に少なく、疑問文や反語文に限られるという事情から、ここでは、疑問文を提示することになった。そこで、実際には「一人で食べることができる」ということを尋ねている文となった。

び〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、聞き手である動作主体は基本的に動作行為を行うことができる。(102) を例に取ると、(102a) では聞き手である動作主体は、「油を入れる」ということをコントロールできるため、その行為に対して、「それほど多くの油は必要ない」ということを要求しており、(102b) では動作主体が「冷水をかける」という行為を行うことができるため、その不成立を求めるという事態が成立する。また、基本的に義務的モダリティである〈-不了: NEG-LIAO$_{necess}$〉及び〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、肯定形式では成立しないが、もしも、肯定の意味を想定したとしても、両者の意味においては、動作主体は事態を基本的には行うことができる(「多くの油を入れる必要がある / 冷水をかけてもいい」)。つまり、義務的モダリティは、否定しても肯定しても、動作主体はその事態実現を制御することができる。動作主体の制御可能性の有無と肯定否定の連動関係がないと言える。このように、動作主体の事態に対する制御可能性という点で、義務的モダリティは可能と異なる。

次に、不可能と義務的モダリティを分ける基準として、語気助詞〈了: SFP〉の付加の有無及び肯定形式の有無という相違に着目する。ここでは義務的モダリティの例としては、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の例のみを提示するが、不必要を表す〈-不了: NEG-LIAO$_{necess}$〉も基本的には同じである。まず、可能の意味を表す場合、(107) から分かるように語気助詞〈了: SFP〉を付加することができ、(108) から分かるように肯定形式でも成立する。

(107) "…我 病病哼哼 的，也 管 不 得 了， 偏劳 了 三妹妹。…"

私 病気がち SFP も 構う-NEG-DE$_{poten}$ SFP 面倒を掛ける PERF 三女

（CCL:张爱玲《金锁记》）

「私は病気がちで、色々と構うことができなくなり、三女に面倒を掛けてしまった。」

(108) 起初 我 很 奇怪， 一个人 能 吃 得 了 吗?

最初 私 とても 不思議だ 1 CL 人 AUX(できる) 食べる-DE-LIAO$_{poten}$ Q

（CCL:水静《我眼中的江青(下)》）

「最初、私は不思議に思った。一人で食べることができるだろうか。」

一方、義務的モダリティの中の不許可を例に取ると、(109ab) から分かるように、語気助詞

〈了: SFP〉の付加も、肯定形式も一般的には用いることができない[67]。

(109) a. ??他　放　的 东西，你　　可　　收拾 不 得　　了。

彼　置く NOM　物　あなた　くれぐれ　　片付ける-NEG-DE$_{permi}$　SFP

「??彼が置いたものをくれぐれも片付けてはいけなくなった。」

b. ??凉水　　浇　　得。

冷たい水　かける-DE$_{poermi}$

「冷たい水をかけてもいい。」

このように可能の意味を表す場合、語気助詞〈了: SFP〉の付加、及び肯定形式での成立を許すのに対して、義務的モダリティでは、両者とも許さない。以上の議論をまとめると（表14）のように提示することができる。

（表 14）　不可能と義務的モダリティにおける制御可能性と語気助詞と肯定形式

	動作主の制御可能性の有無と肯定否定の連動関係	語気助詞〈-了〉	肯定形式
「不可能」	あり	付加する	あり
「義務的モダリティ」	なし	付加しない	なし

3.3.2. 諸特徴と意味との相関性

3.3.1 節では、〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉及び〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉が可能を表す場合と、義務的モダリティ（不許可, 不必要）を表す場合の相違を明らかにした。両者の相違に対して、各々の言語現象を忠実に記述すると、(表 14)でまとめたようになる。そこで、不可能や義務的モダリティといった各意味範疇と、これらの相違の関連性を論じることとする。

[67] 不許可を表す〈-得/-不得-不得: -DE$_{permi}$ / -NEG-DE$_{permi}$〉については、刘月华 (1980) においても〈除了疑问句外，…只用否定式〉（刘月华 1980:255）（疑問文を除いて、…否定形式のみで用いられる）と指摘されている。

まず、「制御可能性」とは、動作主体の事態に対する制御の可能性のことを指すことを論じた。可能という意味範疇は、肯定の場合は、動作主体が意図すればその行為が行われることを表し、否定の場合は、動作主体が意図してもその行為が行われないことを表す。つまり、肯定及び否定に動作主体の事態に対する制御可能性が連動していることが分かる。それに対して、義務的モダリティの場合は、話し手と聞き手の関係が導入され、聞き手が動作主体として機能する。その動作主体である聞き手が、話し手から行為の要求を受けるという点から考えると、動作主体はその行為を必ず行うことができなくてはならない。つまり、動作主体が事態に対する制御可能性を常に有しているという前提が必要になる。このように、可能及び義務的モダリティにおける動作主体の制御可能性に対する現れの相違は、両意味範疇の意味的な特徴を考慮すると、必然的に理解されると言えよう。

次に、「語気助詞〈了: SFP〉」は、可能では付与することができるが、義務的モダリティでは付与することができない。これは、語気助詞〈了: SFP〉は、「何らかの〈変化〉が参照時において〈実現済み〉である（木村 2012:140）」ということを表す[68]ためであると考えられる。この場合、可能という意味においては、「できる/できない」という事態が、変化を伴い、「できるようになる/できないようになる」という事態を想定することは原理的に可能である。それに対して、不許可や不必要という意味は、聞き手に対する行為の要求であり、そこに変化を持ち込むことは、原理的に難しい。このような意味的な特徴が、語気助詞〈了: SFP〉との共起制限という点に関わっていると考えられる。

最後に「肯定形式」の有無に関しては、本来、可能を表す形式においても、肯定形式の使用は非常に少ないことを 1.3.2 節で論じた。しかしながら、可能の意味では、非常に限られてはいるものの肯定形式を用いることができるにもかかわらず、義務的モダリティでは肯定形式を用いることができないことの要因は、厳密には規定しがたい。ここで述べることができるのは、次章で扱う認識的モダリティをも含めて、可能補語において、モダリティレベルにある用法では、肯定形式は一般的に使用することができなくなるということのみである。

3.4. 不許可を表す〈-不得〉

3.4 節では、不許可 (non-permission) を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の文法的特徴及び意味

[68] 〈了: SFP〉は、「新しい状況の出現」を表すと記述されることもある。

的特徴について考察を行う。まず、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の典型的な形式を提示して説明を行う。

(110) 这 双 鞋 穿 不 得。

この CL 靴 履く-NEG-DE$_{permi}$

「この靴は履いてはいけない。」

(110) は、〈穿不得: 履いてはいけない〉というように、不許可の意味を表している。この文において特徴的なのは、本来目的語位置に現れるはずである、対象を表す名詞〈这双鞋: この靴〉が文頭に現れるという点である。

この点に関して本研究では、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、必ず主題-評言という有題文となることを指摘し、その特徴より、主題の属性・性質を表す表現となることを論じる。

また、李宗江 (1994) や刘月华他 (2001) 等によると、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、「(もし靴を履いたら) 何か悪いことが起こる可能性がある」というように「悪い結果」という意味が含意され、それが可能を表す〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉(2.3.1.1 節で取り上げたように普通話では〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に取って替わっている) の意味との根本的な相違となっていることを論じる。

しかし、本研究ではこの点に関して、確かに不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、悪い結果が起こるという意味が含意されるが、不可能と不許可とを分ける根源的な特徴とはならず、両者は 3.3 節で提示した、行為遂行的か否かという点において、分類し得る意味範疇であることを論じる。

本節の構成として、3.4.1 節では、先行述語の種類や主題文となるか否かといった側面の記述、分析を進め、3.4.2 節で主に意味的な特徴の考察を行うこととする。

3.4.1. 不許可を表す〈-不得〉の諸特徴

3.4.1 節では、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の先行述語の種類や主題-評言或いは主語-述語という構文を取るか否かといった特徴について論じる。不許可の意味を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、一般的に意志性を有した動作動詞を取る。稀ではあるが、形容詞を先行述語とすることも可能であるが、この場合でも必ず動作主体の動作性及び事態に対

するコントロール性といった特徴が現れる。また、必ず、主題-評言という有題文として現れる。

そこで、3.4.1.1 節では、先行述語である意志動詞或いは動作性が読み込まれた形容詞について論じ、3.4.1.2 節では、構文的特徴について記述する。

3.4.1.1. 動作･行為動詞の種類

不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉に先行する述語は、基本的に可能補語が可能を表す場合と同様、意志性を含意した動詞が用いられる。

(111) a. 这 个 人　你　小看　不　得。（刘月华他 2001:593②）

この CL 人　あなた 馬鹿にする-NEG-DE$_{perm}$

「この人は馬鹿にしてはいけない。」

b. 阿公 说　面前　的　河，从前　杨柳色，

祖父　言う　目の前　ASSOC　川　以前　ヤナギ色

现在　白鱼 肚子 里　都 墨鱼 一样，有 毒，吃　不　得。

現在　白い魚　腹　の中　すべて イカ と同じ ある 毒　食べる-NEG-DE$_{permi}$

（CCL: 林斤澜《三阿公》）

「祖父が言うに、目の前の川は、以前はヤナギ色だったが、現在は、魚の白い腹の中はまるでイカのように黒く、毒があり、食べてはいけない。」

更に、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の特徴として、形容詞が先行述語として用いられることもある。しかしその場合でも、動作主による意志性及び事態に対する制御性が必ず関与している（刘月华他 2001:593-594 参照）[69]。以下、形容詞が先行述語として用いられている例である。

[69] 刘月华他 (2001) では､不許可を表す可能補語〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉を C2 類可能補語（〈C2 类可能补语〉）とし、その特徴について、次のように記述する。〈C2 类可能补语前的动词或形容词也以单音节的为多。…能带 C2 类可能补语的形容词是有限的，多是口语中常用的、表示人所能控制的状态的。（刘月华他 2001:593-594）〉（C2 類可能補語の前の動詞或いは形容詞も、単音節のものが多い。…C2 類可能補語を取ることができる形容詞にも制限がある。その多くは話し言葉で良く用いるもので、人がコントロールできる状態を表す。）

(112) 那 推 针 的 手，轻 不 得、 重 不 得、 慢 不 得、 快 不 得。

あの 押す 針 ASSOC 手 軽い-NEG-DE$_{permi}$ 重い-NEG- DE$_{permi}$ 遅い-NEG- DE$_{permi}$ 速い-NEG- DE$_{permi}$

（刘月华他 2001:593③）

「あの針を押し動かす手は、軽くても、重くても、遅くても、速くてもいけない。」

(112) は、形容詞〈轻: 軽い〉、〈重: 重い〉、〈慢: 遅い〉及び〈快: 速い〉が〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の先行述語であり、「針を押し動かす手」の様子や速度の描写を行っている。ここでは、動作主体がその動作を意図的に制御できるということが含意されているため、確かに、各々の形容詞が表す重さや速さも自由に制御できると言えるであろう。つまり、たとえ形容詞であっても、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉に先行する場合は、必ず動作性が含意され、意志性及び制御性を有した述語として解釈されるということが重要である。また、3.3.2 節でも述べたが、この制御可能性とは、対象となる事態が動作主体の意志によって制御できるか否かを表す意味特徴であり、意志性に含意される概念である。そのため、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、典型的には意志を表す述語が先行すると言えよう。

3.4.1.2. 文の構文的特徴

不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、「対象/場所…（+ 動作主体） + 動作動詞-不得」というような、主題-評言を基本とする有題文となる。

(113) “大叔， 这 个 也 放 不 得！” 淑娴 气 愤 地 指 着 冯寡妇。

おじさん これ CL も 放つ-NEG-DE$_{permi}$ 淑嫻 怒り 噴く DE 指す DUR 馮寡婦

（CCL: 冯德英《迎春花》）

「『おじさん、これも放ってはいけない』と、淑嫻が馮寡婦を指して怒っている。」

(113) の〈这个: これ〉は、動詞〈放: 放す〉との文法関係を考えると対象を表す要素であり、本来であれば目的語位置に置かれるはずである。しかし、(113) ではそれが主題位置（文頭）に置かれていることが分かる。この例においては、中国語の基本語順である「動作主体+ V 不得 + 対象」から、目的語位置の対象名詞句が左方転移 (left dislocation) したものであるとは考えない。なぜなら、不許可の意味を表す場合、〈V 不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、決して「動作主体 + V 不得 + 対象」とはならないからである。この点に関しては、以下で詳述

する。

(114) a. #穿 不　得　这 双 鞋。

履く-NEG-DE$_{permi}$　この CL 靴

「彼はこの靴を履いてはいけない。」

b. 这 双 鞋 穿 不 得。

この CL 靴　履く-NEG-DE$_{permi}$

「この靴は（彼が）履いてはいけない。」

(114a) は、「(動作主+）V 不得 + 対象」の語順となっており、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が不可能ではなく不許可の意味を表すと仮定した場合、その文の容認度は非常に低くなる。それに対して、(114b) のように、動詞〈穿: 着る〉の対象である〈这双鞋: この靴〉を文頭に置き、所謂主題-評言としたとき、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が不許可の意味として成立する。この現象とは対照的に、不可能を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉の場合、2.3.1.3 節でも論じたように、その構文は (115) のように「(動作主体+）V 不了 + 対象」、及びその目的語位置にある対象名詞句を左方転移した構文の両方で成立する。

(115) a. 穿 不　了　　这 双 鞋。

履く-NEG-LIAO$_{poten}$　この CL 靴

「この靴を履くことができない。」

b. 这 双 鞋 穿 不 了。

この CL 靴　履く-NEG-LIAO$_{poten}$

「この靴は履くことはできない。」

ここで、(115b) のような「対象 + V 不得」(〈这双鞋穿不了: この靴を履いてはいけない〉) という主題-評言を、可能を表す主語-述語からの派生であるとして捉えることもできる。但し、普通話においては、可能の意味を表す〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉に取って替わられたため、ここでは〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉として話を進める。つまり、

(115a) のような可能を表す「V 不了 + 対象」(〈穿不了这双鞋: この靴を履くことはできない〉) から対象である〈这双鞋: この靴〉が文頭へ移動して、主題化したとも原理的には考えることができるが、3.3 節で論じた通り、不可能と不許可は、遂行表現か否かという点を始め、現れ得る特徴が異なるため、本研究では両者を異なる意味範疇に属すると考える。よって、不許可の意味において成立する主題-評言を可能の意味を表す主語-述語からの派生形であるとは考えない。

また、主題としての要素が、前文等に現れ、〈動作動詞-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉を含む文では、その主題が文中に現れる要素としては省略されることも多々ある。

(116) 所以 这 种 蛋 也 称 “拙蛋”， 说是 小孩子 吃 不 得，

だから この CL 卵 も 呼ぶ 『稚拙な卵』 と言われている 子供 食べる-NEG-DE$_{permi}$

吃 了 书 念 不 好。 (CCL:汪曾祺《鸡鸭名家》)

食べる PERF 本 読む NEG 良い

「よってこの種の卵は『稚拙な卵』とも呼ばれており、子供は食べてはいけない、食べると勉強ができなくなると言われている。」

(116) は、〈小孩子吃不得: 子供が食べてはいけない〉の中の成分である〈小孩子: 子供〉及び〈吃不得: 食べてはいけない〉が主語-述語（動作主体-動詞）の関係であり、全体で評言として機能している。それに対応する主題は、前文の〈这种蛋: この種の卵〉である。本来、〈这种蛋: この種の卵〉は、述語〈吃不得: 食べてはいけない〉とは、対象という文法関係を結んでいる。

更に、主題には場所等の他の要素が現れる場合もある。(117) の例は、〈那种地方: あの種の場所〉が主題であり、〈去不得: 行ってはいけない〉が評言である。

(117) “那 种 地方 是 去 不 得 的，他们 有 打手，

あの CL 場所 COP 行く-NEG-DE$_{permi}$ NOM 彼ら いる 手下

去 了 就 必须 进货，…”（CCL:《1994 年报刊精选 10》）

行く PERF 正に 必ず~しなければならない 仕入れる

「『あの種の場所には行ってはいけない。彼らには手下がいて、行けば必ず商品を仕入れなければならなく、…』」

以上、考察したように、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、主題-評言を基本とする有題文となり、主題には述語との文法関係において、対象や場所といった成分が現れ得ることが明らかとなった。

3.4.2. 不許可

3.4.2 節では、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の意味的特徴について考察する。ここでは、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が、主題の属性・性質に対する判断を行う表現であるということを主張する。これは、不許可が必ず主題-評言を取る有題文として成立することに関連している。更に、先行研究において可能を表す用法との比較・対照で、「事態の実現性」及び「悪い結果」という特徴が論じられてきたが、両者が不許可という意味のみを特徴付けるものではないことを主張する。

3.4.2.1 節では、主題の属性・性質を描写するという機能について指摘し、3.4.2.2 節では、「事態の実現性」及び「悪い結果」という特徴と不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の関係について論じる。

3.4.2.1. 主題の属性・性質

〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が表す不許可の意味は、遂行的意味を含意するということを 3.3 節で論じた。このように、不許可という意味範疇は、行為の遂行を求める表現であると言える。しかし、それに併せて、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は主題の属性・性質に対する判断を行う機能を有する、所謂属性叙述文に近い表現であることを主張する。このように、主題の属性・性質に対する判断を表すというのは、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が主題-評言という特徴を取ることと連動して説明され得ることを論じる。

再度、上で挙げた例を取り上げて説明する。(118a) は〈这种蛋: この種の卵〉が主題、〈小孩子吃不得: 子供が食べてはいけない〉が評言、(118b) は〈那种地方: あの種の場所〉が主題、〈去不得: 行ってはいけない〉が評言となっていることを 3.4.1.2 節で考察した。

(118) a. 所以　这 种 蛋 也 称　“拙蛋”，　说是　　小孩子　吃　不　得，

だから この CL 卵　も 呼ぶ 『稚拙な卵』 と言われている　子供　食べる-NEG-DE$_{permi}$

吃　了　书 念　不　好。（CCL:汪曾祺《鸡鸭名家》）

食べる PERF 本 読む NEG 良い

「よってこの種の卵は『稚拙な卵』とも呼ばれており、子供は食べてはいけない、食べると勉強ができなくなると言われている。」

b. “那 种 地方 是　去 不　得　　的，他们　有 打手，

あの CL　場所 COP 行く-NEG-DE$_{permi}$　NOM　彼ら　いる　手下

去　了　就　必须　　进货，…”（CCL:《1994 年报刊精选 10》）

行く PERF　正に 必ず~しなければならない 仕入れる

「あの種の場所には行ってはいけない。彼らには手下がいて、行けば必ず商品を仕入れなければならなく、…」

つまり、主題である〈这种蛋: この種の卵〉及び〈那种地方: あの種の場所〉が話題を設定し、それに対しての説明として〈小孩子吃不得: 子供が食べてはいけない〉及び〈去不得: 行ってはいけない〉ということを述べている。つまり、主題である〈这种蛋: この種の卵〉及び〈那种地方: あの種の場所〉の性質を描写していると言える。このような特徴より、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が表す不許可の意味では、聞き手に対して、直接的に動作の不許可を指示することは難しい。

(119) a. *出去！再　也　回来　不　得!

出て行く 再び　も　戻ってくる-NEG-DE$_{permi}$

「出て行け。もう二度と戻って来るな。」

b. 出去！再　也　不要　　回来!

出て行く 再び も　NEG AUX(するな)　戻ってくる

「出て行け。もう二度と戻って来るな。」

(119a) ように、遂行的意味が前面に出た用法では、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉を用いることは

できない。(119a) を正しく言うならば、法助動詞である〈不要: するな〉（或いは〈別: するな〉）を用いて、(119b) のように表現される。つまり、このような相手に対して、動作行為を直接的に阻止する表現は、主題-評言では表しにくいためであると考えられる。

ここまでの議論では、主題を「文頭に立ち、1 文の中で説明がなされる対象」という観点から考察した。しかし、事柄の既知或いは未知という点に着目した新情報及び旧情報といった見方も情報構造の一つとして見做される。これは、一文を超えて談話、テキストのレベルでの議論に拡張される。この観点に立つと、主題は「前提とされている情報」というように規定され、次のような見方となる。

(120) 杨过道："那 情花 何等 美丽，结 的 果实 却 这麽 难看。"
あの 情花 なんと 美しい 結ぶ NOM 果実 のに こんなにも 醜い

「『あの情花はすごく美しいのに、結んだ実はこんなにも醜い』と楊過は言った。」

女郎道："情花 的 果实 是 吃 不 得 的， 有的 酸， 有的 辣，
情花 ASSOC 果実 COP 食べる-NEG-DE$_{permi}$ NOM あるもの 酸っぱい あるもの 辛い
有的 更加 臭气 难闻， 中 人 欲 呕。"
あるもの ますます 臭気 嫌な臭い CAUS 人 したい 吐く

「『情花の実は食べてはいけない。酸っぱいものもあるし、辛いものもあるし、更に臭くて、吐き気をもよおすものもある』と若い女性は言った。」

（CCL: 金庸《神雕侠侣》）

(120) の〈情花的果实是吃不得的: 情花の果実は食べてはいけない〉という文では、〈情花的果实: 情花の実〉が主題、〈吃不得: 食べてはいけない〉が評言となっている。また、情報構造においても、〈情花: 情花〉及び〈果实: 果実〉が先行文脈で話題となっており、主題である〈情花的果实: 情花の果実〉が「前提とされている情報」を提示している。つまり、前文の〈杨过: 楊過〉が「情花とはなんと美しいのだろう」というように、〈情花: 情花〉の話題を既に提示している。それに対して、次の女郎の〈情花的果实是吃不得的: 情花の果実は食べてはいけない〉という発話があり、ここで〈情花: 情花〉は旧情報として主題位置に現れている。

しかし、「前提とされている情報」と、新情報及び旧情報というレベルでの主題というこ

とが合わない現象もある。

(121) 他　叹　　了　口气：“喝　酒 我　不 在乎，　什么样　的　酒 我 都　喝，
彼 溜息をつく PERF　息　　飲む 酒　私 NEG 気に掛ける どのような ASSOC 酒　私 全部 飲む
可是，喝　茶 我 一向　很　讲究，冷茶　是 万万　喝　不 得　的，
しかし 飲む お茶　私 平素から とても 重んじる 冷たいお茶 COP 絶対に 飲む-NEG-DE$_{permi}$ NOM
要 我　喝　冷茶，　我　宁可　　喝　毒 酒。”（CCL:古龙《英雄无泪》）
もし 私 飲む 冷たいお茶　私 した方が良い 飲む　毒 酒

「彼は溜息をついて『私は酒を飲むことについては気にかけない、どんな酒でも飲む。しかしお茶を飲むことについては平素からずっとこだわりがあって、冷たいお茶は絶対に飲んではいけない（飲まないようにしている）。冷たいお茶を飲むなら、毒入りの酒を飲むほうがましだ』と言った。」

(121) の〈冷茶是万万喝不得的: 冷たいお茶は絶対に飲んではいけない〉というのは、〈冷茶: 冷たいお茶〉が主題で、〈喝不得: 飲んではいけない〉が評言である。しかし、先行文脈で話題となっているのは「（酒やお茶を）飲む」ということであり、「前提とされている情報」は〈喝不得: 飲んではいけない〉であり、〈冷茶: 冷たいお茶〉は新しい情報であると言える。このように、文レベルでの主題がすべて旧情報となるわけではないという点については、既に指摘されている（堀川 2009:80-81 参照）。

以上の議論より、本研究では、主題を「文頭に立ち、1 文の中で説明がなされる対象」という観点からの考察し、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が表す不許可の意味は、主題の属性及び性質を描写するという属性叙述文に近い表現であることを論じた。これは、3.3 節で論じた弱い義務ということと同等のこととして捉えることができる。

3.4.2.2. 事態の実現と悪い結果

本研究では、不可能という意味範疇と不許可という意味範疇は、根本的には異なる意味範疇であると考えてきた。しかし、可能補語が表す不可能と不許可の共通性を「先行述語の事態の実現に関する肯定或いは否定を行う（李宗江 1994:376）」という点に求めようとする議論がある。この議論における両意味範疇の相違に関しては、可能はある条件を備えているか否かを前提とするのに対して、不許可は動作が実現することで悪い結果が起こると

いうことを前提とするというように、前提とする状況の相違という点で論じる[70]。そこで、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉に関して、事態が実現するか否か、即ち「事態の実現性」及び「悪い結果」という特徴について、不許可を規定するのに、或いは不許可と可能の共通点と相違点を捉えるのに十分な特徴ではないということを論じる。つまり、事態の実現性は、可能補語が表す結果事態を肯定･否定するという特徴によるもので、他の可能補語が表す意味においても共通する特徴であり、悪い結果のようにどのような状況を前提とするかということについても、状況によっては他の可能性もあり得ることを指摘する。

まず、事態の実現性という観点に関して、これは不可能及び不許可を表す〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉のみの特徴ではなく、意味の漂白化が進んだ可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉が有する特徴でもあると言える。例えば、可能を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉((122a) の例)、蓋然性を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉((122b) の例)、更に不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉((122c) の例）に関しても、先行述語の事態の実現性を問題にしていると言える。

(122) a. 穿 不 了　　这 双 鞋。

履く-NEG-LIAO$_{poten}$　この CL 靴

「彼はこの靴を履くことができない。」

b. 即使　　中国公司　应诉，　也　赢 不 了。(CCL:《1994 年报刊精选 9》)

たとえ~でも 中国 会社 起訴に応じる も 勝つ-NEG-LIAO$_{prob}$

「たとえ中国の会社が起訴に応じても、勝つ可能性はない。」

c. 搁 不 了　　这么　多 油。

入れる-NEG-LIAO$_{necess}$ こんなにも 多い 油

「こんなに多くの油を入れる必要はない。」(《中国语补语例解》p.184)

(122a) は「靴を履く」、(122b) は「勝つ」、(122c) は「こんなにも多くの油を入れる」とい

[70] 普通話において〈-得/-不得: DE$_{permi}$ / -NEG-DE$_{permi}$〉は、可能の意味を表さなくなったことを 2.3.1.1 節で論じたが、李宗江 (1994) では、中古以前、唐、宋、元、清代の中国語も扱い、〈-得/-不得: DE$_{permi}$ / -NEG-DE$_{permi}$〉における可能と許可の意味を比較･対照する形で論じている。

う事態に対する実現性の否定を表している。つまり、先行述語が表す事態の実現性というのは、〈-不得: -NEG-DE〉が表す不可能及び不許可のみの特徴ではなく、意味の漂白化が進んだ可能補語に通して見られる特徴であると言える[71]。

事態の実現性というのは、本質的には可能補語の結果性に言及、即ち結果事象を肯定･否定するという特徴から現れるものであると考えられる。典型的な可能補語は、〈V 得/不 C〉という語の並びを反映し、補語 (C) が表す結果の実現性を問題にする。それに対して、語彙的意味の漂白化が進んだ〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、表面的な意味としては、先行述語が表す事態の実現性を述べるようになる。よって、この先行述語の事態の実現性を表すという特徴は、可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉を通して見られる特徴であり、意味として、可能と許可を表す場合にのみ共通に現れる特徴とは言えない。

次に、「悪い結果」というのは、李宗江 (1994) によれば、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE_{permi}〉の特徴であり、不可能と不許可を分けるものとして捉えられている。次の例文を用いて、悪い結果について説明する。

(123) 木棉树　那里　太　　危险，　去　不　得。（李宗江 1994:376(20)）

キワタノキ あそこ ひどく 危険である 行く-NEG-DE_{permi}

「キワタノキの辺りは危険だから、行ってはいけない。」

(123) は、「キワタノキの辺りは危険である」ため、〈去不得: 行ってはいけない〉というのは不許可の意味を表している。更に、もしもそこへ行ったら恐ろしい結果が起こる可能性があるという意味が含意されているということが指摘されている。このように、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE_{permi}〉において、もしも先行述語が表す動作行為を行えば、悪い結果が現れるという意味を表すという指摘は、妥当であると思われる。しかし、この悪い結果の含意という特徴を捉えて、不可能と不許可を分ける基準とすることには無理がある。その理由について、もう一例、李宗江 (1994:376) の例を取り上げて、説明する。

[71] 但し、推断を表す〈-不了: -NEG-$LIAO_{deduc}$〉のみは、性質形容詞を先行述語とするため、事態の実現として捉えることはできない。

(124) a. 车　上 人　太　多，挤 得 我 动　不 得。（李宗江 1994:376(17)）

車　の上 人 とても 多い 混む DE 私 動く-NEG-DE$_{poten}$

「車上はとても人が多く、混んでいて、私は動くことができない」

b. 咱们　是 埋伏 在 敌人 的　　眼皮底下，　可　　万万　动　不 得。

我々　COP　潜む　に　敵　ASSOC　　すぐ目の前 くれぐれも 決して　動く-NEG-DE$_{perm}$

（李宗江 1994:376(18)）

「我々は敵のすぐ目の前に潜んでおり、くれぐれも動いてはいけない。」

(124a) は可能の例であり、(124b) は不許可の例である。(124a) の〈动不得: 動けない〉の前提となっているのは、「車の中はとても人が多いため」という事態であるのに対して、(124b) の〈动不得: 動いてはいけない〉の前提となっているのは、文中には明示されていないが、「（もしも動くと、）何か悪い結果が起こるため」という状況であると李宗江 (1994) では指摘されている。この議論において、特に不許可を表す場合、どの状況が前提となっているのかという点を指摘することは、実は非常に困難であると思われる。なぜならば、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の場合でも、条件となる事態（〈咱们是埋伏在敌人的眼皮底下: 我々は敵のすぐ目の前に潜んでおり〉）が、可能の場合と同様、文中に要素として表されるからである。

(125) “你　不要　　出去，外面　更　危险。 你　去　不 得!”

あなた NEG AUX(するな) 出て行く　外 いっそう 危険だ　あなた 行く-NEG-DE$_{permi}$

瑞珏 差不多　带　了　哭声　来　阻止　他。（CCL:巴金《家》）

瑞珏 ほとんど 帯びる PERF　泣き声　来る　阻止する 彼

「『出掛けないでよ。外はもっと危険よ。出て行ってはいけない!』と瑞珏はほとんど泣きそうな声で彼を止めた。」

つまり、(125) は〈去不得: 出て行ってはいけない〉という不許可の要因として、〈外面更危险:外はもっと危険だから〉という事態が条件として明示されている。それに加えて、李宗江 (1994) で指摘されているように、「（出て行ったたら、）何か悪いことが起こる」という悪い結果が想定されていることは十分に考えられるものの、「外が危険である」という条件

と「悪い状況となる」ということのどちらが〈去不得:出て行ってはいけない〉という事態の前提として機能しているのかは、容易に特定することは難しい。また、可能を表す〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の例でも、次の (126) のように、〈说: 話す〉或いは〈唱: 歌う〉ことによっての悪い結果が明示されている例もある

(126)《树王》 中　的　那 棵 巨　树 就　正 是　这 造化　的 象征：

『樹王』　の中 ASSOC あの CL 大きい 木 正に 丁度 COP この 自然 ASSOC 象徴

“我 生平　从未　　见　过　这样　　的　大树，一时 竟 脑子　空空如洗…

私 生涯 まだ~したことがない 会う EXP このような ASSOC 大木 しばらく 全部 頭 からっぽでなにもない

枉　生 一 张嘴，<u>说　不　得</u>，<u>唱　不　得</u>，倘若　发音，必如　野兽　一般。”

無駄に ある 1 口を開く 話す-NEG-DE$_{poten}$ 歌う-NEG-DE$_{poten}$ もしも 発音する 恐らく 野獣 のようだ

（CCL:《读书 vol.98》）

「『樹王』の中のあの巨大な木は、正に大自然の象徴である: 『私は生涯このような大木を見たことがなく、しばらく頭のなかが空っぽになり…口があっても上手く伝わらず、話すことも、歌うこともできなかった。もしも声を発しても、必ず野獣のようになっただろう。」

この例は、「もしも声を発したら、必ず野獣のようになる」ため、「話すことも、歌うこともできない」というように、悪い結果を条件とした文としても解釈することができる。

李宗江 (1994) が指摘するように、特に不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、悪い結果が起こるという意味が含意されやすいという傾向があり、また不可能と不許可の前提とする事態として、前者はある条件であり、後者は悪い結果であるというのも一定の傾向として存在すると考えられるが、そこにはある種のゆれも見受けられる。そこで、本研究では、3.3 節で明示した両者の相違に専ら従って、不可能と不許可は基本的には別の意味範疇であるとして捉えることとする。

3.5. 不必要を表す〈-不了〉

3.5 節では、可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉が不必要の意味を表す場合の文法的、構文的特徴、或いは意味的特徴について論じる。〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉における不必要と

いう意味特徴は、従来指摘されることはなかった。それは、先行動詞の種類や文法的特徴を考察すると、非常に限られた環境でのみ現れる意味特徴であるということもあり、その特徴が見過ごされてきたのかもしれない。まずは、具体例を以下に挙げる。

(127) 搁　不 了　　这么　多 油。

入れる-NEG-LIAO$_{necess}$ こんなにも 多い 油

「こんなに多くの油を入れる必要はない。」(《中国语补语例解》p.184)

(127) の〈搁不了: 入れる必要はない〉の〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉が不必要の意味を表す義務的モダリティであると考える根拠は、3.3 節で考察したように、話し手の聞き手に対する行為遂行的な表現となっているためである。

また、不必要の意味を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は、文法的或いは構文的にも意味的にも非常に制限された環境に現れると言える。たとえば、先行動詞は、モノの使用・消費を表す動詞に限られ、目的語位置の要素には必ず数量を表す表現が含まれる必要がある。また、必ず主題-評言という有題文となり、動作主体が主語位置に現れることができない。意味的には、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉同様、主題-評言を取るという共通性からも分かる通り、主題の属性・性質を表す表現となっている。

そこで、以下の議論では、3.5.1 節で、先行動詞の種類や数量表現との共起、更には主題-評言或いは主語-述語となるか否かといった側面において議論を行い、3.5.2 節では、これらの諸特徴に連動する形で、意味的な特徴についての考察を行う。

3.5.1. 不必要を表す〈-不了〉の諸特徴

3.5.1 節では、不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉の諸特徴について論じる。具体的には、不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は、モノの使用・消費を表す先行動詞に限られ、目的語位置に数量を表す表現が必ず置かれる。更に、主題-評言という有題文の形を取るという特徴のもとで成立することを主張する。

そこで、3.5.1.1 節では先行述語の特徴について、3.5.1.2 節では文法的特徴、3.5.1.3 節では構文的特徴についての記述・分析を行う。

3.5.1.1. 使用･消費を表す動詞

不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉に先行する述語は、可能を表す〈-得了/不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉及び不許可の〈不得: -NEG-DE$_{permi}$〉と同様、基本的に意志性を含意した動詞が用いられる。

(128) 搁　不 了　　这么　多 油。

入れる-NEG-LIAO$_{necess}$ こんなにも 多い 油

「こんなに多くの油を入れる必要はない。」(《中国语补语例解》p.184)

しかし、たとえ動作性や意志性が含意されている状況であっても、不許可の〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉のように形容詞が先行述語に現れることはない。また、〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉が不必要の意味を表す場合の先行動詞は、本研究での調査の範囲では、〈搁: 入れる〉、〈花: 使う，消費する〉や〈费: 費やす〉のように、モノの使用･消費を表す動詞に限られ、CCL コーパスにおいても、その用例数は非常に少ないと言える。例えば、〈吃: 食べる〉や〈坐: 座る〉など典型的な動作行為を表す動詞では、不必要の意味を表すことはできない。

(129) a. #吃　不 了　　这么　多 东西。

食べる-NEG-LIAO$_{necess}$ こんなにも 多い 物

「そんなにも多くのものを食べる必要はない」

b. 不　用　　吃　　这么　多 东西。

NEG AUX(必要だ) 食べる こんなにも 多い 物

「そんなに多くのものを食べる必要はない」

c. 我　吃　饱　了，　吃　不　了　　这么　多 东西。

私 食べる 満腹な PERF　食べる-NEG-LIAO$_{necess}$ こんなにも 多い 物

「私は満腹で、そんなに多くのものを食べきれない。」

(130) a. #坐　不　了　　这么　长 时间。

座る-NEG-LIAO$_{necess}$ こんなにも 長い 時間

「そんなに長い時間座っている必要はない。」

b. 不　用　　坐　　这么　　长 时间。

NEG AUX(必要だ) 座る　こんなにも 長い 時間

「そんなに長い時間座っている必要はない。」

c. 这 孩子 只　有 四个月，坐　不　了　　这么　长　时间。

この 子供 ただ ある 4ヶ月　　座る-NEG-LIAO$_{necess}$ こんなにも 長い　時間

「この子はまだ 4 ヶ月で、そんなに長い時間座っていられない。」

(129a) 及び (130a) の〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は、不必要の意味を表すことを意図した例である。しかし、〈吃不了: 食べる必要はない〉及び〈坐不了: 座る必要はない〉では不必要の意味としては用いることができない。同じ状況で不必要の意味を表すには、法助動詞〈不用: する必要はない〉を用いて〈不用吃: 食べる必要はない〉(129b) 及び〈不用坐: 座る必要はない〉(130b) とする必要がある。それに対して、〈吃不了〉(129a) 及び〈坐不了〉(130a) の表す意味は、状況を併せると「食べきれない」(129c) 及び「座っていられない」(130c)というようになる。

そこで、本節で扱う動詞は、モノの使用・消費を表す〈搁: 入れる〉、〈花: 使う，消費する〉及び〈费:費やす〉に限ることとする。

3.5.1.2. 文法的特徴

不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉の文法的な特徴として、数量表現が目的語位置に必ず現れるという点が挙げられる。

(131) 事实上 第一期 的 文章 和 插图 大部分 是 他 自己 搞 的，

事実上 第一期 ASSOC 文章 と イラスト 大部分 COP 彼 自身 する NOM

照片 和 稿费 一共 还 花 不 了 2000 元，印刷费 也 只 需 6000 元。

写真 と 原稿料 併せて まだ 費やす-NEG-LIAO$_{necess}$ 2000 元 印刷費 も ただ 必要とする 6000 元

（CCL:《读者(合订本)》）

「実際、第一期の文章とイラストのほとんどは、彼自身が書いたもので、写真と原稿料併せて 2000 元も費やす必要はない、印刷費もたったの 6000 元である。」

目的語にくる要素として、具体的には、(128) の〈这么多油: こんなにも多い油〉のように、指示代詞〈这么: こんなにも〉、量を表す形容詞〈多: 多い〉及び名詞〈油: 油〉という語や (131) のように〈2000 元: 2000 元〉という数量表現が用いられている。つまり、目的語位置の要素には、必ず数量表現が必要であると言える。もしも、目的語要素から数量表現を取り除くと、その文は、(132) の例にあるように、〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は不必要の意味としては成立しなくなる。

(132) a. ??照片 和 稿费 一共 还 花 不 了 钱。

写真 と 原稿料 併せて まだ 費やす-NEG-LIAO$_{necess}$ お金

「写真と原稿料併せて金を費やす必要はない。」

b. ??搁 不 了 油。

入れる-NEG-LIAO$_{necess}$ 油

「油を入れる必要はない。」

(132a) は〈钱: お金〉、(132b)は〈油: 油〉というように、目的語要素から数量表現を除くと、その文は成立し難くなる。つまり、不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉には、数量を表す成分が目的語位置に必ず表されている必要があると言える。

以上のように、〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉が表す不必要の意味は、先行動詞の性質においても、また目的語位置に現れる要素においても非常に制限された条件において現れると言える。

3.5.1.3. 文の構文的特徴

不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉も、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉と同様に、主題-評言という有題文を基本とする。(133) では、油が入れられる対象である〈这个菜: この料理〉が主題となり、その解説として〈搁不了这么多油: こんなにも油を入れる必要はない〉という事態が評言となっている。

(133) 这 个 菜　搁　不 了　　这么　多 油。

この CL 料理　入れる-NEG-LIAO$_{necess}$ こんなにも 多い 油

「この料理には、こんなに多くの油を入れる必要はない。」

それに対して、〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は、(134) のように、先行動詞〈搁: 入れる〉の動作主体である〈你: あなた〉を主語として、無題文に持ち込むことは非常に困難であると言える。

(134) ?? 你　搁　不 了　　这么　多 油。

あなた　入れる-NEG-LIAO$_{necess}$ こんなにも 多い 油

「あなたはこんなにも多くの油を入れる必要はない。」

また、目的語位置に現れる要素（(133)では〈这么多油: こんなにも多くの油〉）を左方転移により、主題位置に移動した構文も取ることはできない。

(135) ?? 这么　多　油　搁　不 了。

こんなにも 多い 油　入れる-NEG-LIAO$_{necess}$

「こんなに多くの油は入れる必要はない。」

よって、不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は、主題-評言を基本とする有題文として成立すると言えよう。また、目的語位置に現れる名詞句は、左方転移によって主題位置に移動させることはできない。このように、不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は非常に制限された構文的特徴を取ることが分かる。

3.5.2. 不必要

3.5.2 節では、不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉の意味的特徴について論じる。不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉と同様、主題の属性･性質に対する判断を行っている。また、必ず主題に立つ名詞句の許容量や価値を考慮すると、程度を超えているという「過度」の意味を表す。これは、数量表現が現れるという点に関連していることを論じる。

そこで、3.5.2.1 節では、主題の属性･性質を描写するという機能について論じ、3.5.2.2 節では、不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉と過度の意味との関係について論じることとする。

3.5.2.1. 主題の属性･性質

3.5.1.3 節では、不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉が主題-評言という有題文として成立することを論じた。これは、先に論じた不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が表すのと同様、主題の属性･性質に対する判断を行っているということを主張する。

(136) a. 事实上 第一期 的 文章 和 插图 大部分 是 他 自己 搞 的，

事実上 第一期 ASSOC 文章 と イラスト 大部分 COP 彼 自身 する NOM

照片 和 稿费 一共 还 花 不 了 2000 元，印刷费 也 只 需 6000 元。

写真 と 原稿料 併せて まだ 費やす-NEG-LIAO$_{necess}$ 2000 元 印刷費 も ただ 必要とする 6000 元

（CCL:《读者(合订本)》）

「実際、第一期の文章とイラストのほとんどは、彼自身が書いたもので、写真と原稿料併せて 2000 元も費やす必要はない、印刷費もたったの 6000 元である。」

b. 可 无论如何 花 不 了 那 许多 钱，

しかし どうしても 支払う-NEG-LIAO$_{necess}$ あんな 多い お金

无非 两 道 菜： 素粉汤 和 肉粉汤。（CCL:《插队的故事》）

にすぎない 2 CL 料理 素粉スープ と 肉粉スープ

「しかし、どうあってもそんなにお金を支払う必要はない、2 つの料理に過ぎない: 素粉スープと肉粉スープ」

(136a) は〈照片和稿费: 写真と原稿料〉が主題となっており、それらに対して「2000 元も費やす必要がない」という主題の性質を表している。また、(136b) は評言である〈花不了那许多钱: そんなにも多くのお金を費やす必要はない〉に対する主題である〈素粉汤和肉粉汤: 素粉スープと肉粉スープ〉は文頭にはなく、コロン (:) の後ろに位置するという構文をとっているが、これも (136a) と同様に、主題に対する性質を表していると言える。つまり、両者は、主題の属性・性質を表す表現であると言える。これは (134) で見たように、動作主体を主語とした文では成立しにくいことからも予測される。以下、(134) で提示した例文を、(137) として再度取り上げる。

(137) ?? 你 搁 不 了 这么 多 油。

あなた 入れる-NEG-LIAO$_{necess}$ こんなにも 多い 油

「あなたはこんなにも多くの油を入れる必要はない。」

更に、ある状況において、聞き手に対してその行為が必要でないことを、直接的に指摘する表現としても成立しにくい。

(138) ??这个 菜 就是 要 清淡，你 搁 不 了 这么 多 油。

これ CL 料理 どうしても AUX(必要だ) 薄い あなた 入れる-NEG-LIAO$_{necess}$ こんなにも 多い 油

「この料理は薄口である必要がるため、そんなに油を入れなくてもいい。」

このように、〈这个菜就是要清淡: この料理は薄口でなければならない〉という節を挿入して、聞き手である動作主体の行為を強調した場合、不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉を用いることができない。これも〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉が主題成分の属性・性質を表しているということから推測することができる。つまり、人の直接的な行為に対しては、〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉で表現することは難しい。

3.5.2.2. 過度

不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は、目的語に立つ名詞句に数量表現が必ず含まれることを、3.5.1.2 節で論じた。そこで、数量表現が付加されることから「過度」という意味的特徴が得られることを指摘する。この特徴は、典型的な可能補語である〈-得了/-不了:

-DE-終わる/-NEG-終わる〉が結果の実現性の意味を表す場合と類似性があるという視点から論じる。再度、例を挙げて説明する。

(139) 照片 和 稿费 一共 还 花 不 了 2000 元，印刷费 也 只 需 6000 元。

写真 と 原稿料 併せて まだ 費やす-NEG-LIAO$_{necess}$ 2000 元 印刷費 も ただ 必要とする 6000 元

（CCL:《读者(合订本)》）

「写真と原稿料併せて 2000 元も費やす必要はない、印刷費もたったの 6000 元である。」

(139) は、「2000 元も費やさなくてもよい」という意味を表している。このように、数量を表す要素が付加されることによって、主題に立つ〈照片和稿费: 写真と原稿料〉が、その許容量や価値を考慮すると、程度を超えているという意味を表している。この程度を超えているという意味特徴を、本研究では、「過度」と呼ぶこととする。

この不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉の諸特徴は、結果の実現性を表す典型的な可能補語である〈-得了/-不了: -DE-終わる/-NEG-終わる〉の文法的特徴及び意味的特徴と類似していると言える。文法的な類似性は、数量表現を取るという点であり、意味的な類似性は、過度という意味が現れるという点である。

(140) 我 吃 不 了 这么 多 菜。

私 食べる-NEG-終了する こんなにも 多い 料理

「私はこんなにも多くの料理を食べきれない。」

(140) のように典型的な可能補語である〈-不了: -NEG-終わる〉においても、数量表現(〈这么多: こんなにも多くの〉)が付加すると、過度の意味が現れる。

つまり、この過度の意味というのは、義務的モダリティの不必要の意味を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉のみの意味特徴ではなく、可能の意味を表す場合においても類似した現象が見られると言える。

3.6. まとめ

本章では、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉と不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉

という義務的モダリティを表す形式について論じた。両形式は、主に主題-評言という有題文を取り、その主題に現れる要素の性質や属性について述べるという点で共通した特徴を有する。また、両者とも否定形式のみで用いられる。そこで、3.6 節では、本章の総括として、両形式の意味的特徴を簡潔に提示し、更に文法的、構文的特徴を再度まとめる。その上で、先行研究との関連で、特に問題とした議論についても簡潔にまとめる。

まず、意味的特徴として、両形式の意味を各々簡潔にまとめると次のようになる。不許可を表す〈-不得: -NEG-DE_{permi}〉は、「主題に立つ要素の性質として、評言で表される事態が許されない」ということを表し、不必要を表す〈-不了: -NEG-$LIAO_{necess}$〉は「主題に立つ要素の性質として、評言で表される事態が必要でない」ということを表すと記述することができる。3.3 節で可能用法との相違でも述べたように、義務的モダリティは、遂行的であるという点で、不可能とは区別できる。この機能から、義務的モダリティの範疇にある不許可や不必要という意味は、話し手から聞き手に対して直接的に動作を指示することができそうであるが、この〈-不得: -NEG-DE_{permi}〉及び〈-不了: -NEG-$LIAO_{necess}$〉では、動作の直接的な指示は極めて困難であり、主題要素の性質を述べるという点が非常に重要な特徴の一つである。

次に、両者の文法的或いは構文的特徴をまとめる。

（表 15） 可能を表す〈-得了/-不了〉及び〈-不得〉の諸特徴

		不許可: 〈-不得〉	不必要: 〈-不了〉
先行述語	種類	動作動詞	動作動詞の中の使用･消費を表す動詞
	意味素性	意志性	意志性
構文的特徴		有題文	有題文
文法的特徴		―	数量表現の目的語位置への付加

不許可を表す〈-不得: -NEG-DE_{permi}〉は動作動詞を先行述語に取り、不必要を表す〈-不了: -NEG-$LIAO_{necess}$〉は動作動詞の中でも特に使用･消費を表す動詞を先行述語に取る。また、特に不必要を表す〈-不了: -NEG-$LIAO_{necess}$〉は、数量表現を必ず目的語位置に取らなければならないという制約がある。このように、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE_{permi}〉については、先行述語が意志性を有する動作動詞であれば成立するというように、その制約は非常に緩

やかであるのに対して、不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は先行述語が主に使用・消費を表す動詞に限られ、数量表現が必須であるというように、非常に制限された環境でしか成立しないことが分かった。

最後に、先行研究の分析・記述との関連で、特に問題として取り上げた点をまとめる。先行研究では、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、先行述語の「事態の実現性」と「悪い結果」の含意という点において、主に特徴付けられてきた。それに対して、本研究では、事態の実現性は、文法化した〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉で表される意味に共通した特徴であることを述べ、更に悪い結果の含意に関しては、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉に現れるという一定の傾向は見られるものの、必要条件ではないことを論じた。

第四章　認識的モダリティを表す〈-不了〉

4.1. 研究の背景

本章では、蓋然性及び推断という認識的モダリティ (epistemic modality) に属する〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob/deduc}$〉を取り上げる。この認識的モダリティに入る用法は、義務的モダリティと同様、否定形式でしか使用されないため、考察の範囲も否定形式のみとする。

認識的モダリティを表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob/deduc}$〉は、先行述語として非意志的 (non-volitional) な述語を取るという点で共通している。その中で、蓋然性の意味を表す場合は、非意志性に加えて非継続的 (non-durative) な素性を有する非継続性動詞（〈非继续性动词〉）[72]、一方、推断の意味を表す場合は、非意志性に加えて継続的 (durative) な素性を有する静態形容詞を先行述語として取るという特徴がある。先行述語の意味素性と可能補語が表す意味の関係を以下の表にまとめた上で、各々の具体例を (141) 及び (142) に提示する。

（表 16） 認識的モダリティ: 先行述語の意味素性と可能補語の意味範疇

先行述語		可能補語	
意味素性	述語の種類	形式	意味範疇
非意志性 非継続性	非継続動詞	〈 -不　了 〉 -NEG-LIAO$_{prob}$	蓋然性
非意志性 継続性	静態形容詞	〈 -不　了 〉 -NEG-LIAO$_{deduc}$	推断

(141) 他　那么　　大　　了，　丢　　不　了。（CCL:老舍《龙须沟》）

彼 あんなに　大きい　PERF　迷子になる-NEG-LIAO$_{prob}$

「彼はあんなにも大きいのだから、迷子になる可能性はない。」

[72] 非継続性を有する述語として動態形容詞（変化形容詞）があるが、本研究では、この動態形容詞を扱わず、今後の課題としたい。

(142) 真　　的　假　不　了，　　假　　的　真　不　了。（吕叔湘 1999:367）

本物だ NOM 偽物だ-NEG-LIAO$_{deduc}$ 偽物だ NOM 本物だ-NEG-LIAO$_{deduc}$

「本物は偽物ではるはずはなく、偽物は本物であるはずはない。」

(141) は〈丢不了: 迷子になる可能性はない〉という表現から、事態が起こる蓋然性に対する否定を表していることが分かる。一方、(142) では、〈真: 本物だ〉と〈假: 偽物だ〉という対義語を用いて、「本物であるということは併せて偽物ではないということを含意し、逆に偽物であるということは併せて本物ではないということ」を含意する客観的な事実を基にして、話し手は論理的な推論を行っている文であると言える。

蓋然性を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は、主に先行述語の非継続性 ([-durative]) という意味素性が、その意味の成立に関わっていることが先行研究において指摘されてきた。しかし、本研究では、主に文の構文的特徴や、文中において〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が用いられる位置に着目して、記述分析を行った結果、当該形式は、文中での位置、または現れる文の事態の実現性、即ち未実現事態か既実現事態かによって、蓋然性の意味が現れるか否かが決定されることを主張する。具体的には、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が最もよく現れる文中での位置は、仮定や譲歩という仮定的な事態を表す主従複文の主節位置である。この場合、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉には蓋然性の意味が読み込まれやすい。また、用例数としては少ないが、主従複文の従属節位置にも、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は現れ、この場合は蓋然性の意味が認められない。更に、因果複文や逆接複文といった事実的な事態を表す主従複文の主節位置にも現れ得るが、この場合、主節が表す事態が未実現か既実現かによって、蓋然性の意味が読み込まれるか否かが異なる。つまり、既実現の事態の場合には蓋然性の意味が読み込まれず、未実現の事態の場合には読み込まれやすいことを論じる。

推断を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は、静態形容詞を先行述語とする形式として、先行研究においても、その意味的特徴の記述並びに分析が行われてきた。この形式における従来の研究では、一貫して、〈-不了: -NEG-LIAO〉は推測の意味を表すとされており、近年では認識的意味 (epistemic meaning) というモダリティ論に引き付ける形でも捉え直されてきた。しかし、本研究では実例調査に基づき、その構文及び文法的特徴を明らかにし、詳細な分析を行った結果、当該形式の中核的意味は、何らかの徴候が特定され、その徴候を基に推し量ったことを断定的に述べる推断の表現であることを主張する。それは、〈静態形容

詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉が、数量表現の有無という特徴によって、否定を受ける形容詞の意味解釈が異なり、その意味的観点より、数量表現が後続する場合は「様態」に偏り、数量表現が後続しない場合は「論理的推論」に偏るという点によって裏付けられる。

本章の構成として、まず、4.2 節では認識的モダリティの規定について、特に本研究が拠って立つモダリティ論の立場を明らかにすることを通して論じる。その上で、4.3 節では蓋然性を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉について取り上げ、4.4 節では推断を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉について取り上げる。最後に、4.5 節で本章の議論及び主張をまとめる。

4.2. 認識的モダリティ

4.2 節では、本研究における認識的モダリティの捉え方と、本研究で扱う形式が表す認識的な意味について説明を行う。認識的モダリティにおける認識 (epistemic) とは、ギリシア語の 'knowledge' （知識, 認識）を意味する語に由来する (Lyons1977:793 参照)。先に 3.1 節で述べたように、本研究におけるモダリティは、発話時における話し手の対命題的・対聞き手的態度、即ち発話現場的行為の意味のことである。認識的モダリティの例としては、英語の法助動詞の 'may' や 'must' がよく取り上げられる。ここでは Ziegeler (2006:262) で挙げられている例を取り上げ、説明を行う。

(143) He may/must be smoking outside.　(Ziegeler2006:262) (2)

「彼は外で煙草を吸っているだろう/に違いない。」

(143) は、「彼が外で煙草を吸っている」という命題に対して、話し手が評価・判断を下す、或いは真実性に対する知識の程度を述べる表現となっている。ここから、法助動詞は話し手の存在を取り上げ、話し手による認識的な判断を指定していることが分かる。

可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob/deduc}$〉が表す認識的モダリティは、蓋然性 (probability) 及び推断 (deduction) である。蓋然性を表す場合は先行述語が非意志的及び非継続的な素性を有するのに対して、推断を表す場合の先行述語は非意志的及び継続的な素性を有するという相違がある。まず、蓋然性及び推断という意味について論じる。

蓋然性とは、命題の確からしさを断定的に述べる表現であると規定する。表される事態としては、先行動詞が非継続的、つまり変化を表し、主に否定形式で成立するため、変化

が起こらないということの確からしさを話し手が述べる表現となる。

推断とは、何らかの徴候が特定され、その徴候を基に話し手が推し量ったことを断定的に述べる表現であると規定する。ここでは、徴候の特定ということが、ある程度明確に行われる[73]。この徴候とは、仁田 (1989:44) におけるモダリティの議論の中で提出された術語である。仁田 (1989) では、徴候について、「視覚や聴覚などで捉えられる明確に外界に存在するものだけではなく、内的感覚や気配といったものであってもよい（仁田 1989:44）」としている。本研究においても、基本的には仁田 (1989) で規定された意味で徴候という術語を用いることとする。実際の発話において、何かを推測する場合、話し手は何らかの根拠や事実に基づいて述べていることが多い。つまり、推測表現一般において必ず徴候が、明示的或いは暗示的に含意されていると見ることもできる。その意味では、上に挙げた蓋然性においても、確からしさを述べる上での何らかの徴候が存在していると見るのが自然である。しかし、推断においては、徴候を特定するという点に重点が置かれているという側面があり、徴候が文の要素としてもしばしば指定されるため、定義の中に徴候の特定という点を加えたのである。

〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob/deduc}$〉が表す蓋然性及び推断には、話し手の断定的な態度が現れるという点で共通している。これは可能補語が表す認識的モダリティの特徴であると言える。中国語には法助動詞も存在し、可能補語がモダリティ的な意味の大半を表す必要もなく、この断定的態度の表れが可能補語の表す認識的意味に課せられたものでると言えよう。このことより、可能補語の意味のシフトにおける文法化現象等の観点から分析も可能であると思われるが、本研究ではこれら全てを明らかにすることはできない。

---

[73] 本研究で推断とした形式は、福田 (2011b) では証拠性 (evidentiality) として規定した。この証拠性とは、しばしばモダリティ論の中で議論される概念であるが、その概念規定は、研究者によって一様ではない。福田 (2011b) では、証拠性の定義を Chafe (1986) による広義 (broadest sense) の証拠性の定義である、“…I am using the term ‘evidentiality’ in its broadest sense, not restricting it to the expression of ‘evidence’ per se…this broad interpretation of evidentiality involves attitude toward knowledge. (Chafe1986:262)”（「証拠性」という術語を広義の意味で使用しており、それは「証拠」それ自体の表現に制限されるものではない。…この証拠性の広義の解釈は知識に対する態度を含意する。）という点に求めて議論を展開した。しかし、Chafe (1986) の広義の証拠性に対立して、批判的な議論として Palmar (2001) 及び Aikhenvald (2003,2004) 等がある。特に Aikhenvald (2004:5 note1) における記述を簡潔にまとめると、広義の意味での証拠性は様々なモダリティ形式並びにそれに類似する意味等をも包括してしまい、証拠性モダリティと他のモダリティの境界を明確に規定できないため問題があるとしている。よって、本研究では、術語における混乱を避けるため、証拠性という定義を改め、「推断」(deduction) として議論を展開する。

以上、認識的モダリティについて、可能補語〈-不了: -NEG-LIAO〉が表す諸特徴を明らかにした。

4.3. 蓋然性を表す〈-不了〉

4.3 節では、蓋然性 (probability) を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉における文法的或いは構文的特徴及び意味的特徴について論じる。そこで、扱う形式の具体例を以下に提示する。

(144) 他　那么　　大　　了，　丢　不　　了。(CCL:老舍《龙须沟》)

　　彼 あんなに　大きい　PERF　見失う-NEG-LIAO$_{prob}$

「彼はあんなにも大きいのだから、見失う可能性はない。」

(144) は「彼は大きい」という条件により、「彼を見失う」という事態は実現する可能性はないということを表している。これは、先行動詞に〈丢: 見失う〉という非意志的 (non-volitional)、非継続的 (non-durative) な動詞を有するという特徴が見られる。また、事態に対する実現性の確からしさとしての蓋然性の意味解釈が現れていると言える。

このような蓋然性の意味特徴が現れる要因として、先行動詞の非継続性、つまり変化の意味が大きく関わっていると、荒川 (2008) で指摘されている。厳密には、荒川 (2008) における意味記述では「可能性、未来に傾く（荒川 2008:129)」というように記述されているが、本研究における蓋然性とほぼ同等の意味であると考えることができる。

このように、先行動詞の意味素性が、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の表す蓋然性の意味に関係していることは間違いのない事実であろう。しかし、本研究では、それに加えて〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が用いられる文中での位置、及び事態が表す実現性に着目し、それらが〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の蓋然性の意味の含意の有無にも影響を与えていることを論じる。

本研究で言う蓋然性とは、事態を可能性或いは必然性があるものとして認識的に捉える表現であり、次のように定義することとする（4.2 節でも論じた)。

(145) 蓋然性: 命題の確からしさを断定的に述べる表現。

本節の構成として、4.3.1 節では、先行述語の種類や有題文となるか否か、或いは文法的

な側面の記述、分析を進め、4.3.2 節で主に意味的な特徴の考察を行うこととする。

4.3.1. 蓋然性を表す〈-不了〉の諸特徴

4.3.1 節では、蓋然性を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の先行述語の特徴や文の構文的特徴、或いは文法的な特徴について取り上げる。蓋然性の意味を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は、非継続的で非意志的な意味素性の動詞を取るという点が最大の特徴である。また蓋然性を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は、無題文としても、有題文としても成立する。更に、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が用いられる文中における位置として、主に主従複文における主節位置に多く現れやすい。このような文中での位置も〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が表す蓋然性の意味の含意に深く関わっていることを論じる。

そこで、4.3.1.1 節では、蓋然性の意味を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の先行述語を記述し、4.3.1.2 節では、文の構文的特徴を提示する。更に、4.3.1.3 節では、主に複文という状況での〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の文中における位置について考察する。

4.3.1.1. 非継続性動詞の種類

〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が蓋然性を表す場合、先行述語は非意志的及び非継続的な動詞となる。この動詞が有する意味素性の特徴は、非意志性（[-volitional]）及び非継続性（[-durative]）である。以下の議論では、これを非継続非意志動詞と呼ぶこととする。

このような動詞は、動作の結果・状態の継続を表す〈-着: DUR〉と共起しない動詞（〈死 si:死ぬ〉,〈丢 diu:失う〉,〈完 wan:終わる〉,〈断 duan:切れる〉等）であり、中国語の動詞の体系の中では、数が非常に少ない（马庆株 1981:86 参照）。このような動詞を先行動詞に持つ〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は、蓋然性の意味を表し（荒川 2008 では「可能性」と記述されている）、荒川 (2008:129) では、次のような動詞が挙げられている。

(146)〈非継続非意志動詞-不了〉

到不了 (到着する-NEG-LIAO$_{prob}$)	丢不了 (失う-NEG-LIAO$_{prob}$)
要不了 (欲する-NEG-LIAO$_{prob}$)	免不了 (避ける-NEG-LIAO$_{prob}$)
忘不了 (忘れる-NEG-LIAO$_{prob}$)	赢不了 (勝つ-NEG-LIAO$_{prob}$)

本研究では、主にこの荒川 (2008) で挙げられた動詞を用いて、議論を行うこととする。

4.3.1.2. 文の構文的特徴

蓋然性を表す〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が有する文は、無題文と有題文の両方で成り立つ。まず、無題文を取り上げる。(147a) は位置変化対象である〈他: 彼〉が主語位置に置かれ、着点である〈古城监狱: 古城の監獄〉が目的語位置に置かれており、また、(147b) では〈赢: 勝つ〉の主体である〈你: あなた〉が主語位置に置かれている。更に、(147c) の主語は省略されているが〈我们: 私達〉であり、目的語位置には対象である〈东西: 物〉が用いられている。

(147) a. 说不定　他　根本 就　到　不　了　古城 监狱。(CCL:张平《十面埋伏》)

かもしれない　彼　全く 丁度　到着する-NEG-LIAO$_{prob}$　古城　監獄

「ひょっとすると彼は古城の監獄に到着する可能性はないかもしれない。」

b. 这 块 地　该　怎么　使用，批　给 谁，都　是 政府　的 权力，

これ CL 土地 すべき どのように 使用する　売る　に 誰　全て　COP 政府 ASSOC 権利

你　阻拦 没有 理由，官司　打 到 哪儿，你　都　赢　不　了。

あなた 阻止する ない　理由　控訴　する に　どこ　あなた 全て 勝つ-NEG-LIAO$_{prob}$

(CCL:《1994 年报刊精选》)

「この土地はどのように使用し、誰に売るのか、全ては政府の権利であり、あなたが阻止する理由はなく、控訴をどこにしても、あなたには勝つ可能性はない。」

c. 我们 要是 在 家，还　丢　不　了　东西 呢？(CCL: 老舍《西望长安》)

私達　もし いる 家　やはり 失う-NEG-LIAO$_{prob}$ 物　Q

「もし私達が家にいるなら、物を失う可能性はないでしょう。」

また、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は、次の例のように、主題化することもできる。

(148) 反正 交通　那么 拥挤，车 也　丢　不　了。（CCL: 姚明《我的世界我的梦》）

どうせ　交通 こんなに 混む　　車　も 失う-NEG-LIAO$_{prob}$

「どうせ交通がこんなにも混雑しているのだから、車は見失う可能性もない。」

(148) は本来目的語位置にある〈车: 車〉が、左方転移により、主題として機能していると言える。

〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は、主語-述語を基本とする無題文でも、主題化を伴った有題文としても成立することを指摘した。

4.3.1.3. 〈非継続非意志動詞-不了〉が現れる文中の位置

この蓋然性を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が最もよく現れる文中における位置として、主従複文の主節位置が挙げられる。そこで、まずはこの主従複文という点に着目して、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が現れる文中での位置について考察すると、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は仮定節或いは譲歩節の主節位置に現れる頻度が最も高いことが分かった。次の文がその典型的な例である。

(149) 即使　　中国公司　应诉，　也　赢　不　了。（CCL:《1994 年报刊精选 9》）

たとえ~でも 中国 会社 起訴に応じる も 勝つ-NEG-LIAO$_{prob}$

「たとえ中国の会社が起訴に応じても、勝つ可能性はない。」

(149) は、〈即使:たとえ~でも〉という仮定を表す接続詞が用いられ、仮定条件を表している主従複文である。その主節位置に〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉を伴う述語〈赢不了: 勝つ可能性がない〉が用いられており、蓋然性の意味を表している。

そこで、本節では、非継続性及び非意志性という意味素性を持つ非継続非意志動詞に続く〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉と、一般的な動作行為動詞、つまり意志性を有する動詞に続く〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉が現れる文中での位置における頻度を明らかにする。動作動詞が先行する〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、2.3 節で考察した通り、可能の意味を表す。

この調査では、CCL コーパスを用いて、主体の意志性及び継続性を含意する動作動詞（以下［$V_{+vol/+dur}$］と提示する）と、変化を含意し非意志的な事態を表す非継続非意志動詞（以

下 [$V_{-vol/-dur}$] と提示する）をコーパスより収集した[74]。その用例として、前者は、〈吃: 食べる，跑: 走る，动: 動く〉、後者は〈到: 到着する，丢: 失う，赢: 勝つ〉の各 3 例ずつを代表として抽出した[75]。その具体的な用例数をまとめると、（表 17）のようになる。

（表 17） CCL から収集した〈動作動詞-不了〉及び〈非継続非意志動詞-不了〉の用例数

〈動作動詞-不了〉	〈吃不了〉	〈跑不了〉	〈动不了〉	合計
	142例	58例	145例	345例
〈非継続非意志動詞-不了〉	〈到不了〉	〈丢不了〉	〈赢不了〉	合計
	206例	34例	83例	323例

（表 17）から分かるように、動作動詞が先行する〈-不了: -NEG-$LIAO_{poten}$〉の用例数は合計 345 例、非継続非意志動詞が先行する際の用例数は合計 323 例収集することができた。

このデータを用いて、以下で主張することは、非継続非意志動詞が先行する〈-不了: -NEG-$LIAO_{prob}$〉は、主従複文の主節位置に生起しやすく、特に仮定的な事態を表す仮定複文及び譲歩複文に多いということである。具体的には、4.3.1.3.1 節では主従複文の主節位置での〈-不了: -NEG-$LIAO_{prob}$〉の生起について、4.3.1.3.2 節では主従複文の種類と主節における〈-不了: -NEG-$LIAO_{prob}$〉の使用頻度について、更に 4.3.1.3.3 節では主従複文における位置とその使用頻度について考察を行う。

4.3.1.3.1. 主従複文の主節位置での生起

動作動詞が先行する〈-不了: -NEG-$LIAO_{poten}$〉及び非継続非意志動詞が先行する〈-不了:

[74]北京大学汉语语言学研究中心《CCL 语料库》の〈现代汉语〉（現代中国語）より 2010 年 8-10 月に用例を収集した。(http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai)

[75] 中国語の動詞の中には、意志的な解釈と非意志的な解釈の両者を有することが多く、本研究で扱う動詞もその例外ではない。例えば、〈到〉は本来「到着する，達する」という意味で用いられ、非意志的事態を表す。〈从北京坐两个小时的飞机就到上海。: 北京から 2 時間飛行機に乗ると上海に着く。〉それに対して、〈到〉は意志性を含意して、「行く，来る」という意味でも用いられる。〈你到过上海吗?: 君は上海へ行ったことがありますか。〉また、本来意志的事態を表す〈吃〉は、「食べる、生活する、飲む」等の意味を表すが、〈吃苦头:つらい目に合う〉、〈吃耳光:ビンタを食らう〉のように，「受ける，食らう」という非意志的事態をも表し得る。しかし、ここでは〈吃: 食べる、跑: 走る、动: 動く〉については継続意志動詞として、一方〈到: 到着する、丢: 失う、赢: 勝つ〉については非意志的な非継続非意志動詞として用いられているもののみを対象とする。

-NEG-LIAO$_{prob}$〉の主従複文における使用頻度[76]を集計した。

主従複文とは、従属関係 (subordination)[77] を介在し、異なる統語的状況 (syntactic status) にある二つ、乃至それ以上の節が結合する文のことを言い、要素同士が同等の価値にある等位結合 (co-ordinate linkage) から区別される。その関係の中で従属的な位置にある従属節 (subordinate clause) は、上位節 (superordinate clause) 或いは主節 (main clause) と対立を成す。また、従属接続詞 (subordinating conjunction, subordinator) を有するのが典型的であるが、中国語の場合、頻繁に明示されないことがある。

（表 18）は、〈動作動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉及び〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が主従複文の主節或いは従属節中に用いられた用例の頻度である。

（表 18）〈動作動詞-不了〉及び〈非継続非意志動詞-不了〉の複文での使用頻度[78]

[動作動詞-不了]			[非継続非意志動詞-不了]		
	頻度	比率		頻度	比率
吃得/不了	35/142	24.6%	到得/不了	114/206	55.3%
动得/不了	17/145	11.7%	丢得/不了	15/34	44.1%
跑得/不了	5/58	8.6%	赢得/不了	39 /83	47.0%
Total	57/345	16.5%	Total	168/323	52.0%

（表 18）より、〈動作動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉の場合（合計: 16.5%）より、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の場合（合計: 52.0%）の方がより複文での使用頻度が高いことが明らかである。また、先行動詞別に見ても、すべての非継続非意志動詞が先行する可能補語で、動作動詞が先行する可能補語に比べて、主節での生起頻度が高いことが分か

[76] 柴崎 (2005:48-53) では、日本語の補文標識「と」が補文動詞（「と思う」等)を伴わずに現れる現象を複文を成す副詞節における使用頻度を基に分析を行っており、「補文標識『と』が補文動詞を省略して証拠表示化するのは特定の談話構造に起因している（柴崎 2005:47)」としている。中国語においても、本研究が扱う非継続動詞が先行する〈-得/不了〉は、複文中での振る舞いが柴崎氏の指摘した日本語の証拠表示化した「と」と振る舞いが類似しており、そこから着想を得ている。

[77] 従属関係 (subordination) の記述に関して、Crystal (2003) の以下の記述を参考にしている。“(A term used in GRAMMATICAL analysis to refer to the process or result of linking LINGUISTIC UNITS so that they have different SYNTACTIC status, one being dependent upon the other, and usually a constituent of the other; subordinate is sometimes contrasted with SUPERORDINATE. (Crystal2003: 443)”（ある要素が他の要素に従属する、または他の要素を大抵構成するという、異なる統語的地位を有すために、その言語学的な要素を結合する過程或いは結果に言及する文法学的な分析で使用される。従属節は、しばしば上位節と対立を成す。）

[78] 〈吃不了兜着走:自分の責任だとあきらめて後の結果をすべて引き受ける〉、〈吃不了亏（吃亏）: 損をする〉、〈吃不了苦（吃苦）: 苦労する〉等のイディオム的な表現は扱わない。

る。これは、可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten/prob}$〉の意味の対立は、先行動詞の意志性及び変化性に加えて、主従複文での生起頻度という点においても何らかの関連性があることが見て取れる。

4.3.1.3.2. 主従複文の種類と主節における〈-不了〉の使用頻度

次に、主従複文の中でも、どのような種類の主従複文で〈動作動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉及び〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が、どのくらい使用されているのかという観点で考察を行う。そこで、まずは主従複文の種類について概観する。

まず、本研究で扱う主従複文は、因果関係を表すタイプに限り、因果関係を表さないものは考察対象としない。因果関係を表さない主な主従複文として、中国語学では〈目的复句: 目的複文〉というタイプがある。目的複文とは、次のような例である。

(150) a. 老赵 尽力 使 车子 跑 得 平稳， 以便 总指挥 睡 得 安宁。

趙さん 全力で CAUS 車 走る DE 穏やかだ ように 総指揮官 眠る DE 安らかだ

（张斌 2010:668）

「総司令官が安らかに眠れるように、趙さんは全力を尽くして車を静かに走らせた。」

b. 当晚，主人 为了 照顾 我们 的 疲劳，

その夜 主人 ために 配慮する 我々 ASSOC 疲れ

很 快 就 引 我们 到 一户 农家 安歇 去 了。（张斌 2010:668）

とても 急ぐ すぐ 案内する 我々 到着する 1 CL 農家 休む 行く SFP

「その夜、主人は私たちの疲れを気遣って、急いで我々を一軒の農家に連れて行き休ませてくれた。」

(150) は、従属節で動作行為を提示し、主節で達成すべき目的を説明している。このような複文には、従属節と主節の間に因果関係は存在しない。中国語で目的複文の代表的な文の特徴として、(150a) のような〈Q, 以便 P: P するために、Q する〉や、(150b) のような〈为了 P, Q: P のために、Q する〉等がある[79]。

一方、因果関係を表す複文には、〈假设复句: 仮定複文〉、〈条件复句: 条件複文〉、〈让步

[79] 従属節に当たる前件を P、主節にあたる後件を Q と表示する。

复句: 讓步複文〉、〈因果复句: 因果複文〉及び〈转折复句: 逆接複文〉がある。これらは全て、前件と後件の間に因果関係があり、「仮定的-事実的」或いは「順接的-逆接的」という基準を用いて、4 つのタイプに分類することができる。

（表 19）「仮定的-事実的」及び「順接的-逆接的」と複文の種類

仮定的	順接的	〈假设复句: 仮定複文〉〈条件复句: 条件複文〉
	逆接的	〈让步复句: 讓步複文〉
事実的	順接的	〈因果复句: 因果複文〉
	逆接的	〈转折复句: 逆接複文〉

仮定的とは空想上或いは創造上の事態を表すのに対して、事実的とは現実世界に起こった、或いは起こり得る事態を表す。また、順接的とは前件 (P) が真であるときには後件 (Q) も真であることを表し、逆接的とは前件が真のとき後件が偽である関係を表す。次に、この 5 つのタイプの複文について、张斌 (2010) を参考にして、その説明を以下に取り上げる。

(151) 仮定的･順接的:

a. 〈假设复句: 仮定複文〉

偏句提出假设，正句说明由此产生的结果。（张斌 2010:674）

「従属節で虚構を提示し、主節でそこから生じた結果を説明する。」

b. 〈条件复句: 条件複文〉

偏句提出一种条件，正句说明满足这种条件所产生的结果。（张斌 2010:669）

「従属節である条件を提示し、主節でこの種の条件を満たして生じた結果を説明する。」

(152) 仮定的・逆接的: 〈让步复句: 讓步複文〉

让步复句是指偏句先退让一步，正句说明在这种让步条件下所产生的结果。

（张斌 2010:686）

「讓步複文は、従属節が先に一歩退き、主節がこの種の讓步条件の下で生じた結果を説明することを指す。」

(153) 事実的・順接的: 〈因果复句: 因果複文〉

偏句说明原因，正句说明结果，分句间存在原因和结果关系的复句。张斌(2010:665)

「従属節は原因を説明し、主節は結果を説明し、節の間に原理と結果の関係が存在する複文である。」

(154) 事実的・逆接的: 〈转折复句: 逆接複文〉

偏句 p 先说一个意思，正句不是顺着 p 的趋势说$\bar{q}$，而是转向了另一个相反或相对的方向 q。（张斌 2010:679）

「従属節 p が先にある内容を述べ、主節が p の成り行きに沿って$\bar{q}$のことではなく、別の相反する或いは相対する方向である q に転じる。」

以上の観点より、〈動作動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉と〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の主従複文の主節位置における用例を集計すると次の表のような結果となる。

（表 20）主従複文の種類と主節位置に現れる〈動作動詞-不了〉及び〈非継続非意志動詞-不了〉頻度[80]

			［動作動詞-不了］		［非継続非意志動詞-不了］		合計	
仮定的		仮定節・条件節	頻度数	%	頻度数	%	頻度数	%
	順接的	マーカーなし	2	3.5%	5	8.8%	7	4.4%
		如果…(的话)…就(也)…	2	3.5%	12	21.1%	14	8.8%
		要是…就(也)…	1	1.8%	9	15.8%	10	6.3%
		倘(假)若…就(也)…	2	3.5%	2	3.5%	4	2.5%
		否则…就…	1	1.8%	12	21.1%	13	8.1%
		只有…就…	0	0.0%	1	1.8%	1	0.6%
		无论…, …	0	0.0%	5	8.8%	5	3.1%
		只要…就…	1	1.8%	2	3.5%	3	1.9%
	小計		9	15.8%	48	84.2%	57	35.6%
		譲歩節	頻度数	%	頻度数	%	頻度数	%
	逆接的	マーカーなし	0	0.0%	20	64.5%	20	12.5%
		就算…也…	1	3.2%	3	9.7%	4	2.5%
		即使…也…	0	0.0%	4	12.9%	4	2.5%
		即便…也…	0	0.0%	1	3.2%	1	0.6%
		就是…也…	0	0.0%	2	6.5%	2	1.3%
	小計		1	3.2%	30	96.8%	31	19.4%
事実的		原因節・理由節	頻度数	%	頻度数	%	頻度数	%
	順接	マーカーなし	0	0.0%	11	55.0%	11	6.9%
		因为…所以…	2	10.0%	4	20.0%	6	3.8%
		由于…, …	0	0.0%	1	5.0%	1	0.6%
		…而…	0	0.0%	1	5.0%	1	0.6%
		既然…就…	0	0.0%	1	5.0%	1	0.6%
	小計		2	10.0%	18	90.0%	20	12.5%
		逆接節	頻度数	%	頻度数	%	頻度数	%
	逆接的	マーカーなし	4	7.7%	20	38.5%	24	15.0%
		虽然…但是…	4	7.7%	8	15.4%	12	7.5%
		虽然…可是…	6	11.5%	5	9.6%	11	6.9%
		虽然…不过…	1	1.9%	1	1.9%	2	1.3%
		…而…	0	0.0%	1	1.9%	1	0.6%
		不管…, …	0	0.0%	1	1.9%	1	0.6%
		可…却是…	0	0.0%	1	1.9%	1	0.6%
	小計		15	28.8%	37	71.2%	52	32.5%
合計			27	16.9%	133	83.1%	160	100%

（表 20）より、〈動作動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉も〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉も「仮定的-順接的」、「仮定的-逆接的」、「事実的-順接的」及び「事実的-逆接的」の全ての範疇の主節位置で用いられていることが分かった。その中で、特に〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は仮定的事態の用例が多いと言える。つまり、仮定節・条件節が 66 例、

[80] （表 20）の形式に関しては、柴崎 (2005:52)（表 3）「副詞節の種類と『と』の機能的分布」を参考にした。

譲歩節が 30 例となっている。それに対して、可能の意味を表す〈継続意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉には、そのような傾向は見られない。ここでは、データによる事実のみを指摘するに止め、複文の種類とその頻度、及び〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の意味の関連性に関しては、4.3.2.2 節で改めて論じる。

4.3.1.3.3. 主従複文における位置とその使用頻度

非継続非意志動詞に後続する〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉及び動作動詞に後続する〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は両者とも、主節及び従属節での使用が確認されることが以下の例から分かる。

(155) 〈動作動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉

a.「従属節中に現れる例」

“要是 我 动 不 了 啦,

もし 私 動く-NEG-LIAO SFP

不 能 走 不 能 笑 只 能 吃 喝 睡, …”

NEG AUX(できる) 歩く NEG AUX(できる) 笑う ただ~だけ AUX(できる) 食べる 飲む 寝る

(王朔《永失我爱》)

「もし動けなくなったら、歩けないし、笑えもしない、ただ食べて飲んで寝るだけで、…」

b.「主節中に現れる例」

他们 到处 张望, 想 移动 一下,

彼ら 方々 眺める 思う 移動する 少し

但是 他们 动 不 了。(姚明《我的世界我的梦》)

しかし 彼ら 動く-NEG-LIAO

「彼らはあちこち見渡して、少し移動したいと思ったが、しかし動けない。」

(156) 〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉

a.「従属節中に現れる例」

假若 当时 这 期 杂志 到 不 了 我 手中,

もしも 当時 この CL 雑誌 到着する-NEG-LIAO 私 手中

假若 当时 我 不 曾 对 《母亲的帐单》 感 兴趣…

もしも 当時 私 NEG かつて に対して 母親の勘定書 感じる 興味

幸运 的 是 这 一切 都 没有 发生。(CCL:《读者(合订本)》)

幸運 NOM COP これ 一切の すべて ない 起こる

「もしもあの時雑誌が手に入らなければ、もしもあの時『母の勘定書』に興味を持たなければ、…幸いにも全て起こることはなかった。」

b.「主節中に現れる例」

我 要是 被 他们 的 意见 左右，就 到 不 了 今天 的 位置。

私 もしも PAS 彼ら ASSOC 意見 左右する 正に 到着する-NEG-LIAO$_{prob}$ 今日 ASSOC 地位

(CCL:《1994 年人民日报》)

「もしも私が彼らの意見に左右されていたなら、今日の地位はなかっただろう。」

そこで、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉及び〈動作動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉が、各主節及び従属節で用いられる際の使用頻度をまとめると、（表 21）のようになる。

（表 21）可能補語の出現頻度: 従属節位置と主節位置

[動作動詞-不了]			[非継続非意志動詞-不了]		
	従属節	主節		従属節	主節
吃得/不了	24	11	到得/不了	25	89
动得/不了	4	13	丢得/不了	2	13
跑得/不了	2	3	赢得/不了	8	31
合計	30 (52.6%)	27 (47.4%)	合計	35 (20.8%)	133 (79.2%)

（表 21）より、〈動作動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉の主節及び従属節での生起頻度（従 52.6%: 主 47.4%）はほぼ同じであるのに対して、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の生起頻度（従 20.8%:主 79.2%）は、従属節に比べて主節の方が非常に高いと言える。

〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は、主節に対して仮定された状況や事実、原

因等を提示するという役割を担う従属節中にも現れ得る。しかし頻度として、主節位置での出現が際立って高いことが明らかである。

更に、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は、接続詞の有無、緊縮複文での使用率という点でも差が現れる。中国語においては、接続詞を文中に明示しない複文や、緊縮複文という、単文の形をとっているが、意味的には複文となっている文が存在する。次に挙げる (157) が接続詞を用いないで成立している複文であり、(158) が緊縮複文の例である。

(157) 我 死 了， 你 最 好 再 嫁。 (Li&Thompson1997:649)

私 死ぬ PERF あなた 最も 良い 再び 結婚する

「もし私が死んだら、あなたは再び結婚するのが良い。」

(158) 勤奋 才 能 有 出息。 （张斌主编 2010:702）

勤勉である こそ AUX(はずだ) ある 前途

「勤勉であってこそ、前途有望である。」

次に、複文において〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が現れる位置について考察を行う。(159) は、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が主節中に現れる場合（a.接続詞あり、b.接続詞なし、c.緊縮複文）、(160) は〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が従属節中に現れる場合（a.接続詞あり、b.接続詞なし）である。

(159) a. 要是 他 有 什么 二心，

もしも 彼 ある 何か ふた心

你 也 到 不 了 这 个 地方 了。（CCL:《龙枪−兄弟之战》）

あなた も 到着する-NEG-LIAO この CL 場所 SFP

「もしも彼に何かふた心があれば、あなたもあの場所には到着する可能性はなかった。」

b. 东西 卖 不 出 去，钱 到 不 了 手,

物 売る NEG 出る 去る お金 着く-NEG-LIAO 手

想 干 的 事情 没 法 干, …。(CCL:《市场报 1994 年》)

AUX(したい) する NOM 事柄 ない 方法 する

「物が売れなければ、お金は手に入る可能性がなく、やりたいこともやるすべがない…。」

c.（这 个 样子,)两个星期 怎么 也 到 不 了 洞庭湖 呵！

この CL 様子 二週間 どのようにして も 到着する-NEG-LIAO 洞庭湖 SFP

(CCL:方可《中共情报首脑李克农(10)》)

「（この様子では、）二週間では、どうしても洞庭湖に到着する可能性はない。」

(160) a. 万一 东口 的 银 车 到 不 了,

万が一 東口 ASSOC 銀 車 到着する-NEG-LIAO

我 还 另外 借 了 五十万 两 银子！（CCL:《乔家大院》）

私 やはり 別の 借りる PERF 50 万 CL 銀

「万が一東口の銀を運ぶ車が到着しなくても、50 万両の銀を別に借りている。」

b. 我 到 不 了 刑场,

私 到着する-NEG-LIAO 処刑場

你们 有 什么 好 看 的！(CCL:《读者(合订本)》)

あなた達 ある 何か 良い 見る SFP

「私が処刑場に着かなければ、まだ見るものはないでしょう。」

以上の〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉を有する文の特徴を簡略化し、出現頻度をまとめると以下のようになる。

(161) 主節位置での生起頻度

a. 〈$_{従}$[接続詞] 〉, 〔$_{主}$ [V$_{-vol/-dur}$ 得/不了] 〕 77 (46.1%)

b. 〈$_{従}$φ 〉, 〔$_{主}$ [V$_{-vol/-dur}$ 得/不了] 〕 32 (19.2%)

c. 〔$_{主}$ [V$_{-vol/-dur}$ 得/不了] 〕 24 (14.4%)

(162) 従属節位置での生起頻度

a. 〈$_{従}$[接続詞] [$V_{-vol/-dur}$ 得/不了]〉, 〔$_{主}$ 〕 24 (14.4%)

b. 〈$_{従}$φ [$V_{-vol/-dur}$ 得/不了]〉, 〔$_{主}$ 〕 10 (6.0%)

非継続非意志動詞に後続する〈-不了: -NEG-$LIAO_{prob}$〉の成立は、接続詞でマークされる複文の主節に現れる頻度が最も高いことより（(161a)参照）、強い論理関係を有する文の主節位置に現れる傾向が高く、主節位置での生起から従属節での生起へ（(161)から(162)）、また接続詞を有する複文から接続詞を持たない複文、更には緊縮複文へ（(161a)から(161c)、(156a)から(156b)）と頻度が段階的に下がる点が窺える。

4.3.2. 蓋然性

4.3.2 節では、蓋然性を表す〈-不了: -NEG-$LIAO_{prob}$〉の意味的特徴について、4.3.1 節で議論した〈-不了: -NEG-$LIAO_{prob}$〉が用いられる文中での位置との関連性から論じる。これは否定形式においてのみ現れ、「可能性がない」という蓋然性に対する否定を表す。更に、〈-不了: -NEG-$LIAO_{prob}$〉が現れる文中での位置が、主節位置なのか従属節位置なのか等によって、蓋然性の意味を帯びるか或いは帯びないかということが異なる。具体的には、主従複文の主節位置に現れた場合、蓋然性の意味が現れやすく、従属節中に現れた場合は、蓋然性の意味が現れない。また、時間表現を伴った〈到不了: の前に〉という副詞化した形式もあり、そこには話し手の発話現場的な意味は含意されない。

4.3.2.1 節では先行述語の意味素性から蓋然性の意味が現れることが類推されることを論じ、4.3.2.2 節では複文の種類と蓋然性の意味の相関性、4.3.2.3 節では〈-不了: -NEG-$LIAO_{prob}$〉の文中での位置における蓋然性の意味との関連性について、更に 4.3.2.4 節では副詞句として機能する〈到不了 + 時間表現〉について論じる。

4.3.2.1. 先行述語と意味の相関性

〈-不了: -NEG-$LIAO_{prob}$〉が蓋然性という意味特徴を有するのは、先行述語の意味素性の影響を受けていることが、これまでの研究でも指摘されてきた。これまでも述べてきたように、ここで重要となる先行動詞の意味素性とは、非意志性 ([-volitional]) と非継続性 ([-durative]) の 2 つである。次の例で見ると、その 2 つの意味素性が揃っており、「見失う可能性がない」という蓋然性の意味を表している。

(163) 他　那么　　大　　了，　丢　不　了。（CCL:老舍《龙须沟》）

彼 あんなに　大きい　PERF　見失う-NEG-LIAO$_{prob}$

「彼はこんなにも大きいのだから、見失う可能性はない。」

まず、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の意味と先行述語の非意志性の関係に関して、柯理思 (2000:72) では、それが〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の主観化 (subjectification)[81] を決定付ける要因であるとし，可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の文法化を論じ[82]、先行述語の非意志性が話し手の認識的意味 (epistemic meaning) を帯びる根源的な要因であることを主張する。

次に、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の意味と先行述語の非継続性との関係に関して、荒川 (2008) では、非継続性、つまり変化という意味素性の存在により、「『そうなりっこない』という意味（荒川 2008:129）」から「可能性、未来に傾く（荒川 2008:129）」と記述されている。

このような先行述語の意味素性から得られる「~となる可能性はない」という可能性の否定の意味は、裏を返せば、「~とならないはずだ/~とならないにちがいない」という必然性の意味としても解釈することができる。(163) の例で説明すると、「見失う可能性がない」というのは、「見失わないはずだ/見失わないにちがいない」という必然性の側からも解釈することができる。本研究では、この可能性及び必然性を表す意味範疇を蓋然性とし、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が表す意味を「命題の確からしさを断定的に述べる表現」であるとした。

本研究でも、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉と、その先行述語の関係に対する、柯理思氏及び荒川氏の見解を基本的には支持し、それに則って議論を行うが、しかし〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が用いられる文中での位置やその事態が表す実現性によって、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が表す蓋然性の意味を含意する度合いが異なる、或いは蓋然性の意味を含意しないことがあるという点について以下で論じる。

次節では、4.3.1.3 で論じた〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の文中における位置をも考慮して、その意味特徴を詳細に考察する。

---

[81] 主観化 (subjectification) とは、「指示的、命題的意味からメタテキスト的、感情表出的な意味への変化 (proposition > ((textual) > (expressive))) 」を言い、その進展は一方向的 (unidirectional)であることが指摘されてきた(Traugott 1995:31)。

[82] 中国語学では马庆株 (2004:62 (1989)) が法助動詞の意味に関して、無意志動詞に先行する場合は［－主観性］を表し、意志動詞に先行する場合には［±主観性］を表すというように、英語学のそれとは逆の主張を行っているが、本研究では文法化に伴う主観的意味の現れという点に沿った形での議論を採用することとする。

4.3.2.2. 複文の種類と意味の相関性

〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は、主従複文における主節位置に現れる頻度が最も高いことより、主従複文の種類と〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の意味の関連性について論じる。ここでは、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が蓋然性の意味を表すのは、主節が未実現の事態である場合であり、既実現の事態の場合は蓋然性の意味が積極的には見て取れないことを主張する。ここで言う未実現とは、ある事態が現実世界において実現していないことを指し、既実現とは、現実世界においてある事態が既に実現していることを指す。そこで、まずは仮定的な複文と事実的な複文に分けて、以下で論じる。

4.3.1.2 節では、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は仮定的な事態を表す主節位置で最も用いられやすいことが明らかとなった。仮定的な複文である仮定節、条件節及び譲歩節は、従属節が表す前件の事態の真偽が不明という仮定的な事態を表すために、主節も必然的に未実現の事態となりやすい。つまり、話し手の推測や可能性といった認識的な意味が現れやすい環境であると言える。よって、蓋然性の意味を表す〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が現れやすいということとの関連性が窺える。以下で、具体的に例を考察する。

(164) 必须　　在 天 黑　以前　开　过去,

しなければならない に　空 暗い　前　運転する 行く

否则　一夜　开　车　<u>到　不　了</u>　纽约。(CCL:《新华社 2004 年新闻稿》)

さもなくば 一晩 運転する 車　到着する-NEG-LIAO$_{prob}$ ニューヨーク

「暗くなる前に出発しなければ、一晩中運転してもニューヨークに到着する可能性はない。」

(164) は、仮定複文の例であり、接続詞〈否则: さもなくば〉[83]が用いられている。このような複文は、前件が仮定の事態（「暗くなる前に出発しなければ」）を表すことより、それに伴って後件の「一晩中運転してもニューヨークに到着しなくなる」という事態も未実現の事態となる。つまり、この未実現の事態に対しては、話者の認識的な態度が含まれやす

[83] 〈否则: さもなくば〉は、〈选择复句: 選択複文〉、〈条件复句: 条件複文〉、〈假设复句: 仮定複文〉或いは〈转折复句: 逆接複文〉等異なる用法として議論されることがあるが、本研究は、张斌 (2010) の分類に基づいて、〈假设复句: 仮定複文〉に入れて議論することとする。

く、その解釈として、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が表す蓋然性の意味とも適合しやすいとも言えよう。次に、仮定的な複文の例を見る。

(165) 王升 在 我们 和 经国先生 之间 是　扮演　照顾　我们 的　角色，
王昇　で 私達　と 経国さん　の間　COP 役を務める 配慮する 私達　ASSOC　役
如果 这　之间 不　畅通　的话，事情 就　<u>到　不 了</u>　上面 去。
もしも この　の間　NEG 滞りなく通じる　なら　事柄　正に　達する-NEG-LIAO$_{prob}$　先　行く
（CCL:章孝严《章孝严在台忆身世(上)》）
「王昇は私達と経国さんの間で、私達のことを配慮する役割を務めてくれた。もしも私達の間が上手く通じていなければ、事柄が上に伝わらなかっただろう。」

(166) 双喜 回答　说："爸爸 放心。　只要　孩儿 不 阵亡，　大峪谷 决　<u>丢　不　了</u>!"
双喜　答える 言う　父さん 安心する　さえすれば 子供 NEG 戦死する 大峪谷 決して 失う-NEG-LIAO$_{prob}$
（CCL: 姚雪垠《李自成 2》）
「双喜が答えて言うに、『父さん、安心して。僕が戦死しなければ、大峪谷は決して失う可能性はない。』」

(165) は仮定複文、(166) は条件複文の例であり、両者は仮定的であり順接的という点で共通している。また、前件で仮定的な事態を提示し、後件はその結果として起こり得る可能性があるという未実現の事態となっている。更に、次の例は、仮定的な逆接、つまり譲歩複文の例である。

(167) 另一方面，美国　商务部 采用“替代国”价格 处理　　对　　华　反倾销案，

一方　　アメリカ 商務省　採用する 『代替国』 価格　処理する　に対して 中国 反ダンピング案

不公平，也 不合理，中国商品　难免　　倾销　　之名，

不公平　も　不合理　　中国商品　免れない ダンピングする　の名前

即使　　中国 公司　应　诉，也　<u>赢　不　了</u>。

たとえ~としても 中国　会社 応じる 起訴　　も 勝つ-NEG-LIAO$_{prob}$

（CCL:《1994 年报刊精选》）

「一方、アメリカの商務省が『代替国』の価格を採用して中国に対する反ダンピング案を処理しており、それは不公平で、不合理であるが、中国商品はダンピングの名を免れ得ず、たとえ中国の会社が起訴に応じても、勝つ可能性はない。」

譲歩複文も逆接関係を表すだけで、仮定的な事態を前件で提示し、後件では未実現の事態を表すという点で、仮定複文及び条件複文と同じである。つまり、これらの仮定的な事態を前件として提示し、後件では未実現の事態を表すことより、後件である主節に話者の認識的な態度である蓋然性の意味を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が現れやすいということとの相関性が見て取れる。更に次の例は、仮定節と原因節の 2 つの従属節が、主節である〈自然永远到不了吉隆坡: 自然と永遠にクアラルンプールに到着することはない〉を修飾している。

(168) 小坡　不　说 话，自然　永远　<u>到　不　了</u>　　吉隆坡，

坡ちゃん　NEG 言う 話　自然と 永遠に 到着する-NEG-LIAO$_{prob}$ クアラルンプール

因为　只有　他 认识　那 个 地方。（CCL: 老舍《小坡的生日》）

なぜなら ただ~だけ 彼　知る あの CL　場所

「坡ちゃんが何も言わなければ、自然と永遠にクアラルンプールに到着することはない。何故なら彼ただ一人だけがあの場所を知っているから。」

これは、〈小坡不说话: 坡ちゃんが何も言わなければ〉という仮定節に、原因節を含む文が埋め込まれているという関係になっており、全体としては仮定的な事態を表している。よって、主節に用いられている〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉も蓋然性の意味が読み込まれやすいことになる。

次に、事実的な複文であり、前件と後件が順接関係にある因果複文と、逆接関係にある逆接複文について考察する。これらの複文は、前件が事実的な事態を表すが、前件及び後件が実現したか否かという観点で、次のような組み合わせが可能である。そこで、〈因为 P, 所以 Q: P だから、Q である〉という形式を取る因果複文を例として、前件と後件の事態の事実性について取り上げる。

(169) a. 前件: 实现 / 後件: 未実現

因为 儿子 昨天 回来 了，所以 她 要 准备 许多 好 菜。

だから 息子 昨日 帰って来る PERF 従って 彼女 AUX(必要がある) 準備する 多い 良い 料理

「息子が昨日帰ってきたため、彼女はたくさんの料理を用意する。」

b. 前件: 未実現 / 後件: 实現

因为 儿子 可能 回来， 所以 她 一大早 就 准备 了 许多 好 菜。

だから 息子 AUX(可能性がある) 帰って来る 従って 彼女 早朝 正に 準備する PERF 多い 良い 料理

「息子が帰って来るかもしれないから、彼女は明け方からたくさんの料理を用意した。」

c. 前件: 未実現 / 後件: 未実現

因为 儿子可能 回来， 所以 她 要 准备 许多 好 菜。

だから 息子 AUX(可能性がある) 帰って来る 従って 彼女 AUX(必要がある) 準備する 多い 良い 料理

「息子が帰って来るかもしれないから、彼女はたくさんの料理を用意する。」

（张斌 2010:665）

(169a) は原因節である前件が既実現の事態であるのに対して、結果節である後件が未実現の事態となっている。また、(169b) は前件が未実現、後件が既実現、更に (169c) は前件が未実現、後件も未実現の事態となっている。つまり、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は蓋然性の意味を表すということより、原則的には、後件が未実現である (169a) や (169c) の環境で現れやすいことが考えられる。予想通り、たとえ事実的な事態を前件に有する複文であっても、後件が未実現の事態のもとで、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が使われる用例が多く見受けられる。次の例は、因果複文の主節位置で〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が生起する例であり、やはり未実現の事態を表して

いる。

(170) 第二天 雨 大 了。他 一早 就 来 了，说 前面 的 山路 上 出现 了 塌方，

2日目 雨 強い PERF 彼 早朝 正に 来る PERF 言う 前 ASSOC 山道 の上 起こる PERF 地滑り

<u>到 不 了</u> 我 要 去 的 地方 了。下午 再 动身 吧！

到着する-NEG-LIAO$_{prob}$ 私 AUX(したい) 行く NOM 場所 SFP 午後 再び 出発する SFP

（CCL:梁晓声《表弟》）

「2日目は雨が強くなった。彼は朝早くに来て、言うに、前の山道は地滑りが起こったため、私の行きたい場所へは到着する可能性はない。そこで、午後にまた出発しましょう。」

(170) は因果複文の例であり、原因を表す前件である〈前面的山路上出现了塌方: 前の山道は地滑りが起こったため〉は既実現の事態であるが、結果を表す後件〈到不了我要去的地方了: 私の行きたい場所へは到着する可能性はなくなった〉は未実現の事態である。そこで、後件の述語〈到不了: 到着する可能性はない〉には蓋然性の意味を読み込みやすいことが分かる。また、次の逆接複文においても同様、後件の「彼は勝つ可能性はない」は未実現の事態であると言える。

(171) “我 是 想 让 他 赢， 可 他 <u>赢 不 了</u>，

私 COP AUX(したい) CAUS 彼 勝つ しかし 彼 勝つ-NEG-LIAO$_{prob}$

除非 我 不 走 子儿 了，等 着 他 吃。”（CCL: 王朔《过把瘾就死》）

しない限り 私 NEG 移動する 駒 SFP 待つ DUR 彼 食べる

「『私は彼に勝って欲しいが、彼は勝つ可能性はない。何も動かさないで彼が駒を取るのを待つ以外は。』」

つまり、後件が未実現の事態であるがゆえに、蓋然性を表す〈非継続非意志動詞-不了〉が現れやすい環境であると言える。

一方、それに対して、事実的な複文の中で後件が実現した事態を表す文に〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が用いられる例がある。この場合、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉に蓋然性といった意味は読み取れない。

(172) 从 机场　接　回 刘力，我 说　你　现在 是 富人　了，

から 空港　迎える-戻る 劉力　　私 言う あなた 現在 COP 金持ち SFP

可　书生　　的　穷 意气　丢　不 了。

しかし 読書人 ASSOC 貧しい 気概　失う-NEG-LIAO$_{prob}$

（CCL: 忘川《一场不涉及理想的恋爱》）

「飛行場から劉力を迎えて戻ると、あなたは今金持ちになったが、読書人の素朴な気質を失っていないと私は言った。」

(173) 冯教授 介绍　　说，这 个　得分　　属　　中上等 水平，

馮教授　　紹介する 言う　これ CL 点を取る　属する　　中上級　レベル

许多 发达国家 还　　到　不　了　　这 个 水平。

多い　　先進国　　まだ 達する-NEG-LIAO$_{prob}$ これ CL　レベル

（CCL:《1994 年报刊精选》）

「馮教授は、この得点は中上級のレベルに属するが、多くの先進国がこのレベルに達していないことを紹介して言った。」

これらは逆接複文の例であり、(172) は後件の「読書人の素朴な気質を失っていない」というのは主体である〈我: 私〉が認識している事実であり、実現している事態として捉えられている。また、(173) の後件である「多くの先進国がこのレベルに達していない」というのも実現している事態であると言える。つまり、これらの事態には、可能性や必然性という発話現場的な意味が入り込みにくい。

4.3.2.3. 文中における位置と意味の相関性

従属節中に現れる〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の用例数は、相対的に見て、非常に少ないことを論じた。また、仮定的な主従複文及び現実的な主従複文のどちらにおいても、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は現れることができる。このように、用例数は少ないが、存在するという事実より、ここでは、従属節位置に現れる〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉について論じる。4.3.2.3 節における主な主張は、事実として、仮定的な複文であっても従属節に〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が用いられる場合は、蓋然性の意味を帯びることはできないのに対して、事実的な複文である場合は、

従属節であっても未実現の事態を表す際には、蓋然性の意味を帯びることができるということである。これは従属節の文らしさの度合いに関連していることを論じる。

まず、(174) に〈万一: 万が一~だったら〉という接続詞を用いた仮定複文の例を提示する。これは、従属節中に〈到不了: 到着しない〉が現れており、その意味は「東口の銀を運ぶ車が到着する可能性がなくても」という可能性の否定ではなく、「東口の銀を運ぶ車が到着しなくても」というように「到着する」こと自体を否定している。つまり、主節で用いられる〈到不了: 到着する可能性はない〉のように蓋然性の意味を読み込むことはできず、どちらかというと、先行動詞が表す〈到: 到着する〉という事態が実現しないという不可能の意味を表していると言える。

(174) 万一 东口 的 银 车 到 不 了,

万が一 東口 ASSOC 銀 車 到着する-NEG-LIAO$_{poten}$

我 还 另外 借 了 五十 万 两 银子! (CCL:《乔家大院》)

私 やはり 別の 借りる PERF 50 万 CL 銀

「万が一東口の銀を運ぶ車が到着しなくても、50 万両の銀を別に借りている。」

(174) の例にある〈-不了: NEG-LIAO$_{poten}$〉に、「(到着する) 可能性がない」という蓋然性の意味が含まれていないという根拠として、次のような、〈到不了: 到着する-NEG-LIAO$_{poten}$〉を、〈不可能到: 到着する可能性はない〉及び〈无法到: 到着できない〉に言い換えたときの文法性判断という、統語テストが根拠となっている。(175ab) から分かるように、仮定節にある〈到不了: 到着する-NEG-LIAO$_{poten}$〉は、(175b)〈无法到: 到着できない〉と言い換えることはできるが、(175a)〈不可能到: 到着できない〉と言い換えることはできない。

(175) a. ?? 万一 东口 的 银 车 不 可能 到,

万が一 東口 ASSOC 銀 車 NEG AUX(可能性がある) 到着する

我 还 另外 借 了 五十 万 两 银子!

私 やはり 別の 借りる PERF 50 万 CL 銀

「万が一東口の銀を運ぶ車が到着しなくても、50 万両の銀を別に借りている。」

b. 万一 东口 的 银 车 无法 到，

万が一 東口 ASSOC 銀 車 できない 到着する

我 还 另外 借 了 五十 万 两 银子！

私 やはり 別の 借りる PERF 50 万 CL 銀

「万が一東口の銀を運ぶ車が到着しなくても、50 万両の銀を別に借りている。」

(175a) の〈不可能: 可能性がない〉は、ある事態が起こる可能性がないということを表す法助動詞であり、(175b) の〈无法: できない〉は、何らかの状況或いは能力がないために「~する方法がない」、「~できない」という不可能の意味を表す表現である。よって、〈到不了: 到着する-NEG-LIAO$_{poten}$〉は、蓋然性ではなく、先行動詞が表す事態が起こらないという可能に近い意味を表していると言える。更に、もう一例挙げる。

(176) 假若 当时 这 期 杂志 到 不 了 我 手中，

もしも 当時 この CL 雑誌 到着する-NEG-LIAO 私 手中

假若 当时 我 不 曾 对 《母亲的帐单》 感 兴趣…

もしも 当時 私 NEG かつて に対して 母親の勘定書 感じる 興味

幸运 的 是 这 一切 都 没有 发生。(CCL:《读者(合订本)》)

幸運 NOM COP これ 一切の すべて ない 起こる

「もしもあの時雑誌が手に入らなければ、そして、もしもあの時『母の勘定書』に興味を持たなければ、…幸いにもこれら全ては起こることはなかった。」

(176) のように、〈假若: もしも〉という従属節中にある〈到不了: 手に入らない〉は、可能性の意味を読み込んだ「手に入る可能性がなければ」というのではなく、「手に入らなければ」と断定的に解釈する方が自然である。なぜなら、2 文目にある〈《母亲的帐单》:『母の勘定書』〉は、雑誌の中にある一つの記事あるいはその雑誌を表しており、更に、ここでは省略したが、(176) には、〈我认真地读了几遍后，…: 私は真剣に何度か読んだ後、…〉という文が続き、実際に雑誌が手に入っていることが分かるからである。よって、1 文目にある従属節では、雑誌が手に入ったか否かということを問題にしているのであり、手に入る可能性があるか否かを問題にしているわけではないと言えよう。

次に、事実的な事態を表す因果複文の従属節に現れる〈非継続非意志動詞-不了:

-NEG-LIAO$_{prob}$〉であるが、(177) のように、従属節が既実現の事態を表す場合は、勿論〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉に蓋然性の意味は読み込めない。

(177) 他 和 战士们 一起 打 篮球 时，大家 都 不 愿意
彼 と 兵士達 一緒に する バスケットボール のとき みんな 全て NEG 希望する
跟 他 在 一队， 因为 同 他 一起 打 球 总也 赢 不 了。
と 彼 いる 同じチーム だから と 彼 一緒に する ボール いつも 勝つ-NEG-LIAO$_{prob}$
（CCL:《读书》）

「彼と兵士達が一緒にバスケットボールをするとき、皆は彼と同じチームに入ることを望まない。なぜなら彼と一緒にバスケットをして勝てないからだ。」

これは〈因为同他一起打球总也赢不了: なぜなら彼と一緒にバスケットをして勝ったことがないからだ 〉というように既実現の事態を表している。しかし一方で、事実的な因果複文の従属節に〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が用いられるときでも、未実現の事態を表している場合は、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉に蓋然性の意味が現れる。

(178)a. 因为 钥匙 丢 不 了， 所以 我 很 放心。
だから 鍵 失くす-NEG-LIAO$_{prob}$ 従って 私 とても 安心する
「鍵は失くなる可能性がないから、私は安心している。」

b. 因为 钥匙 不 可能 丢， 所以 我 很 放心。
だから 鍵 NEG AUX(可能性がある) 失くす 従って 私 とても 安心する
「鍵は失くなる可能性はないから、私は安心している。」

(178a) の〈丢不了: 失う可能性がない〉の補語〈-不了: NEG-LIAO$_{prob}$〉に蓋然性の意味が現れるという事実は、(178b) の〈不可能丢: 失う可能性がない〉という可能性の意味を表す法助動詞を用いた形式と言い換えられることからも分かる。

以上の議論を簡潔にまとめると次の表のようになる。

（表 22）従属節における〈-不了: NEG-LIAO$_{prob}$〉の蓋然性の含意

複文の種類	〈V 不了〉の位置	事態の実現性の対立	蓋然性の含意
仮定的	従属節	存在しない	なし
事実的	従属節	既実現	なし
	従属節	未実現	あり

（表 22）における要点は、事実的な複文の場合、従属節に現れる〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO〉は、事態が既実現の場合には蓋然性の意味が現れ難く、未実現の場合は現れるという対応を見せるのに対して、仮定的な複文の場合は、仮定･空想的な事態を表し専ら非現実のこととして述べられるのため、事態の実現性の対立は存在しないのにも関わらず、蓋然性の意味が現れないという点である。そこで、この事実に対する原理は、従属節の文らしさ（陳述度）が関わっていることを論じる。

一般的に仮定節の主節に対する従属度は非常に高い、つまり、文らしさという度合が低い。それに対して、事実的な事態である原因節の主節に対する従属度は非常に低く、文らしい節であるとされてきた。つまり、前者の仮定節はモダリティ的な要素を取り込み難い節であるのに対して、後者の原因節はモダリティ的な要素を取り込みやすい節であるということができる。よって、従属節という共通性はあるものの、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉に蓋然性の意味が読み込めるか否かは、その環境によって異なることが分かった。

4.3.2.4. 副詞句への移行

次に、文中において、副詞句として機能する〈到不了: 到着しない〉の用法について考察する。〈到不了: 到着しない〉は目的語位置に時間表現を取り[84]、副詞句的な表現として機能する。この用法は、意味的には主節に対する従属節での〈到不了: 達しない〉の使用と同様である。

[84] Chao (1968:533) は、時間語(time word)を有する語として、〈到: 到着する〉を取り上げている。それは、〈到: 到着する〉の後ろに時間語を有し、「~の時間に達する」という意味を表す。

(179) a. 魏占奎说：“一　担　也　误　不　了！

魏占奎 言う　一　担ぎ　も　遅れる-NEG-LIAO

到　不　了　晌午 我　就　能　赶　出　来！”

到達する-NEG-LIAO　昼　私 すぐに AUX(できる)　追う 出る 来る

（CCL:赵树理《三里湾》）

「魏占奎は『荷物運びは遅れることはないよ。昼までに全部できるから。』と言った。」

b. 到　半夜，芳林 嫂　的　娘 已经 不省人事　了，四肢　发　凉，

に達する 夜中　芳林 姉さん ASSOC 母親　既に 意識不明に陥る SFP　四肢　生じる 冷たい

只有 口鼻 还　能　呼 出　微弱　的 气息，看样子　到　不　了　天明，

ただ　口 鼻 まだ AUX(できる) 吐く-出る 微かな NOM 息　見たところ 到達する-NEG-LIAO　夜明け

就要　离开　人间　了。（CCL:知侠《铁道游击队》）

まもなく 離れる　この世　SFP

「夜中になり、芳林姉さんの母親は、既に意識不明に陥っており、四肢が冷たくなっているため、ただ口と鼻で微かに息ができるだけで、見たところ夜明け前には、この世を去ってしまいそうだ。」

c. 因此，　到　不　了　11 月 中旬 政府 就　可能　陥入

それゆえ 達する-NEG-LIAO　11 月　中旬　政府 正に　AUX(可能性がある)　陥る

“破产”境地。（CCL:《1995 年人民日报 11 月份》）

破産　境地

「それゆえ，11 月中旬になる前に，政府は『破産』の境地に陥るかもしれない。」

〈到不了晌午: 昼までに〉(179a)、〈到不了天明: 夜明けまでに〉(179b)、〈到不了 11 月中旬: 11 月中旬までに〉(179c) は、全て主語位置に名詞句を取らない。また、直後にコンマ等はないが、主語及び動詞を伴う文が後続する。つまり、これら可能補語から成る語は、副詞句を形成し、(179a) は「昼に到達しないで」、つまり「昼になる前に」、また (179bc) は「夜になる前に」、「11 月中旬までに」という意味となっている。更に、(180) のように、前後をコンマで括って〈到不了 2000 年: 2000 年になる前に〉と独立した句を形成することもできる。

(180) 一些　权威人士　　预测，　　到　　不　了 2000 年，

一部　権威のある人　予想する　到達する-NEG-LIAO　2000 年

当前　“山东路，广东桥” 的 “两强”局面，…。(CCL:《1994 年报刊精选 06》)

目前　山東路　広東橋　ASSOC　2 強　局面

「一部の権威のある人の予測によると，2000 年になる前に，目前の「山東路，広東橋」の二つの強い局面が，･･･」

このように、特に時間を表す語を〈到不了: 達しない〉の後に取り、「(その時間に) 達しない」ということから「(その時間に) なる前に」という意味を表す機能的な語へと拡張していることが分かる。また、(181) は、副詞〈看样子:見たところ/~だろう〉が〈到不了天明: 夜明けになる前に〉という節に前接している。

(181) 只有　口鼻 还　能　　呼　　出 微弱 的 气息，看样子　到　　不　了　天明，

ただ~だけ 口鼻 まだ AUX(できる) 息をする 出す 弱い　の　息　見たところ　到着する-NEG-LIAO　明け方

就要　离　开　人间　了。(CCL:知侠《铁道游击队》)

間もなく 離れる　開く この世　PERF

「ただ口と鼻で微かに息ができるだけで、見たところ夜明け前には、間もなくこの世を去ってしまいそうだ。」

しかし、副詞〈看样子: 見たところ/~だろう〉は、直後の述語的な要素である〈到不了: 達しない〉を修飾せず、主節の〈离开: 離れる〉を修飾している。このことからも、〈到不了天明: 夜明けになる前に〉が副詞句的な独立した語として機能していることが分かる。

一方で、〈到不了: 達しない〉が述語的な要素を完全に逸していないことも次の例から明らかである。

(182) 30 年，说不定　　到　不　了　那　时候，

30 年　かもしれない　到達する-NEG-LIAO その 時間

现在 最　怕　“变” 的，…。(CCL:《1994 年人民日报第 1 季度》)

現在 最も 恐ろしい 変化　SFP

「30 年、その時にならないかもしれないが、現在最も変化が恐ろしいのは、･･･」

(182) の〈到不了: 達しない〉は，時間表現である〈那时候: その時〉を取り、先行する副詞〈说不定: ~かもしれない〉が〈到不了: 達しない〉を修飾し、「その時にならないかもしれない」という意味を表している。つまり、(181) の例とは逆に、時間表現を有する〈到不了: 達しない〉が副詞句の修飾を受け、述語的に振る舞うこともある。

(183) 到　　不　了　本　世纪　　结束，

到達する-NEG-LIAO　この　世紀　　終結する

网络　　就　不　能　　再　扩展　了。（CCL:《1996 年人民日报 1 月份》）

ネットワーク　正に　NEG AUX（できる）　再び　広がる　PERF

「今世紀が終結する前に，ネットワークはそれ以上広がることはないだろう。」

また、(183) は〈到不了: 達しない〉の後ろに、〈本世纪结束: 今世紀が終結する〉という主述句が後続し、「今世紀が終結する前に」という意味となっている。このように〈到不了: 達しない〉には、文成分を取ることができるという特徴もある。また、これら〈到不了〉は、主語位置に名詞句は現れないという特徴を一律に有している。

時間表現が後続し、主語位置に名詞句が現れず、副詞句的に機能する〈到不了 ＋ 時間表現〉は、本来非継続非意志動詞が先行する可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が有する蓋然性の意味を表しているとは言えない。このような表現では、意味的には，主節を修飾する従属節から動詞の有する語彙的意味が薄れた副詞句的な機能語へと移行していることが窺える。以上の現象から、非継続非意志動詞に後続する〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の必然性、可能性に関わる蓋然性という意味は、それが現れる文中での位置、つまり従属節及び副詞句という主節を修飾するという機能的位置に現れることによって、薄れていくと考えることができる。

4.4. 推断を表す〈-不了〉

4.4 節では、推断 (deduction) を表す〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉について、その構文及び文法的特徴、また意味的特徴について論じる。そこで、扱う形式の具体例を以下に提示する。

(184) 这　箱子　轻 不　了。

この トランク 軽い-NEG-LIAO$_{deduc}$

「このトランクは軽いはずはない。」

(185) 我　的 个子 比　你　高　不　了　多少。

私 ASSOC 背　より あなた 高い-NEG-LIAO$_{deduc}$ いくらか

「私の身長はあなたよりそれほど高いわけではない。」

(184) は〈轻: 軽い〉という形容詞に可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉が付加され「軽いはずはない」という意味を表し、(185) は〈高不了: 高い-NEG-LIAO$_{deduc}$〉で「(それほど) 高くはない」という意味を表す。そこで、先行述語として用いられる形容詞、及びそれに付加される可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉という順で、先行研究の記述を概観する。

まず、補語に先行する形容詞であるが、朱德熙 (1982:73-75) の「形容詞」、もしくは张国宪 (2006:19-98) の「静態形容詞」を対象とする。これらは、静的 (static) な意味素性を有する形容詞であり、変化形容詞のような動的な意味を含意する形容詞は対象としない[85]。記述の便宜上、ここでは静態形容詞という呼び名を採用する。また、静態形容詞は、単純に性質及び属性を表す「性質形容詞」と、ある種の描写性を帯びている「状態形容詞」に分けることができる。

次に、静態形容詞に付加する可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉について体系的に取り上げたものに吕叔湘主编 (1999(1980)) 及び刘月华他 (2001(1983)) があり、両氏の指摘をモダリティ論の枠組みで捉え直したものに柯理思 (2000, 2005) がある。以下で各々の主張を取り上げる。

吕叔湘主编 (1999) では、〈-了: -LIAO$_{deduc}$〉が動補構造の第二成分に用いられる際の意味として次のように記述されている。

[85] 本研究において、静態形容詞が先行する〈-不了〉を考察対象とし、変化形容詞を扱わない理由として、吕叔湘主编 (1999) の記述がある。吕叔湘氏は、前者の〈-不了〉の意味を〈表示对性状的程度作出估计（吕叔湘主编 1999:367)〉(性質や状態の程度に対する推測を表す)、後者の〈-不了〉の意味を〈表示对性状的变化作出估计（吕叔湘主编 1999:367)〉(性質や状態の変化に対する推測を表す）とし、両者が別の意味カテゴリーに属するものとしている。そこで、本研究では変化形容詞が先行する場合の分析は別の機会に譲ることとする。

(186) 用在形容词后，表示对性状的程度作出估计，一般只用否定式；肯定式只用于问句。

「形容詞の後に用いて、性質･状態の程度に対する推測を表す。一般的に否定形式で用いられ、肯定形式は疑問文のみで用いられる。」（吕叔湘主 1999:367）

刘月华他 (2001) では、〈大不了: 大きいはずはない〉、〈长不了: 長いはずはない〉のような例を取り上げて、〈-了: -LIAO$_{deduc}$〉を補語とする可能補語の記述として次のように述べている。

(187) “得/不了”还可以表示对情况的估计。

「〈得/不了〉は状況の推測をも表し得る。」（刘月华他 2001:590）

以上、両者の記述は、当該形式を推測表現として捉えており、その意味記述は共通していると言える。

最後に、柯理思 (2000) の議論では、英語、フランス語、中国語等の法助動詞（may, should, must, pouvoir, devoir, 能, 会, 应该等）の文法化に伴う根源的意味 (root meaning) から認識的意味 (epistemic meaning) への拡張現象と平行する形で、〈静態形容詞-不了〉においても、先行する形容詞の静的 (static) な性質及び〈-了: -LIAO$_{deduc}$〉の意味の漂白化によって、話者の主観的判断の意味が現れる認識的モダリティ (epistemic modality) であると規定した。これは、吕叔湘主编 (1999) 及び刘月华他 (2001) で規定された推測をモダリティ論の枠内で捉え直したに過ぎず、その意味記述としては上記の二氏と大差はないと言える。

先行研究における問題点は、詳細な実例の分析がなされないままに、〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉が表す意味を〈估计: 推測〉や認識的モダリティという点に帰結させてしまっていることである。そこで本研究では、北京大学作成の CCL コーパス[86]から合計 673 例の〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉を収集し、その構文及び文法的特徴を規定し、それに連動する形で意味的観点からの分析を行った。その結果、当該形式の中核的意味をより厳密に規定すると、何らかの徴候が特定され、その徴候を基に推し量ったことを断定的に述べる表現であるということを主張する。

そこで、4.4.1 節では、〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉が用いられる文及び句の形式

[86] 北京大学汉语语言学研究中心《CCL 语料库》の〈现代汉语〉より 2010 年 6 月に用例を収集した。(http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai)

的側面に焦点を当て、4.4.2 節では、特に文法的特徴に連動した形での意味規定を行う。

4.4.1. 〈静態形容詞-不了〉の諸特徴

4.4.1 節では、CCL コーパスから収集した例をもとに、当該形式を有する文の構文的、文法的特徴等の形式的側面に関しての記述を行う。まず、先行する静態形容詞の種類を 4.4.1.1 節で、〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉を有する文の構文的特徴について 4.4.1.2 節で、そして〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉が述語として用いられるのか、連体修飾節として用いられるのか、或いは副詞として機能しているのかという用法的特徴について 4.4.1.3 節で提示する。更に、4.4.1.4 節では数量表現の有無とそれに伴う否定を受ける形容詞の意味解釈の相違について論じる。

4.4.1.1. 静態形容詞の種類

まずは、CCL コーパスから収集した可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉に先行する静態形容詞（性質形容詞/状態形容詞）のタイプに応じて、(188) でその例を提示し、（表 23）で用例数をまとめる（以下の(　　)内の数字は用例数、「　」内は形容詞の日本語訳である）。本研究では、性質形容詞及び状態形容詞の分類を張国宪 (2006) に求めることとする[87]。

(188) 静態形容詞の種類

a. 〈性質形容詞＋不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉

大不了 (264)「大きい-NEG-LIAO$_{deduc}$」	快不了 (19)「速い-NEG-LIAO$_{deduc}$」
好不了 (128)「良い-NEG-LIAO$_{deduc}$」	富不了 (18)「富む-NEG-LIAO$_{deduc}$」
差不了 (92)「差がある-NEG-LIAO$_{deduc}$」	坏不了 (7)「壊れる-NEG-LIAO$_{deduc}$」
高不了 (23)「高い-NEG-LIAO$_{deduc}$」	近不了 (6)「近い-NEG-LIAO$_{deduc}$」
小不了 (22)「小さい-NEG-LIAO$_{deduc}$」	慢不了 (6)「遅い-NEG-LIAO$_{deduc}$」

（他 23 類）[88]

---

[87] 性質形容詞か否かを判断するテストは、「I. {最・很・比较・稍} ＋_____、II.NP$_1$＋比 NP$_2$ ＋_____、III._____$_{定}$＋NP$_{中}$（张国宪 2006:19-21）」の 3 点である。性質形容詞は I から III 全ての環境において成立するが、状態形容詞は I から III の少なくとも何れかで成立しにくいか、または成立しない。

[88] 紙幅の都合上、コーパスより抽出された 〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉に先行する他の性質形容詞の種類と意味を以下に記す。

冷(6)「寒い/冷たい」,凶(4)「甚だしい/ひどい」,短(4)「短い」,直(4)「まっすぐである」,白

b. 〈状態形容詞＋不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉

长远不了 (10)「長期に渡る-NEG-LIAO$_{deduc}$」　凶恶不了 (1)「凶悪な-NEG-LIAO$_{deduc}$」

长久不了 (9)「長く続く-NEG-LIAO$_{deduc}$」　聪明不了 (1)「聡明な-NEG-LIAO$_{deduc}$」

轻松不了 (4)「気楽な-NEG-LIAO$_{deduc}$」　顺利不了 (1)「順調な-NEG-LIAO$_{deduc}$」

痛快不了 (2)「痛快な-NEG-LIAO$_{deduc}$」　丰富不了 (1)「豊富な-NEG-LIAO$_{deduc}$」

接近不了 (2) 「近い-NEG-LIAO$_{deduc}$」

（他 0 類）

（表 23）CCL から収集した各形容詞の用例数

	性質形容詞	状態形容詞	合計
異なり語数（述語タイプ）	33 例	9 例	42 例
延べ語数（全数）	642 例	31 例	673 例

（表 23）より、用例の出現頻度は、状態形容詞（31 例）に比べて性質形容詞（642 例）が圧倒的に高いことが分かる。また、性質形容詞及び状態形容詞は、限定性及び描写性等といった点で異なるが、両者は静的 (static) な意味素性を有するという点で共通しており、可能補語を伴った際、本研究で扱う意味記述には大きな影響を与えない。よって、以下の議論では静態形容詞として、両者を特段区別せずに議論を行う。

ここで静態形容詞として認定した (188) の形式の中には、併せて変化形容詞としても機能し得るものも存在する。たとえば、〈好: 良い/良くなる〉は本来性質形容詞として静的な意味を表す語であるが、以下のように変化を表すことができる。

(189) 经过 抢救，别 的 病 好 了， 房 颤 却是 永远 <u>好 不 了</u> 的。

経る 応急処置 別 ASSOC 病気 良い PERF 心房 痙攣 にも関わらず 永遠に 良い-NEG-LIAO$_{prob}$ SFP

（CCL:《人民日报》1994.2）

「応急手当を経て、別の病気は良くなったが、心房の痙攣は永遠に良くなる可能性はない。」

(4)「白い」,凉(4)「涼しい」,硬(3)「かたい」,矮(3)「低い」,圆(3)「丸い」,宽(3)「幅(範囲)が広い」,远(3)「遠い」,穷(2)「貧しい」,红(2)「赤い」,贵(2)「(値段が)高い」,干净(2)「清潔である」,甜(1)「甘い」,年轻(1)「若い」,碎(1)「砕ける」,黑(1)「黒い」,薄(1)「薄い」,美(1)「美しい」,深(1)「深い」,黄(1)「黄色い」

(189) の〈好不了〉は「良い状態にはならないだろう」というように、先行する形容詞が変化形容詞として機能していることが分かる。このような例は、本研究の集計では除外し、扱っていない。更に以下のように〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉がイディオムとして機能している例も集計から除外している[89]。

(190) 他 多次 说："我 脑子 清楚， 手脚 也 灵便，
彼 度々 言う 私 頭 はっきりしている 手足 も 敏捷である
没有 什么 大 不 了 的 病。"（CCL:凯旋《许世友三次自杀真相》）
ない 何か 大きい-NEG-LIAO NOM 病気
「『頭がはっきりしていて、手足は素早く動くので、大したことのない病だ。』と彼は何度も言った。」

4.4.1.2. 文の構文的特徴

推断を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は、「対象 + 静態形容詞-不得」というように、本来的に先行する形容詞が取る文と同じ構文的特徴となっている。形容詞の主語は、その性質や状態を描写される対象であるという点で、主語であるとともに、主題として捉えたくなるような要素であると言える。そこで、(185)を例に取ると、述語〈轻不了: 軽くないだろう〉に前置する要素である〈这箱子: このトランク〉は、主語であるとともに主題でもあると考える。

(191) 这 箱子 轻 不 了。
この トランク 軽い-NEG-LIAO$_{deduc}$
「このトランクは軽いはずはない。」

---

[89] 《现代汉语词典第 5 版》では、〈大不了〉の項目に〈了不得（多用于否定式）: 大したものである（多くは否定形式で用いられる）〉とあり、例文として〈这个病没有什么大不了，吃点药就会好的〉が挙げられている。これは、その意味記述からもイディオムとして捉えるのが妥当であり、本研究で扱う〈静態形容詞＋不了〉とは意味的に無関係であると言える。更に〈什么大不了〉、〈有啥大不了〉、〈有什么大不了〉、〈不是什么大不了〉等の異形が存在し、述語用法で 143 例、連体修飾節用法で 125 例抽出されたが、これらは集計には含めていない。また、〈大不了的事情: 大したことではない事柄〉、〈大不了的损失: 大したことではない損失〉等の例もイディオムと見做している。

4.4.1.3. 述語用法、連体修飾節用法、副詞用法

〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は、以下のように、述語として機能する「述語用法 (192) 」、連体修飾節として機能する「連体修飾節用法 (193) 」、更には副詞として用いられる「副詞用法 (194) 」の 3 用法に分けることができる。以下で各々の例を提示する。

(192) 她　対　抗战 和 时局　的　看法 是：中国　亡　不　了，　鬼子 长　不　了，
彼女　対する 抗戦　と　時局 ASSOC 見方　COP　中国 滅びる-NEG-LIAO$_{deduc}$　敵軍　長い-NEG-LIAO$_{deduc}$
国民党 好 不　了，八路军 少　不　了。（CCL:李英儒《野火春风斗古城》）
国民党 良い-NEG-LIAO$_{deduc}$ 八路軍 欠ける-NEG-LIAO$_{prob}$
「彼女の抗戦及び時局に対する見方は、中国は滅びず、敵軍はそう長いはずはないだろうし、また国民党の状況は良いはずはないだろうから、八路軍も欠かせないだろうということだ。」

(193) 米斯拉 把 最后 一丝 黑暗　眨 掉，　知道 自己 是　醒　在 一个　比　梦境
ミスラ　BA　最後　1 CL　暗闇 瞬きする-落ちる　知る　自分　COP 覚める に　1 CL　より 夢の世界
好　不　了　多少　的　世界 里。（CCL:龙枪《兄弟之战》）
良い-NEG-LIAO$_{deduc}$ いくら NOM　世界 の中
「ミスラは瞬きで暗い闇を取り払い、夢の世界よりさほど良いというわけではない世界に目覚めたことを知った。」

(194) “我 都　不 介意，　你　为　我　紧张 什么？大不了 等　你们　离去　后，
私 全て NEG 気にする あなた のために 私 緊張する 何を　せいぜい 待つ あなた達 立ち去る　の後
我　才 好好　睡一大觉。”（CCL:岑凯《伦蜜糖儿》）
私 やっと 良く　一眠りする
「『私は何も気にしていないのに、あなたは何を緊張しているの。せいぜいあなたが帰るのを待って、一眠りするだけよ。』」

(194) の副詞用法は、先行する形容詞がほぼ〈大: 大きい〉に限られ、可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉を伴って「せいぜい」という意味を表す。また、本研究では文及び句の成分として、述語的に機能する〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉のモダリティレベルでの

意味記述に焦点を当てているため、副詞用法は以下では扱わず、述語用法及び連体修飾節用法に限って議論を行う[90]。

4.4.1.4. 文法的特徴と否定に伴う形容詞の意味

〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉を有する文は、数量表現がその述語に後続するか否かという点において二分することができる。また、数量表現が後続することで、否定を伴う形容詞の意味解釈が異なるという現象も見られる。以下ではこの点に関して、4.4.1.3 節で提示した述語用法及び連体修飾節用法に関して論じる。

まず、数量表現が〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉に後続する例について考察する。(195) が述語用法で、(196) が連体修飾節用法である。

(195) …我 的 手劲 比 他 的 小 不 了 多少。(CCL:《福尔摩斯探案集 08》)
私 ASSOC 握力 より 彼 ASSOC 小さい-NEG-LIAO$_{deduc}$ いくらか
「…私の握力は彼のよりさほど小さいというわけではない。」

(196) 在 他 那 间 堪 称 “斗室” —
で 彼 あの CL するに足る 呼ぶ 『狭い家』
比 斗 大 不 了 多少 的 小 屋 里，沉默 地 然而 全神贯注 地，
より 一斗升 大きい-NEG-LIAO$_{deduc}$ いくらか NOM 小さい 部屋 の中 沈黙する DE しかし 一心不乱になる DE
用 破 木头 或 废石材 记录 了 他 对 生活 的 特殊 感受。
用いる 壊れた 木材 或いは 廃材 記録 PERF 彼 対する 生活 ASSOC 特殊な 感情
(CCL:《读书》vol.37)
「あの『狭い家』、一斗升よりさほど大きいとは言えないような小さな部屋で、沈黙を守り集中して、ぼろぼろの木材と廃材で彼の生活の特別な感情を記録した。」

(195) 及び (196) ともに、述語〈小不了: 小さいはずはない〉、〈大不了: 大きいはずはない〉の後に〈多少: いくらか〉という不定の数量表現が付加されている。このように、述語に後

[90] 副詞化した形式は、認識的モダリティに大きく関わるものの、〈静態形容詞-不了〉全体で一つのイディオムと見做すべきであり、本研究の分析対象である〈-不了: -NEG-LIAO〉の一例ではないため、考察からは除外する。

続するのは主に不定の数量表現であり、その例として CCL コーパスからは以下のような表現が観察された。

(197) 〈多少: いくつか〉, 〈几分钟: 数分間〉, 〈许多: 多い〉, 〈几天: 数日〉, 〈太多: 非常に多い〉, 〈很多: とても多い〉, 〈几个钱: いくらか〉 等

更に、数量表現が付加される際、比較マーカー〈比: より〉を用いた比較表現となりやすい。再度、(195) 及び (196) を観察すると、(195) では彼の握力と私の握力、(196) では家と一斗升という大きさを比べた比較表現となっており、比較マーカー〈比: より〉でマークされていることが分かる。しかし、たとえ比較形式を用いなくとも、述語に数量表現が付加された場合には、必ず二者間の比較を行った表現となる。

(198) 市民 手 上 缺 零钞，企事业单位 和 金融机构 也 好 不 了 多少。
市民 手 の上 不足する お金 事業団体 と 金融機関 も 良い-NEG-LIAO$_{deduc}$ いくらか
（CCL:《1994 年报刊精选 12》）
「市民にはお金が不足しているが、事業団体や金融機関もさほど良い状況ではない。」

(198) は、数量表現〈多少: いくらか〉が用いられているにもかかわらず、比較マーカー〈比: より〉を用いた比較構文とはなっていない。しかし、事業団体や金融機関は、市民と比べて「さほど良い状況とは言えない」というように、意味的には二者間の比較となっていることが窺える。逆に言うと、比較構文を用いた〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は、〈多少: いくらか〉、〈许多: 多い〉等の数量表現が、必ず後続する必要がある。(199) から分かるように数量表現がない場合は、比較形式での〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は成立し難い。

(199) ??我 的 手劲 比 他 的 小 不 了。
私 ASSOC 握力 より 彼 ASSOC 小さい-NEG-LIAO$_{deduc}$
「私の握力は、彼のより弱いはずはない。」

次に、数量表現が後続しない〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉の用例を考察する。数

量表現が後続しない〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は、述語用法は存在するが、連体修飾用法の用例は今回の調査からは見つからなかった（4.4.2.2 節にて詳述）。以下 (200) は述語用法の例である。

(200) 周伯通 呵呵 笑 道: “那 就 好 啦，一个 女孩儿 若是 浓 眉 大 眼，
周伯通 ハハハ 笑う 言う それ 正に 良い SFP 1 CL 女性 もし 濃い 眉 大きい 目
黑黑 的 脸蛋，像 我 郭兄弟 一般， 那 自然 是 美 不 了。”
黒い NOM 頬 みたいだ 私 郭兄弟 同様 それじゃ 自然に COP 美しい-NEG-LIAO$_{deduc}$
（CCL:金庸《神雕侠侶》）

「周伯通は笑って言った『女が濃い眉で大きな目、黒い頬、まるで郭兄弟のようで、それじゃ、美しいはずはない。』」

〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は数量表現が後続するか否かという特徴が窺え、数量表現が後続する際には、比較構文、或いは比較形式が明示されていなくとも意味的には比較を表すことが分かった。更に、数量表現の有無という特徴において二分類する根拠として、否定を受ける形容詞の意味解釈が異なる点が挙げられる。この点を以下で詳述する。

以上観察した数量表現が現れるか否かという特徴は、次に示すように否定を伴う形容詞の意味解釈が異なるという点を同時に反映している。(201) は、〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉に数量表現が付加されない例であり、(202) は数量表現〈多少: いくらか〉が付加された例である。両者に関して、以下に示すような意味的な違いが現れる。

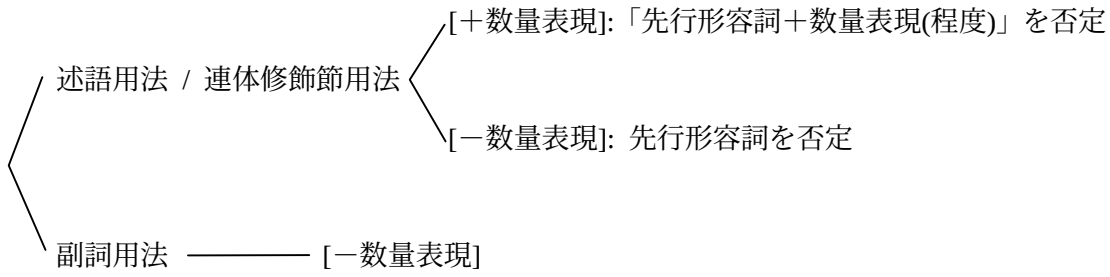
(201) 张三 的 工资 高 不 了。
張三 ASSOC 給料 高い-NEG-LIAO$_{deduc}$
「張三の給料は高いはずはない。」

(202) 张三 的 工资 高 不 了 多少。
張三 ASSOC 給料 高い-NEG-LIAO$_{deduc}$ いくらか
「張三の給料はそれほど高いというわけではない。」

(201) が表す事態は「張三の給料は高くない」ということを意味し、主要述語として用いら

れている形容詞〈高: 高い〉を否定している。つまり、先行する形容詞の語彙的意味を否定していると言える。それに対して、数量表現を有する (202) は、「張三の給料は（誰か/何かと比べて）それほど高いというわけではない」という事態を表している。これは、「張三の給料は（誰か/何かより）少し高い」が、その程度は「それほど高くはない」というように、先行する形容詞と後続する数量表現が表す程度の全体を否定している[91]（三宅登之先生からの私信による）[92]。

以上より、数量表現の有無によって、両者を明確に分類する意義があると言える。そこで、これまでの議論を簡略に図示すると（図 1）のようになる。



（図 1）各用法と数量表現の付加に伴う否定

（図 1）に沿う形で CCL コーパスから収集した用例をまとめると(表 23)のようになる。

（表 24）性質･状態形容詞における各用法と意味の連動: CCL より

		述語用法		連体修飾節用法		副詞的用法	合計
		[－数量]	[＋数量]	[－数量]	[＋数量]	[－数量]	
静態形容詞	性質形容詞	196 例	245 例	0 例	38 例	163 例	642 例
	状態形容詞	28 例	3 例	0 例	0 例	0 例	31 例

[91] 〈高不了多少: それほど高くない〉は、〈高得多: ずっと高い〉に可能補語の否定形〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉がかかり、「それほど高いというわけではない」という意味が現れると考察し得る。この現象をもってここでは先行する形容詞と後続する数量表現が表す程度表現全体を否定していると捉える。〈-得多〉は肯定の意味にしか使用できないため、否定表現となると〈多少: いくらか〉のような語彙に変わる。

[92] ここで述べた「否定が及ぶ範囲」における分析は、2010 年 11 月 6 日に頂いた三宅登之先生からの私信によって、ご指摘及びご助言頂いた。しかし、内容に関する一切の責任は筆者にある。

〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉の CCL コーパスでの使用頻度を不定の数量表現が述語に後続するか否かという観点から観察すると、述語用法での頻度は、［－数量］が 224 例、［＋数量］が 248 例と差はそれ程大きくないのに対して、連体修飾節用法では［－数量］が 0 例、［＋数量］が 38 例と数量表現が付加される例しか観察されなかった。柯理思 (2000:75) では、〈性質形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は名詞（句）を修飾し難い、つまり連体修飾節としては機能しにくいとしており、数量表現が後続しない〈性質形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉に関しては、本研究の CCL コーパスを用いた調査でも同様の結果が得られた。しかし、数量表現が後続する〈性質形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は 38 例と少数ではあるが、連体修飾節での使用が確認された。

4.4.1.節の議論は、〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉を有する文における諸特徴について論じた。そこで、以上の議論を簡潔にまとめると、〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は、主題-評言を基本とし、述語用法、連体修飾節用法、副詞用法があり、前二者は数量表現の有無という特徴によって、否定を受ける形容詞の意味解釈が変わるとなる。

4.4.2. 推断

本節では、静態形容詞に後続する可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉について、前節で得られた諸特徴に連動させる形で、その意味的特徴について論じる。そこで、次の例文を再度取り上げて、先行研究における意味記述を考える。

(203) 这　箱子　轻　不　了。

この トランク 軽い-NEG-LIAO$_{deduc}$

「このトランクは軽いはずはない。」

これまでの研究では、(203) のような文を提示し、話し手の推測及び認識的モダリティの表現であると言われてきた。しかしコーパスデータから得られた、文脈を考慮した実例を詳細に分析すると単なる推測の表現ではなく、特定された徴候を基に推し量ったことを断定的に述べる推断の表現であることが明らかとなった。そこで、4.4.2.1 節では述語用法、4.4.2.2 節では連体修飾節用法について詳細に論じる。

4.4.2.1. 論理的推論と様態：述語用法

述語用法において、〈静態形容詞-不了：-NEG-LIAO$_{deduc}$〉に数量表現が後続することによって、否定を伴う形容詞の意味の相違を 4.4.1.4 節で考察した。その中で、可能補語〈-不了：-NEG-LIAO$_{deduc}$〉の意味として数量表現が後続しない場合は「論理的推論」の意味を表し、数量表現が後続する場合は「様態」の意味を表すことを以下の議論で明らかにする。

まず、数量表現が後続しない例は、予め提供或いは認識されている状況を基にして、その帰結としての事態を論理的に推論する表現であると言える。簡潔にまとめると以下のようになる。

(204)「論理的推論」：何らかの徴候を基にして、その帰結として事態を論理的に推論する表現。

そこで、CCL コーパスから得られた実例を以下で考察する。

(205) 不　用功　学习　的　孩子　自觉　升学　无望，
NEG よく勉強する 勉強する NOM 子供 自覚する 進学する 望みがない
也就　不 好好 锻炼，分数 自然 高　不　了。 (CCL:《人民日报》1994.2)
~したらもう…だ NEG よく 鍛える 得点 自然に 高い-NEG-LIAO$_{deduc}$
「まじめに勉強しない子供は自ら進学する望みのないことを自覚しているので、勉強もほとんどしない。よって、当然点数も高いはずはない。」

(205) における話し手は、「まじめに勉強しない子供は自ら進学する望みがないことを自覚しているので、勉強もほとんどしない」という事実をもとより認識しており、それを根拠として「（試験の）点数は高いはずはない」と予測していると言える。つまり、ある事実を認識し、それが徴候となり、その事実に基づいてその帰結としての事態を推論している表現であると言える。以下で、更に例を観察する。

(206) 当时 在 国外 存在 幻想，在 这里 犯事， 中国 警察 管 不 着。

当時 で 国外 存在する 幻想 で ここ 犯罪を犯す 中国 警察 構う-NEG-ZHAO$_{poten}$

没 想到， 被 你们 逮 住 了。我 知道 我 罪 大 恶 极，

ない 思いつく CAUS あなた達 捕まえる-固定する PERF 私 知る 私 罪 大いに 悪い とても

只要 被 抓住 就 好 不 了。（CCL:《人民日报》1993.10）

さえすれば CAUS 捕まえる 正に 良い-NEG-LIAO$_{deduc}$

「当時、外国で罪を犯しても中国の警察は手出しできないという幻想があった為、まさか逮捕されるとは思わなかった。しかし私は自らの罪の大きさを自覚しており、捕まりさえすれば厳しく罰せられるだろう（状況は好いはずはない）。」

(207) 史更新 一定 是 离开 了 原来 的 地方，可是 他 往 哪里 去 呢?

史更新 きっと COP 離れる PERF もとの ASSOC 場所 しかし 彼 住む どこ 行く SFP

既然 他 不 能 走路 了，当然 他 就 远 不 了，

したからには 彼 NEG AUX(できる) 歩く SFP 当然 彼 正に 遠い-NEG-LIAO$_{deduc}$

所以 等 伪军们 走 了 之后，他就 又 在 这 附近 寻找 起来。

だから 待つ 傀儡軍ら 去る PERF の後 彼 正に また で この 付近 探す-始める

（CCL:刘流《烈火金刚》）

「史更新はきっともとの場所から離れただろうが、どこへ行ったのだろうか。彼は歩けないだろうから、当然そう遠いはずはない（遠くへ行っているはずはない）。だから軍隊が去った後、彼はこの付近をまた探し求めた。」

(208) 周伯通 呵呵 笑 道: “那 就 好 啦，一个 女孩儿 若是 浓 眉 大 眼，

周伯通 ハハハ 笑う 言う それ 正に 良い SFP 1 CL 女性 もし 濃い 眉 大きい 目

黑黑 的 脸蛋，像 我 郭兄弟 一般， 那 自然 是 美 不 了。”

黒い NOM 頬 みたいだ 私 郭兄弟 同様 それじゃ 自然に COP 美しい-NEG-LIAO$_{deduc}$

（CCL:金庸《神雕侠侶》）

「周伯通は笑って言った『女が濃い眉で大きな目、黒い頬、まるで郭兄弟のようで、それじゃ、美しいはずはない。』」

(206) から (208) の各々の用例に関しても (205) と同様に捉えることができ、それを簡潔

にまとめると、（表 25）のようになる。

（表 25） 話し手の認識の徴候と論理的推論の関係

	「話し手の認識している徴候」		「話し手が推論している事態」
(205)’	勉強しない子は進学の望みがないから勉強をしない	→	〈分数高不了: 点数は高いはずはない〉
(206)’	自らの罪の大きさを自覚している	→	〈只要被抓住就好不了: 捕まりさえすれば状況は良いはずはない〉
(207)’	彼は歩けない	→	〈他就远不了: 彼はそう遠くへ行っているはずはない〉
(208)’	眉が濃く目が大きく男である郭兄弟の顔のようだ	→	〈美不了: 美しいはずはない〉

以上の表現は、話し手が何らかの手段である事態を認識するに至り、それを徴候とすることで、その帰結にある事態を自らの意見として、論理的に推論していることが分かる。つまり、話し手が単に頭の中で想像した事態ではなく、外部から得た知識及び情報を徴候として認識的判断を行っている、或いはその徴候の特定に重点が置かれているという点で、単なる推測表現とは区別する。

次に数量表現が後続する例を取り上げる。この例は主に比較形式を用いた比較表現となることを述べた。これは、主に眼前の事実に対して、比較対象を基準とすることで、確定的に述べようとする様態としての表現となる。簡潔にまとめると以下のようになる。

(209)「様態」：比較対象を徴候として、それを基にして現場の状況を述べる表現。

そこで、CCL コーパスから得られた実例を以下で考察する。

(210) 男生　聚　在 碾盘 周围 “唏哩呼噜” 地　吞；

男子　集まる　に 碾臼　周囲 『クチャクチャ』 DE 飲み込む

女生 围 住　　磨盘，吃　态　　雅　不　了　太　多少…。

女子 囲う-固定する 碾臼　食べる 態度 上品である-NEG-LIAO$_{deduc}$ とても いくらか

（CCL:史铁生《插队的故事》）

「男子は大型の挽臼の周りに集まってクチャクチャと食べ、女子は手回しの挽臼を取り囲み、女子の食べ方も男子に比べてそれほどきれいというわけでなく…。」

(211) 我们 乘 车 经过 家用电器厂 和　石化厂　进入 大理石厂。

私たち 乗る 車 通る　家電工場　　と 石油加工工場 入る 大理石 工場

厂子 比 一个 足球场　大　不　了　多少，一排 木制 房，

工場　より 1 CL サッカー場 大きい-NEG-LIAO$_{deduc}$ いくらか 1　CL 木製 建物

是 管理人员 的　办公室，…。（CCL:《人民日报》1995.2）

COP　管理人　ASSOC　事務所

「私達は車で家電工場と石油加工工場を通り、大理石工場に入った。工場はサッカー場よりそれほど大きいというわけではない。一列に並んだ木製の建物は、管理人の事務所であり、…。」

(210) 及び (211) は、描写対象を目の前にして、その状況を描写している表現であると言える。(210) では女性の食べ方を描写するために、男性を比較対象とし、(211) では実際に目にした工場の大きさを描写するために、サッカー場と比較する形で評価を下していることが分かる。更に、具体物だけではなく、以下の例のように「水準」のような抽象的な事柄においても描写対象とすることができる。

(212) 当然，在　　说　着 空话 的时候，也 不　免　　要　　带　出

当然　DUR　言う DUR 空論　のとき　も NEG 避ける AUX(必ず) 帯びる-出る

一些 零碎　的 感想，看来　比　起　五十年前　的　水平 也

1 CL　雑多な NOM 感想見たところ 比べる-始める 50 年前　ASSOC 水準　も

高　不 了　　多少，…。（CCL:《读书》vol-041）

高い-NEG-LIAO$_{deduc}$ いくらか

「当然空論を述べていると、どうしても些細な事柄が脳裏を掠める。見るに 50 年前の水準と比べてそれほど高いというわけではなく、…。」

(212) は、視覚的な認識を意味する副詞〈看来: 見たところ〉が用いられており、50 年前の水準に比べて現時点での現場の描写を行っていることが分かる。

よって、以上で取り上げた表現は、眼前の事実を基にして現場の状況を述べことより、様態の表現であるとする。更に比較対象を設けることで基準を設定し、その対象の特徴をより具体的に浮き彫りにしていることが窺える。

4.4.2.2. 論理的推論と様態：連体修飾節用法

（表 24）の集計では、可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉に数量表現が後続しない場合、当該形式は連体修飾節には現れないとした。しかし、実際には CCL コーパスより抽出した実例を詳細に観察する過程で、先行する形容詞が静態形容詞なのか否かを決め兼ねる例が 2 例あった。それは〈丰富不了的意象: 豊富とはならない/豊富ではない情趣〉及び〈富不了的原因: 裕福にならない/裕福でない原因〉である。そこで、これらを連体修飾節に生起する“静態形容詞＋不了”の用例であると見做さなかった根拠を以下に挙げる。

(213) 而 我 觊觎 已 久 的 欲望 也 在 这 深藏 不 露 之中 伸出 无数

しかし 私 希望する すでに 長い NOM 欲望 も に この 深い蔵 NEG-現れる の中 伸ばす 無数

抚摸 的 手，那 是 一种 任凭 想象 也 <u>丰富 不 了</u> 的 意象，

撫でる NOM 手 それ COP 1 CL の判断に任せる 想像する も 豊富-NEG-LIAO$_{prob/deduc}$ NOM 情調

满足 不 了 的 荒诞 童心:…。（CCL:《读者(合订本)》）

満足する-NEG-LIAO$_{poten}$ NOM でたらめな 童心

「しかし、私は以前からの欲望を望んでも、奥深くに隠された中で無数の撫でようとする手を出す。それは如何に想像しても［豊富とはならない/豊富ではない］情趣、満足できないでたらめな童心:…。」

(213) の〈丰富不了〉には、「豊富な状態にならない」という変化の意味解釈と「豊富な状態でない」という静態的な状態の解釈の両者があり得るが、この場合、変化の解釈の方が優勢であると言える。次に〈富不了的原因: 裕福にならない/裕福ではない原因〉の用例を挙げる。

(214) “这 是 免费 的，” 她 说，“在 这儿 好多 东西 都 免费。

これ COP 無料だ SFP 彼女 言う ~で ここ たくさんの もの 全て 無料だ

这 就是 我们 为什么 <u>富 不 了</u> 的 原因。…。”（CCL:《没有钥匙的房间》）

これ 絶対に 私たち どうして 富む-NEG-LIAO$_{prob/deduc}$ NOM 原因

「『これは無料です。』彼女は言った。『ここでは多くの物が無料です。これこそ我々が［裕福にならない/裕福ではない］原因だ。…。』」

(214) も同様に、先行する形容詞〈富: 富む〉は、変化の意味と変化を伴わない静的な意味の両方の解釈があり得るが、(213) に比べて更に変化としての解釈が優勢である。このように、〈丰富不了: 豊富でない〉(213) 及び〈富不了: 裕福でない〉(214) は、静的な状態の意味としても解釈できなくはないが、変化の解釈の方がより優勢であることをもって、本研究ではこれらの例を連体修飾節に用いられた〈静態形容詞-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉の例とはしない。

それに対して数量表現が付加する例は連体修飾節用法でも存在し、CCL コーパスより合計 38 例得られた。その用例の一部を以下に提示する。

(215) 我　听说　它　是　利用　一只 金属制　的

私 ~聞いている それ COP 利用する　1 CL　金属性　ASSOC

比　烟盒　大　不　了　多少　的　盒子，…。

より シガレットケース 大きい-NEG-LIAO$_{deduc}$ いくらか NOM ケース

（CCL:《第二次世界大战回忆录第三卷伟大的同盟》）

「聞くところ、それは金属性のケースであって、シガレットケースよりもさほど大きくはないケースで…。」

(216) 每 星期六 下午　都　背 着　比 自己 矮　不　了　多少　的　小提琴

毎週　土曜日　午後 いつも 背負う-DUR より 自分　低い-NEG-LIAO$_{deduc}$ いくらか NOM バイオリン

到　团　里　参加　排练。（CCL:《报刊精选》1994.4）

へ行く　楽団　の中 参加する リハーサル

「毎週土曜日の午後に自分よりさほど低いというわけではないバイオリンを背負って、楽団のリハーサルに参加した。」

(215) はシガレットケースと比べて、(216) は自分の背丈と比べて対象物の大きさや高さを描写しており〈-不了: -NEG$_{deduc}$〉の意味は述語用法と同様、様態の表現であると言える。

4.4.2.3. 各用法の頻度

4 節では、述語用法及び連体修飾節用法において、数量表現を従えるか否かで、可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉の意味が論理的推論に偏るか、様態に偏るかが決まることを述べてきた。そこで、各用法をまとめた上で、コーパスから得た用例数を整理すると（表 26）のようになる。

（表 26）諸特徴に対応する意味の用例数の割合: CCL より

用法	述語用法		連体修飾節用法		副詞用法
[数量]の有無	[－数量]	[＋数量]	[－数量]	[＋数量]	[－数量]
否定範囲	形容詞	形容詞+数量	形容詞	形容詞+数量	-
意味	「論理的推論」	「様態」	「論理的推論」	「様態」	-
頻度(用例数)	47.5%(224)	52.5%(248)	0%(0)	100%(38)	-
合計	100%(472)		100%(38)		-

4.4.2.節の議論は、静態形容詞に付加する可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉には、どのような意味的特徴があるのかという点について議論したものである。そこで、この議論を簡潔にまとめると、静態形容詞に後続する可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉の意味は、数量表現の有無に連動する形で、数量表現が後続する場合は様態、数量表現が後続しない場合は論理的推論に偏り、両者が拮抗する推断の表現である。

4.4.3.推断としての論理的推論と様態

〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉の意味は、数量表現を取らない場合は論理的推論となり、数量表現言を取る場合は様態となり、両者は推断の表現として捉えられることを論じた。しかし、推量表現一般において、何らかの根拠を基に出来事を述べるということは、常に行われることである。そこで、本研究では論理的推論及び様態を推断として、単純な推量表現と違えてまとめたい根拠を更に詳しく論じることとする。

まず、論理的推論について考察する。論理的推論とは、「何らかの徴候を基にして、その帰結として事態を論理的に推論する表現」であることを論じた。ここで、まず問題となるのが、ある事態について単に推し量る表現である推量との意味的な相違があるのか否かという点である。推量は、典型的に認識的モダリティに含まれる意味であると言える。この推量を表す形式として、法助動詞の〈会: だろう〉を挙げることができる。そこで、この法助動詞〈会: だろう〉を用いた表現である〈不会轻:軽くないだろう〉が表す意味を推量とし、可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉を用いた表現である〈轻不了: 軽いはずはない〉の意味を論理的推論とし、両者の相違を比較･対照する。

(217) a. 这　箱子　不　会　　轻。

この トランク NEG-AUX(だろう) 軽い

「このトランクは軽くないだろう。」

b. 这　箱子　轻　不　了。

この トランク 軽い-NEG-LIAO$_{deduc}$

「このトランクは軽いはずはない。」

推量と論理的推論の最も根本的な相違は、推量は話し手が何ら根拠を持っていなくとも自らの予想として述べることができるのに対して、論理的推論は話し手が何らかの徴候を認識しており、その事実に基づいて推論しているということである。つまり、推量を表わす〈不会轻: 軽くないだろう〉は、話し手がそのトランクが軽いか重いかということを全く認識していなくても、話し手の主観に基づいて述べることができる。それに対して、論理的推論を表わす〈轻不了:軽いはずはない〉は、話し手はトランクが軽いということについて何らかの徴候を情報として得ており、確信を持って断定的に述べる表現である。

次に、様態について考察する。様態は、「比較対象を徴候として、それを基にして現場の状況を述べる表現」であることを論じた。これは、眼前の事実を基に述べる表現であることより、論理的推論に比べて、より徴候が明確に提示されている。また、この徴候は、数量表現を付加し、比較対象を明示することで、提示されていると言える。

(218) 厂子 比 一个 足球场　大　不　了　　多少，…。(CCL:《人民日报》1995.2)

工場 より 1 CL サッカー場 大きい-NEG-LIAO$_{deduc}$ いくらか

「工場はサッカー場よりそれほど大きいというわけではない…。」

つまり、〈多少: いくらか〉という数量表現が付くことによって、比較表現となり、比較対象である〈足球场: サッカー場〉を提示し、それと主語に立つ描写対象である〈厂子: 工場〉の大きさをより詳しく特定している。このように、数量表現を加えることで、比較表現に持ち込み、それが主語に立つ対象の性質をより断定的に述べることに繋がると考えられる。また、4.4.2.2 節で指摘したように、様態を表わす場合、連体修飾節としても現れる。連体修飾節は、主節に対する従属度が非常に高く、主にモダリティのような要素は主節によっ

て表されるため、話者の主観性の強いモダリティ形式は、連体修飾節における生起は非常に制限されると言える（奥田 1977 等参照）。よって、様態は連体修飾節では現れない論理的推論を表わす場合と比べて、より主観性の弱い、断定的な解釈となっていることが推測される。

本研究では、〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉が表わす論理的推論と様態を認識的モダリティの中の推断の表現として位置付けられることの根拠をより明確に論じた。具体的にまとめると、論理的推論と様態は、話し手が何らかの徴候を根拠として述べる、つまり徴候が存在しない状態で、自らの予想として述べている表現ではないという点に集約することができる。また、論理的推論よりも様態の方が、数量表現という要素が加えられ情報量が増えており、更には連体修飾節で用いられるということより、より断定性が強いと分析し得る可能性が高いことを見た。

4.5. まとめ

本章では、蓋然性を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉と推断を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉という認識的モダリティを表す形式について論じた。この認識的モダリティが現れる最も根本的な要件は、先行述語の非意志的な事態であると言える。また、両形式は否定形でのみ用いられるという特徴がある。そこで、4.5 節では、本章の総括として、両形式の意味的特徴を簡潔に提示し、更に形式的特徴を挙げる。その上で、先行研究との関連で、特に問題とした議論についてまとめる。

まず、意味的特徴として、両形式の意味を各々簡潔にまとめると次のようになる。蓋然性を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は、「命題の確からしさを断定的に述べる表現」であり、推断を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は「何らかの徴候が特定され、その徴候を基に推し量ったことを断定的に述べる表現」であると記述することができる。

次に両形式の諸特徴をまとめる。

（表 27）認識的モダリティを表す〈-不了〉の形式的特徴

	蓋然性: 〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉	推断: 〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉
先行述語	・非継続動詞: [非意志性] / [非継続性]	・静態形容詞: [非意志性] / [継続性]
構文的特徴	・無題文 / 有題文	・無題文 (有題文)

蓋然性を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は非意志性及び非継続性を有する非継続動詞を先行述語とし、推断を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は非意志性及び継続性を有する静態形容詞を先行述語とするという特徴がある。また、両者とも主語-述語を基本とする。しかし、推断を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉に関しては、主語の性質を表す形容詞であるということから、同時に主題-評言であるとも捉えることができる。

最後に、先行研究の分析･記述との関連で、特に問題として取り上げた点をまとめる。まず、蓋然性を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は、その意味的特徴が現れるのは、先行述語の非継続性にのみよると記述されてきた。しかし本研究では、それに加えて、〈非継続動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が現れる文中での位置及び、〈非継続動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉を含む文の実現性という観点から、蓋然性の意味が現れるか否かが決定することを考察した。次に、推断を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は、かつて、推測や推量を表す認識的モダリティであると記述されてきた。しかし本研究では、当該形式が特定された徴候を基にして、推し量ったことを断定的に述べる表現であるということを、実例を考察することで明らかにした。

第五章〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉の中心的意味

5.1. 研究の背景

本章では、第二章から第四章で論じた「可能」、「義務的モダリティ」及び「認識的モダリティ」という意味用法について、〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉及び〈-不得: -NEG-DE〉の各形式にとって、どの意味が中心的であるのかという観点で考察を行う。具体的には、〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉が表す「可能 (状況可能)」、「義務的モダリティ (不必要)」、「認識的モダリティ (蓋然性, 推断)」の 3 つの意味用法、及び〈-不得: -NEG-DE〉が表す「可能（心理的不可能）」及び「義務的モダリティ（不許可）」の 2 つの意味用法についてである。各形式の中心的な意味に関する主要な判断基準としては、その意味用法が取る先行述語の多様性、構文的特徴、或いは文法特徴の義務性等から総合的に考察を行う。そこで、〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉に関しては 5.2 節で、〈-不得: -NEG-DE〉に関しては 5.3 節で論じる。

ある一つの形式に幾つか意味が存在する場合、その中心的な意味を決定付ける際には、様々な基準が考えられる。しかし、本研究では、中心的な意味であればあるほど、その構文的特徴や文法的特徴等の諸特徴における制限が少なくなるであろうという考えをもとにして、分析を行うこととする。

5.2. 〈-得了/-不了〉の意味用法

〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉は、「可能（状況可能）」、「義務的モダリティ（不必要）」、「認識的モダリティ（蓋然性, 推断）」の 3 つの意味が存在することを論じた。まずは、各々の特徴を簡潔にまとめる。

状況可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、先行述語として意志性を有した動作行為を表す動詞を取る。また、主語-述語という無題文や、ある要素が左方転移して文頭に置かれた有題文、更には主題-評言を基本とする文においても成立する。一例を以下に提示する。

(219) 平时 工作 忙碌, 想 去 的 地方 去 不 了。(CCL:《新华社 2004 年新闻稿》)

普段 仕事 忙しい したい 行く NOM 場所 行く-NEG-LIAO$_{poten}$

「普段は仕事が忙しく、行きたい場所へ行けない。」

また、可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、可能或いは不可能であることの条件をも含意する必要がある。その条件の種類として、当該形式は、一時的な事態を表す条件(所謂「外在的条件」「内在的条件」)のもとでは成立するが、恒常的な事態を表す条件（所謂「心情条件」「能力条件」）のもとでは成立しないことを指摘した。また、可能の用法に限らず、本研究で扱った補語形式は、意味の漂白化が進み、先行述語の表す意味を指向していると、これまでの研究において分析されてきた。この意味の漂白化に対する影響として、可能補語が表す否定或いは肯定の対象が先行述語の表す意味を指向していると言い換えることができる。これは、一見すると補語位置にある要素を肯定或いは否定するという、典型的な可能補語の特徴から逸脱した現象に見えるが、それが恒常的な条件を表す心情可能及び能力可能としては成立せず、状況可能として成立するという特徴として現れることを論じた。

次に、義務的モダリティ（不必要）を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は、可能用法と同様に、先行述語として意志的な動作行為を表す動詞を取るが、その中でも、特に使用或いは消費を表す動詞に限られる。また、その文は、必ず有題文とならなければならない。このように、先行述語の意味素性及び文の構文的特徴から見れば、可能を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉と重なる部分が多い。しかし、義務的モダリティは、話し手から聞き手への行為要求として機能し、聞き手である動作主体が表された事態に関与しないという点で、可能用法とは異なる意味範疇であることを論じた。不必要の例を以下に提示する。

(220)（??你 / 这 个 菜） 搁 不 了 这么 多 油。

あなた これ CL 料理 入れる-NEG-LIAO$_{necess}$ こんなにも 多い 油

「(??あなたは / この料理は）こんなに多くの油を入れる必要はない。」

（《中国语补语例解》p.184）

〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉が表す不必要の意味は、その場で、相手に直接的に行為が不必要であることを要求することはできない。よって、(220) からも分かるように聞き手である〈你:

あなた〉を主語位置に置くことができない。〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉が表すのは、主題に立つ要素の性質及び属性を述べる用法であると言える。更に、不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は、目的語位置に数量表現を伴った用法が必ず必要であるというように、非常に制限された用法なのである。

最後に、認識的モダリティを表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob/deduc}$〉は、可能用法及び義務的モダリティ用法とは異なり、非意志的な述語を取るという点が大きな特徴である。また、その中でも、非継続性動詞を取る場合は蓋然性の意味となり、静態形容詞を取る場合は推断の意味となることを指摘した。以下、蓋然性の例を (221) に、推断の例を (222) に提示する。

(221) 他　那么　　大　　了，　　丢　　不　了。（CCL:老舍《龙须沟》）

彼 あんなに　大きい　PERF　　迷子になる-NEG-LIAO$_{prob}$

「彼はこんなにも大きいのだから、迷子になる可能性はない。」

(222) 这　　箱子　轻 不　了。

この トランク 軽い-NEG-LIAO$_{deduc}$

「このトランクは軽いはずはない。」

(221) のように蓋然性を表す用法では、述語である〈非継続性動詞+不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉の文中での位置によって、蓋然性の意味が読み込まれやすいか否かが異なることを論じた。最も、蓋然性の意味が現れやすいのは、仮定複文の主節位置という仮定的或いは空想的な事態を表す、つまり話者の推測が関わる位置である。また、従属節であっても、未実現の事態の場合は、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉に蓋然性の意味を読み込むことができる。(222) の推断を表す用法では、目的語位置に数量表現を取るか否かで、厳密には意味の違いが現れ、数量表現が付加しない場合は論理的推論、数量表現が付加する場合は様態となることを論じた。既に提示した (222) は数量表現が付加されていないことより論理的推論の例であり、次に挙げる (223) の例が様態の例である。

(223) 我　的　个子 比　　你　　<u>高　不　了</u>　　多少。

私 ASSOC　背　　より あなた 高い-NEG-LIAO$_{deduc}$ いくらか

「私の身長はあなたよりそれほど高いわけではない。」

また、様態の用法は連体修飾節中に現れ主名詞を修飾する用例が見られるのに対して、論理的推論の用法は連体修飾節中には現れない。この事実より、モダリティにおける対命題的態度、即ち発話現場的行為という観点から、連体修飾節に現れない論理的推論の用法の方が、様態の用法よりも話し手の断定性が強い可能性があることを論じた。

以上、〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉が表す「可能」、「義務的モダリティ（不必要）」、「認識的モダリティ（蓋然性, 推断）」の 3 つの意味用法における本研究で行った議論について、簡潔にまとめた。そこで、次にこの 3 つの用法の先行述語の種類、文の構文的特徴、及びその意味を表すのに必須であるとされる文法的特徴という観点から整理する。その上で、各々の意味と構文的、文法的な特徴との関連性を論じる。

（表 28）　〈-得了/-不了〉の意味用法と諸特徴

		可能	義務的モダリティ	認識的モダリティ	
可能補語	形式	〈-得了 / -不了〉	〈-不了〉	〈-不了〉	〈-不了〉
	意味	「状況可能」	「不必要」	「蓋然性」	「証拠性」
先行述語	意味素性	意志性		非意志性	
		働きかけ		非継続性	継続性
	種類	動作動詞	使用･消費動詞	非継続動詞	静態形容詞
構文的特徴	有題文の義務性	非義務的	義務的	義務的	義務的
文法的特徴	義務的な統語要素	―	数量の目的語要素への付加	―	―

〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉が表す意味として、中心的であると考えられるのは、可能及び認識的モダリティである。それは、先行述語の多様性や文の構文的特徴、或いは何らかの文法的な要素の義務性における制限を考慮している。つまり、可能と認識的モダリティは、先行述語の意味素性の相違（[±volitional]）という点で対立しているが、両者とも先行述語の種類は多岐に渡り、何らかの要素を必須として要求しない。認識的モダリティが有題文に限られるのは、先行する述語の性質によるもので、可能補語が関わる問題ではない。また、可能と認識的モダリティは、その意味としても、非常に異なると言えよ

う。それは、主に意志性の有無という点で、両者が異なることが、その根本的な要因であると思われる。

次に、〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉という一つの形式が表す可能及び認識的モダリティを、全く別の意味と考えるのか、そこに何らかの共通性を求めるのか、または、一方から他方への意味的な拡張が起こったのか等という点が問題となる。これに関しては、6.2 節に議論を譲る。一方、義務的モダリティの場合は、先行述語も使用・消費動詞に限られており、主題-評言という構文を許さず、必ず数量を表す要素を目的語位置に置く必要があるという点で、可能及び認識的モダリティを表す場合に比べて、非常に制限された用法であると言える。つまり、この不必要の意味は、遂行的な表現であり、更に構文的、文法的に制限を受ける中で成立している用法であると見ることができる。

5.2 節の議論をまとめると、文の構造的特徴や統語的特徴における制限という観点から考察すると、〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉が表す意味として、中心的な用法は、状況可能と認識的モダリティであり、義務的モダリティである不必要の意味は、現代中国語においては二次的な用法であると考えることができる。そこで、6.2 節では、この状況可能と認識的モダリティの意味の関係性について、議論することとする。

5.3. 〈-不得〉の意味用法

〈-不得: -NEG-DE〉は、「可能（心理的不可能）」及び「義務的モダリティ（不許可）」の 2 つの意味用法が存在することを論じた。まずは、各々の特徴を簡潔にまとめる。

心理的不可能を表す〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、先行述語として意志性に加えて、許容・受容に言及した知覚動詞を取る。また、必ず主語-述語となっており、主題化或いは主題-評言という有題文では、不許可の意味となり、心理的不可能の意味としては成立しない。

(224) 他们 <u>看 不 得</u> 别人 受苦，他们 爱 流 泪。（CCL:《读者(合订本)》）

彼ら 見る-NEG-DE$_{poten}$ 他人 苦しむ 彼ら 好む 流す 涙

「彼らは他人が苦しんでいるのを見ていられず、涙を流すことを好む。」

この場合、含意される不可能であることの条件は、文中には明示されていないが、「可哀想であるため」や「見ているのがつらくて」といった、主体の心理的、心情的な側面が要因

となっていることが考えられる。しかしここで言うところの主体の心理及び心情とは、主体の恒常的な特性というよりも、事態を認識した際の一時的な感情であると思われる。つまり、条件として心理的な側面が関わっているが、極めて状況可能に近いと言える。

次に、義務的モダリティ(不許可)を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permit}$〉は、先行述語として意図的な動作行為を表す動詞を取り、その種類は多岐に渡る。また、行為の意図性が読み込まれれば、形容詞も先行動詞として取り得る。更に、その文は、必ず有題文となっている。一例を以下に提示する。

(225) 現在　白鱼 肚子 里　都 墨鱼 一样，有 毒，吃　不　得。(CCL: 林斤澜《三阿公》)

現在　白い魚　腹　の中 すべて イカ　と同じ ある 毒　食べる-NEG-DE$_{permi}$

「現在は、魚の白い腹の中はまるでイカのように黒く、毒があり、食べてはいけない。」

また、〈-不得: -NEG-DE$_{permit}$〉の特徴として、悪い結果が起こるというニュアンスが含意されやすいという傾向があり、それこそが〈-不得: -NEG-DE$_{permit}$〉を特徴付ける意味であると考えられてきた。しかし、この悪い結果の含意は二次的に与えられる意味であり、例えば可能を表す用法でも、状況によってはこのような意味を読み込む可能性があることを論じた。

以上、〈-不得: -NEG-DE〉が表す「可能 (心理的不可能)」及び「義務的モダリティ（不許可）」の 2 つの意味用法における本研究での議論について、簡潔にまとめた。そこで、次にこの 2 つの用法の先行述語の種類、文の構文的特徴、及びその意味を表すのに必須であるとされる文法的特徴という観点から整理することで、各々の意味と諸特徴の関連性を論じる。

（表 29）〈-不得〉の意味用法と諸特徴

		可能	義務的モダリティ
可能補語	形式	〈 -不得〉	〈 -不得〉
	意味	心理的不可能	不許可
先行述語	意味素性	意志性	
		許容･受容	―
	種類	知覚動詞	動作動詞（形容詞）
構文的特徴	有題文の義務性	不可(必ず無題文)	義務的
文法的特徴	義務的な統語要素	―	―

〈-不得: -NEG-DE〉は、普通話では、義務的モダリティである不許可の意味を中心として表すと考えて良いであろう。それは、不許可を表す場合、その先行述語は意志性を有するという基準のもとで、非常に様々な種類に及ぶのに対して、心理的不可能を表す用法では、許容･受容に着目した主に知覚動詞に限られるためである。また、心理的不可能の場合は主語-述語となり、不許可の場合は主題-評言となることより、両者は相補的な関係にあると言える。

しかし、元代、清代に遡れば、〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉が状況可能としての用法を持っていたことを 2.3.1.1 節で論じた。そこで、6.3 節では、状況可能の用法と義務的モダリティの用法との意味的な関連性について、更に考察を行うこととする。

5.4. まとめ

本章では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉及び〈-不得: -NEG-DE〉という形式ごとに表される意味用法を整理し、各々の形式で中心的に表される意味を、構文的特徴や文法的要素等の義務性を根拠にして論じた。その結果、〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉は、可能（状況可能）及び認識的モダリティ（蓋然性, 推断）の両者が、中心的な意味を成し、〈-不得: -NEG-DE〉は、義務的モダリティ（不許可）が中心的な意味用法として機能していると考えられることが明らかとなった。

そこで、次に問題となるのが、〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉が表す状況可能と認識的モダリティの関連性、及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が表す状況可能（主に清代以

前まで）と義務的モダリティの関連性である。また、どうして同じモダリティレベルの意味として、〈-不了: -NEG-LIAO〉が認識的な意味を表し、〈-不得: -NEG-DE〉が義務的な意味を表すに至ったのかという原理も考察する必要がある。そこで、これらの議論に関しては、次章に譲ることとする。

第六章　可能から認識的･義務的モダリティへ

6.1. 研究の背景

本章では、次に挙げる二つの点について議論する。一つ目は、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉は状況可能と認識的モダリティという意味を併せ持ち、一方で〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は状況可能（主に清代以前まで）と義務的モダリティという意味を併せ持つという事実に対して、各形式における各々の意味範疇の関係性を明らかにする。そして、二つ目は、モダリティのレベルにおいて、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob/deduc}$〉は対命題的態度である認識的意味（蓋然性, 推断）を表し、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は対聞き手的態度である義務的意味(不許可)を表すが、どうして〈-不了: -NEG-LIAO〉が義務的意味、〈-不得: -NEG-DE〉が認識的意味を表すに至らなかったのかということについてである。

通時的な言語変化を見れば、状況可能の意味として用いられていた〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉に形式的に取って変わられたという事実より、本来的には両形式ともにもともとは状況可能の意味を表していたということができる。よって、〈-不了: -NEG-LIAO〉が認識的モダリティの用法（蓋然性, 推断）で用いられ、〈-不得: -NEG-DE〉が義務的モダリティ（不許可）の用法で用いられる必然性はないように思われる。

このような、ある種解釈に関わる問題は、その問題に光を当てる側面によって、見え方が異なってくるというのが常である。そこで、本研究では、各意味範疇における意味的、機能的な繋がりや、補語として用いられる〈了: 終了する〉及び〈得: 獲得する〉の有する語彙的或いは文法的な意味、そして更に、通時的な転換が行われる際の可能補語形式といしての類似性等を根拠にして、論じることとする。

6.2 節では〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉が表す状況可能と認識的モダリティの関連性、6.3 節では〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が表す状況可能と義務的モダリティの関連性を明らかにする。また、6.4 節では、モダリティのレベルにおいて、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob/deduc}$〉が認識的な意味(蓋然性, 推断)を表し、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が義務的な意味（不許可）を表すに至ったことについての説明を加える。

6.2. 状況可能と認識的モダリティ

本研究では、認識的モダリティの意味は、状況可能の意味に由来するという観点[93]で分析を行う。この考え方は、英語の法助動詞の意味を考察した Sweetser (1990) の議論にも見られる。そこで指摘されている例として、法助動詞の‘can’が挙げられる。‘can’も根源的意味と認識的意味の両方を表すことができる。(226a) が可能を表す‘can’の例で、(226b) が認識的モダリティを表す‘can’の例である。

(226) a. I can lift fifty pounds.　(Sweetser1990:62) (21a)

「私は 50 ポンドを持ち上げることができる。」

b. You can’t have lifted fifty pounds.　(Sweetser1990:62) (21b)

「あなたが 50 ポンド持ち上げたはずがない。」

この、‘can’における認識的な意味[94]は、「何らかの状況から考えて」というように、ある条件が与えられるという状況可能の性質を引き継いでいる。この点を根拠として、Sweetser (1990) では、認識的な‘can’は、能力可能の用法ではなく、状況可能の用法に由来すると考えるのである。

まず、中国語の可能補語における、結果事象に対する否定（或いは肯定）という特徴が、何らかの条件または状況のもとで成立するという状況可能の解釈を得るのに適している語順となっているという点を論じる。そこで、〈-不了: -NEG-終了する〉という語彙的意味を持つ典型的な可能補語の用法について、まずは考察し、その特徴を〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉が引き継いでいるという前提に立って説明を行う。

(227) a. 这么 些　饭，我 三天 也　吃　不　了。(Chao1968:453)

こんな CL ご飯　私　三日　も 食べる-NEG-終了する

「こんなにもご飯を 3 日間かけても食べきれない。」

---

[93] ‘I proposed that the root-modal meanings can be extended metaphorically from the “real” (sociophysical) world to the epistemic world. (Sweetser1990:64)’（根源的法助動詞の意味が現実(社会物理)世界から認識世界へと、メタファー的に拡張され得る。）

[94] ‘Positive *can* is almost unusable in an epistemic sense. (Sweetser1990:62)’（肯定的な‘can’が認識的な意味で使用されることはほとんどない。）

b. 这　饭 我　吃　不　了，　里头 净是　沙子。(Chao1968:453)

この ご飯 私 食べる-NEG-LIAO$_{poten}$　中身　ばかり　砂

「このご飯は私は食べることはできない。何故なら中身は砂ばかりだからだ。」

(227a) は可能補語〈-不了: -NEG-終了する〉に語彙的意味が含意されており、結果の否定となっている所謂典型的な可能補語の例である。この場合、「ご飯の量が多い」ということを条件として、「食べきれない」という意味を表している。このような状況の現れは、主体が動作を意図するという点と関わっている。なぜなら、主体は、「ご飯を食べようとして、実際に食べたが、食べ終わらなかった」という連続した事態において、主体の意図に対して、結果が実現しなかったということは、そこに何らかの要因が関連していると見るのが自然である。つまり、結果性に言及するという可能補語が持つ特徴から得られた意味解釈では、能力可能ではなく、状況可能の意味となることが必然であると考えられる。もしも主体が自らの属性或いは性質として、何らかの行為を行う能力がないということが分かっている状態であれば、わざわざその動作を行おうとする状況は非常に稀であると言えよう。しかし、従来、主体が行うことができると認識している動作であれば、主体が行うことを試みることは自然である。そこで、行うことを意図したが、その結果としての事態が実現しないということの間には、何らかの条件が関わっているのが自然である。それが、状況可能としての解釈を与えるものと思われる。更に、本研究で扱った (227b) の〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、意味の漂白化が進み、先行述語が表す事態が実現しないことを表しているが、その結果事象を肯定･否定するという特徴は、典型的な可能補語と平行しており、その意志性と結果性の組み合わせが、状況可能として成立していることが予想し得る。このように状況或いは条件として機能している「ご飯が多いから (227a) 」及び「中身は砂ばかりだから (227b) 」というのは、ある種、物理的な事態であると言える。

更に、非意志的な事態を表す先行述語を取り、認識的意味を表す用法においても、必ずある条件が読み込まれるという状況可能の特徴を引き継いでいる。

(228) a. 他　那么　　大　　了，　丢　不　了。(CCL:老舍《龙须沟》)

彼 あんなに　大きい　PERF　失う-NEG-LIAO$_{prob}$

「彼はこんなにも大きいのだから、見失う可能性はない。」

b. 这　箱子　轻 不　了。

この トランク 軽い-NEG-LIAO$_{deduc}$

「（見たところ、）このトランクは軽いはずはない。」

また、認識的モダリティとなる場合、特に (228b) の推断の意味用法では、ある条件または状況が、話者の思考、感覚といった認識的な世界に移行していることが分かる。

このように〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉が表す状況可能と認識的意味の共通性は、条件を有するということであり、その条件は、結果事態を否定する或いは肯定するという特徴から類推される要素である可能性があることを論じた。

6.3. 状況可能と義務的モダリティ

2.3.1.1 節で論じたように、可能を表す〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉の用法は、清代頃までは使用されていたが、普通話においては消滅していると考えられている。また、心理的不可能の用法としては普通話においても残されているが、これは、本質的には、知覚動詞を先行動詞とする〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉との意味の違いによって、残った形式であると考えられる。そこで、当該形式が普通話においてもっとも優勢に用いられている用法は、義務的モダリティである不許可の意味である。本節では、〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が表す義務的モダリティの意味も状況可能に由来することを論じる。

状況可能と不許可においても、何らかの条件または状況のもとで成立するという共通性があると言える。

(229) 篮子　里　有 鸡蛋，　压　不 得。（吕叔湘主编 1999:165）

手提げかご　の中 ある　卵　押さえる-NEG-DE$_{permi}$

「手提げかごには卵が入っているから、押さえてはいけない。」

〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が不許可を表す例である (229) における条件とは、〈篮子里有鸡蛋: 手提げかごには卵が入っているから〉という箇所である。相手に不許可を要求する場合は、通常、何らかの理由が必要である。それが、条件として機能するのである。つまり、語用論的に見て、状況可能と義務的モダリティには、条件の介在という点で共通性があり、状

況可能から義務的モダリティへの転換が予測され得る。

また、不可能を表す〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉と不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、先行述語に意志性を持つ動作或いは行為を表す動詞を有するという共通性をより、両形式は本来的に動作的な事態を表すということができる。しかし、両者は無題文或いは有題文を取るか否かという点で、異なることを指摘した。可能を表す場合は、普通話では一般的に〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉が用いられるが、ここでは〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が不可能の解釈をし得るものとして分析を進める。

(230) a. 他　穿　不 得　　这 双 鞋。

彼　履く-NEG-DE$_{poten/??permi}$　　この CL 靴

「彼がこの靴を(履くことはできない / ??履いてはいけない)。」

b. 这　双 鞋 他 穿　不　得。

この CL　靴　彼　履く-NEG-DE$_{poten/permi}$

「この靴は彼は (履くことはできない / 履いてはいけない)。」

(230a)のように、対象である〈这双鞋: この靴〉が目的語位置に置かれている無題文では、不可能の解釈は許すが、不許可の解釈は許さない。それに対して、(230b)のように、〈这双鞋: この靴〉が主題化した有題文では、〈-不得: -NEG-DE〉が不許可の意味としても解釈することができる。つまり、義務的モダリティである不許可の意味は、有題文でしか成立しない。このことからも、本質的には、〈-不得: -NEG-DE〉にとって、無題文でも有題文でも成立する可能の意味が、有題文でしか表せない不許可の意味に対して、中心的であると解釈することも可能である[95]。

6.4. 状況可能からモダリティへのシフト

〈-不了: -NEG -LIAO$_{prob/deduc}$〉の認識的モダリティ及び〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の義務的モ

[95] 不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉における状況可能〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉との関係性は、今後の課題としたい。それは、〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉の不必要の意味は、非常に制限された条件で現れ、また現時点で不可能と不必要の関連性を述べる用意がないため、今後慎重に考察の方を進めたいためである。

ダリティは、共に状況可能に由来する用法である可能性が高いことを論じた。それは、主に、条件の含意という意味論的、語用論的な共通性において指摘した。このように、両形式ともに状況可能を表す（或いは、表していた）という共通性があり、その特徴である条件の含意を共通として、モダリティへの意味の拡張が行われているとすれば、逆に、〈-不了: -NEG -LIAO〉が義務的モダリティの用法へ拡張し、〈-不得: -NEG-DE〉が認識的モダリティの用法へ拡張していても良さそうである。しかし、現実には、〈-不了: -NEG -LIAO〉が認識的モダリティの用法へ、そして〈-不得: -NEG-DE〉が義務的モダリティの用法へ拡張したのであり、どうしてその逆ではなかったのかということについて、考察を行う。しかし、本質的には、この原理を実証的に説明するのは非常に困難であると言える。そこで、本研究では、補語にくる語である〈-了: 終了する〉及び〈-得: 獲得する〉の文法的意味及び語彙的意味の相違、〈-不得: -NEG-DE〉が有する許容･受容という意味素性、並びに通時的な観点からの両形式の使用の転換という観点から考察を行う。

状況可能と認識的モダリティ及び義務的モダリティは、条件の含意という点で共通性があった。また、モダリティを表す〈-不了: -NEG -LIAO〉及び〈-不得: -NEG-DE〉は、主に有題文として成立するという共通性もあり、無題文でも成立する状況可能とは異なる特徴を有すると言える。

（表 30）状況可能と認識的･義務的モダリティ

意味範疇	状況可能	認識的・義務的モダリティ
共通点	条件の含意	
相違点	無題文 / 有題文	有題文

まず、補語にくる動詞〈-了: 終了する〉及び〈-得: 獲得する〉の意味的相違という観点から、〈-不了: -NEG -LIAO〉が認識的モダリティに拡張し、〈-不得: -NEG-DE〉が義務的モダリティに拡張することの原理を説明する。動詞〈了: liao〉は、語彙的には「終了する」という意味を表す。この〈了: 終了する〉は、基本的には、動作主体の意志性に関与しない、自発的 (spontaneous) な事態である。それに対して、動詞〈得: de〉は、語彙的には「獲得する」という語彙的意味を表す。この〈得: 獲得する〉は、基本的には、動作主体の意志性に関与する、活動的(active)な事態を表す。その根拠として、〈了: 終了する〉が主語位置に取る要素として、(231a) のような出来事や、更には心配事や事件等に限られるのに対して、

〈得: 獲得する〉は基本的に動作の主体を主語位置に取るという特徴がある。しかし、二次的な意味としては、〈了: 終了する〉であっても、(231b)のように「終了させる」という使役的な用法もあり、〈得: 獲得する〉においても、主語に立つ〈我: 私〉の身の上に自然に起こることとして「病気にかかる」という用法もあるが、基本的な意味としては、〈了: 終了する〉は出来事主語を取り自発的な事態を表し、〈得: 獲得する〉はヒト主語を取り活動的な事態を表すと言える。

(231) a. 这 件 事 已经 了 啦。（吕叔湘 1999:366）

この CL 事柄 すでに 終了する SFP

「この件はすでに終了した。」

b. 我们 得 抓紧 把 这 案子 了 了。（吕叔湘 1999:366）

私達 AUX(しなければならない) 急いでやる BA この 事件 終了する SFP

「私達は急いで、この件を終了させなければならない。」

(232) a. 数学考试 我 得 了 一百分。

数学 試験 私 得る PERF 100 点

「数学の試験で、私は 100 点を取った。」

b. 我 得 病 了。

私 なる 病気 SFP

「私は病気にかかった。」

つまり、典型的には、本来〈了: 終了する〉は出来事が自発的に起こることを表すのに対して、〈得: 獲得する〉はヒトの活動を表すとまとめることができる。そこで、本研究では、このような両形式の意味の相違に着目して、これらの述語が補語の位置に現れる際の意味に影響を与えているのではないかという推測のもとで、まずは分析を行う。文法化した可能補語〈-不了: -NEG-LIAO〉及び〈-不得: -NEG-DE〉は、その語彙的意味を失い、先行述語が表す事態の成立或いは不成立を表す。それが状況可能の解釈を得るのに重要な点であると言える。そこに、文法的意味として、〈-不了: -NEG-LIAO〉に自発性、〈-不得: -NEG-DE〉

に行為性という素性が存在しているとすれば、意味的な関連性の観点から考えると、〈-不了: -NEG-LIAO〉よりも〈-不得: -NEG-DE〉の方が、義務的モダリティである不許可の意味を得やすいと考えることができる。例えば、先行述語として、〈吃: 食べる〉を例にして考える。

(233) a. 吃　不　了　(了: 事態の自発性)

食べる-NEG-LIAO$_{poten}$

「食べられない」

b. 吃　不　得　(得: ヒトの働きかけ)

食べる-NEG-DE$_{poten/permi}$

「食べられない / 食べてはいけない」

可能補語形式全体が表す意味について、各々の要素の意味関係を考慮して考える。まず、〈吃不了: 食べられない〉は、先行動詞〈吃: 食べる〉で主体の意図性(食べようとする)を表す。更に、可能補語〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉で「食べること」という事態の生起を否定する。つまり、食べようとしたがその事態が起こらない、つまり、「食べられない」という可能の意味となる。それに対して、〈吃不得: 食べられない〉も同じように不可能の意味を表すことがかつてはできたが、普通話では不許可の意味となり、その原理を考察する。まず、〈吃不了: 食べられない〉と同様に、先行動詞〈吃: 食べる〉で主体の意図性(食べようとする)を表す。更に、補語では、〈得: 得る〉が表すヒトの働きかけという側面より、主体がその事態を得ようとするが、それが否定される。つまり、「してはいけない」という不許可の意味が類推されやすい。また、そこに話し手及び聞き手という関係性が介入すれば、聞き手である動作主体の活動を否定することからも不許可の意味が導かれやい。このように解釈することで、〈-了: LIAO〉よりも〈-得: DE〉の方が、補語の意味特徴という観点から考察すると、義務的モダリティの意味を表す可能性が高いと言うことができる。

次に、第二章で分析した、〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が言及する許容・受容が、義務的モダリティの意味と関連しているという観点から考察を試みる。〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が表す許容・受容の意味とは、「対象を受け入れる」ということを表す。また、主として〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が表す心理的不可能及び不許可の用法は、否定形式で用いられることより、

「対象を受け入れられない」という意味を表す。この許容･受容という意味素性が、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の意味と関連性が見て取れるという点で分析を行う。まず、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は、遂行的行為表現であり、そこには話し手と聞き手の関係性が現れることを論じた。

(234) “你　不要　出去，外面　更　危险。 你　去　不 得!”（CCL:巴金《家》）

あなた NEG AUX(するな) 出て行く 外　いっそう 危険だ　あなた 行く-NEG-DE$_{permi}$

「『出掛けないでよ。外はもっと危険よ。出て行ってはいけない!』」

つまり、(234) の不許可を表す〈去不得: 出て行ってはいけない〉から分かるように、話し手は、行為主体である聞き手が「出て行く」という行為を許可できないということを表している。そこで、この「許可できない」という意味は、ある種、許容･受容である「受け入れられない」ということで説明することができる。よって、〈-不得: -NEG-DE〉が有する許容･受容という意味素性が、必然的に義務的モダリティの意味を獲得することになったと考えることもできる。

更に、通時的観点を加えて、本来、状況可能を表していた〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉が、形式的に〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に取って変わられた経緯を考慮して、更に分析を進める。2.3.1.1 節において、李宗江(1994)の議論に基づいて論じたが、もともと状況可能は、〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉が表していた。しかし、元代に入ると、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が台頭し、普通話においては、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉に完全に取って代わられた。そこで、このような形式の転換が起こった要因として、李宗江 (1994) は、〈得: DE〉の多義性と先行動詞の音節数の制限、及び可能補語の結果事象を肯定･否定するという特徴からの意味の類推という点から説明を試みた（詳しくは 2.3.1.1 節参照）。要因はどうであれ、事実として〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ / -NEG-DE$_{poten}$〉が状況可能としての地位を失ったとすれば、次に拡張する可能性の高い意味は、やはり認識的モダリティよりは、義務的モダリティの不許可の意味となろう。なぜなら、先行述語として、動作或いは行為を表す動詞（稀に意志性は保証された上で、形容詞の場合もある）を取るという点が状況可能と義務的モダリティでは共通しているためである。また、可能と許可の意味は、3.2 節でも述べたように、非常に類似している。このような点から見ても、状況可能としての地位を失った〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が不許可の意味

へとシフトする可能性は非常に高いと考えられる。

6.5. まとめ

本章では、〈-不了: -NEG -LIAO$_{prob/deduc}$〉の認識的モダリティの用法、及び〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の義務的モダリティの用法は、両用法ともに状況可能に由来することを論じた。このように、ある形式の多義性や意味の転換に関しては、様々な角度からその要因を考察することができる。その中で本章では、状況可能とモダリティの共通性を何らかの条件を含意するという特徴によって考察し、各々の認識的或いは義務的とされる意味の相違は、可能補語に現れる語の意味的特徴、〈-不得: -NEG-DE〉が有する許容･受容という意味素性、及び通時的な用法の転換という観点から考察を試みた。この点に関しては、今後、様々な解釈及び分析が可能であり、更なる議論の発展に関しては、今後の課題としたい。

第七章　結論

7.1. はじめに

本研究は、可能補語の一種である〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉における諸特徴についての記述及び分析を行った。

まず、第二章から第四章にかけて、両形式が表す意味的な特徴について論じた。そこで特定した意味は、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉に関しては、「状況可能」、「義務的モダリティ（不必要）」及び「認識的モダリティ（蓋然性, 推断）」の 3 つであり、〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉に関しては、「心理的不可能」及び「義務的モダリティ（不許可）」の 2 つである。そこで行った具体的な議論に関しては、7.2 節で、特に先行研究からの発展という点を踏まえて総括することとする。

〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、多義性を有する形式である。そこで、第五章では、この多義の中で、両形式が表す最も中心的な意味の特定について議論を行った。本研究では、構文的特徴や文法的特徴における制限という点を基準として、各形式の中心的な意味の特定を行った。更に、第六章では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉は状況可能の意味から認識的モダリティの意味へ、そして〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は状況可能から義務的モダリティの意味へと移行したと考え、各形式の意味の関連性について議論した。そこで、これらの議論に関しては、7.3 節で総括することとする。

7.2. 〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉の意味範疇

〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が表す意味範疇である、可能、義務的モダリティ、認識的モダリティについてまとめる。また、各々の意味範疇に伴う、先行述語の種類や文の構文的特徴、更には文法的特徴等についても併せてまとめる。

【 可能補語の意味と先行述語の意味素性 】

本研究では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉における各々の意味を特定する際、第一に先行述語の意味素性を分類の手掛かりとしている。そこで、先行述語の意味素性と可能補語が表す意味の対応関係を以下に簡潔にまとめる。

まず、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉が可能の意味を表す場合は、意志性(+volitional) を有する先行述語を取る。これは主に、働きかけに言及する。一方、通時的に見て、普通話では可能の意味として用いられなくなった〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、意志性に併せて許容･受容を有する、特に知覚動詞を先行述語とするときに、可能の意味として成立する。

（表 31） 可能を表す〈-得了/-不了〉と〈-不得〉の先行述語の特徴

可能補語			先行述語	
形式		意味範疇	意味素性	種類
A	〈-得了/-不了〉	「状況可能」	意志性 働きかけ	動作動詞
B	〈-不得〉	「心理的不可能」	意志性 許容･受容	動作動詞の中の知覚を表す動詞

次に、義務的モダリティの用法であるが、可能を形成するときと同様、先行述語の意味素性が意志性となるときに成立する。つまり、可能の意味と、義務的モダリティである不許可や不必要といった意味は、非常に類似していることを述べた。それでは、可能と義務的モダリティの根本的な相違はというと、義務的モダリティは、遂行的行為表現であるということである。また、義務的モダリティは、話し手に対して、行為者である聞き手という関係が現れる。それに対して、可能の場合は、遂行的行為表現ではない。

（表 32）義務的モダリティを表す〈-不了〉と〈-不得〉の先行述語の特徴

可能補語			先行述語	
形式		意味範疇	意味素性	種類
C	〈-不了〉	「不必要」	意志性	動作動詞の中の使用・消費を表す動詞
D	〈-不得〉	「不許可」	意志性	動作動詞

最後に、認識的モダリティを表す形式は、〈-不了: -NEG-LIAO〉のみで、非意志性を有する動詞或いは形容詞を先行述語とする。また、先行述語が非意志性に併せて、継続性を有するか否かで、その意味は蓋然性と推断に分けることができる。

（表 33）認識的モダリティを表す〈-不了〉の先行述語の特徴

可能補語			先行述語	
形式		意味範疇	意味素性	種類
E	〈-不了〉	「蓋然性」	非意志性 非継続性	非継続非意志動詞
F	〈-不了〉	「推断」	非意志性 継続性	静態形容詞

以上、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が表す、可能、義務的モダリティ及び認識的モダリティという意味範疇に関して、先行述語の意味素性との関連性という観点で整理した。

【 各意味範疇の諸特徴 】

次に、各々の意味範疇において、先行研究との関連を意識して、本研究で明らかとなった諸特徴について整理することとする。

「可能」

まず、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉は、先行研究において、状況可能を表す用法

として詳細に記述並びに分析が行われてきた。状況可能とは、(235) のような例に代表される。行きたい場所へ行こうと意図しても、仕事が忙しいということが原因で、行くという事態が実現しない。つまり、何らかの条件によって、主体が意図した事態が実現しない或いは実現するということを表す。

(235) 平时 工作 忙碌, 想 去 的 地方 去 不 了。

普段 仕事 忙しい AUX(したい) 行く NOM 場所 行く-NEG-LIAO$_{poten}$

（CCL:《新华社 2004 年新闻稿》）

「普段は仕事が忙しく、行きたい場所へ行けない。」

このような状況可能の意味を形成する特徴として、先行研究では主に次の 2 点が取り上げられてきた。それは、「可能・不可能であることの条件」及び「動作への指向性」である。「可能・不可能である条件」というのは、まさに状況可能の性質そのものである。そこで、この条件の内実について、本研究では更に議論を進めた。まず、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉が表す可能は、主体にとって一時的に付加される内在的或いは外在的な条件においてのみ成立する。つまり、いわゆる能力可能や心情可能といった恒常的な条件においては成立しないと言える。次に、「動作への指向性」であるが、可能補語は、典型的に、主体の動作行為事象を表す先行述語と、それに対する結果事象を表す補語の間に、肯定形式の場合は〈得: -DE〉を、否定形式の場合は〈不: NEG〉を挿入した形式となると表面的には分析することができる。つまり、その特徴より、その意味は、ある動作を行い、結果としてある事態が実現した或いは実現しなかったとなる。その例として、(236a) のように〈听不懂: 聞いて理解できない〉が挙げられる。それに対して、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉を用いた可能補語では、(236b) の〈听不懂: 聞くことができない〉という例から分かるように、先行述語〈听: 聞く〉という事態が実現しないということを表している。この事実より、これまでの研究では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉の特徴として、結果を指向しているのではなく、動作を指向している(「動作への指向」)と考察されてきた。

(236) a. 典型的な可能補語　　：听　　不　　懂　　「聞いて理解できない」

聞く　-　NEG　- 理解する

b. 可能補語〈-得了/-不了〉　　：听　　不　　了　　「聞くことができない」

聞く　-　NEG　-　$LIAO_{poten}$

これらの事実は認めた上で、本研究では、可能補語本来の結果事態を肯定或いは否定するという特徴の反映が、異なる形で〈-得了/-不了: -DE-$LIAO_{poten}$ / -NEG-$LIAO_{poten}$〉にも引き継がれているという観点で、2.3.2.2 節において、次のような例を提示して分析を行った。

(237) 今天　没有 材料，做　不　了　　菜　。

今日　　ない　材料　　作る-NEG-$LIAO_{poten}$　料理

「今日は材料がないので、料理できない。」

簡潔に述べると、(237) の文は、主体は「料理をすることができる」という前提のもとに成り立っており、本質的に「料理ができない」という事態は、この形式では表せない。つまり、先行述語の事態を指向しているとしても、主体の先行述語の事態を行う本質的な能力までを否定することはできない。まさに、ここに条件の一時的な特性という点が関わってくる。まさにそれが、〈-得了/-不了: -DE-$LIAO_{poten}$ / -NEG-$LIAO_{poten}$〉が状況可能でしか成立し得ない理由であろうことを論じた。これは、結果を指向するという可能補語本来の特徴によるものであると分析を行った。

次に、心理的不可能を表す〈-不得: -NEG-DE_{poten}〉についてまとめる。この形式は主に否定形式でのみ成立する。また、〈-不得: -NEG-DE_{poten}〉は普通話においては、不許可を表す用法として用いられ、すでに可能を表す用法としては用いられないことを述べた。つまり、普通話において可能を表す〈-得/-不得: -DE_{poten} / -NEG-DE_{poten}〉を分析することは原理的に無理があると言える。よって、知覚動詞を先行述語とする〈-不得: -NEG-DE_{poten}〉の心理的不可能の用法も、管見の限りでは、先行研究における指摘は見当たらない。しかし、知覚動詞を先行述語とする〈-不得: -NEG-DE_{poten}〉に関しては、普通話でも用いられる形式であることを論じた。その根拠として、基本的に普通話が用いられる資料（《人民日报》等の新聞や《读者》等の雑誌）で用例が多く見られ、母語話者への確認でも普通話

として頻繁に用いると言う。更に、知覚動詞につく〈-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉との意味の相違が見られる。そこで、本研究では、知覚動詞を先行述語とする〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉に関して、可能用法として分析を行った。

(238) 用 项士信 的 话 说，他 看 不 得 别人 受苦。(CCL:《1994 年人民日报》)
で 項士信 ASSOC 話 言う 彼 見る-NEG-DE$_{poten}$ 別の人 辛い目に合う
「項士信の言葉を借りて言うと、彼は他人が苦しむのを見ていられない。」

その例として、(238) の〈看不得: 見ていられない〉は、「彼」が「他人が苦しんでいる」という状況を知覚する、或いは知覚することが仮定されおり、その状況に対して「見ていられない」という主体の心理的な感情を表している。また、〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉に関して、〈知覚動詞-不了: -NEG-LIAO$_{poten}$〉と意味的、構文的、或いは文法的特徴を比較対照するという視点より、〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の意味を明らかにした。

（表 34）〈知覚動詞-不得〉と〈知覚動詞-不了〉の形式及び意味の相違

		〈知覚動詞-不得〉	〈知覚動詞-不了〉
意味的特徴	・意味素性	許容･受容	働きかけ
	・心理的影響	＋	－
文法･構文的特徴	・主題-評言	－	＋
	・〈最〉と共起	＋	－
	・主述句目的語	＋	－

〈知覚動詞-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の意味を形成する最も重要な特徴は、〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉が先行する知覚動詞の許容･受容に言及するという点である。また文法的或いは構文的特徴との関連として、主体の心の動きが含意されるため、性質や属性を描写する主題-評言とはなり難く、また心理的活動を表す副詞〈最: とても〉とは共起しやすくなる。更に、既に知覚している事態を表すため、目的語に主述句という複雑な出来事を取りやすくなる可能性があることを論じた。

「義務的モダリティ」

義務的モダリティを表す形式として、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉と不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉の 2 形式を扱った。

義務的モダリティである不許可(或いは不必要)が表す意味は、可能と非常に類似した意味的側面を有することを指摘した。しかし、本研究では、主に遂行的行為という点に着目して、両者を異なる意味範疇であるという観点から考察し、その他の特徴として、次の表のようにまとめた。

（表 35）不可能と義務的モダリティの分類基準とその関係性

	動作主の制御可能性の有無と肯定否定の連動関係	語気助詞〈-了〉	肯定形式
「不可能」	あり	付加する	あり
「義務的モダリティ」	なし	付加しない	なし

つまり、可能の意味においては、動作主体の制御可能性の有無と肯定及び否定の連動関係があり、語気助詞〈了: SFP〉の付加を許し、肯定形式が成立する。それに対して、義務的モダリティでは、動作主体の制御可能性の有無と肯定及び否定の連動関係がなく、語気助詞〈了: SFP〉の付加を許さず、肯定形式が成立しないという特徴を有する。以上の観点における可能と義務的モダリティの相違より、両者は異なる意味範疇であると結論付けた。

〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が不許可の意味を表すということについては、これまでの研究において、中心的に扱われ、様々な記述分析が行われてきた。しかし、不必要の意味を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉に関しては、管見の限りでは、これまで取り上げられた文献はない。両形式に共通する特徴として、必ず有題文として成立し、その主題要素の性質或いは属性について述べる表現であるということが言える。

(239) 现在　白鱼 肚子 里　都 墨鱼 一样，有 毒，吃 不 得。(CCL: 林斤澜《三阿公》)

現在　白い魚　腹　の中 すべて イカ と同じ ある 毒　食べる-NEG-DE$_{permi}$

「現在は、魚の白い腹の中はまるでイカのように黒く、毒があり、食べてはいけない。」

(240) 这 个　菜　搁　不 了　　这么　多 油。(《中国语补语例解》p.184)

これ CL　料理　入れる-NEG-LIAO$_{necess}$ こんなにも 多い 油

「この料理はこんなに多くの油を入れる必要はない。」

つまり、例えば不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の例で言えば、聞き手に対して、直接的に行為の不許可を要求することはできない。

(241) *出去！再　也　回来　不　得!

出て行く 再び も 戻ってくる-NEG-DE$_{permi}$

「出て行け。もう二度と戻って来るな。」

不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉に関しては、先行研究において、主に「事態の実現性」と「悪い結果」の含意という特徴が主に議論されてきた。しかし、事態の実現性という特徴は、文法化した〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉に共通したものであり、不許可を表す〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉のみを特徴付けるものではないことを指摘し、更に、悪い結果の含意に関しては、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の特徴として一定の傾向は見られるものの、必要条件ではないことを論じた。

不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は、先行述語の種類が使用・消費を表す動詞に限られ、目的語位置には必ず数量表現を必要とするということより、構文的、文法的に非常に制限された用法でのみ成立すると言える。

「認識的モダリティ」

認識的モダリティを表す形式は、〈-不了: -NEG-LIAO〉のみであり、先行述語の意味素性の相違によって、蓋然性を表すものと、推断を表すものに分けることができる。

まず、蓋然性を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は、先行動詞に非意志的及び非継続的な非継続非意志動詞を取る。この意味に関しては、先行研究でも蓋然性や可能性といった形で指摘されてきた。

(242) 他　那么　　大　　了，　丢　不　了。（CCL:老舍《龙须沟》）

彼 あんなに　大きい　PERF　失う-NEG-LIAO$_{prob}$

「彼はこんなにも大きいのだから、見失う可能性はない。」

このように、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉に蓋然性の意味が現れるのは、先行述語の非継続性によると、これまでの研究では記述されてきた。本研究でもその点は認めた上で、しかし、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が現れる文中における位置及び、〈非継続非意志動詞-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉を含む文の実現性という観点から、蓋然性の意味が現れるか否かが異なるという点に着目して、分析を行った。その結果、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉が最も現れやすいのは、仮定的事態を表す複文の主節位置であることが分かった。また、当該形式が蓋然性の意味を表すのは、主節が未実現の事態である仮定的な事態の場合であり、既実現の事態の場合は蓋然性の意味が積極的には見て取れない。

次に、推断を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は、従来推測の意味を表すとされており、近年では認識的意味(epistemic meaning)というモダリティ論に引き付ける形で捉え直されてきた。しかし、本研究では、実例調査に基づき、その構文的及び文法的特徴を明らかにし、詳細な分析を行った結果、次のことが分かった。まず、当該形式は述語用法、連体修飾節用法、副詞用法があり、前二者は数量表現の有無という特徴によって、否定を受ける形容詞の意味解釈が異なる。更に、意味的観点より、数量表現が後続する場合は「様態」に偏り、数量表現が後続しない場合は「論理的推論」に偏る。様態の例は (243a)、論理的推論の例は (243b) である。

(243) a. 这　箱子　轻 不　了。

この トランク 軽い-NEG-LIAO$_{deduc}$

「このトランクは軽いはずはない。」

b. 我　的 个子 比　你　高　不　了　　多少。

私 ASSOC 背　より あなた 高い-NEG-LIAO$_{deduc}$ いくらか

「私の身長はあなたよりそれほど高いわけではない。」

そこで、当該形式の中核的意味は、何らかの徴候が特定され、その徴候を基に話し手が推

し量ったことを断定的に述べる表現であることを明らかにした。

【 各形式の意味 】

〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が表す可能、義務的モダリティ、認識的モダリティについて、各々の意味を以下にまとめて記述する。

(244) 「可能」(potential)

a. 「状況可能」: 〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉

動作主体が意図的に動作･行為を行おうとすれば、ある一時的な条件が要因で、その事態が実現する或いは実現しないという状況にあること表す。

b. 「心理的不可能」: 〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉

主体が許容或いは受容している事態に対して、主体の性格･性質として現れる心理･心情的な要因により、知覚を受け入れられないという主体の恒常的な感情を表す。

(245) 「義務的モダリティ」(deontic modality)

a. 「不必要」:〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉

主題に立つ要素の性質として、評言で表される事態が必要でないことを表す。

b. 「不許可」:〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉

主題に立つ要素の性質として、評言で表される事態が許されないことを表す。

(246) 「認識的モダリティ」(epistemic modality)

a.「蓋然性」:〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉

現在話者が認識している状況を基にして、ある事態が成立する可能性或いは必然性について断定的に述べることを表す。

b.「推断」:〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉

何らかの徴候が特定され、その徴候を基に推し量ったことを断定的に述べる。

b-1. 「論理的推論」

何らかの徴候を基にして、その帰結として事態を論理的に推論する。

b-2. 「様態」

比較対象を徴候として、それを基にして現場の状況を述べる。

【 各意味範疇の文法的･構文的特徴 】

〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が表す可能、義務的モダリティ、認識的モダリティについて、各々の文法的、構文的特徴について、以下の表にまとめる。併せて、先行述語の特徴も表示する。

まず、(表 36) は、可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉と〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉の文法的及び構文的特徴をまとめたものである。

(表 36) 可能を表す〈-得了/-不了〉と〈-不得〉の文法的･構文的特徴

		状況可能	心理的不可能
可能補語	形式	〈-得了 / -不了〉	〈-不得〉
	意味	「状況可能」	「心理的不可能」
先行述語	意味素性	意志性	意志性
		働きかけ	許容･受容
	種類	動作動詞	動作動詞の中の知覚を表す動詞
構文的特徴	有題文の義務性	非義務的	不可 (必ず無題文)
文法的特徴	義務的な要素	—	—

状況可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉は、その構文的特徴として、主語-述語という無題文に併せて、主題化した有題文も取ることができる。それに対して心理的不可能を表す〈-不得: -NEG-DE$_{poten}$〉は、主題-評言を許さず、必ず無題文もとで成立する。また、両形式は、その意味の成立において、文中に何らかの義務的な要素を有する必要はない。

次に、(表 37) は、義務的モダリティを表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉と〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の統語的･構造的特徴をまとめたものである。

（表 37）義務的モダリティを表す〈-不了〉と〈-不得〉の文法的･構文的特徴

		義務的モダリティ	
可能補語	形式	〈-不了〉	〈-不得〉
	意味	「不必要」	「不許可」
先行述語	意味素性	[+volitional]	[+volitional]
	種類	動作動詞の中の使用･消費を表す動詞	動作動詞 (形容詞)
構文的特徴	有題文の義務性	義務的	義務的
文法的特徴	義務的な要素	数量の目的語要素への付加	―

義務的モダリティを表す場合、〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉及び〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉は両者ともに、必ず有題文となる必要がある。また、不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{necess}$〉は、必ず数量表現が目的語要素に含まれていなければならないという制限がある。

最後に、（表 38）は、認識的モダリティを表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob/deduc}$〉の文法的･構文的特徴をまとめたものである。

（表 38）認識的モダリティを表す〈-不了〉の文法的･構文的特徴

		認識的モダリティ	
可能補語	形式	〈-不了〉	〈-不了〉
	意味	「蓋然性」	「推断」 (論理的推論, 様態)
先行述語	意味素性	非意志性	非意志性
		非継続性	継続性
	種類	非継続非意志動詞	静態形容詞
構文的特徴	有題文の義務性	非義務的	(義務的)
文法的特徴	義務的な要素	―	―

認識的モダリティを表す場合、蓋然性を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob}$〉は、無題文でも有題文でも成立する。それに対して、推断を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉は、基本的には主語

-述語という構文を取っていると見ることができるが、併せて主題-評言であると言いたくなるような構文であると言える（よって表中の表記を（義務的）とした）。推断を表す〈-不了: -NEG-LIAO$_{deduc}$〉のこのような現象は、先行述語の静態形容詞が有する特徴から来ていると見ることができる。

7.3．中心的意味と意味シフト

以上で論じてきたように、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、多義を有する形式であると言える。以下にそれをまとめる。

(247) 〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉が有する意味範疇

a. 可能: 状況可能

b. 義務的モダリティ: 不必要

c. 認識的モダリティ: 蓋然性、推断

(248) 〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が有する意味範疇

a. 可能: 心理的不可能

b. 義務的モダリティ: 不許可

そこで、この中で〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が表す中心的な意味について特定した。両形式において、普通話での中心的な意味は次のとおりである。

(249)〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉の中心的意味

a. 可能: 状況可能

b. 認識的モダリティ: 蓋然性、推断

(250)〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の中心的意味

義務的モダリティ: 不許可

その基準として、中心的な意味であればあるほど、その構文的特徴や文法的特徴に制限が少ない状態で文が成立するという考えのもとで考察を行った。その結果、〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉は、可能(状況可能)及び認識的モダリティ（蓋然性, 推断）の両者が中心的な意味を形成し、〈-不得: -NEG-DE〉は、義務的モダリティ（不許可）が中心的な意味用法として機能していることが分かった。

次に、〈-不了: -NEG -LIAO$_{prob/deduc}$〉の認識的モダリティの用法（蓋然性, 推断)、及び〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉の義務的モダリティの用法（不許可）は、状況可能に由来することを論じた。上述した通り、〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob/deduc}$〉は、状況可能の意味を有するが、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉に関しては、普通話では、状況可能の意味を表さない。しかし、〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉もかつて清代以前は、状況可能の意味を表していた。そこで、〈-不了: -NEG -LIAO$_{prob/deduc}$〉及び〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉が表すモダリティにおける意味は、状況可能から拡張したものであるという観点で分析を行った。

まず、(図 2)は、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉における意味の拡張である。当該形式は、状況可能の意味から認識的モダリティへと意味の拡張がなされる。

【　形式　】	【　意味　】
〈-得了/-不了: -DE-LIAO$_{poten}$ / -NEG-LIAO$_{poten}$〉	状況可能
⬇	⬇
〈-不了: -NEG-LIAO$_{prob/deduc}$〉	認識的モダリティ (蓋然性, 推断)

（図 2）状況可能から認識的モダリティへの意味拡張

状況可能と認識的モダリティの共通性は、ある条件が含意されているという点に求められる。それに対して、状況可能の用法では意志的な事態を表すのに対して、認識的モダリティの用法では非意志的な事態を表すという相違がある。

次に、（図 3）は、〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉における意味の拡張である。当該形式は、状況可能の意味から義務的モダリティへと意味の拡張がなされる。

【　形式　】	【　意味　】
〈-得/-不得: -DE$_{poten}$ /-NEG-DE$_{poten}$〉	状況可能
⬇	⬇
〈-不得: -NEG-DE$_{permi}$〉	義務的モダリティ (不許可)

（図 3）状況可能から義務的モダリティへの意味拡張

状況可能と義務的モダリティにおいても、その共通性は、ある条件が含意されているという点である。また、両意味範疇は、意志的な事態を有するという点でも共通している。

以上、本節では、〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の中心的な意味、及び意味のシフトについて総括した。

7.4．課題と展望

本研究は、現代中国語の可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉における意味特徴について記述並びに分析を行った。また、その中で、文法的特徴や文の構文的特徴等を併せて考察し、両形式の特徴を明らかにした。そこで、今後の課題並びに展望に関して、通時的な視点及び他の類似する意味を有する形式との関係といった観点、そして、モダリティ研究及び文法化研究といった観点で指摘する。

まず、通時的な視点での更なる分析であるが、特に〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉が表す義務的モダリティの不必要、認識的モダリティの蓋然性及び推断、或いは〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が表す心理的不可能及び不許可といった意味が、いつ頃から用いられ始めたのか、また過去の文献においてどのくらいの頻度で用いられているのかという点について、更に考察を進める必要がある。

更に、意味的に類似している他形式との関連については、特に法助動詞との関係性が挙げられる。中国語における法助動詞〈能: できる，してもよい〉、〈会: できる，だろう〉、〈可以: できる，してもよい〉、〈要: する必要がある，だろう〉等は、可能や推量、不必要や不許可といった意味を表すことができる。これらの形式と可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が、意味並びに他の諸特徴において、どのように張り合いを持って存在しているのかという視点で考察を進める必要がある。

〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、所謂モダリティ意味を表す形式であると言える。モダリティは、主に英語の法助動詞の意味記述を行う上で発展し、他形式及び他言語へと広まった概念であると言える。そこで、本研究で扱った〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉が表す意味が、モダリティを表すと分析されている他言語における形式と、どのような相違があるのか、またはモダリティ研究全体にとっての〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉の位置づけという視点でも更に研究を進める必要がある。

可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、動詞としての意味である〈得: 得る〉や〈了: 終了する〉といった内容語(実詞)から、意味の漂白化による機能語(虚詞)へ移行するというように、ある種の文法化現象として扱うことのできる形式であると言える。しかし、この可能補語は、厳密な意味としての文法化形式として、限られた数の閉じられた体系を形成しているものでもなく、またその使用が義務的であるということでもない。そこで、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉に関して、文法化という視点より更に考察することで、中国語の機能語の役割が明らかになる可能性がある。

以上の視点を踏まえた上で、今後、更なる可能補語の研究を進めていきたい。

資料

北京大学汉语语言学研究中心《CCL 语料库(CCL コーパス)》
(http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai)

侯精一・徐枢・张光正・蔡文兰 (2001)《中国语补语例解》北京:商务印书馆.

商務印書館・小学館共同編集 (2003)『中日辞典 第 2 版 電子版』東京:小学館, 北京: 商務印書館.

参考文献

A

Aarts, Bas (2006) Subordination. In Keith Brown (ed.) *Encyclopedia of language & linguistics. Second edition*, 248-254. Amsterdam: Elsevier.

Aikhenvald, Alexandra Y (2003) Evidentiality in typological perspective. In Y. Aikhenvald & W. Dixon (eds.), *Studies in evidentiality*, 1-31. Amsterdam: John Benjamins.

Aikhenvald, Alexandra Y (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.

Aikhenvald, Alexandra Y (2006) Evidentiality in grammar. In Keith Brown (ed.) *Encyclopedia of language & linguistics. Second edition*, 320-325. Amsterdam: Elsevier.

Allan, Keith (2001) *Natural language semantics*. Oxford: Blackwell.

荒川清秀 (1985)「“着”と動詞の類」『中国語』306(7):30-33.

荒川清秀 (1990)「中国語の可能表現—/能 VR/と/V 得 R/—」愛知大学『外語研紀要』14:1-12.

荒川清秀 (2008)「“~不了”は二つか」『日本語と中国語の可能表現』117-132. 東京:白帝社.

Austin, John L (1962) *How to do things with words*. Cambridge: Harvard University Press.

C

Chafe, Wallace (1986) Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view. In Charles N Li (ed.), *Subject and topic*, 27-55. New York: Academic Press.

Chafe, Wallace (1986) Evidentiality in English conversation and academic writing. In Wallace Chafe and Johanna Nichols(eds.), *Evidentiality: the linguistic coding of epistemology*, 261-272.

NJ:Ablex.

Chao, Yuen Ren (1968) *A grammar of spoken Chinese*. California: University of California Press.

張威 (1998)『結果可能表現の研究—日本語・中国語対照研究の立場から』東京:くろしお出版.

Coats, Jennifer (1983) *The semantics of the modal auxiliaries*. London: Routledge Kegan & Paul.

Crystal, David (2003) *A dictionary of linguistics & phonetics. Fifth edition*. Oxford: Blackwell Publishing Ltd.

D

Denison, David (1993) *English historical syntax: verbal constructions*. London: Longman.

丁声树・吕叔湘・李荣・孙德宣・管燮初・傅婧・黄盛璋・陈治文 (1961)《现代汉语语法讲话》北京: 商务印书馆.

F

方梅 (1995)〈汉语对比焦点的句法表现手段〉《中国语文》247:279-288.

福田翔 (2010)「中国語の可能性の意味を表す〈V 不 C〉」峰岸真琴・稗田乃・早津恵美子・川口裕司(編)『コーパスに基づく言語学教育研究報告 4 コーパスを用いた言語研究の可能性 II』213-236.東京外国語大学(TUFS)大学院総合国際学研究科グローバル COE プログラム.

福田翔 (2011a)「中国語の方向補語の可能形式」峰岸真琴・稗田乃・早津恵美子・川口裕司(編)『コーパスに基づく言語学教育報告 6 コーパスを用いた言語研究の可能性 III』45-71.東京外国語大学(TUFS)大学院総合国際学研究科グローバル COE プログラム.

福田翔 (2011b)「“静態形容詞+不了”の意味と構造—証拠性という観点から—」『中国語学』258: 232-251.

福田翔 (2012)「中国語の可能補語“-得/不+了(liao)”の意味と構文的位置の関連性」峰岸真琴・稗田乃・早津恵美子・川口裕司(編)『コーパスに基づく言語学教育報告 8 コーパスを用いた言語研究の可能性 IV』73-97. 東京外国語大学(TUFS)大学院総合国際学研究科グローバル COE プログラム.

福田翔 (2012)「現代中国語における可能補語“-不得”の文構造—先行動詞及び目的語の構造的特徴を中心に—」『言語・地域文化研究』18:11-27. 東京外国語大学大学院総合国際学研究科.

福田翔 (2013)「心理的不可能を表す可能補語形式〈知覚動詞-不得〉」『中国語学』260: 132-150.

G

Givon, Talmy (1994) Irrealis and the subjunctive. *Studies in language* 18: 265-337.

Givon, Talmy (1995) *Functionalism and grammar*. Amsterdam: John Benjamins.

郭锐 (2002)《现代汉语词类研究》北京:商务印书馆.

H

服部昌之 (1970)「可能の能願動詞と可能補語の関連について」『北九州大学外国語学部紀要』20:133-146.

Hopper, Paul J and Elizabeth C Traugott (2003) *Grammaticalization. Second edition*. Cambridge: Cambridge University Press.

堀川智也 (2009)「主題として機能する格助詞表示の名詞句」『大阪大学世界言語研究センター論集』1:75-88.

黄文龙 (1998)〈“V 不了”的否定焦点与语法意义浅析〉《湘潭师范学院学报》19(5):8-86.

J

蒋绍愚 (1995)〈内部构拟法在近代汉语语法研究中的运用〉《中国语文》246:191-161,220.

K

柯理思 (2000)〈论表示说话者的主观判断的[V 不了]格式及其语法化过程〉《现代中国语研究》1:70-78.

柯理思 (2005)〈[形容词＋不了]格式的认识情态意义〉吴福祥(主编)《汉语语法化研究》261-291. 北京:商务印书馆.

川村大 (2004)「受身･自発･可能･尊敬―動詞ラレル形の世界―」尾上圭介(編)『朝倉日本語講座 6 文法 II』105-127. 東京:朝倉書店.

木村英樹 (2012)『中国語文法の意味とかたち』東京:白帝社.

L

Li, Charles N and Sandra A Thompson (1986) Subject and topic: a new typology of language. In

Charles N Li (ed.), *Subject and topic*, 457-489. New York: Academic Press.

Li, Charles N and Sandra A Thompson (1997) *Mandarin Chinese*. Tai pei: The Crane Publishing Co., Ltd.

李临定 (1990a)〈动词分类研究说略〉《中国语文》217:248-257.

李临定 (1990b)《现代汉语动词》中国社会科学出版社.

李宗江 (1994)〈“V 得(不得)”与“V 得了(不了)”〉《中国语文》242:375-381.

林可 (2001)〈析“V 得/不动”与“V 得/不了”〉《广西大学学报(哲学社会版)》23(6):65-71.

刘月华 (1980)〈可能补语用法的研究〉《中国语文》157:246-257.

刘月华（主编）(1998)《趋向补语通释》北京:北京语言大学出版社.

刘月华･潘文娱･故韡 (1983)《实用现代汉语语法》北京:外语教学与研究出版社.

刘月华･潘文娱･故韡 (2001)《实用现代汉语语法(增订本)》北京:商务印书馆.

陆俭明 (1988)〈现代汉语中数量词的作用〉中国语文杂志社(编)《语法研究和探索(四)》172-186.

魯暁琨 (1993)「「不能 VR」と「V 不 R」」『中国語学』249:77-83.

Lyons, John (1977) *Semantics vol.2*. Cambridge: Cambridge University Press.

吕叔湘 (1944)〈与动词后得与不有关之词序问题〉《金陵，齐鲁，华西大学中国文化汇刊》, 第四卷, (裁《汉语语法论文集(增订本)》1984,132-144.商务印书馆).

吕叔湘 (1963)〈现代汉语单双音节问题初探〉《中国语文》122:10-22.

吕叔湘（主编）(1980)《现代汉语八百词》北京:商务印书馆.

吕叔湘（主编）(1999)《现代汉语八百词(增订本)》北京:商务印书馆.

M

马庆株 (1981)〈时量宾语和动词的类〉《中国语文》161:86-90.

马庆株 (1989)〈能愿动词的意义与能愿结构的性质〉《语言学通讯》3-4:5-8.(裁《汉语动词和动词性结构･一编》2004, 57-67. 北京: 北京大学出版社.)

马庆株 (2004)《汉语动词和动词性结构･一编》北京大学出版社.

益岡隆志 (2008)「叙述類型論に向けて」益岡隆志編『叙述類型論』3-18. 東京:くろしお出版.

峰岸真琴 (2007)「孤立語の他動性と随意性—タイ語を例に—」角田三枝･佐々木冠･塩谷亨(編)『他動性の通言語的研究』205-216. 東京:くろしお出版.

宮本厚子 (1996)「現代中国語可能表現の否定—「不能」を中心に—」『言語･地域文化研究』

2:1-14. 東京外国語大学大学院総合国際学研究科.

望月八十吉・望月圭子 (1999)「いわゆる『多主語構文』の日中語対照」現代中国語研究会(編)『現代中国語研究論集』317-345.福岡:中国書店.

望月圭子 (1986a)「漢語的主題結構」『中国語学』233:75-84.

望月圭子 (1986b)「主題のハイアラーキー」『中国語』323:30-33.

望月圭子 (1990)「動補動詞の形成」『中国語学』237:128-137.

N

Narrog, Heiko (2005) On defining modality again. *Language sciences* 27(2):168-192.

Narrog, Heiko (2009) *Modality in Japanese: The layered structure of the clause and hierarchies of functional categories*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

ナロックハイコ (2009)「モダリティと文の階層構造」『月刊言語』38(1):34-41.

日本語記述文法研究会編（仁田義雄代表）(2003)『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』東京:くろしお出版.

仁田義雄 (1989)「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』東京: くろしお出版.

仁田義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』東京: ひつじ書房.

O

尾上圭介 (1999)「文法を考える 7 (出来文 3)」『日本語学』18(1): 86-93.

尾上圭介 (2004)「第 2 章主語と述語をめぐる文法」尾上圭介(編)『朝倉日本語講座 6 文法 II』1-57. 東京:朝倉書店.

小野秀樹 (1990)「中国語の可能表現—「他動性」を通しての「能 VR」及び「V 得 R」の考察—」『中国語学』237:93-100.

小野秀樹 (1991)「中国語の可能表現の“否定”—“他動性”を通しての「不能 VR」及び「V 不 R」の考察—」『中国語学』238:11-19.

太田辰夫 (1958)『中国語歴史文法』江南書院.

奥田靖雄 (1988)「文の意味的なタイプ—その対象的な内容とモーダルな意味とのからみあい」『教育国語』92:14-28.

大河内康憲 (1980)「中国語の可能表現」『日本語教育』41:61-73.

P

Palmer, Frank R (1979) *Modality and the English Modals*. London: Longman.

Palmer, Frank R (1986) *Mood and modality*. Cambridge: Cambridge University Press.

Palmer, Frank R (1990) *Modality and the English Modals second edition*. London: Longman.

Palmer, Frank R (2001) *Mood and modality. Second edition*. Cambridge: Cambridge University Press.

Palmer, Frank R (2003) Modality in English: Theoretical, Descriptive and Typological Issues. In Facchinetti, Krug and Palmer *Modality in Comtemporary English*, 1-17. Berlin: Mouton de Gruyter.

彭利贞 (2007)《现代汉语情态研究》北京:现代社会科学出版社.

S

澤田治美 (2006)『モダリティ』東京:開拓社.

澤田浩子・中川正之 (2004)「中国語における語順と主題化ー主題化とその周辺の概念を中心にー」益岡隆志(編)『シリーズ言語対照第 5 巻主題の対照』19-42. 東京:くろしお出版.

沈家煊 (2001)〈语言的“主观性”和“主观化”〉《外语教学与研究》33:268-275.

沈家煊 (2003)〈现代汉语“动补结构”的类型学考察〉《世界汉语教学》65:17-23.

沈家煊 (2005)〈也谈能性述补结构“V 得 C”和“V 不 C”的不对称〉沈家煊・吴福祥・马贝加(主编)《语法化与语法研究(二)》185-207.北京:商务印书馆.

柴崎礼士郎 (2005)「証拠表示化する『と』と談話構造ー頻度から見た文法化の層状的拡大ー」『日本語の研究』1(4):47-59.

渋谷勝己 (1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33(1): 1-261.

Sornicola, Rosanna (2006) Topic and comment. In Keith Brown (ed.) *Encyclopedia of language & linguistics. Second edition*, 766-773. Amsterdam: Elsevier.

杉村博文 (1992)「可能補語の考え方」大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集』213-232. 東京:くろしお出版.

孙玄常 (1957)《宾语和补语》上海:新知识出版社.

Sweetser, Eve (1990) *From etymology to pragmatics: metaphorical and cultural aspects of semantic*

structure. Cambridge University Press.

T

高梨信乃 (2010)『評価のモダリティ-現代日本語における記述的研究-』東京:くろしお出版.

湯廷池 (1992)〈「原則參數語法」與英華對比分析〉《漢語詞法句法三集》243-382. 台灣:台灣學生書局印行.

鳥井克之 (2004)「再論 中国語の複文について-新しい中国語教学文法の再構築を目指して-」『外国語教育研究』8:75-97.

Traugott, Elizabeth C (1989) On the rise of epistemic meanings in English: an example of subjectification in semantic change, *Language 65*(1):31-55.

Traugott, Elizabeth C (1995) Subjectification in grammaticalisation. In Dieter Stein and Susan Wright (eds.) *Subjectivity and subjectivisation*, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.

角田太作 (2009)『世界の言語と日本語:言語類型論から見た日本語(改訂版)』東京:くろしお出版.

W

王力 (1980)《汉语史稿(重排本)》北京:中华书店.

吴福祥 (2002)〈汉语能性述补结构“V 得/不 C”的语法化〉《中国语文》286:29-40.

吴福祥 (2002)〈能性述补结构琐议〉《语言教学与研究》5:19-27.

吴之翰 (1965)〈形容词使用情况的一个考察〉《中国语文》139:419-431.

X

徐仲华 (1958)《主语和谓语》上海:新知识出版社.

Y

雅洪托夫 (1957)《汉语的动词范畴》北京:商务印书馆.

ヤコブセン, ウェスリー (1989)「他動性とプロトタイプ論」久野暲・柴谷正義(編)『日本語学の新展開』213-248. 東京:くろしお出版.

安本真弓 (2009)『現代中国語における可能表現の意味分析:可能補語を中心に』東京:白帝社.

扬平 (1989)〈“动词+得+宾语”结构的产生和发展〉《中国语文》209:126-136.

扬平 (1990)〈带“得”的述补结构的产生和发展〉《古汉语研究》1:56-63.

Z

张斌（主编）(2010)《现代汉语描写语法》北京:商务印书馆.

张国宪 (2006)《现代汉语形容词功能与认知研究》北京:商务印书馆.

张旺熹 (1999)《汉语特殊句法的语义研究》北京:北京语言文化大学出版社.

张志公 (1953)《汉语语法常识》北京:中国青年出版社.

赵长才 (2002)〈结构助词“得”的来源与“V 得 C”述补结构的形成〉《中国语文》287:123-129.

朱德熙 (1982)《语法讲义》北京:商务印书馆.

朱德熙 (1985)《语法答问》北京:商务印书馆.

Ziegeler, Debra P (2006) Mood and modality in grammar. In: Keith Brown (ed.) *Encyclopedia of language & linguistics. Second edition*, 259-267. Amsterdam: Elsevier.